（様式１）　　No.　２００１

業務実績書

中期計画の項目 （Ⅰ４（１）①）	文化財保護法の一部改正に伴い新たに保護対象となった文化的景観、民俗技術に関する基礎的・体系的な調査・研究を実施し、今後の指定をはじめとする保護施策に関する資料と指針を提供する。

【事業名称】	文化的景観に関する調査研究（Ⅰ４（１）①ア）

【事業概要】
文化的景観の概念整理など基礎的な研究に資するために、ケーススタディとして高知県四万十川流域の文化的景観の調査研究を行うとともに、景観の体系化や保護策に関する研究を行う。

【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	景観研究室長　内田和伸

【スタッフ】
高瀬要一、平澤毅、惠谷浩子、宮城俊作（奈良女子大学）

【年度実績概要】
平成 18 年度からの５カ年計画の中で、現地調査などを含め具体的に取り組む文化的景観の調査研究対象を四万十川流域とし、高知県内同流域の調査を行った。この四万十川流域の自治体では、文化的景観保存活用事業として国の補助事業が開始され、“四万十川流域の文化的景観”として同時に重要文化的景観の選定を受けるべく準備を進めており、この調査は、それらに対する調査協力の意味も持っており、四万十市・梼原町については平成 18 年度から、四万十町については平成 19 年度から、それぞれ四万十川流域の文化的景観の保存活用事業に関わる受託調査も実施してきた。

四万十市は、四万十川の河口部を含む下流域から中流域に位置する。この四万十市については、河川地区では四万十川で行われる伝統漁法の風景、洪水時には水面下に没することがある沈下橋の景観などの現地調査を行った。また、最河口部の下田地区は陸運が盛んになる前、流域の物資が舟運によって集積した集落であり、民家の亀甲積みの石垣や煉瓦塀などに栄えた頃の面影をみることができ、かつて河口部で堆積した砂利を用いたバラスブロックが作られ、現在も町中の塀に多く残り、独特な景観を呈していることを確認し、それらの景観保全に留意した保存計画を提案した。

四万十町は、四万十川中流部に位置する町であり、水量の豊富なことから陸運が発展する近代までは河川交通の中継点として栄えた集落もある。当町の調査では、舟運の安全を祈願した四万十川最大の中州・三島や、本流に堰を設けて河岸の台地上で灌漑をした水路、国有林の伐採で栄えた集落などに重点を置いた現地調査を実施した。

梼原町は、四万十川最大の支流、梼原川の中・上流部に位置する山間の町である。本町の河川地区には小規模な沈下橋が多く分布する。調査の結果、沈下橋が架けられる前は一本橋があり、出水で流されるたび橋桁に橋板を戻すことになるが、戻しやすい水量を計る計り石なども多く残されており、川と生活の関わりが確認できた。また、棚田オーナー制度発祥の地となった神在居の棚田の現地調査も行った。

【実績値】
報告書：３件（①②③）
論文数：３件（④～⑥）　　発表数：３件（⑦～⑨）
文化的景観の景観地区件数：四万十市７件、四万十町６件、梼原町５件

【備考】
〈報告書〉
①『四万十川流域の文化的景観保存活用事業報告書　四万十市』2008.3
②『四万十川流域の文化的景観保存活用事業報告書　四万十町』2008.3
③『四万十川流域の文化的景観保存活用事業報告書　梼原町』2008.3
〈論文〉
④内田和伸「四万十川流域の文化的景観」『奈良文化財研究所紀要 2007』2007.6
⑤平澤毅「文化遺産としての遺跡・庭園・公園の概念に関する比較考察」『遺跡学研究』第４号 2007.11
⑥惠谷浩子「農村地域における景観形成に関わる住民の意識と行動の構造化」『ランドスケープ研究』vol.70No.5　2007
〈発表〉
⑦平澤毅「文化遺産としての遺跡・庭園・公園の概念に関する比較考察」、日本造園学会大会　2007.5
⑧惠谷浩子「農村地域における景観形成に関わる住民の意識と行動の構造化」、日本造園学会大会　2007.5
⑨平澤毅「文化遺産としての風景の保存」、第 101 回奈良文化財研究所公開講演会、2007. 10

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２００１

１．定性的評価

観点	適時性	発展性				
判定	A	A				

備考　適時性：四万十市・四万十町・梼原町で国庫補助事業が行われるのに合わせ、調査研究を進めた。
忘れられつつある景観構成要素の再発見と価値付けが流域のまちづくりに資する。
発展性：多様な文化遺産へ研究対象が広がる。

２．定量的評価

観点	論文数等	発表件数				
判定	A	A				

備考

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	四万十川流域の現地調査などによって、重要文化的景観としての選定に向けて必要な調査方法、保存計画の立て方など具体的な内容に関するノウハウを蓄積することができた。また、四万十川流域というまとまった地域でありながら、上流、中流、下流の３市町の文化的景観の保存活用事業の調査を受託することによって、河川部から都市部、農村部、森林部、高原部に到るまでの様々な文化的景観を対象にすることができ、研究の対象が広まった意味も大きい。よって、Ａと評価した。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当初の予定通り事業を実施でき、順調であった。次年度においては、文化的景観の全般に関しての概念整理や体系化、それに応じた保護策などについても研究を進めたい。

（様式１）　　No.　２００２

業務実績書

中期計画の項目 （Ⅰ４（１）①） （Ⅰ４（１）④）	文化財保護法の一部改正に伴い新たに保護対象となった文化的景観、民俗技術に関する基礎的・体系的な調査・研究を実施し、今後の指定をはじめとする保護施策に関する資料と指針を提供する。 我が国の風俗慣習、民俗芸能、民俗技術など無形民俗文化財の現在における伝承の実態、伝承組織、公開のあり方等を明らかにするとともに、各地の保存団体や保護行政担当者等とこれら研究成果及び問題意識の共有化を図り、「無形民俗文化財の映像記録作成ガイドライン(仮称)」等の指針を作成し公表する。

【事業名称】	民俗技術に関する調査・資料収集（Ⅰ４（１）①イ）　無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究（Ⅰ４（１）④）

【事業概要】

風俗慣習、民俗芸能、民俗技術など無形民俗文化財の現在における伝承の実態、伝承組織、公開のあり方等についての全国的調査研究を行い、その成果をデータベースとして構築する。さらに研究協議会の開催を通じて各地の保存団体や保護行政担当者等とこれら研究成果及び問題意識の共有化を図り、「無形民俗文化財映像記録作成の手引き」等の、具体的保護施策の実施に資する指針を作成し公表する。さらに、韓国等との研究交流を積極的に実施し、無形遺産分野における国際協力体制の充実を図る。

また、文化財保護法の一部改正に伴い新たに保護対象となった民俗技術に関する基礎的な調査・研究を実施し、今後の指定をはじめとする保護施策に資するデータを提供する。

【担当部課】	無形文化遺産部	【事業責任者】	無形民俗文化財研究室長　宮田繁幸

【スタッフ】

俵木悟（無形文化遺産部）、大島暁雄、服部比呂美（客員研究員）

【年度実績概要】

無形民俗文化財の伝承実態の調査として、千葉県南房総市の重要無形民俗文化財「白間津のオオマチ行事」について、とくに子どもたちの踊りであるささら踊りの伝承過程を調査し、現地の保存会と協力して踊りの練習用 DVD を作成した。その他、同じ南房総市の川口のみのこ踊りも調査を行った。また、中国地方の神楽の公開のあり方についての調査として、広島県安芸高田市の神楽門前湯治村にある「神楽ドーム」での定期公演等を調査した。

公開の実態調査としては、北海道・東北、近畿・東海・北陸、中国・四国、の各ブロック別民俗芸能大会、「伝統文化こども教室」フェスティバル IN なら等の公開確認調査を実施した。

都市における民俗技術の定着と展開については、庄内地方の三月節供で雛人形に供えられる「飾り物」の実態調査を行った。調査の結果、鶴岡市や酒田市では、上級武士や都市町人が近世前期には上方や江戸から贅を尽くした雛人形を買い求め、この人形に高い装飾性をもった雛菓子や、雛菓子を模した押絵が供えられ、その伝統は現在も引き継がれていることが明らかになった。こうした雛菓子は、主に上級武士や豪商の求めに応じた菓子職人とその系譜を引く現在の職人によって製作され、押絵や傘福、御殿毬などとともに、生活と関わりながら飾り物が根付いた実態が明らかになってきた。

無形民俗文化財研究協議会は、その第２回を「市町村合併と無形民俗文化財の保護」をテーマとして、2007 年 12 月 7 日に開催した。その成果は報告書として刊行し、関係者に配布するとともに、HP 上で広く一般に公開している。また、「無形の民俗文化財映像記録作成」小協議会を５回開催し、その検討の成果を『無形民俗文化財映像記録作成の手引き』として刊行し、関係機関に配布した。

【実績値】

論文等掲載数　　１件(1)
研究会等発表件数　１件(2)
＜参考指標＞
報告書刊行　２件(3,4)

【備考】

1　俵木悟「無形の民俗文化財の映像記録作成への提言」　『民俗文化財―保護行政の現場から―』　岩田書院　07.10
2　宮田繁幸「日本における無形民俗文化財の保護－その現状と課題－」　文化資源シンポジウム「地方文化からの観点」　国立台北芸術大学文化資源学院　07.12.08
3　『第２回無形民俗文化財研究協議会報告書』　2008.3
4　『無形民俗文化財映像記録作成の手引き』　2008.3

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２００２

１．定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性		
判定	A	A	A	A		
備考						

２．定量的評価

観点	論文等掲載数	研究会等発表件数				
判定	A	A				
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	無形民俗文化財研究協議会では、長年懸案となっていた市町村合併の無形民俗文化財の保護に与える影響をテーマとして取り上げ、時宜に適ったテーマとして大きな反響を得た。実地調査としては、無形民俗文化財の伝承状況の調査の一環として、単なる学術的な調査にとどまらず、地元の保存会と協力して祭礼の踊りの後継者育成のためのビデオ作成を試みるなど、伝承に実質的に貢献する、応用性のある試みも行った。また、過去５年度にわたり継続してきた「無形の民俗文化財映像記録作成」小協議会の検討の成果をまとめ、『無形民俗文化財映像記録作成の手引き』を刊行し、関係者に配布することができた。これも継続的な研究の成果であると同時に、実際に映像記録作成事業の現場で役立ててもらうことが期待できるという点で、応用性ある成果と言える。以上の状況を総合的に判断して、Ａと判定した。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査研究は、年度当初の計画通りに実施されており、目的を順調に達成した。調査研究活動については、今後もこのペースを維持し、協議会についても、緊急の課題に対応するという視点からはもちろんのこと、実際の保護施策の現場で役立つ、実践的なテーマを積極的に取り上げていきたいと考えている。さらに、映像記録作成の手引きの刊行が実現されたので、今後は作成された記録の活用を目指して、記録の所在情報のデータベース化に取り組んでいくつもりである。

（様式 1）　　No.　２００３

業務実績書

中期計画の項目 （Ⅰ１（1）②i）	我が国の有形文化財及びそれに関わる諸外国の文化財に関し、以下の課題に重点的に取り組む。 ｉ日本を含む東アジア地域における美術の価値形成の多様性の解明

【事業名称】	東アジアの美術に関する資料学的研究（I４（1）②ア）

【事業概要】
日本を含む東アジア地域の美術を対象に、人とモノとが複雑に絡み合って多様に展開する価値形成のしくみを解明することを目指す。研究にあたっては、より質の高い資料の提示が求められる時勢に対応して、新しい技術、精度、信頼性、網羅性など必要な条件を満たすこれからの美術資料のあり方や可能性を探り、資料の収集・蓄積・公表等においてそれを具体的に実現することに留意している。

【担当部課】	企画情報部	【事業責任者】	文化形成研究室長　塩谷　純

【スタッフ】
中野照男、勝木言一郎、山梨絵美子、田中淳、津田徹英、綿田稔、皿井舞、江村知子（以上、企画情報部）、相澤正彦（客員研究員）

【年度実績概要】
（1）情報資料の収集のための調査
黒田清輝「湖畔」（東京国立博物館蔵）の制作地である箱根での取材調査（田中）。狩野正信「周茂叔愛蓮図」「山水人物図」（九州国立博物館蔵）、雲谷派「山水図屏風」（萩美術館蔵）の作品調査（綿田）。
（2）美術史研究のためのコンテンツの形成
2010 年度に『日本絵画史年紀資料集成（15 世紀）』を刊行すべく、古美術展カタログ等に散在する情報を抽出して統合するための仮登録作業を継続しておこなっている。事業の発展性を考慮し、絵画に限らず 15 世紀の年紀を有するものすべてを登録することを旨としたため、今年度は約 2600 件（うち絵画は約 500 件、ともに重複データをふくむ）の情報を集めた（綿田）。
（3）研究会の開催
折々の総合研究会、企画情報部研究会において研究経過・成果を発表したほか、オープンレクチャーを本研究と関連させ、「人とモノの力学」というテーマのもと 11 月 2・3 日に開催、また同テーマで国立台湾大学芸術史研究所の陳芳妹氏を招へいし、1 月 15 日に「淡水鄞山寺に造られた神聖空間と民族相互認識の問題―社会芸術史の探究」の演題で講演会を開催、18 世紀末から 19 世紀初頭にかけて台湾へ移住した漢民族、とりわけ福建省西山区の客家汀州を出身とする人々の表象についての理解を深めた。10 月 12 日には『美術研究作品資料 5　黒田清輝《湖畔》』刊行のための研究協議会を荒屋鋪透氏（ポーラ美術館）、植野健造氏（石橋美術館）、金子一夫氏（茨城大学）、鈴木康弘氏（箱根町教育委員会）、渡邉一郎氏（修復研究所 21）を交えて開催した。
（4）報告書の刊行
黒田清輝の代表作《湖畔》について、度重なる調査や収集資料をふまえ画家とモデル、創作のプロセス、評価の変遷などの面から多角的にとらえなおした研究成果報告書『美術研究作品資料 5　黒田清輝《湖畔》』を出版刊行した。

【実績値】
学会誌等への掲載論文数 7 件（①～⑦）
学会等での発表件数 7 件（⑧～⑭）
報告書刊行件数 1 件（⑮）

【備考】
①皿井舞「醍醐寺薬師三尊像と平安前期の造寺組織（上）」　『美術研究』392　2007.9
②皿井舞「醍醐寺薬師三尊像と平安前期の造寺組織（中）」　『美術研究』393　2008.1
③綿田稔「自牧宗湛（上）」　『美術研究』393　2008.1
④綿田稔「自牧宗湛（中）」　『美術研究』394　2008.3
⑤江村知子「研究資料　曽我物語図屏風について」　『美術研究』394　2008.3
⑥田中淳「序論　黒田清輝《湖畔》を語るために」　東京文化財研究所編『美術研究作品資料 5　黒田清輝《湖畔》』　中央公論美術出版　2008.3
⑦山梨絵美子「黒田清輝《湖畔》のモデルをめぐって」　東京文化財研究所編『美術研究作品資料 5　黒田清輝《湖畔》』　中央公論美術出版　2008.3
⑧綿田稔「宗湛の研究」　総合研究会　東京文化財研究所　2007.7.10
⑨塩谷純「《悲母観音》の生命誌」　東京国立博物館月例講演会　東京国立博物館　2007.8.11
⑩中野照男「敦煌文書の真贋をめぐって」　企画情報部研究会　東京文化財研究所　2007.9.26
⑪江村知子「光琳の目と手」　第 41 回オープンレクチャー　東京文化財研究所　2007.11.2
⑫山梨絵美子「矢代幸雄と美術研究所」　第 41 回オープンレクチャー　東京文化財研究所　2007.11.3
⑬勝木言一郎「訶梨帝母（鬼子母神）の図像をめぐる“オリジン”・“オリジナル”・“オリジナリティ”」　総合研究会　東京文化財研究所　2008.1.8
⑭綿田稔「聚光院問題を考える」　企画情報部研究会　東京文化財研究所　2008.2.27
⑮『美術研究作品資料 5　黒田清輝《湖畔》』　東京文化財研究所　2008.3

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２００３

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

２．定量的評価

観点	論文等掲載数	発表件数	報告書刊行数			
判定	A	A	A			
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	今年度は「人とモノの力学」というテーマで、恒例のオープンレクチャーに加え、東アジアの美術という視点から台湾の研究者を招き、日本人研究者の見落としがちな前近代の台湾についてのケーススタディを行えた。また一つの作品をめぐり、その制作から評価の変遷に至る多角的な研究を盛り込んだ報告書『美術研究作品資料５　黒田清輝《湖畔》』を刊行するなど、美術品をめぐる価値形成の解明に十分な成果を得られたため、A と判定した。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	今年度は美術史研究のためのコンテンツ形成として『日本絵画史年紀資料集成（15 世紀）』刊行に向けてのデータ入力を重点的に進めたが、絵画に限らず工芸や彫刻、建築といった他ジャンルも視野に入れているため、進度にやや遅れはあるものの汎用性があり、かつ堅実なデータベースが構築されつつある。次年度もその精度を維持しつつ 15 世紀の年紀資料を収集・整理し、さらに新たなコンテンツとして黒田清輝宛のフランス語書簡の整理・翻訳を進めることにしたい。

（様式１）　　No.　２００４

業務実績書

中期計画の項目 （Ⅰ４（１）②ⅱ）	我が国の有形文化財及びそれに係わる諸外国の文化財に関し、以下の課題に重点的に取り組む。 ⅱ　我が国における近現代美術の歴史の解明

【事業名称】	近現代美術に関する総合的研究（Ⅰ４（１）②イ）

【事業概要】
多様化する現代美術の動向の調査研究を含め、日本近代美術の研究資料のあり方、研究の手法の開発、研究成果の公開の仕方を研究し、文化財行政に寄与することを目的としている。そのため、具体的には、第１にこれまで未公開の基礎資料の収集整理の上、データ化等の公開にむけた調査研究を行う。第２に資料にもとづく研究協議、論文等の研究成果の公開を進める。

【担当部課】	企画情報部	【事業責任者】	近現代視覚芸術研究室長　田中　淳

【スタッフ】
山梨　絵美子、塩谷　純（以上、企画情報部）、青木　茂（客員研究員）

【年度実績概要】
本年度の事業実績は下記の２項である。
1　未公開資料の収集整理とデータ化にむけた調査研究。本年度は、下記の４件の調査研究を行うことができた。
（1）黒田清輝宛フランス語書簡の再調査をおこない、特に封筒等の情報を加味して、差出人、差出日時等の調査をすすめた。
（2）平成18年２月に黒田清輝夫人の御遺族から寄贈を受けた黒田清輝関係写真等の資料をデータ化し保存し、同時に平成１９年１０月に同氏より写真等の資料105件の追加寄贈があり、これの整理と調査をすすめた。
（3）笹木繁男氏主宰現代美術資料センター寄贈資料のうち、作家別資料のデータ化をすすめた。
（4）平成２０年３月３日から８日まで、海外の文化財アーカイブ調査のためロバート・ウィット・ライブラリー（ロンドン）等において調査し、担当者との協議を行った。

2　資料にもとづく研究協議、論文等の研究成果の公開を進める。
（1）平成18年度に刊行した『黒田清輝著述集』の一部をＰＤＦ版によりホームページ上で公開することができた。黒田宛フランス語書簡については、翻刻と和訳作業をすすめることができた。（2）黒田清輝関係写真等208件を整理し、黒田記念館において特集陳列「写された黒田清輝」として公開し、あわせて追加資料のデータ目録化をすすめた。（3）作家別資料についてはファイリング作業を継続し、あわせて保存公開のための基礎データ4,071件を入力することができた。また、中期計画にあげた報告書『昭和期美術展覧会の研究』（平成２０年度刊行）のために、当研究所において昨年度につづき平成19年５月17日に研究協議会を開催し、後に国内諸機関の研究者28名に執筆依頼した。平成19年12月27日には研究会を開催した。発表者、及び発表題名は下記のとおりである。①喜多孝臣（早稲田大学會津八一記念博物館）「矢部友衛とプロレタリア美術運動」、②足立　元（東京芸術大学大学院）「翼賛漫画の系譜」、③敷田弘子（東京芸術大学大学美術館）「新しい生活をつくる―合理的であること、最小限であること」

【実績値】
研究会等発表　３件（①～③）
論文数　　３件（④～⑥）

【備考】
①田中淳　アジアのモダニズムの一側面―「仁丹」広告が伝えること　第60回美術史学会全国大会　九州大学　07.5.25
②田中淳　黒田清輝の生涯と芸術－画家がいる『場所』から　東京国立博物館　07. 11. 10
③田中淳「日展１００年」を見るために－「洋画」の変遷を中心に　広島県立美術館　08. 2. 24
④田中淳「展覧会評　昭和前期をめぐる三人の画家たち」　『美術研究』393号、08.1 pp.61-78
⑤山梨絵美子「日本近代絵画にみる農耕主題とその背景」　『田園讃歌』展図録　埼玉県立近代美術館等　07.10　pp.144-149
⑥塩谷純「川端玉章の研究（一）」　『美術研究』392号、07.9　pp.43-66

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２００４

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

２．定量的評価

観点	研究会発表数	論文掲載数				
判定	A	A				
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	未公開資料の収集調査とデータ化については、黒田清輝宛フランス語書簡、寄贈資料である黒田清輝関係写真、現代美術資料の調査とデータ化を進めることができ、ことに黒田関係写真の一部については、展示公開することができた。 また、中期計画にあげた報告書『昭和期美術展覧会の研究』については、研究協議会を開催して、構成内容を決め、各諸機関の専門家に執筆依頼をすることができ、研究会を開催して一部の執筆者の研究発表と討議を行うことができた。これをもとに、次年度の報告書刊行にむけて、準備を整えることができた。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	全般的に中期計画のとおり実施しており、順調に進捗していると判断した。

（様式１）　　№.　２００５

業務実績書

中期計画の項目 （Ⅰ４（１）②ⅲ）	我が国の有形文化財及びそれに関わる諸外国の文化財に関し、以下の課題に重点的に取り組む。 ⅲ　美術や文化財に対する理解を深めるための美術の創作のプロセスの解明

【事業名称】	美術の技法・材料に関する広領域的研究（Ⅰ４（１）②ウ）

【事業概要】
この研究では、文化財にかかわる諸分野との提携によって、美術作品の多角的研究を目指す。具体的には美術作品が基盤としている材料や用いられた技法、制作の過程・作品の成り立ち、生成されてから今日にまでそれがどのように受容され、あるいは伝来してきたか等を、関係の文献史料や、あるいは直接、作品に対しての科学的・光学的手法（X線透過撮影、蛍光X線非破壊分析、赤外線撮影など）による分析をも援用しながら解明し、美術作品を考究していくことを目的としている。

【担当部課】	企画情報部	【事業責任者】	広領域研究室長　津田徹英

【スタッフ】
中野照男、田中淳、塩谷純、綿田稔、山梨絵美子、勝木言一郎、皿井舞、江村知子（以上、企画情報部）

【年度実績概要】
本年度の実績は以下の通りである。

（1）作品・関係資料の調査・研究：本年度は以下の作品・関係資料の調査を行った。
ア）安城市歴史博物館一時寄託『親鸞聖人絵傳』巻子本断簡の調査
イ）東京・個人蔵菩薩立像(脱活乾漆造、天平時代)の調査ならびにX線透過撮影
ウ）東京・高円寺蔵　阿弥陀如来坐像(木造 江戸時代)の調査
エ）奈良文化財研究所架蔵貴重書『十六羅漢記』(中世写本。「久寿二年丈六金色阿弥陀仏像支度注文案」「同年丈六像座飾支度殊」「仏の法量」を収録する)の原本閲覧調査
オ）アメリカ・サンスランシスコ東洋美術館蔵梵天・帝釈天像(脱活乾漆造、天平時代)の調査ならびに関係資料の閲覧

（2）彩色関係データ（語彙・史料編）の集積とホームページによる公開
美術工芸品の彩色を考えてゆくうえで、史料にあらわれた関係語彙とその使用例を総覧することを目的に彩色関係資料データベース（語彙・史料編）のデータ集積を行った。集積に際しては公刊史料（活字本）をもとに、その中から彩色関係の語彙の抽出につとめ、分類し、奈良時代史料にあらわれた彩色語彙データベースをホームページにおいて公開するとともに、逐次、更新し精度を上げることに努めた。

【実績値】
彩色関係資料データベース　入力件数　2,100 件
論文掲載数　　２件　(① ②)
発表件数　　２件　(③ ④)

【備考】
①Tetsuei Tsuda　"Nondestructive Investigation of the Polychromy of Japanese Sculptures (Yasuhiro Hayakawa, Tetsuei Tsuda, and　Sadatoshi Miura)", *Scientific Research on the Sculptural Arts of Asia: Procedings of Third Forbes Symposium at the Freer Gallery of Art*, pp159-164　07.7
②津田徹英「X線透過撮影による仏像の調査」『文化財と科学技術―東京文化財研究所のしごと(日本の美術492)』至文堂　pp.45-47　07.4
③津田徹英「近江の仏像 五大明王」大津市歴史博物館　07.12.1
④津田徹英「平安末期の在地造像をめぐる小考」企画情報部研究会　東京文化財研究所　07.12.26

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２００５

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

２．定量的評価

観点	論文掲載数	発表件数	データ集積数			
判定	A	A	A			
備考						

３．実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	美術や文化財に対する理解を深めるための美術の創作のプロセスの解明を行うべく、実作例と史料の双方からアプローチを行っている。計画２年度としては十分な成果を得られたため、Ａと判断した

４．当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	全般的に計画通りに進捗したと考える。次年度以降も一層の深化が期待でき、計画的に調査研究・史料収集・データ整理を継続したい。

（様式１）　　No.　２００６

業務実績書

中期計画の項目（Ⅰ４（1）②iv）	古都所在寺社所蔵の歴史資料・書跡資料等に関する原本調査を通じた日本の歴史、文化の研究。

【事業名称】	古都所在寺社の歴史資料等に関する調査研究（Ⅰ４（1）②ｴ）

【事業概要】
古都に所在する寺社、特に南都の興福寺、東大寺、薬師寺、唐招提寺や、京都の高山寺、滋賀の石山寺など、世界文化遺産に登録されているような大寺社を主たる調査研究対象として、それら古寺社が所蔵している古文書、古記録、聖教、経巻、板木などの歴史資料や書跡資料を継続的に、かつ悉皆的に整理、写真撮影、調書作成などの調査を行い、現存資料の実態の究明、把握に努め、その調査成果を目録、データベース等の方法により公開し、重要資料については、翻刻を行い紹介する。また書跡資料の記載内容の分析から、各寺社伝来の文化財の歴史的性格と個別的特徴を研究し、日本の歴史、文化の研究に資する。調査にあたって撮影した写真は焼き付けを作成し、研究者などの研究に供する。
本研究は、以下の如き理念を持っている。日本の古都においては、記念工作物等、建造物、史跡等の文化遺産自身が、多くの歴史資料等を所蔵している。それらの資料を継続的・悉皆的に調査研究することは、文化遺産を総合的に調査研究するために、さらには、それが所在する古都、ひいては日本文化の歴史的特質を究明するために必須の作業である。そのため、着実に中断なく、精確に全容を把握する調査を意図している。したがって調査研究の方法は、その改良も試みているが、根本的には独創性などの新規な観点のみでなく、精確なデータの提供を意図している。

【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	主任研究員　吉川 聡

【スタッフ】
高瀬要一、渡辺晃宏、馬場 基、市 大樹、山本 崇、浅野啓介、古藤真平、綾村 宏（客員研究員）

【年度実績概要】
本年度は、興福寺・薬師寺・東大寺・唐招提寺・高山寺・氷室神社大宮家所蔵の書跡資料・歴史資料調査をおこなった。興福寺調査は、従来把握されていなかった函の調査を進め、かつ、調書を作成した函の目録刊行を準備中である。本年度は、東金堂文書函等の調書を作成した。東金堂文書函は、近代に東金堂の天井裏から発見された鎌倉時代から室町時代にかけての東金堂関係文書であり、極めて興味深い内容を有している。また、第 89 函 65 号の、文書が板に挟んである資料を『奈良文化財研究所紀要 2008』に報告した。写真撮影は、東金堂関係文書等をブローニー版で撮影し、第 89 函をマイクロフィルムで撮影している。薬師寺は、第 31 函～第 53 函の調書作成をおこなった。写真は第 24 函を撮影している。
東大寺は、東大寺図書館収蔵庫第４号室収蔵の新修東大寺文書聖教の調査を、科学研究費補助金も充当して実施した。主に中村準一寄贈文書を調査し、第 35 函・43 函・44 函・56 函・75 函・93 函・98 函の目録データをパソコンに入力し、一部写真撮影をおこなった。幕末の興福寺の動向が判明する日記などを見いだすことができた。唐招提寺所蔵資料については、惣倉所在の近代書類を調査し、かつ、唐招提寺弁天堂の弁才天板絵・墨書銘の調査・写真撮影をおこなった。
また、京都の高山寺の調査を実施し、第 309 函・310 函の調査目録を、高山寺典籍文書綜合調査団編『高山寺経蔵典籍文書目録』完結篇（汲古書院、2007 年）の一部として刊行した。さらに、氷室神社大宮家文書について、奈良市教育委員会との間で共同研究の協定書を締結し、共同研究として、未成巻文書の調書作成・写真撮影を行い、成巻文書１巻～10 巻のデータベースを作成・公開した。
奈文研所蔵の資料については、「関野貞日記」の翻刻作業を進めているところである。
その他、調査協力の依頼を受けて、滋賀県石山寺聖教調査や、文化庁依頼の醍醐寺聖教調査などに協力した。また文部科学省科学研究費「カンボジアにおける中世遺跡と日本人町の研究」に協力し、カンボジアのアンコール･ワットに残る 17 世紀前期の日本人墨書銘を調査・報告した。

【実績値】
論文等数：３件(論文２件①②、発表件数１件(③)
収集資料点数
興福寺：調書作成資料点数 256 点、写真撮影資料点数 397 点
薬師寺：調書作成資料点数 569 点、写真撮影資料点数 115 点
東大寺：調査及びデータ入力資料点数 1962 点、写真撮影資料点数 734 点
唐招提寺：調査及びデータ入力資料点数 92 点、写真撮影資料点数 3 点
大宮家文書：データ入力資料点数 208 点

【備考】
①吉川 聡「文書の挟み板」『奈良文化財研究所紀要 2008』2008.6
②吉川 聡「日本人墨書の研究」『カンボジアにおける中世遺跡と日本人町の研究』文部科学省科学研究費補助金成果報告書 2008.3
③吉川 聡「中世の奈良と大乗院」文化講演会「大乗院文化サロン」2007.11
「大宮家文書データベース」（奈良文化財研究所ホームページ上で公開開始）

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２００６

１．定性的評価

観点	正確性	適時性	継続性	発展性		
判定	A	A	A	A		

備考　正確性：調査における作成調書・データベースの内容
適時性：現在本調査をおこなう意義
継続性：本調査研究を書跡資料所蔵機関との協力により、持続的、悉皆的におこなっている意義
発展性：調査研究の成果が、所蔵者、研究者やその他の人々に取り役に立つかの視点

２．定量的評価

観点	調査対象箇所数	論文等数	発表件数	データ入力件数		
判定	A	A	A	A		

備考

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	興福寺、東大寺、唐招提寺、薬師寺の調査は計画通り実施した。高山寺も調査を実施し、その成果を公表することができた。また氷室神社大宮家文書も、奈良市教育委員会と共同研究の形で調査を実施することができ、大宮家文書データベースの一部を公開することができた。以上の進捗状況を総合的に判定してＡとした。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業は、堅調に実現できたと考える。氷室神社大宮家文書を奈良市教育委員会との共同調査の形で実施したが、今年度はまだ緒に就いたばかりで、今後も共同研究を推進する必要があるだろう。他の寺社の調査研究は、今後もこのペースで進める必要がある。成果の公表についても、目録等を積極的に刊行していく必要があるだろう。

（様式１）　　No.　２００７

業務実績書

中期計画の項目（Ⅰ４（1）②ｖ）	歴史的建造物の保存・修復・活用に関し重点物件に係る調査・研究を通じた基礎データの収集整理・公開

【事業名称】	歴史的建造物の保存・修復・活用の実践的研究（Ⅰ４（1）②オ）

【事業概要】
わが国の文化財建造物の保存・修復・活用に向けた歴史的建造物、伝統的建造物群及び近代化遺産等に関する基礎データを蓄積し、分析・研究を行うとともに、古代建築の今後の保存と復原に資するため、古代建築の諸構法についての再検証を行い、得られた成果を整理するとともに、一般公開を図る。

【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	建造物研究室長　窪寺茂

【スタッフ】
島田敏男、箱崎和久、清水重敦、黒坂貴裕、金井健、西田紀子、大林潤、粟野隆、番光、崔ゴウン（日韓文化交流基金フェロー）、村田健一（文化庁）、田中泉・金子隆之・山田　宏・山下秀樹（以上、奈良県教育委員会）、春日井道彦・加藤雅大（以上、文化財建造物保存技術協会）、木村勉（長岡造形大学）、黒田龍二（神戸大学）、清水真一（東京文化財研究所）、田中淡・福田美穂・山岸常人（以上、京都大学）、冨島義幸（滋賀県立大学）、鳴海祥博（和歌山県文化財センター）、藤井恵介（東京大学）、藤田盟児（広島国際大学）、渡邊晶（竹中大工道具館）

【年度実績概要】
研究所が保管する建造物の基礎データとして、過去の建造物修理時に撮影された約３万枚の建造物写真乾板と、重要文化財の建造物修理時に作成された現状変更説明資料がある。これらは文化財建造物の保存修理を推し進めるうえで有効性の高い一次資料であり、この事業では、これらを公表する作業（デジタルデータ化及びデータ化）を近年継続している。写真乾板についてはデジタル化し、現状変更説明については 1965 年～1967 年分と 1968 年～1970 年分とに分けて資料をデータ化し、それぞれ本文編と図版編とに分けた出版物を刊行した。

古代建築の技術に関する研究では、昨年度に引き続き、日韓古代寺院建築の発掘遺構資料を可能な限り収集し、発掘遺構と上部構造の関係の再考を進め、研究成果を 2008 年３月 21 日に開催した第２回研究集会で発表したうえ、研究協力者との間で討議をおこなった。また、現在工事中の平城宮第一次大極殿正殿復原施工に関する技術面での援助・助言をおこなうとともに、扁額意匠設計に向けた研究をおこなった。

伝統的建造物群及び近代化遺産等に関する研究では、まず、現在文化財として未指定物件である出雲大社境外諸社殿について、昨年度に引き続き 10 棟の調査をおこない、全 12 棟の調査（調書作成・実測・写真撮影）を完了させたほか、文献調査などにより出雲大社における造営遷宮の実際とそのあり方についての分析をおこなった。この調査成果としての報告書は 2008 年度の刊行を予定している。また、受託事業として高知県中芸地区森林鉄道遺構調査をおこない、260 件にのぼる物件調査を実施し、成果を報告書に取り纏め刊行した。また、京都府近代和風建築総合調査も受託事業として実施し、今年度分として選定した 153 件の各種建築の現地調査等をおこない、平成 20 年３月 24 日開催の同調査委員会において一年間の成果を報告した。これらの受託業務については別紙参照（No.7-１、7-2）。

このほか、海外関係事業では、カンボジア・西トップ寺院遺跡の現地調査に参加し、アフガニスタン・バーミヤーン寺院遺跡石窟調査では、成果を報告書として取り纏めた（報告書刊行・東文研担当）。また、昨年度刊行したベトナム・ドゥオンラム村集落調査報告書の英語版を刊行するための英訳作業のほか、日中韓文化財研究所でおこなおうとしている建築遺産に関する共同研究に向けた準備会議を北京・奈良において実施した。

【実績値】
論文等数 11 件（公刊図書５件①～⑤、論文等７件⑥～⑭）　　学会等発表件数２件（⑬～⑭）
保管建造物関係資料整理：写真乾板デジタル化 1121 枚、現状変更資料入力 19655～1970 年分
古代建築研究資料収集（図面・写真等画像）：国内資料 90 点、韓国資料 200 点、中国資料６点　　扁額資料収集：53 件
研究会等開催件数３件：日中韓文化財研究所共同研究準備会議 2007.9.3～9.6、扁額復原所内検討会 2007.11.1、古代建築の技術に関する研究集会 2008.3.21
保管建造物資料の外部者利用数：乾板写真４件 31 枚、建造物保存図３件 42 枚

【備考】
①中芸地区森林鉄道遺産を保存・活用する会『高知県中芸地区森林鉄道遺産調査報告書』2008.3 ②奈良文化財研究所『重要文化財建造物現状変更説明 1968～1970（本文編）』2007.8 ③奈良文化財研究所『重要文化財建造物現状変更説明 1968～1970（図版編）』2007.8 ④奈良文化財研究所『重要文化財建造物現状変更説明 1965～1967（本文編）』2008.2 ⑤奈良文化財研究所『重要文化財建造物現状変更説明 1965～1967（図版編）』2008.2 ⑥山下ほか３名「扁額の意匠と構造－平城宮第一次大極殿正殿扁額の復原考察－」 ⑦清水重敦ほか２名「古代寺院建築における特異な基壇・平面とその構造」 ⑧窪寺茂「日中韓文化財研究所による建築遺産に関する共同研究の動向」 ⑨大林潤「境外社の造替と建築形式－出雲大社境外社の調査より－」 ⑩島田敏男「西トップ寺院の建築調査」 ⑪西田紀子「高知県中芸地区の森林鉄道遺産」（⑥～⑪『奈良文化財研究所紀要 2008』2008.6 ⑫清水重敦ほか１名「出土部材から見た山田寺建築」『奇偉荘厳　山田寺』飛鳥資料館 2007.10 ⑬清水重敦「山田寺金堂復元案批判」『日本建築学会大会学術講演梗概集』2007.9⑭窪寺茂ほか１名「バーミヤーン石窟寺院遺構の保存に向けた調査報告（2）」『日本建築学会大会学術講演梗概集』2007.9

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２００７

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考
適時性、効率性、正確性は受託調査・保管資料のデータ化に関するもの、独創性、発展性は古代建築の技術に関する研究に関するもの、継続性は保管資料のデータ化に関するものを主な対象とした観点

２．定量的評価

観点	調査対象箇所数	資料収集数	論文等発表数			
判定	A	A	A			

備考

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	古代建築の技術に関する研究などでの資料収集数やそのデータ化、受託調査における調査対象件数・棟数など、定量的側面の成果が十分達成できたと同時に、今年度における調査研究成果を十分に上げることができた。この今年度の業務達成度は、次年度計画の進展を図るうえでも大きいと考える。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業のうち、古代建築の技術の研究では、従来の研究視点とは異なる内容で行っており、古代建築研究に関する新たな研究手法、方向性を提示しつつあると考える。研究所保管資料の公開に向けた年度計画の進捗も順調に進んでおり、外部利用者の便宜を図ることができつつあると考える。また、受託事業は設定された計画と期待された調査水準を実現しており、歴史的建造物の保存・修復・活用に向けた働きかけができていると考える。今後もこのペースを維持し、次年度計画の達成に向けた努力を行いたい。

（様式１）　　No.　２００８

業務実績書

中期計画の項目（Ⅰ４（１）③）	我が国の古典芸能及び伝統的工芸技術等の無形文化財の伝承実態を把握するとともに、その伝承・公開の基礎となる技法・技術を明らかにする。

【事業名称】	無形文化財の保存・活用に関する調査研究（Ⅰ４（１）③）

【事業概要】
わが国の無形文化財、並びに文化財保存技術の伝承実態を把握し、その保護に資するため、伝承の基礎となる技法・技術の実態や変遷の調査研究、及び資料の収集を行い、現状記録の必要な対象を精査して記録作成をおこなう。
また、無形文化遺産分野についての国際的研究交流として、アジア地域を中心とした諸外国の関係機関との具体的交流を推進するための協議を行う。

【担当部課】	無形文化遺産部	【事業責任者】	部長　宮田繁幸

【スタッフ】
鎌倉惠子、高桑いづみ、飯島満、俵木悟（以上無形文化遺産部）、福岡裕子、森下愛子（以上、客員研究員）

【年度実績概要】
文化財保護委員会が作成した音声資料の調査を行い、上方寄席囃子の林屋トミの記録について、第２回無形文化遺産部公開学術講座で発表した。また、部所蔵のSPレコードを公開鑑賞する会を開催した。
東京都在住の個人が所有する鼓胴について調査を行い、その成果を『銕仙』に発表した。また、八代藩旧蔵、長州藩旧蔵、愛媛県村上水軍博物館所収などの龍笛・能管について調査を行った。村上水軍博物館所有の能管についてはX線撮影もおこなった結果、龍笛と能管の中間的な形状をしていることが判明した。
奈良県生駒市宝山寺、及び財団法人観世文庫が所蔵する世阿弥自筆能本について調査を行い、世阿弥の作曲法、記譜法について考察をした。成果は『無形文化遺産研究報告』で公表した。
無形文化遺産部所蔵の音声資料、昭和期の歌舞伎写真を整理し、所蔵一覧等を『無形文化遺産研究報告』に概説した。また、長く雑誌『演劇界』のグラビアを担当していた写真家梅村豊氏(1923－2007)撮影の写真およびネガの寄贈を受け、その整理を開始した。
人形浄瑠璃文楽技芸員重要無形文化財保持者吉田簑助氏、人形浄瑠璃文楽囃子方望月太明藏社中藤舎秀左久氏、同社中望月太明吉氏から聞取り調査をおこない、『無形文化遺産研究報告』で公表した。
工芸技術に関しては、葛布製造の現状、民平焼の「土型」について調査研究を行い、それぞれ『無形文化遺産研究報告』で公表した。
近年の伝承に変化が著しい宝生流と喜多流の謡曲、及び連続口演の機会が激減している講談について、昨年度にひきつづき、実演記録作成を行った。
また無形文化遺産分野についての国際的研究交流として、中国成都市で行われた無形文化遺産保護条約臨時政府間会合に出席し、情報収集を実施した。

【実績値】
論文等掲載数　３件（１～３）
発表件数　３件　（４～６）

＜参考指標＞
記録作成数　39 件（謡曲 29　講談 10）
公開講座の開催　１件　SP レコード鑑賞会の開催　１件

【備考】
１高桑いづみ「『過渡期の鼓胴その後』再び」　『銕仙』560号　pp.6-7　07.9
２高桑いづみ「世阿弥自筆本の節付を考える―「難波梅」から「盛久」「江口」まで」『無形文化遺産研究報告』２　pp.265-286　08.3
３鎌倉惠子「〔聞書き〕〔聞書き〕人形浄瑠璃文楽の裏方―囃子の世界を中心に―　吉田簑助師　藤舎秀左久師　望月太明吉氏に聞く」『無形文化遺産研究報告』2　pp. 194-212　08.3
４高桑いづみ「安国寺納入品・龍笛の歴史的位置づけ」　公開講演会　鞆の浦歴史民俗資料館　07.6.23
５飯島満「文楽―音の記録―」　藝能史研究会第 31 回東京例会　国立能楽堂大講義室　07.12.1
６飯島満「無形文化財『上方寄席下座音楽』の位置」　第２回無形文化遺産部公開学術講座　大阪文楽劇場小ホール　07.12.12

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２００８

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

２．定量的評価

観点	論文等数	発表数				
判定	A	A				
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	プロジェクト２年目で、文化財保護委員会作成資料の調査、選定保存技術の調査を継続し、新たに管楽器の調査に着手した。このうち文化財保護委員会に関しては調査結果の一部を公開学術講座で公表した。いずれも他の機関が行っていない調査で独創性が強く、楽器を所蔵する博物館に貢献するなど公共性も高い。今後も、この調査を継続する予定である。以上の観点を総合してＡと判定した。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究は、その進捗度、内容において順調に実施できた。

（様式１）　　No.　２００９

業務実績書

中期計画の項目（Ⅰ４（１）⑤）	平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び関連する中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査・研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建造物の様式並びに瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。

【事業名称】	平城宮跡　東院地区（第４２１次）の発掘調査（Ⅰ４（１）⑤ア）

【事業概要】
平城宮跡東院地区で実施した本調査は、東院地区中枢部の遺構配置やその変遷といった実態を解明する目的で実施した。平成 18 年度からはじまった５カ年計画の第２年度目にあたる。

【担当部課】	都城発掘調査部　平城地区	【事業責任者】	副部長　山崎信二

【スタッフ】
小池伸彦、深澤芳樹、島田敏男、城倉正祥、森川 実、林 正憲、馬場 基、山本 崇、金井 健、牛嶋 茂、中村一郎、鎌倉 綾（以上、奈良文化財研究所）、杉本和樹（西大寺フォト）

【年度実績概要】
平城第 401 次調査（平成 18 年度）の成果をうけ、調査対象地は、復原公開されている東院庭園の北西、東院南門（推定建部門）の北方とし、調査区は、旧調査区に東接する国有地内に、昨年の調査区と一部重複させて設定した。
調査面積は 1560 ㎡。調査期間は、平成 18 年 4 月 2 日から 10 月 10 日まで。調査成果の概要は、紀要および現地説明会、速報展示などで公表した。第 421 次調査では、奈良時代に属する少なくとも５時期の遺構を検出した。
Ⅰ期（奈良時代前半）に属する主な遺構は、南北塀 SA19055 と、それにとりつく門 SB19056 であり、18 年度調査で推定した東院西半区画の東限を、ほぼ推定通り確認した。　奈良時代半ば以降、東院は、東西を二分せず全体を広く区画して用いられ、建物も大規模になる傾向が認められる。Ⅱ期に属する遺構は、調査区南端で検出した、桁行 11 間梁行１間以上の掘立柱東西棟建物 SB19040、桁行９間以上梁行２間の南北棟建物 SB19035、東西３間南北３間の総柱建物 SB19043 である。Ⅲ期（奈良時代半ば～後半）に属する遺構は、桁行９間梁行４間で四面庇をもつ掘立柱東西棟建物 SB19080 が注目され、その柱穴は、１辺 1.5m～２m深さ約 1.5m と宮内でも屈指の大規模なものであった。
続くⅣ期・Ⅴ期の遺構は、東院区画を考える上で重要な成果をもたらした。Ⅳ期（奈良時代後半）の遺構として、東院中枢部を囲む回廊 SC19050 の西南隅を検出した。回廊は、既調査区の成果とあわせ、東西・南北とも 27m分検出しており、さらに調査区外へ続く。Ⅴ期（奈良時代末期）の主要な遺構は、桁行９間梁行３間分検出した北庇をもつ掘立柱東西棟建物 SB19090 である。建物の中軸が東院南門の東西方向の中軸線上に位置し、かつ門の北およそ 500 尺に位置するなど、東院の建物群の計画的な配置の様が窺われる。
以上、本調査の成果は、東院の区画変遷をほぼ解明したことといえる。変遷の概要は、西半部に官衙的な建物を配する段階（奈良時代前半）から、東院全体を広く区画する段階へ（奈良時代半ば以降）と概括され、奈良時代末期には、東院南門の中軸線を意識する、より計画的に配置された建物群が出現する。なお、単廊 SC19050 の検出は特筆される成果といえ、東院の中枢部を本調査区北東に推定する説は、これによりさらに確実になった。

【実績値】
論文等件数６件（論文１件①、解説３件②③④、その他２件⑤⑦）
発表件数３件（記者発表１回②、現地説明会１回③、速報展示１回⑥）
出土品　軒瓦 43 点、道具瓦２点、丸瓦・平瓦・磚類 5059 点 379.88 kg、凝灰岩 51 点 55.36 kg、土器整理用コンテナ 12 箱
記録作成数　実測図等 66 枚、写真（４×５）113 枚

【備考】
①金井健・山本崇・森川実・林正憲ほか「東院地区中枢部の調査－平城第 421 次・423 次」『奈良文化財研究所紀要 2008』（予定）
②奈良文化財研究所「東院地区中枢部の調査―平城第 421 次―」記者発表資料、2007. 8
③奈良文化財研究所「東院地区中枢部の調査―平城第 421 次現地説明会資料―」2007. 9
④奈良文化財研究所「平城宮跡東院地区中枢部の調査　平城第 421 次調査」現地説明会資料添付図版（A4 カラーリーフレット）、2007. 9
⑤金井健「平城宮東院地区の調査（平城第 421 次）」『奈文研ニュース』No. 26、2007. 9
⑥速報展示「平城宮跡東院地区中枢部の調査（平城第 421 次調査）」2007. 11. 13～12. 16、平城宮跡資料館
⑦山本崇「平城宮跡東院地区中枢部の調査（平城第 421 次調査）『奈文研ニュース』No. 27、2007. 12

(様式２)

自己点検評価調書

№. ２００９

１．定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	正確性		
判定	A	A	A	A		

備考
適時性：発掘調査成果の公開を現地説明会、速報展示等により行った
発展性：新たな調査成果をうけ、平城宮および東院成立過程を考究する基礎データを提示できた
継続性：５カ年計画の中で継続的に調査を行い、調査面積の蓄積のみならず、より集約的効率的な成果の検討を行った
正確性：検出遺構・出土資料の性格な検討、資料化による貢献を行った

２．定量的評価

観点	発掘調査箇所数	論文数				
判定	A	A				

備考
発掘調査箇所数：年度計画に従い調査を行った

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本調査によって東院地区西部の遺構変遷を総括でき、また調査成果を現地説明会および紀要で公開できたので、総合的にＡと判断した。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画に従い発掘調査が行われ、着実に成果をあげてきている。

（様式１）　　No.　２０１０

業務実績書

中期計画の項目 （Ⅰ４（１）⑤）	平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び関連する中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査・研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建造物の様式並びに瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。

【事業名称】	平城宮跡　東院地区（第４２３次）の発掘調査（Ⅰ４（１）⑤ア）

【事業概要】
本調査は平城宮跡東院地区中枢部において平城第４２１次調査に続く調査で、平城宮東院中枢部の遺構配置やその変遷などの実体解明を目的に発掘調査を行った。

【担当部課】	都城発掘調査部　平城地区	【事業責任者】	副部長　山崎信二

【スタッフ】
西口壽生、粟野隆、和田一之輔、石村智、浅野啓介、牛島茂、杉本和樹、中村一郎

【年度実績概要】
調査区は、第401次調査区の北側で、かつ第381次調査区の東側で。東西30m、南北45mの調査区を設定した。調査面積は1379㎡（このうち未発掘区は1025㎡）である。調査は平成19年の9月25日から開始して、平成20年の3月3日に終了した。現地説明会を1月19日に実施した。
掘立柱建物１３棟、石組溝８条、礫敷などを検出した。遺構は建物の柱穴の重複関係、及び石組溝・礫敷と建物の柱穴の重複関係などから、大きく５時期にわけられる。それぞれの時期において、場所を違えて大規模な建物が造り替えられている。とりわけ重要な点は、奈良時代後半の短い期間に前代の建物をほぼ全面的に改作している点である。また、大規模な総柱建物や石組溝が多いという特徴は、建物外を礫敷で舗装することとあわせて、内裏をはじめとした宮殿の様相に類似している。今後の調査において、建物配置だけでなく、舗装や排水施設など生活空間全般を検討する上での足がかりを得たこととなる。また、Ⅴ期の建物の抜取穴から地覆石が出土していることは当該期ころに基壇建物があったことを示唆する。
さらに、Ⅱ期の建物 SB19100・19101 及びⅤ期の建物 SB19116 が東に続く可能性があることから、各時期にわたって本調査区の一段高い東側に東院地区中枢部の主要施設があることが推定できる。特にⅢ期の回廊 SC19112・19113 が区画の北西部を形成し東に続くということは、まさに東院中枢部の北西隅をとらえたといえるであろう。 現地説明会には８００人が来場した。

【実績値】
論文等数４件（論文１件③、解説等３件①②④）
発表件数２件（記者発表１回、現地説明会１回）
出土品　土器コンテナ４０箱、瓦５８４kg、磚２８kg（緑釉を含む）、凝灰岩５７kg、柱根１点、緡銭１点
記録作成数　７１枚、写真（４×５）８５枚

【備考】
①平城宮跡東院地区中枢部（平城第 423 次）の調査　記者発表資料　2008・1
②平城宮跡東院地区中枢部（平城第 423 次）の調査　現地説明会資料　2008・1
③西口壽生・粟野隆・和田一之輔・浅野啓介「東院地区中枢部の調査　平城第 423 次」『奈良文化財研究所紀要 2008』（予定）
④平城宮跡東院地区中枢部の調査（平城第４２３次調査）『奈文研ニュース』（予定）

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２０１０

１．定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性			
判定	A	A	A			

備考
適時性：東院中枢部の区画が確認できた
発展性：石組溝・礫敷・土坑など生活空間全般を考える足がかりができた
継続性：既調査区との関係を明確にできた

２．定量的評価

観点	論文等数	発表件数				
判定	A	A				

備考

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	東院地区中枢部の建物変遷や生活空間にかかわる基礎的資料を得ることができた。また、調査成果を一般に公開することもできたので、総合的にＡと判断した。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査研究は、年度当初の計画通り行われており、目的を順調に達成した。

（様式１）　　No.　２０１１

業務実績書

中期計画の項目（Ⅰ４（１）⑤）	平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び関連する中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査・研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建造物の様式並びに瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。

【事業名称】	平城宮跡　東方官衙地区（第４２９次）の発掘調査（Ⅰ４（１）⑤ア）

【事業概要】
本調査は、平城宮跡中枢部の１つ東区朝堂院地区と東院地区の間に位置する東方官衙地区において、遺構の広がり、区画単位の解明及び遺構深度などの実態を解明する目的で実施した。昨年度からはじまったこの地区における調査の第２回目である。

【担当部課】	都城発掘調査部　平城地区	【事業責任者】	副部長　山崎信二

【スタッフ】
渡辺晃宏、今井晃樹、大林潤、城倉正祥、加藤雅士、石村智、中村一郎

【年度実績概要】
昨年度の調査区の南側を調査対象とし、南北 96m、東西 129m、調査面積 1314 ㎡の調査区を設定した。調査は平成 20 年１月１１日より開始した。
昨年度に実施した第 406 次調査では基幹排水路 SD2700 をはさんで東西にならぶ２つの官衙区画を確認した。このうち東側で発見された区画は東西 51m、南北 120m 以上の規模をもつ築地塀の囲いがあり、その中に基壇をもつ礎石建物が配置されていることをあきらかにした。東側の区画の東側には南北にとおる基幹排水路 SD3410 も検出した。さらに西側にも官衙区画が存在し、南北棟の礎石建物が検出された。
本調査区は 406 次調査の成果をふまえ、官衙がさらに南方へどのように展開するかを解明することを目的とした。
406 次調査で検出した 2 本の基幹排水路 SD2700、 SD3410 は本調査区内に南行することがあきらかになった。ただし、本調査区の南端で従来知られていない東西方向の溝が確認され、地形から考えて SD2700 は本調査区の南端あたりで東折し、SD3410 に合流すると考えられる。
この SD2700 をはさんで東西に２つの官衙区画を確認した。東区画では築地塀本体は残存しておらず、区画の正確な規模を解明することはできなかったが、東西両側の基幹排水路の存在と 406 次調査の成果から推算すると、区画の東西幅は 50mほどとなる。遺構の残存状況がわうるいため、区画の南北規模は不明である。区画内には掘立柱建物が数棟検出され、全体として何度かの建て替えがあったことをあきらかにした。
SD2700 の西側では築地塀の存在を示す雨落溝を検出し、区画の東西幅がおよそ 51m であることがわかった。区画内には総柱の礎石建物が２基確認され、いずれも東西５間、南北２間以上の東西棟建物である。建物の構造から高床式の倉庫であったと推測できる。
東西２つの区画は規模がほぼ近似するものの、区画内の建物の様相がことなっており、機能がことなると予想される。２つの官衙の機能や役所名の特定は今後の調査研究をまって判断したい。
また、SD2700 が南へ続かず調査区南端で東折することは、この東西溝の南側に朝堂院東門から東にのびる宮内通路の存在を示唆する。
以上の成果は、東方官衙地区における官衙の配置や規模を把握するだけでなく、東方官衙全体の構造を解明するうえでも重要な資料となる。

【実績値】
論文等数３件（論文１件①、解説等２件②③）
発表件数２件（記者発表１回、現地説明回１回）
出土品　土器 58 箱　軒丸瓦 59 点　軒平瓦 42 点　鬼瓦８点　木製品 33 箱　金属製品５点
実測図 60 枚　写真（４×５）80 枚

【備考】
①渡辺晃宏、今井晃樹、大林潤、城倉正祥、加藤雅士、石村智、中村一郎「平城第 429 次　東方官衙地区の調査」『奈良文化財研究所紀要 2008』（予定）
②奈良文化財研究所「平城第 429 次　東方官衙地区の調査　記者発表資料」2008.3
③奈良文化財研究所「平城第 429 次　東方官衙地区の調査　現地説明会資料」2008.3

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２０１１

１．定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	正確性		
判定	A	A	A	A		

備考
適時性：東方官衙の配置・規模を確認し、調査成果を即座に公開した
発展性：来年度にこの南で調査を予定しており、本調査成果を発展させることができる
継続性：周辺地域での調査成果を総合する
正確性：充実した測量機器と出土遺物の専門的研究に支援された調査を実施した

２．定量的評価

観点	論文等	発表件数				
判定	A	A				

備考

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	東方官衙地区における官衙配置や規模のほかに通路の存在を示唆する遺構の検出により、東方官衙全体の構造を解明する資料を得ることができた。また、その成果も一般に公開する役割も充分に果たしたとみて、A とした。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査研究は当初の計画どおり実施することができた。また、次回の調査に必要な資料の提示とともに、今後解明すべきあらたな課題をも明確にすることができた。中期計画の目標は充分に達成している。

（様式１）　　No.　２０１２

業務実績書

中期計画の項目（Ⅰ４（１）⑤）	平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び関連する中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査・研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建造物の様式並びに瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。

【事業名称】	旧大乗院庭園（第４２４次）の発掘調査（Ⅰ４（１）⑤ア）

【事業概要】
奈良文化財研究所では、(財) 日本ナショナルトラストからの委託を受け、復元整備の基礎データを得るため、平成７年度より継続的に旧大乗院庭園の発掘調査を行ってきた。本調査は、その成果に基づく西小池復原整備工事に伴う補足調査である。
発掘は西小池南西の旧建物基礎内部（西調査区）及び、西小池の南池東岸部分（東調査区）の２箇所である。調査期間は 2007 年９月 10 日から９月 19 日まで、調査面積は 27.8 ㎡である。

【担当部課】	都城発掘調査部　平城地区	【事業責任者】	副部長　山崎信二

【スタッフ】
城倉正祥、島田敏男、牛島茂、中村一郎

【年度実績概要】
西調査区は 390 次調査で検出した鎌倉～室町時代のＳＢ8983 の西側の続きを確認することを主目的として調査したが、近代に標高 89.5mまで大きく削平されていた事が判明、顕著な遺構は検出できなかった。
東調査区は、310 次・352 次調査の土層観察用畔部分だが、西小池南側が大池方向と池尻方向の二股に分かれる岬に位置するため、汀線と護岸状況の確認を目的として調査した。基本層序は、上から表土、現代盛土、近代客土、堆積土、護岸時の盛土となっている。堆積土の上面で土坑を検出、土坑からは近世前半の軒平瓦が出土した。
堆積土を除去すると、調査区のほぼ中央で護岸の基底石を確認し、汀線を確定できた。護岸は、径約 20～30ｃｍ大の礫を積み上げているが、大型礫の下には小礫が大量に確認でき、裏込めをしながら比較的急傾斜で礫を積み上げた事がわかる。一方、池底には、径 5～10ｃｍほどの小礫を敷いているが、敷石面は基底石から 1.5mほど続いたところで途切れ、そこから急激に池底に向って深くなっている。
今回の調査では、西小池南西の旧建物基礎内が近代に大きく削平されていた状況、及び西小池東岸の汀線と護岸状況を確認した。昨年度までの調査成果と合わせることで、西小池の全体像が明らかになった。

【実績値】
発表件数１件（論文①）
出土品　土器類１箱　軒平瓦２点　丸瓦８点　平瓦 121 点　鉄板１点　鉄パイプテント支脚１点　竜一銭銅貨１点　貝１点　蓋板１点
記録作成数　遺構実測図３枚　写真 31 枚（4×5）

【備考】
論文　①城倉正祥「旧大乗院庭園（424 次）の調査」『奈良文化財研究所紀要 2008』（予定）

（様式２）

自己点検評価調書

No. ２０１２

１．定性的評価

観点	適時性	継続性	正確性			
判定	A	A	A			

備考
適時性：復原整備のための基礎データの取得
継続性：13 年にわたる発掘調査成果の蓄積
正確性：西小池の汀線及び護岸状況に関する知見

２．定量的評価

観点	論文等数					
判定	A					

備考

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	現在進められている旧大乗院庭園西小池部分の復原整備事業のための補足調査により、西小池の汀線及び護岸状況に関する基礎データを得ることができた。これまでの発掘調査成果も踏まえた上で、いかにして考古学的な成果と庭園研究の成果を総合し、復原整備を進めていくかが今後の課題といえる。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	13 年にわたる継続的な調査によって旧大乗院庭園に関する膨大な考古学的成果を得ることができた。これらの成果を総括すべく、発掘調査報告書の刊行へ向けた作業が必要である。

（様式１）　　No.　２０１３

業務実績書

中期計画の項目 （Ⅰ４（１）⑤）	平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査・研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建築物の様式並びに瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。

【事業名称】	藤原宮跡大極殿院南門発掘調査　（Ⅰ４（１）⑤ア）

【事業概要】
奈良県高市郡明日香村から橿原市にかけての「飛鳥・藤原」地域は、我が国古代国家成立期の歴史的な舞台であり、６世紀末から８世紀初めにいたる間、政治・経済・文化の中心地であった。この地域の地下には、現在も宮殿や豪族の居館、寺院や墳墓など様々な遺跡が眠っている。本研究は、こうした遺跡の発掘調査を通じて、古代国家の具体的な歴史像を復元すべく、学際的な調査研究をおこなうものである。その成果は、遺跡発掘調査説明会や報告書類、展示室などで広く公開するとともに、遺跡の保存・活用についても取り組んでいる。
藤原宮跡は、我が国初の本格的都城をそなえた宮殿遺跡であり、平成 11 年度から中枢部の実態解明のための計画調査を実施している。

【担当部課】	都城発掘調査部　飛鳥藤原地区	【事業責任者】	部長　巽淳一郎

【スタッフ】
箱崎和久、高田貫太、松村恵司、中川あや、丹羽崇史、長谷川透、玉田芳英、番　光、青木　敬、竹本 晃、井上直夫、岡田　愛

【年度実績概要】
藤原宮大極殿院南門は、1934～1943 年にかけて日本古文化研究所（以下、古文化研）による発掘調査が行われた。1940 年の調査では、東西に列をなす石材を 11 個確認し、それを基壇の北辺と判断、門基壇の規模を東西 100 尺程、南北 50 尺程と推定した。しかし、礎石などは確認されず、南門の具体的な構造も不明であった。今回の調査は、南門基壇の正確な規模やその築成方法、南門自体の規模や構造、大極殿院回廊との関係、儀式用施設の有無などを明らかにすることを目的とした。調査総面積は、1560 ㎡、調査期間は平成 19 年 4 月 1 日～11 月 12 日。
調査の成果として、まず大極殿南門基壇の規模を確定した。1940 年に古文化研が確認した基壇外装と判断される石材列を再検出し、石材が抜き取られた部分についても基壇外装の据付掘形や抜取溝を検出した結果、基壇の規模は、東西 39.1m×南北 14m となり、古文化研の調査で推定した南門基壇の規模よりも大きくなることが判明した。また、次のような南門基壇の築成方法を明らかにすることができた。① 藤原宮全域を大規模に整地する。② 南門の位置を決定し基壇の規模よりも一回り広く掘り込む。深さは少なくとも 1m 以上。③ 掘込の中に、橙色粘質土・灰色粘質土・黒褐色砂質土など性質の異なる土を交互に敷いて、版築工法で搗き固める(掘込地業)。さらに、地業上にその範囲よりも広く、整地土を敷いて搗き固める。④ 基壇部を築成し、礎石を据え、門の建物を築く。切石を用いて基壇外側を整え(基壇外装)、あわせて階段を設ける。⑤ 基壇外周に拳大の礫を敷く。藤原宮の建物において大規模な掘込地業を確認したのは、古文化研が大極殿で確認したのに続き 2 例目で、南門が入念に築成されていたことがうかがえ、天皇の儀式空間である大極殿院の真南に開く門としての重要性を示している。さらに、南面西回廊 1 間目の範囲において地鎮遺構を確認した。藤原宮期の整地土に土坑が掘り込まれ、その中に富本銭 9 枚、水晶原石 9 点をおさめた須恵器平瓶が埋納されていた。また、日本の都城、宮殿遺跡における最古の地鎮具である。
2007 年９月８日に現地説明会をおこない、1,030 人の見学者があった。

【実績値】
論文等数６件（論文１件①、その他４件②③④⑤⑥）
発表件数３件（現地説明会１回、報道発表２回）
出土品　軒瓦 116 点、丸平瓦(整理箱)280 箱、土器(整理箱)27 箱、木製品 5 点、金属製品 16 点、石製品 10 点
記録作成数　遺構実測図 71 枚、遺構写真(4×5)　74 枚

【備考】
① 高田貫太・青木敬・箱崎和久・豊島直博・松村恵司「大極殿院南門の調査－第 148 次」『奈良文化財研究所紀要 2008』2008.6
② 奈良文化財研究所「飛鳥藤原第 148 次調査　記者発表資料」2007.9
③ 奈良文化財研究所「飛鳥藤原第 148 次調査　現地説明会資料」2007.9
④ 奈良文化財研究所「飛鳥藤原第 148 次調査記者発表資料　藤原宮大極殿院南門の調査－宮造営に関わる地鎮遺構を発見－」2007.11
⑤ 高田貫太「藤原宮大極殿院南門の調査－第 148 次調査」『奈文研ニュース』26、2007.9
⑥ 高田貫太「藤原宮大極殿院出土の地鎮具」『奈文研ニュース』28、2008.3

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２０１３

１．定性的評価

観点	適時性	発展性	独創性	継続性		
判定	A	A	A	A		

備考　適時性：藤原宮中枢部(大極殿院)の全体解明への寄与。
発展性：大極殿院の造営過程を復元するための手がかりを得た。
独創性：掘込地業など南門基壇の詳細な築成方法を明らかにした。並びに、藤原宮造営時の地鎮遺構を確認した。
継続性：計画調査の継続。

２．定量的評価

観点	論文等数	発表件数				
判定	A	A				

備考

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本調査では、藤原宮大極殿院南門の全体像を明らかにするとともに、造営時の地鎮遺構を確認するなど注目すべき新たな知見を数多く得ることができた。また、調査成果の一般への公開も適切に行いえたので、総合的にＡと判断した。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査研究は、年初当初の計画通りに実施されており、かつ目的を順調に達成した。

（様式１）　　No.　２０１４

業務実績書

中期計画の項目（Ⅰ４（１）⑤）	平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査・研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建築物の様式並びに瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。

【事業名称】	石神遺跡（第 20 次）発掘調査（Ⅰ４（１）⑤ア）

【事業概要】
奈良県高市郡明日香村から橿原市にかけての「飛鳥・藤原」地域は、我が国古代国家成立期の歴史的な舞台であり、６世紀末から８世紀初めにいたる間、政治・経済・文化の中心地であった。この地域の地下には、現在も宮殿や豪族の居館、寺院や墳墓など様々な遺跡が眠っている。本研究は、こうした遺跡の発掘調査を通じて、古代国家の具体的な歴史像を復元すべく、学際的な調査研究をおこなうものである。その成果は、遺跡発掘調査説明会や報告書類、展示室などで広く公開するとともに、遺跡の保存・活用についても取り組んでいる。
石神遺跡は、飛鳥の宮殿遺跡として重要な遺跡の一つであり、この遺跡の実態解明のため、昭和 56 年度より継続的に計画調査を実施している。今回は、第 20 次調査となる。

【担当部課】	都城発掘調査部　飛鳥藤原地区	【事業責任者】	部長　巽淳一郎

【スタッフ】
黒坂貴裕、次山　淳、小田裕樹、関広尚世、丹羽崇史、井上直夫、岡田　愛

【年度実績概要】
石神遺跡は７世紀中頃には外交上の饗宴施設であったと考えられている。第 14 次調査までに、大規模な建物群をともなう石神遺跡の中心部分を発掘し、その北限施設と南北規模を明らかにした。この成果をふまえて、今回の調査では遺跡の範囲を明らかにすることを主な目的として、北限施設の延長を想定し、第 14 次調査区の東側について発掘調査を実施した。調査面積は 484 ㎡。調査期間は平成 19 年 10 月 1 日ー平成 20 年２月 14 日である。
調査の結果、遺跡南限から全長 200m を超えて延びる石組基幹水路の一部を確認し、14 次調査区の北限施設の延長がこの基幹水路を越えて、新たに検出した南北方向の建物付近で止まることを明らかにした。この建物付近では同じく南北方向の時期を違える塀を２条確認した。これにより、石神遺跡中心部東限施設の有力な候補を見つけることができた。これまでに推定されている西限から本調査区の東限候補施設まで約 130m である。また、今回の調査では、石組溝の接合部にコウヤマキを用いた木樋を組み込む遺構を確認し、また石組暗渠と石組溝の詳細な記録をおこなったことで、古代土木技術についての知見を深めた。
次年度以降は、今回の調査で得られた東限施設の延長と周辺の様相を明らかにすることで、石神遺跡の全体像を明らかにし、その範囲を確定することができるという見通しを得た。
平成 19 年 12 月 15 日に現地説明会を行い、867 名が来場した。

【実績値】
論文等数４件（論文１件①、その他３件②③④）
発表件数３件（現地説明会１回、報道発表１回、講演１回⑤）
出土品　丸・平瓦 17 kg、土器（整理箱）40 箱、金属製品、石製品、銭貨２点
記録作成数　遺構実測図 36 枚、遺構写真（4×5）28 枚

【備考】
① 黒坂貴裕・関広尚世「石神遺跡の調査ー第 150 次」『奈良文化財研究所紀要 2008』2008.6
② 奈良文化財研究所「石神遺跡の調査ー石神遺跡第 20 次調査記者発表資料」2007.12
③ 奈良文化財研究所「石神遺跡の調査ー石神遺跡第 20 次調査現地説明会資料」2007.12
④ 黒坂貴裕「石神遺跡の調査（飛鳥藤原第 150 次）」『奈文研ニュース』27、2007.12
⑤ 黒坂貴裕「石神遺跡」飛鳥京観光協会 2008.2

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２０１４

１．定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	正確性		
判定	A	A	A	A		

備考　適時性…学術的問題点と成果公開への取り組み
発展性…影響性、今後の調査への見通し
継続性…計画調査の継続
正確性…飛鳥の都市構造復元に関わる数値・データ

２．定量的評価

観点	論文等数	発表件数				
判定	A	A				

備考

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本調査では、計画調査の目的である石神遺跡中心区画北辺および東辺の状況を明らかにするとともに、南北基幹水路の状況を確認することができた。また、調査成果の一般への公開も適切に行いえたので、総合的にＡと判断した。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査研究は、年度当初の計画通り実施されており、課題であった石神遺跡東限施設の有力な候補を検出することで、次回の調査方針を固めることができ、石神遺跡全体像の解明に向けて、目的を順調に達成した。

（様式１）　　No.　２０１５

業務実績書

中期計画の項目 （Ⅰ４（１）⑤）	平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査・研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建築物の様式並びに瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。

【事業名称】	甘樫丘東麓遺跡発掘調査　（Ⅰ４（１）⑤ア）

【事業概要】
奈良県高市郡明日香村から橿原市にかけての「飛鳥・藤原」地域は、我が国古代国家成立期の歴史的な舞台であり、６世紀末から８世紀初めにいたる間、政治・経済・文化の中心地であった。この地域の地下には、現在も宮殿や豪族の居館、寺院や墳墓など様々な遺跡が眠っている。本研究は、こうした遺跡の発掘調査を通じて、古代国家の具体的な歴史像を復元すべく、学際的な調査研究をおこなうものである。その成果は、遺跡発掘調査説明会や報告書類、展示室などで広く公開するとともに、遺跡の保存・活用についても取り組んでいる。
甘樫丘は、『日本書紀』に飛鳥時代の豪族蘇我氏が邸宅を設けたという記述があり、甘樫丘東麓遺跡は、その関連遺跡としての重要性が高く、2007 年度より継続的に計画調査を実施している。

【担当部課】	都城発掘調査部　飛鳥藤原地区	【事業責任者】	部長　巽淳一郎

【スタッフ】
関広尚世、豊島直博、次山　淳、黒坂貴裕、小田裕樹、市　大樹、番　光、石田由紀子、青木　敬、井上直夫、岡田　愛

【年度実績概要】
甘樫丘は飛鳥側の西に位置する丘陵で、東麓にはいくつかの谷地が入り込む。遺跡は谷地の一つで、2006 年度の造園修景に先立つ確認調査によって７世紀の建物群の存在が明らかになった。2007 年度には初めて面的な学術調査に着手し、石垣、掘立柱建物群、炉などを確認した。2008 年度の調査区は昨年度の調査区に隣接し、確認調査で検出した建物群の規模と年代、谷地奥側における遺跡の広がりを把握することが目的である。調査面積は 950 ㎡。調査期間は 2007 年 11 月 12 日～2008 年４月 28 日。
調査区内では、過去の試掘調査で確認したものも含めて、５棟の掘立柱建物を検出した。このうち２棟は７世紀中頃、残る３棟が７世紀後半のものである。また、隣接する昨年度の調査区で確認した総柱建物も７世紀中頃のものであることが確定した。年代の手がかりとなったのは調査区北東隅で確認した土坑で、７世紀中頃の土器が一括で出土している。土坑との重複関係から建物群の年代を限定することが可能となった。
７世紀中頃の建物は、倉庫と考えられる総柱建物と小規模な掘立柱建物である。つまり、今回の調査区内には居住空間が見あたらない。未発掘部分に居住空間が広がる可能性があり、今後は谷の入り口に近い部分の調査が重要性を増したといえよう。いっぽう、７世紀後半の建物群は区画塀に囲まれ、計画的に配置されている。その性格を解明することが新たな課題である。
建物群の時期が定まったことにより、この谷に蘇我氏の邸宅と関連する遺構の存在する可能性は高まったといえよう。居住空間の有無を含め、引き続き遺跡の全体像を明らかにするための調査が必要である。
2008 年３月 29 日に現地見学会を実施し、2,100 人の見学者があった。

【実績値】
論文等数４件（論文１件①、その他３件②③④）
発表件数２件（現地見学会１件、報道発表１件）
出土品　土器（整理箱）２０箱
記録作成数　遺構実測図８枚他

【備考】
①豊島直博「甘樫丘東麓遺跡の調査－第 151 次」『奈良文化財研究所紀要 2008』2008.6
②奈良文化財研究所「甘樫丘東麓遺跡の調査（飛鳥藤原第 151 次調査）記者発表資料」2008.3
③奈良文化財研究所「甘樫丘東麓遺跡　飛鳥藤原第 151 次調査現地見学会資料」2008.3
④豊島直博「甘樫丘東麓遺跡の調査（飛鳥藤原第 151 次）」『奈文研ニュース』28、2008.3

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２０１５

１．定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性			
判定	A	A	A			

備考
適時性：蘇我氏邸宅推定地の解明に向けた調査。
発展性：次年度以降の調査への見通しが得られた。
継続性：計画調査の継続による遺跡全容の解明。

２．定量的評価

観点	論文等数	発表件数				
判定	A	A				

備考

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本調査では、計画調査の目的である甘樫丘東麓遺跡における土地利用と遺構の広がりについての知見を得るとともに、出土土器の分析から建物群の年代を推定する手がかりを得ることができた。また、調査成果の一般への公開も適切に行いえたので、総合的にＡと判断した。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査研究は、年度当初の計画通り実施されており、目的を順調に達成した。

（様式１）　　No.　２０１６

業務実績書

中期計画の項目 （Ⅰ４（１）⑤）	平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び関連する中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査・研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建造物の様式並びに瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。

【事業名称】	平城京跡出土遺物の調査研究 （Ⅰ４（１）⑤イ）

【事業概要】
本年度の発掘調査による平城宮・京跡の木製品・金属製品・石製品・土器・土製品・瓦磚類・木簡などの整理、分析研究、出土遺構の整理・分析研究、出土遺構の図面及び写真作成、分析研究を年間を通じて実施し、昨年度以前の調査において出土した遺物について、報告書刊行またはその準備作業としての再調査を行う。また、出土遺物の科学的保存処理を継続して実施する。

【担当部課】	都城発掘調査部　平城地区	【事業責任者】	副部長　山崎信二

【スタッフ】
小池伸彦、和田一之輔、城倉正祥、西口壽生、神野恵、森川実、加藤雅士、深澤芳樹、今井晃樹、林正憲、渡辺晃宏、馬場基、山本崇、浅野啓介、島田敏男、金井健、大林潤、粟野隆、牛嶋茂、中村一郎

【年度実績概要】
・本年度の発掘調査による出土遺物について
平城宮・京跡で出土した木製品・金属製品・石製品・土器・土製品・瓦磚類・木簡などの整理、分析研究、出土遺構の整理、分析研究、出土遺構の図面・写真作成、分析研究、及び出土遺物の科学的保存処理は、発掘調査研究の基礎作業であり、年間を通じて発掘調査と併行して遅滞なく実施した。そのうち、平城宮跡東院地区の発掘調査の成果については、文化財情報課と協力して、発掘調査速報展「平城宮跡東院地区中枢部の調査」を実施した（平成 19 年 11 月 13 日から 12 月 16 日まで）。
・平成 18 年度以前の出土遺物について
コンピュータ処理などによるデータ化を目指して、各発掘調査資料・遺物などの再整理・分析を重点的に実施した。特に、第一次大極殿院に係るデータについて、『平城宮発掘調査報告（第一次大極殿院）』の刊行に向けて基礎的分析作業を引き続き実施した。平成 18 年度に西大寺食堂院跡で出土した木簡を始めとする遺物の整理・分析を継続して進めた。本年５月に重要文化財に指定された平城宮跡内裏北外郭官衙の土坑 SK820 出土木簡について、文化財情報課と協力して『地下の正倉院展―平城宮木簡の世界』を平城宮跡資料館において実施した（平成 19 年 10 月 23 日から 12 月 16 日まで）。なお、木器・木簡や金属器などの科学的保存処理事業については、埋蔵文化財センターと共同で遂行した。
・報告書などの刊行について
西大寺食堂院跡出土木簡、及びここ数年の間に平城京跡で出土した木簡を合わせて、『平城宮発掘調査出土木簡概報(38) 』を編集・刊行した。

【実績値】
論文数等計３件（報告書等１件①、論文１件②、解説１件③）

【備考】
①『平城宮発掘調査出土木簡概報(38)』2007.11
②大林潤・渡辺晃宏・今井晃樹・神野恵・小池伸彦「西大寺食堂院跡の発掘調査」日本考古学協会『日本考古学』24、2007.10 所収
③『地下の正倉院展―平城宮木簡の世界』2007.10

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２０１６

１．定性的評価

観点	継続性	発展性	適時性	正確性		
判定	A	A	A	A		

備考
継続性：厖大な歴史資料の基礎的分析研究
発展性：新たな資料提示方法の追究
適時性：新出土資料についての知識供与のよる文化財活用
正確性：蓄積されている資料の正確な資料化による貢献

２．定量的評価

観点	論文等数					
判定	A					

備考

３．実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	平城宮・京で出土した考古・文献資料を整理・分析研究し、それぞれの研究に東アジア的視点で検討を加えたことなど、総合的に見てＡと判断した。

４．当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	これまでの研究を基礎にして、さらに新しい方法を加味・活用して、研究を深化した。

（様式１）　　No.　２０１７

業務実績書

中期計画の項目 （Ⅰ４（１）⑤）	平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査・研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建築物の様式並びに瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。

【事業名称】	飛鳥・藤原京跡出土遺物・遺構に関する調査研究等　（Ⅰ４（１）⑤イ）

【事業概要】
本年度の発掘調査による飛鳥・藤原京跡出土の木製品・金属製品・石製品・動植物遺存体、土器・土製品・瓦塼類、木簡などの整理、分析研究、発掘遺構の図面および写真資料の整理・作成、分析作業は年間を通じて実施し、合わせて前年度までの発掘調査成果を報告書等で公開するための基礎的整理・分析・復原研究を行う。また、出土遺物の保存処理を継続的に実施する。

【担当部課】	都城発掘調査部　飛鳥藤原地区	【事業責任者】	部長　巽淳一郎

【スタッフ】
松村恵司、村上　隆、豊島直博、廣瀬　覚、長谷川透、玉田芳英、小田裕樹、丹羽崇史、関広尚世、青木　敬、次山　淳、中川あや、高田貫太、石田由紀子、箱崎和久、黒坂貴裕、番　光、市　大樹、竹本　晃、井上直夫、岡田　愛

【年度実績概要】
①本年度の発掘調査による出土遺物・遺構について
本年度、飛鳥・藤原京跡で出土した木製品・金属製品・石製品・動植物遺存体・土器・土製品・瓦塼類・木簡などの整理、分析研究、発掘遺構の図面および写真資料の整理・作成、分析作業、および出土遺物の保存と保存処理は、発掘調査研究の基礎作業であり、年間を通じて野外での発掘調査と平行して、各整理室において計画的に遅滞なく実施した。成果の一部は、『奈良文化財研究所紀要 2008』等で公表した。
②前年度までの出土遺物・遺構について
発掘調査成果を、計画中の『藤原京左京六条三坊発掘調査報告』等の報告書で公開するための基礎的整理・分析・復原研究、出土遺物の保存処理を継続的に実施した。また、平成 19 年２月に重要文化財に指定された山田寺出土品について、指定品管理用の登録台帳の作成をおこなうとともに、重要文化財指定を記念して飛鳥資料館において開催された『奇偉荘厳山田寺』展に協力した。藤原京条坊に関連する発掘成果をデータ化する作業は、前年度に引き続いて実施した。木簡については、2005・2006 年度に石神遺跡・藤原京から出土した木簡を、『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報（二十一）』に取りまとめ、『飛鳥藤原京木簡　二』を出版するための資料整理を実施した。
③韓国との共同研究について
韓国との古代都城に関する共同研究に関連して、研究員を派遣し、国立加耶文化財研究所において威安城山山城出土木簡の調査、同現地見学、国立扶余文化財研究所・国立扶余博物館において扶余王興寺址現地見学・出土資料見学等を実施した。2006 年度より開始した国立慶州文化財研究所との発掘調査交流では、研究員１名を派遣し、慶州四天王寺址および月城垓子の発掘調査に参加するとともに、帯金具の比較研究を目的とした資料調査をおこなった。慶州からは２名の研究員を受け入れた。

【実績値】
論文等数６件(公刊図書４件①②③④、その他２件⑤⑥)

【備考】
①奈良文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報(二十一)』2007.11
②飛鳥資料館『奇偉荘厳　山田寺』飛鳥資料館図録第 47 冊、2007.10
③飛鳥資料館『飛鳥の考古学 2007』飛鳥資料館カタログ第 19 冊、2008.1
④奈良文化財研究所『奈良文化財研究所紀要 2008』2008.6
⑤長谷川透「石神遺跡出土の鋸」『奈文研ニュース』25、2007.6
⑥中川あや「日本一の巨大瓦」『奈文研ニュース』26、2007.9

（様式２）

自己点検評価調書

No. ２０１７

１．定性的評価

観点	適時性	継続性	独創性	発展性		
判定	A	A	A	A		

備考
適時性：新出土資料の迅速な公開と活用。
継続性：膨大な歴史資料の基礎的分析研究および保存。
独創性：新たな資料分析方法の追究。
発展性：蓄積された歴史資料の正確な資料化。

２．定量的評価

観点	論文等数					
判定	A					

備考

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	出土遺物・遺構についての整理調査を、野外での発掘調査と併行して遅滞なく実施し、合わせて韓国との共同研究も計画どおりに実施することができた。また、調査成果の一般への公開も適切に行いえたので、総合的にＡと判断した。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	報告書作成のための遺物整理作業を、ほぼ予定通り進めることができた。

（様式１）　　No.　２０１８

業務実績書

中期計画の項目 （Ⅰ４（１）⑤）	平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査・研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建築物の様式並びに瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。

【事業名称】	古代瓦に関する研究集会の開催（Ⅰ４（１）⑤イ）

【事業概要】
飛鳥白鳳期の古代瓦を、実物を見ながら議論し、造瓦技術の変遷と伝播を明らかにする研究集会である。

【担当部課】	都城発掘調査部　飛鳥藤原地区	【事業責任者】	副部長　山崎信二

【スタッフ】
中川あや　高田貫太　石田由紀子

【年度実績概要】
飛鳥白鳳期の古代瓦のうち、藤原宮式軒瓦および本薬師寺式軒瓦の展開について検討する研究会である。
11 回目の今回は、藤原宮式軒瓦および本薬師寺式軒瓦の展開をテーマとして、2008 年２月２日・３日に平城宮跡資料館において開催した。成果に関しては、発表要旨によって公開した。
近年蓄積されつつある藤原宮跡出土軒瓦のありかたを中心に、各生産地（大和・四国東部・淡路）、および同笵瓦が分布する地域（山背・近江・丹波・摂津・河内・和泉・尾張）の様相、また、藤原宮式軒瓦と意匠を一部共有し、製作時期が重複する本薬師寺創建軒瓦、各地（紀伊・山背）における本薬師寺式軒瓦の様相、藤原宮式軒瓦との時間的前後関係が注目される九州の老司式軒瓦についての報告がなされた。
報告を踏まえた討議では、① 藤原宮式軒瓦の属性（本薬師寺式軒瓦の位置づけ）の検討、② 藤原宮式軒瓦の生産・供給体制の再整理、③ 藤原宮式軒瓦・本薬師寺式軒瓦の地方における展開、などの論点を中心に議論をおこなった。研究集会を通じて、近年の資料の蓄積や新出資料による新たな知見が得られるとともに、丸・平瓦も含めた総合的な検討の必要性も今後の課題として浮き彫りになった。

【実績値】
参加人数：205 名
発表件数：11 件（うち紙上報告３件）
外部招聘者：９名
研究報告資料数：１件（①）

【備考】
①奈良文化財研究所『飛鳥白鳳の瓦づくりＸＩ－藤原宮式軒瓦の展開－発表要旨』2008.2

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２０１８

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性			
判定	A	A	A			

備考
適時性…全国的な瓦研究の原状に即した研究課題の設定。近年蓄積された資料の分析。
独創性…報告と実物観察の組み合わせをセットにした具体性の高さ。
発展性…今後の課題への明確な見通し。

２．定量的評価

観点	参加者数	発表件数				
判定	A	A				

備考

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	飛鳥白鳳期の古代瓦に関する研究会を継続的に実施するなかで、研究報告と実物観察という会の運営方法が定着し、今回の研究会では、藤原宮式軒瓦研究の現状と、具体的な課題を明らかにすることができた。また、報告数・参加者数も適切であるため、総合的にＡと判断した。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	瓦の製作技法ならびに瓦当文様を総合的に検討し、蓄積された新資料への対応などから独創性、発展性に加えて適時性を提示することができたので、順調であると判断した。

（様式１）　　№.　２０１９

業務実績書

中期計画の項目（Ⅰ４（１）⑤）	平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び関連する中国･韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査・研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建造物の様式並びに瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。

【事業名称】	アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡、墓制及び陶磁器に関する中国、韓国との共同研究（Ⅰ４（１）⑤ウ）

【事業概要（全体計画を含む）】
Ａ：漢長安城桂宮発掘調査報告書の作成、唐大明宮太液池発掘調査出土品の整理、漢魏洛陽城跡の共同発掘調査を実施し日本の都城との関連を追究し、調査・研究の成果を公刊する。
Ｂ：朝陽地区隋唐墓出土副葬遺物を共同で整理し比較研究をおこない、日本都城成立期の交流を考察しその成果を公表する。
Ｃ：鞏義市黄冶唐三彩窯跡及び製品の共同研究を実施し、日本の奈良三彩との関連を考察し、成果を公刊する。
Ｄ：日本と韓国の都城・王京形成の共同研究を実施し、古代における両国の文化交流を跡付ける。

【担当部課】	都城発掘調査部	【事業責任者】	所長　田辺征夫

【スタッフ】
Ａ：山崎信二・小池伸彦他 11 名（王巍・銭国祥他）Ｂ：小林謙一・金田明大他 9 名（王晶辰、田立坤他）Ｃ：巽淳一郎・西口壽生他 6 名（孫新民・趙志文他）、Ｄ：巽淳一郎・次山淳他 24 名（李柱憲・兪洪植他）

【年度実績概要】
Ａ：漢長安城桂宮の日本語版発掘調査報告書作成については、2007 年に出版された中国語版発掘調査報告書『漢長安城桂宮』の翻訳作業を進め、本格的な編集作業のための準備に取りかかった。報告書は 2009 年度に刊行する計画である。唐長安城太液池については、4 名の研究員を西安市に派遣し太液地出土の陶磁器、石造物、瓦磚類、金属製品を調査し、写真撮影を実施した。
　漢魏洛陽城については、延べ 4 名の研究員を派遣し調査研究方針について協議した。その後、日中共同発掘調査の申請が中国国務院により批准されたことを受けて、中国社会科学院考古研究所との間で日中共同発掘調査協議書を取り交わし、2008 年度の洛陽城宮城跡における具体的な共同発掘調査計画を協議した。また、共同発掘調査のために測量等の関連する準備作業をおこなった。
Ｂ：遼寧省朝陽地区隋唐墓出土副葬品に関する共同研究の 2 年目である。秋には 5 名の研究員を派遣し、中山營子墓、八里堡唐墓、師範学校 2 号墓、韓貞墓、左才墓などから出土した陶磁器、陶俑、銅帯金具、銅鏡など多数の副葬品の調査・写真撮影等を実施した。また、3 月にも研究員を 8 名派遣し韓相墓、勾竜墓、楊律墓出土土器、陶俑、銅鏡などの副葬品を調査・写真撮影等するとともに、2008 年度の共同研究計画について協議した。秋には遼寧省文物考古研究所研究員 5 名および遼寧省文化庁文物処処長を招聘し、学術交流を深めた。なお、国内では天理大学所蔵陶俑の調査をおこない、遼寧省で調査した出土品との比較研究を進めた。
Ｃ：5 月と 12 月に鞏義市白河水地河地区における河南省文物考古研究所主導の窯跡発掘調査に研究員を計 8 名派遣、調査面積は 1200 ㎡で今年度が最終。新たに窯跡 3 基、廃棄物土坑・溝・竈・道路等の遺構 40 基余を検出し、北朝青磁、唐三彩、窯具など大量の遺物が出土。特筆すべき成果は唐三彩大型馬俑の発見で、懸案であった鞏義窯での大型俑生産を実証した。また、唐青花の発見により鞏義窯による唐青花生産を実証、北魏青磁と白磁の大量出土により早期白磁の起源問題への手懸りを得た。10 月には中国側 5 名を招聘し、関連遺跡遺物の調査及び、趙志文「河南鞏義黄冶・白河窯跡 2005・2006 年度発掘成果報告」・賈連敏「近年の河南省考古重要新発見」成果報告会を開催、学術交流を深めた。
Ｄ：前年度までの共同研究成果を『日韓文化財論集Ⅰ』（学報第 77 冊）として出版、また、韓国語版を国立文化財研究所より同時出版した。本書には、都城制・庭園史・考古資料・古建築・遺跡整備等に関する 12 篇の論文を収録した。2008 年 3 月には、次年度以降の共同研究についての協議を主目的として研究者を派遣し、威安城山山城出土木簡、扶余王興寺址発掘調査現場等を調査・見学し、意見交換をおこなった。
　国立慶州文化財研究所との発掘調査交流では、当研究所より中川あやを 2 ヶ月間派遣し、慶州四天王寺址・月城垓子の発掘調査参加、資料調査等を実施した。慶州からは、李柱権学芸研究官、兪洪植研究員が来日、延べ 2 ヶ月間滞在して飛鳥甘樫丘東麓遺跡、平城宮第二次朝堂院東方官衙地区の発掘調査参加、都城関連遺跡・古代寺院遺跡の視察を行なった。

【実績値】
論文等数 6 件（①～⑥）

【年度決算見込額】

【備考】
①今井晃樹「太液池遺跡の遺物調査」『奈文研ニュース』2007.12
②奈良文化財研究所『日韓文化財論集Ⅰ』奈良文化財研究所学報第 77 冊　2008.3
③韓国国立文化財研究所『韓日文化財論集Ⅰ』2007．12
④中川あや「日韓発掘調査交流の成果」『奈良文化財研究所第 18 回総合研究会資料』2008･1
⑤中川あや「日韓発掘調査交流を終えて」『奈文研ニュース』28、2008.3
⑥中川あや「慶州・四天王寺の発掘調査」『奈良文化財研究所紀要 2008』（予定）

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２０１９

１．定性的評価

観点	独創性	発展性	適時性			
判定	A	A	A			

備考
独創性：最新情報提供による古代史の再検討
発展性：日本文化の源流を探る基礎的研究
適時性：成果報告書の刊行及び刊行準備

２．定量的評価

観点	成果報告	論文件数	発表件数			
判定	A	A	A			

備考

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中国および韓国で、遺跡・遺物を共同で調査し、相互の研究を向上させ、またその研究成果を公刊したので、総合的にＡと判断した。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通りに実施、成果をあげることができ、次年度には発掘調査にある程度長い期間参加する準備ができたため。 国際共同研究は都城発掘調査部が担当し、４本の研究を総合的に組み立て、古代史の解明に資する成果の達成を目指す。

（様式１）　　No.　２０２０

業務実績書

中期計画の項目（Ⅰ４（１）⑤）	平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び関連する中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査・研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建造物の様式並び瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。

【事業名称】	庭園に関する調査研究（Ⅰ４（１）⑤エ）

【事業概要】
平安時代以降の発掘庭園を中心にした調査・研究を行う。特に、平安時代前期の遺構について情報収集・調査を行うとともに、研究会を行う。

【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	景観研究室長　内田和伸

【スタッフ】
高瀬要一、平澤毅、粟野隆、惠谷浩子、宮城俊作（奈良女子大学）

【年度実績概要】
古代庭園に関する研究の５カ年計画全体では、平安時代の庭園を対象にして情報収集を図るとともに、今年度は、平安時代前期の庭園に主眼をおいた研究会を実施した。報告内容は、①嵯峨院（大覚寺）、②冷泉院、③斎宮邸宅、④賀陽親王邸宅・初期高陽院、⑤平安京の貴族邸宅と庭園―前期を中心として―、⑥奈良時代の宮殿・邸宅と庭園、⑦寝殿造邸宅と庭園、である。これらの実例をもとに論議し、平安時代前期庭園の検出遺構の構造や意匠上の特徴などについて検討を深め、問題点を整理した。また、昨年度開催した研究会の報告書『平安時代庭園に関する研究Ⅰ』を編集・発行した。
また、奈良時代前半の大極殿前庭にある塼積擁壁や大極殿院、朝堂院の設計に関し、思想的な側面からの研究も行い、平安時代以降における庭園造営のあり方や苑池と儀礼との関係などを探る新たな視角を提示する試みも行った。
このほか、文化遺産部の遺跡整備研究室と合同で、「宮中儀礼の復興による文化遺産の活用」に関する講演会を開催し、庭の機能や朝庭遺構の活用のあり方などについても考える機会を設けた。また、和歌山県海南市の琴の浦・温山荘庭園のコンクリートを利用した造形意匠に関し、近代庭園における位置付けの基礎調査を実施した。

【実績値】
研究集会等開催数：１回（古代庭園研究会）、参加者：大学教員ら 26 名
刊行図書：１件（①）　論文等数：１１件（②～⑫）　講演会発表回数：７回（⑬～⑲）　研究発表回数：５回（⑳～24）

【備考】
〈図書〉
①『平安時代庭園に関する研究１』2007.10 奈良文化財研究所
〈論文〉
②高瀬要一「平安時代庭園の現状」『平安時代庭園に関する研究１』2007.10 奈良文化財研究所、③内田和伸「平安時代庭園発掘調査の概要」『平安時代庭園に関する研究１』2007.10 奈良文化財研究所、④内田和伸「平城宮第一次大極殿および朝堂院の設計思想について」『ランドスケープ研究』vol.70No.5 日本造園学会 2007.5、⑤内田和伸「平城宮第一次大極殿院の設計思想」『遺跡学研究』第４号 2007.11 日本遺跡学会、⑥内田和伸「日韓宮殿の設計思想について」『韓日文化財論集』Ⅰ2007.12 韓国国立文化財研究所、⑦内田和伸「平城宮第一次大極殿院と高御座の設計思想」『古代日本の構造と原理』2008.1 青木書店、⑧内田和伸「平城宮の復元と年中行事の復興について～古代の思想と整備活用のあり方～」『埋文ニュース』第 130 号 2008.3.奈良文化財研究所、⑨平澤毅「名勝庭園の歴史と展望」『日本庭園学会誌』第 17 号日本庭園学会 2007.8、⑩平澤毅「文化的資産としての近代の庭園及び公園の保護」『日本庭園学会誌』第 18 号日本庭園学会 2007.10、⑪平澤毅「文化遺産としての遺跡・庭園・公園の概念に関する比較考察」『遺跡学研究』第４号日本遺跡学会 2007.11、⑫粟野隆「コンクリートの庭園利用の系譜および造園意匠からみた温約荘庭園の造園史的位置付けに関する基礎調査」2008.3(財)琴の浦温山荘、⑬粟野隆「庭園スタイルの模倣と創造－苑池の空間デザインと古代日韓」『韓日文化財論集１』韓国文化財研究所 2007.12
〈講演発表〉
⑭内田和伸「平城宮の復元と宮中儀礼の復興について」奈良市国際交流協会総会講演 2007.7.4、⑮内田和伸「宇宙をかたどる宮殿～大極殿院の設計思想」朝日カルチャー奈良「大極殿とは何かⅡ」2007.7.14⑯内田和伸「奈良時代の庭園文化」奈良女子大学市民講座 2007.11.17、⑰内田和伸「平城宮の復元と宮中儀礼の復興について」宮中儀礼の復興と文化遺産の活用講演会 2008.3.29、⑱平澤毅「文化遺産としての風景の保存」第 101 回奈良文化財研究所公開講演会 2007.10、⑲粟野隆「縄文・弥生時代における“場としての庭”」日本庭園学会 2008.2.17

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２０２０

１．定性的評価

観点	独創性	適時性	発展性			
判定	A	A	A			

備考
独創性：大極殿前庭を含む大極殿院の設計について、今までない思想的な側面（『易』、天文、暦、陰陽五行などの術数）から研究した。
適時性：上記では平城宮第一次大極殿が復元される遷都 1300 年を前に研究成果をアピールできた。
発展性：平安時代前期庭園では遺構の理解が深まり、近代庭園ではコンクリートの位置付けを明らかにしつつある。

２．定量的評価

観点	論文数	発表数				
判定	A	A				

備考

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	大極殿院や朝堂院の朝庭のデザインに関しては等閑に付されがちであったが、井戸の位置や、施設の尺長などの規模に用いられる数字、用いられた軒瓦の文様、宝幢の意味などを思想的な側面からの分析し、古代の宮殿設計の思想的背景、朝庭のデザインの解釈に新たな展開を見せることができた。このような視点は今後の古代の苑池の研究にも展開可能であり期待できる。コンクリートを用いた近代庭園についても来年度は実測調査が予定されており、実態調査を踏まえた研究が期待できる。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当初の計画通り事業を実施できた。特に大極殿院や朝堂院の朝庭の研究に関しては、論文数、発表件数ともに多く、思想的側面から遺構遺物を捉えるという新たな展開が図れたものと判断できた。発掘庭園の苑池での分析にもこのような視点を導入することが可能であり、次年度以降平安時代の庭園の研究についてもさらに研究を深めていくべきと判断される。「宮中儀礼の復興による文化遺産の活用」に関する講演会は活用を念頭においたものであるが、儀礼は古代苑池の理解を深めるものとして有効であり、次年度以降の展開が期待される。

（様式１）　　№　２０２１

業務実績書

中期計画の項目 （Ⅰ４（１）⑤）	平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び関連する中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査・研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建造物の様式並び瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。

【事業名称】	飛鳥地域の歴史に関する調査研究（Ⅰ４（１）⑤オ）

【事業概要】
山田寺出土展示部材の経年変化の計測研究
アジア史の中の飛鳥文化の研究として飛鳥地方壁画古墳の研究
飛鳥時代の工芸技術の研究として飛鳥・奈良時代の金工品の研究

【担当部課】	飛鳥資料館	【事業責任者】	学芸室長：杉山洋

【スタッフ】
加藤真二、西田紀子

【年度実績概要】
出土部材展示の経年変化の研究：当館では1982年に出土した山田寺東回廊の出土部材を、保存処理後に復元展示している。日本においてはこうした出土建築部材の出土処理後の展示公開は当館が初めてであり、木材の経年変化の遺跡研究が必要とされてきた。そのために展示後にセンサーを設置し、計測を続けてきている。
当館の研究の中には飛鳥時代の工芸技術の研究が含まれている。高松塚古墳出土海獣葡萄鏡をはじめとして、飛鳥時代は日本の歴史において鏡が主要な遺物として再登場してくる時代に当たっている。これら唐式鏡を全国的にまとめて研究することが当館の研究目的に含まれている。今年度は当該研究として、延岡市教育委員会所蔵の鏡８面を借用して、写真撮影・実測・拓本という基本的な調査とともに、蛍光X線分析を行った。
壁画古墳の研究としては、飛鳥地方の壁画古墳についての資料を収集すると共に、特に中国における壁画古墳の現状と、その保存に関する資料収集を行った。

【実績値】
研究図録刊行　１冊

【備考】
「延岡市教育委員会蔵鏡の研究」飛鳥資料館研究図録第１０冊　2008.3

（様式２）

自己点検評価調書

№ ２０２１

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	A	A	A		

備考
適時性：研究課題の必要性と緊急性、
独創性：基礎実験と現地における暴露試験および手法、
発展性：遺跡をとりまく環境の多様性への対応、
継続性：基礎データの収集

２．定量的評価

観点	論文等数	発表件数				
判定	A	A				

備考

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当初の研究計画通り、金工品の調査を進め研究図録を刊行することができた。また壁画古墳の研究は春期特別展示として成果を公開することができた。山田寺の出土部材についても、継続的な調査を推進し、保存内容についての問題点を見いだすこともなく、順調に継続展示が進行している。以上の進捗状況を総合的に判定してＡとした。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度の計画を当初の予定とおり遂行したことから、当事業は順調であると判定した。

（様式１）　　No.　２０２２

業務実績書

中期計画の項目 （Ⅰ４（1）⑥）	遺跡の保存・整備・活用に関する一体的な調査・研究、技術開発の推進及び整備事例のデータベース化等により、個々の遺跡の現況に応じた適切な保存修復・整備に資する。また、これに関連して、平城宮跡・藤原宮跡の整備・公開・活用に関する調査・研究を行い、文化庁が行う平城宮跡及び飛鳥・藤原宮跡の整備・復原事業に関して、専門的・技術的な協力・助言を行う。

【事業名称】	遺跡の保存・整備・活用に関する調査研究（Ⅰ４（1）⑥ｱ）

【事業概要】
遺跡の保存・整備・活用に関する研究の一環として、遺跡の保存・整備計画段階から整備後におけるまでの遺跡の公開・活用状況や、遺構の露出展示を伴う整備例の調査研究を行い、収集した資料のデータベース化を開始する。

【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	遺跡整備研究室長　山中　敏史

【スタッフ】
高瀬　要一、内田　和伸、平澤　毅、黒崎　直（客員研究員）

【年度実績概要】
1．今年度は主に遺跡の公開・活用面に関する調査研究活動の一環として、保存された遺跡の管理や活用がどのようになされているかについて情報収集を行った。
2．2008年1月25・26日に、「遺跡の保存管理・公開活用と指定管理者制度」のテーマで第2回遺跡整備・活用研究集会を平城宮跡資料館講堂にて開催した。
　発表内容は、遺跡や文化財施設等における管理・活用に関して平成15年度に導入された指定管理者制度の内容と課題に関する講演が2件、指定管理者となっている立場からの現状報告が4件、指定管理者を導入する立場からの実態報告が2件であり、各発表の後、総合討議をおこなった。研究集会参加者の92%からアンケートを回収し、そのうちの96%から有意義であったとの回答を得た。
3．研究集会開催後は、来年度にこの研究集会の報告書を刊行する準備として総合討議の内容の整理等をおこなった。
4．昨年度の研究集会「遺跡の教育面に関する活用」の報告書を編集・刊行した。
5．遺構の露出展示に関する整備状況についての情報収集を継続するとともに、データベース化を進めるにあたっての項目の見直しや露出展示における問題点の把握と今後のあり方について検討を始めた。
6．本研究室の前身である旧文化遺産研究部遺跡研究室がまとめた大規模遺跡の整備・管理・活用に関する調査研究成果について、今後の遺跡整備事業における参考資料として情報提供をすべく、独立して起動するデータベース形式でファイルを収納したＣＤを制作・発行した。
7．文化遺産部の景観研究室と共同で、「宮中儀礼の復興による文化遺産の活用」に関する講演会を2008年3月29日に平城宮跡資料館講堂にて開催した。

【実績値】
研究集会等開催数：1回（講演・報告資料集１件①）、参加者数：地方自治体職員・大学教員・大学院生など約100名。
刊行図書数：１件（②）
発行ＣＤ数：１件（③）
講演会開催数；1回（④）、参加者数；地方自治体職員・市民など50人。
論文等数；4件（論文5件⑤～⑧、発表4件⑨～⑪）。

【備考】
①遺跡整備・活用研究集会（第2回）「遺跡の保存管理・公開活用と指定管理者制度」講演・報告資料集 2008.1
②奈良文化財研究所『遺跡の教育面に関する活用　―平成18年度　遺跡整備・活用研究集会（第1回）報告書―』2008.1
③遺跡整備研究室『大規模遺跡の整備・管理・活用に関する調査（平成13年度～平成17年度）　大規模遺跡の整備・管理・活用に関するデータベース』2008.3
④内田和伸「平城宮の復元と宮中儀礼の復興について」『宮中儀礼の復興による文化遺産の活用』講演会 2008.3
⑤内田和伸「高松塚古墳の仮整備」『文化庁月報』第466号 2007.7
⑥平澤毅「文化遺産としての遺跡・庭園・公園の概念に関する比較考察」、『遺跡学研究』第4号 2007.11
⑦内田和伸「日韓宮殿の設計思想について」『韓日文化財論集Ⅰ』2007.12
⑧内田和伸「平城宮の復元と年中行事の復興について～古代の思想と整備活用のあり方～」『埋蔵文化財ニュース』130 2008.3
⑨内田和伸「平城宮第一次大極殿および朝堂院の設計思想について」日本造園学会平成19年度全国大会 2007.5
⑩内田和伸「平城宮の復元と宮中儀礼の復興について」奈良市国際交流協会総会講演　2007.7
⑪平澤毅「遺跡の個性の理解と応用」第32回全国遺跡環境整備会議、2007.11

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２０２２

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

２．定量的評価

観点	論文等数	研究会等の開催数				
判定	A	A				
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	遺跡整備に関する情報の収集・整理・公開に関する検討を様々な観点から進めることができた。特に、遺跡の適切な保存管理・公開活用を考える上で重要な運営体制等の検討に関連して、指定管理者制度の遺跡への適用について検討した研究集会は、指定管理者制度導入以来最初の指定替えがされる時期になっていること、これまで「遺跡」を中心的テーマとした指定管理者制度に関する検討がほとんどされてこなかったこと、指定管理者制度適用の検討の背後にあるのは遺跡の保存管理・公開活用の本質的な在り方であること、などから遺跡整備を包括的に検討していく上で極めて有効な機会のひとつとなったと評価できる。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当初の計画通り事業を実施できた。特に、第２回を迎えた研究集会については、参加者の評価も高く、さらに充実を図っていくべき事業であると判断される。また、関連する調査研究成果についても、学会等を通じて数多く公表することができた。これらの成果を踏まえつつ、今後も遺跡整備に関する情報の収集・公開の内容・方法等の質を向上し、遺跡整備を検討・実施していく上での課題を見極めて、その解決策等について引き続き検討を図っていく。

（様式１）　　№　２０２３

業務実績書

中期計画の項目 （Ⅰ４（1）⑥）	遺跡の保存・整備・活用に関する一体的な調査・研究、技術開発の推進及び整備事例のデータベース化等により、個々の遺跡の現況に応じた適切な保存修復・整備に資する。また、これに関連して、平城宮跡・藤原宮跡の整備・公開・活用に関する調査・研究を行い、文化庁が行う平城宮跡及び飛鳥・藤原宮跡の整備・復原事業に関して、専門的・技術的な協力・助言を行う。

【事業名称】	遺跡の保存・整備・活用に関する技術開発研究（Ⅰ４（1）⑥イ）

【事業概要】
遺構の安定した公開･展示を行うことを目的とした事前調査法、保存技術ならびに監視技術の開発的研究の一環として、遺跡の水分状態や石材の劣化状態を把握する技術の応用研究、平城宮跡遺構展示館等における遺構安定化薬剤の実地試験に取り組む。

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長　肥塚隆保

【スタッフ】
高妻洋成 、降幡順子、脇谷草一郎（企画情報部）

【年度実績概要】
アコースティックエミッション法を高松塚古墳の石室解体において、把持・移動および搬送時の微小破壊のモニタリングに応用したところ、解体・搬送時には石室石材の破壊は生じていないことを確認することができた。
昨年度試作した打音試験装置にさらなる改良を加え、打撃力の異なる打撃装置を試験した。また、エコーチップ試験装置およびコンクリートハンマー試験装置との相関性についても検討をおこない、おおむね良好な相関を持つこととそれぞれの試験法についての特徴を把握することができた。
ガランドヤ古墳および宮畑遺跡において比抵抗測定法を用いた遺跡の地中における水分状態を測定し、遺跡の保存整備に有効なデータを提示した。また、宮畑遺跡においては土壌のコンシステンシー（含水比、塑性限界、液性限界）についての測定もおこない、遺構が安定な状態を保つことのできる含水比を設定することが可能となった。

【実績値】
論文等数：　８件（①～⑧）
発表件数：　５件

【備考】
① 脇谷草一郎・高妻洋成・降幡順子・肥塚隆保「イースター島モアイ像の保存科学的研究 2―溶出実験による石造文化財保存処理法の評価―」『日本文化財科学会第 24 回大会研究発表要旨集』pp.74-75、2007.6
② 脇谷草一郎・長尾かおり・高妻洋成・降幡順子・肥塚隆保「妻木晩田遺跡における保存科学的研究―土質遺構の露出展示にむけた環境調査―」『日本文化財科学会第 24 回大会研究発表要旨集』pp.284-285、2007.6
③ 高妻洋成・降幡順子・脇谷草一郎・肥塚隆保「石造文化財へのアコースティックエミッション法の応用」『日本文化財科学会第 24 回大会研究発表要旨集』pp.330-331、2007.6
④ 高妻洋成「音波による石造文化財の劣化評価」『第 31 回文化財の保存および修復に関する国際研究集会』pp.50-52、2008.2
⑤ 高妻洋成「高松塚古墳石室石材の運搬」『文化庁月報』No.466、pp.12-13、2007.7
⑥ 肥塚隆保・建石徹「高松塚古墳の石室解体の実施」『文化庁月報』No.467、pp.12-15、2007.8
⑦ 肥塚隆保・高妻洋成・降幡順子・建石徹・田辺征夫「国宝高松塚古墳壁画保存修理のための石室解体」『2007 東アジア文化遺産保存国際シンポジウム』pp.153-158、2007.11
⑧ 肥塚隆保・高妻洋成・降幡順子「石室解体と輸送」『月刊文化財』532 号、pp.22-37、2008.1

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２０２３

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	S	S	S	S	S	
備考						

２．定量的評価

観点	発表件数	論文等数				
判定	S	S				
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
S	調査研究事業を当初計画どおり順調に達成することができたことから、総合的評価としてＳと判定した。遺跡保存に関する調査法については、フィールドにおける試験を重ねるとともに、新たな手法の開発がさらに必要である。次年度には、これらの点にも取り組む予定である。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度の計画を当初の計画どおり実施できたことから、順調であると判定した。 次年度はこのペースを維持しつつ、遺跡保存に関する調査法についてフィールドにおける試験を重ねるとともに、新たな手法の開発に取り組む予定である。

（様式１）　　No.　２０２４

業務実績書

中期計画の項目 （Ⅰ４（１）⑥）	遺跡の保存・整備・活用に関する一体的な調査・研究、技術開発の推進及び整備事例のデータベース化等により、個々の遺跡の現況に応じた適切な保存修理・整備に資する。また、これに関連して、平城宮・藤原宮跡の整備・公開・活用に関する調査研究を行い、文化庁が行う平城宮及び飛鳥・藤原宮跡の整備・復原事業に関して、専門的・技術的な協力・助言を行う。

【事業名称】	第一次大極殿復原整備研究（Ⅰ４（１）⑥ウ）

【事業概要】
平城宮跡・藤原宮跡の整備・公開・活用に関する調査研究のため、文化庁の行う平城宮跡第一次大極殿院地区の復原整備計画に沿った実践的調査研究を実施するとともに、「宮跡整備構想」に基づく具体的整備方針の再検討を目指し、情報収集や調査・分析を行う。文化庁がおこなう平城宮跡第一次大極殿院復原に関して、専門的・技術的な援助・助言を行うため、第一次大極殿院復原設計計画に沿った実践的研究及び第一次大極殿院正殿の復原施工段階における実践的研究を行うものとし、復原に関する資料の整理、新たに行うべき調査研究の計画案などを提示するとともに、文化庁記念物課や文部科学省文教施設企画部の主催する会議等に参画し、専門的・技術的な援助・助言をおこなう。

【担当部課】	都城発掘調査部　平城地区	【事業責任者】	副部長　山崎信二

【スタッフ】
島田敏男、渡辺晃、深澤芳樹、西口壽生、金井健、大林潤、粟野隆、箱崎和久、黒坂貴裕、窪寺茂、清水重敦、内田和伸、杉山洋、千田剛道、西田紀子、今西康益、桑原隆佳

【年度実績概要】
上記スタッフによって、宮跡の管理・活用を検討するワーキンググループを構成し、ワーキンググループ内で検討会をおこないながら、今後の宮跡の管理・活用についての調査研究をおこなった。今年度は主として、宮跡管理・活用・整備のためのゾーニング、導線計画について検討をおこなった。実施した調査研究項目は、①平城宮跡内における中核施設の位置付けの検討、②中核施設の施設・設備に関する検討、③中核施設を軸とした導線計画の検討、④中核施設以外のゾーニング、⑤宮跡全体の管理・活用方法、⑥宮跡内における調査研究の今後、についてである。そして、昭和 53 年に策定された「基本構想」の見直案を検討した。
同時に、今年度は文化庁において『特別史跡平城宮跡保存整備基本構想推進プラン（仮称）』策定作業をおこないっており、その計画策定に協力するとともに、文化庁と共催でその検討委員会を開催した。
また、文化庁がおこなう第一次大極殿正殿の復原に対しての専門的・技術的協力として、扁額についての研究会を開催するとともに、施工に際しての助言をおこなった。
なお、一昨年来おこなってきた、遺跡の管理活用に関する類例調査の成果を、『遺跡整備調査報告書　管理運営体制および整備活用手法に関する類例調査』として、刊行した。

【実績値】
刊行図書　『遺跡整備調査報告書　管理運営体制および整備活用手法に関する類例調査』
論文　『奈良文化財研究所紀要　2007』所収　１篇
文化庁事業への協力
- 特別史跡平城宮跡及び藤原宮跡の保存整備に関する検討委員会　共催　５回
- 大極殿復原事業に関する連絡会議　出席１１回
- 大極殿復原に関する扁額研究会　開催　２回

大極殿正殿復原事業にかかる指導・助言　２３回

【備考】
『遺跡整備調査報告書　管理運営体制および整備活用手法に関する類例調査』
渡邊晃宏／山下秀樹／/窪寺茂／清水重敦「扁額の構造と意匠－平城宮第一次大極殿扁額の復原考察－」『奈良文化財研究所紀要 2008』（予定）

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２０２４

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
適時性：検討成果を進行中の平城宮第一次大極殿復原工事に生かす
独創性：研究成果が実行可能かを検証しながら、建物を建設する
発展性：全国の解体修理・復原工事に生かす
継続性：計画段階から実施
正確性：各専門分野の研究の総合化

２．定量的評価

観点	協力回数					
判定	A					

備考

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	出土遺物、および建造物に関する広汎な研究を、第一次大極殿の復元にあたって細部にいたるまで積極的に活用したので、総合的にＡと判断した。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究事業は、継続的におこなっているもので、研究の段階も順調に進み、同時に文化庁事業への協力も順調におこなっており、今後もこのペースを維持しつつ、研究内容の向上に努めたい。

（様式１）　　№.　２０２５

業務実績書

中期計画の項目（Ⅰ4（2）①）	光に対する物性を利用した高精細デジタル画像を形成する手法に関する調査・研究を行い、文化財の色や形状・肌合いなどを正確かつ詳細に再現することを目指す。

【事業名称】	高精細デジタル画像の応用に関する調査研究（Ⅰ4（2）①）

【事業概要】
本研究では、前の中期計画５カ年中に開発した高精細デジタル画像形成の手法を用い、着色仏画・彩色壁画・油彩画・日本画・漆絵などの美術品を対象とし、それぞれについて、１）光に対する物性の検討、２）光物性の画像化に関わる技術開発、３）形成画像の汎用的な活用法（表示・出力）に関する条件整備を行い、広範な文化財研究を支援するために不可欠な研究画像を形成し、それらを応用・利用する方法を探ることを目的とする。

【担当部課】	企画情報部	【事業責任者】	文化財アーカイブズ研究室長　山梨絵美子

【スタッフ】
中野照男、皿井舞、江村知子、城野誠治、鳥光美佳子（以上、企画情報部）

【年度実績概要】
1　他機関との共同研究：本研究は、先の中期計画において開発した画像形成技術を用いた画像の汎用的な活用・運用を行う方法・技法の研究に重点を置いている。平成 17 年度に行った奈良国立博物館との薬師寺蔵「吉祥天像」の共同研究の報告書、および平成 18 年度から彦根城博物館と共同で行った国宝「彦根屏風」の調査報告書を刊行した。平成 17 年度に國立故宮博物院（台湾）との共同研究として行った孫過庭筆「書譜」の成果については、平成 20 年度に刊行することを目指して編集会議を行った。また、写真画像の撮影、保存の試みのひとつとして、黒田清輝遺族より寄贈された関連資料のうち、当時の写真をその質感を再現すべくデジタル撮影および出力を行った（成果は「写された黒田清輝」にて展示）。
2　今年度の他機関との共同調査研究作品：宮内庁三の丸尚蔵館（「春日権現験記絵巻」07.4.9～20、11.27～12.17）、奈良国立博物館（「天台高僧像」　07.9.10～14）、彦根城博物館（「彦根屏風」　07.11.6～15）、國立故宮博物院（孫過庭筆「書譜」　08.1.28 ～2.1）
3　高精細デジタルコンテンツとしての形成画像とその多目的利用：脆弱な材料で構成されている我国の貴重な文化財を間近で精査・鑑賞する機会は限定されている。文化財の高精細な画像や特殊撮影画像を公開し、多目的な利用に供することは、文化財への理解を深め、実物の保存と共に活用の道を開く有効な方法である。デジタルコンテンツの多目的利用の一環である画像展示を以下の場所で実施した。
・黒田記念館特集展示
①黒田清輝筆「智・感・情」「湖畔」ほかの画像展示　黒田記念館（０７.4～）
②「写された黒田清輝」　黒田記念館（07.11.15～）
・国宝「彦根屏風」　特殊撮影画像展示（07.9.28～10.26 「よみがえった国宝・彦根屏風と湖東焼の精華」、彦根城博物館）

【実績値】

学術雑誌等への掲載論文数	５件（①～⑤）
学会研究会等での発表件数	２件（⑥⑦）
画像展示の件数	３件

【備考】
①城野誠治「光学的手法による国宝・彦根屏風の調査」　『国宝　彦根屏風』（08.3）pp121－124
②江村知子「彦根屏風の表現について」『国宝　彦根屏風』（08.3）pp145－160
③城野誠治「光学的手法による国宝・吉祥天像の調査」『国宝　吉祥天像』（08.03）pp93-95
④早川泰弘・城野誠治「吉祥天像のＸ線透過画像について」『国宝　吉祥天像』（08.03）pp74-75
⑤城野誠治「2006 年の写真の進歩　文化財」「日本写真学会誌」2007 年 70 巻３号 pp170-171(07.7)
⑥城野誠治「高精細画像で見た彦根屏風」（シンポジウム「よみがえった国宝・彦根屏風」07.10.20）
⑦山梨絵美子「桂ゆきを中心に～絵画概念を超えて～」江東区男女共同参画推進センター（07.12.1）

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２０２５

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

２．定量的評価

観点	調査箇所数	論文数	発表数			
判定	A	A	A			
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本年は高精細画像データを印刷媒体においてより正しく再現することに努め、昨年度よりもよい成果を得ることができた。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	書籍、展示などの媒体による高精細画像公開については比較的安定した方法を確立することができた。今後も積極的な成果公開に努めたい。

（様式１）　　No.　２０２６

業務実績書

中期計画の項目（Ⅰ４（２）②）	小型可搬型機器の開発研究及び応用研究を行い、文化財の材質調査をその場で行えるようにする。また、有機化合物の物質同定を目的とした新規手法の検討及びその応用研究を行い、金属文化財や顔料など無機化合物に関する元素同定及び構造解析法手法の確立等を目指す。

【事業名称】	文化財の非破壊調査法の研究（Ⅰ４（２）②）

【事業概要】
文化財の材質調査をその場で行うことを目的に、小型可搬型機器の開発研究およびその応用研究を行う。金属文化財や顔料などの無機化合物に対して、その場での元素分析および構造解析手法の確立を行う。また、染料など有機化合物の物質同定を目的とした新たな非破壊調査法の調査･研究を行う。

【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	保存修復科学センター長　石﨑武志

【スタッフ】
早川泰弘、佐野千絵、木川りか、吉田直人、犬塚将英　（以上、保存修復科学センター）

【年度実績概要】
５年計画の第２年度として、下記の２点に重点をおいて研究を実施し、以下の成果を得た。
⑴ 可搬型機器による彩色文化財の材質調査とデータ解析
ポータブル蛍光X線分析装置を博物館・美術館等に持ち運び、絵画あるいは建造物などの彩色に関する材質調査を行い、その材料や技法を明らかにする研究を推進した。透過X線撮影、高精細画像撮影、あるいは反射分光法など様々な調査手法によって得られたデータと蛍光X線分析によって得られたデータを相互に関連付けられるような研究展開を図った。
⑵ 有機染料分析に関する検討とその応用
ファイバー送受光型紫外・可視反射スペクトル測定システムによる染料の非破壊分析に関する研究を引き続き行った。基礎的課題としては、平面資料測定を想定した分析精度、および顕微鏡と組み合わせることによる微小試料の分析可能性について検討した。また、応用事例として、江戸中期に作成された絵図資料の彩色に用いられた染料の非破壊分析を行った。

【実績値】
論文等数　２件（①、②）
発表件数　２件（③、④）

【備考】
①早川泰弘　「蛍光X線分析による国宝吉祥天像の彩色材料調査」　『保存科学』 47、pp. 27-36、 08. 03
②吉田直人　「ファイバー送受光型分光光度計による平面文化財資料の反射スペクトル測定における誤差に関する考察」　『保存科学』 47、pp. 187-196、 08. 03
③早川泰弘、佐野千絵、三浦定俊、太田彩　「伊藤若冲「動植綵絵」の彩色材料調査」　日本文化財科学会第 24 回大会、奈良教育大学 07. 6. 2-3
④吉田直人　「顕微反射スペクトル測定による微小試料の染料分析」　日本文化財科学会第 24 回大会、奈良教育大学 07. 6. 2-3

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２０２６

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

２．定量的評価

観点	学術雑誌等への掲載論文等数	学会研究会等での発表件数				
判定	A	A				
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	基礎研究の確実な遂行のための情報収集、基礎研究の実施、ならびに各博物館・美術館などと共同した作品調査研究の実施、および速やかな研究成果公開を果たし、高い調査研究水準を保つことができた。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	研究計画の第２年度として、基礎的研究の進展および多くの作品調査を実現し、今後の研究活動を進めていく上で重要な成果を得た。速やかな成果公開も果たし、包括的に調査研究を進めた。

（様式１）　　No.　２０２７

業務実績書

中期計画の項目 （Ⅰ４（2）③）	遺跡調査における新たな指標や属性分析法の確立に関する研究等を行い、全国における遺跡調査・研究の質的向上と発掘作業の効率化に資する。

【事業名称】	遺跡データベースの作成と公開（Ⅰ４ ⑵ ③ｱ）

【事業概要】
遺跡調査における新たな指標や属性分析法の確立に関する研究等の一環として、官衙関連遺跡および豪族居宅遺跡の資料収集を行い、官衙や豪族居宅と認定するための指標、およびそれらの遺跡の発掘調査において抽出すべき基本的属性について調査研究を進め、収集し属性分析した資料をデータベース化し、順次一般公開する。

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	文化遺産部　遺跡整備研究室長　山中敏史

【スタッフ】
森本晋、清野陽一（京都大学大学院 人間・環境学研究科博士後期課程）

【年度実績概要】
①各地の官衙関連遺跡および豪族居宅遺跡等の発掘調査資料の収集・整理・分析については、平成17年度以前刊行の報告書を中心に、めくり作業を行い、国府・郡衙・城柵遺跡やその他の官衙関連遺跡・豪族居宅遺跡等の資料を収集整理した。官衙関連遺跡については、とくに中国地方以西の地域のデータ収集と近畿地方以北のデータの補訂作業を重点的に進めた。
②官衙関係遺跡データベースについて、建物データなどの新たな属性項目をデータベースのフィールド項目として増加し、一部に改訂を加えた。また、市町村合併に対応して、遺跡所在地の変更作業をほぼ完了した。
③これまで未公開であった中国地方以西の官衙関連遺跡のデータとともに、それ以東の地域の遺跡データについても新項目の追加による補訂作業をおこない、全国の主要官衙関係遺跡データを奈良文化財研究所ホームページで全面的に公開した。
④豪族居宅遺跡の属性分析や資料収集等の成果については、論文にまとめた。
⑤新たに寺院遺跡データベースの作成計画を立て、データベース構造などについての検討に着手した。

【実績値】
データベース入力・補訂件数：遺跡マスタ約370件、文献データ約2,800件、建物データ約4,600件
スキャナ取り込み・貼り付け図面件数：約5,500件
公開データ数：遺跡マスタ約1,000件、文献データ約10,200件、建物データ約12,300件等
論文等数：論文１件（①）

【備考】
① 山中敏史「地方豪族居宅の建物構造と空間的構成」『古代豪族居宅の構造と機能』2007.12

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２０２７

１．定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性	独創性	正確性
判定	A	A	A	S	A	A
備考						

２．定量的評価

観点	収集資料数	データベース入力件数				
判定	A	A				
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	全国の主要官衙関係遺跡について、新たな属性項目も加えてデータベースを作成し、一般公開することができたので、Aと評価した。これにより、各地における官衙関係遺跡の調査等において、建物遺構等の評価をより客観的かつ効率的に進めるうえで欠かせない基礎データの共有化が実現したと言える。今後は、官衙か否かのグレーゾーンにある遺跡や、最近の新出資料や新報告資料の追加を図るとともに、このデータベースを基礎として、新たに寺院遺跡データベース作成に取り組みたい。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	官衙関連遺跡のデータベースの作成を順調に進めることができた。そして、官衙関係建物遺構の属性分析を進め、データベース項目に盛り込むことによって、遺跡調査における新たな指標を示すことができた。また、豪族居宅遺跡関係については、貴族邸宅も含めて建物の属性分析を進め、研究報告をまとめることによって、そうした遺跡の属性分析法についても新たな視角を提示できたと考える。今後は、官衙関係遺跡の新出資料の追加および末端官衙関係遺跡データの入力を継続し、このデータベースを充実させるとともに、新たに寺院遺跡データベースの構築にも着手していきたい。

（様式１）　　No.　２０２８

業務実績書

中期計画の項目 （Ⅰ４（2）③）	遺跡調査における新たな指標や属性分析法の確立に関する研究等を行い、全国における遺跡調査・研究の質的向上と発掘作業の効率化に資する。

【事業名称】	古代官衙・集落に関する研究集会の開催 （Ⅰ４ (2) ③イ）

【事業概要】
地方官衙遺跡と集落遺跡に関する研究集会を実施し、全国におけるこの種の遺跡調査の質的向上を図る。

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	文化遺産部　遺跡整備研究室長　山中敏史

【スタッフ】
松井良祐、志賀崇（京都大学大学院 人間・環境学研究科博士後期課程）、清野陽一（京都大学大学院 人間・環境学研究科博士後期課程）、

【年度実績概要】
① 12月14･15日の両日にわたって、「古代地方行政単位の成立と在地社会」のテーマで研究集会を開催した。
② 研究報告は、考古学サイドから３本、歴史地理学サイドから２本、文献史学サイドから２本の計７本。
③ 研究集会参加者は、158名であった。
④ 国・郡（評）・里（五十戸）制の成立過程について、木簡や文献史料、官衙遺跡の様相などからアプローチするとともに、古墳時代における在地勢力基盤と郡域との関係、国郡域の成立と土器流通との関係、国郡界線のあり方などについて探り、国郡里制の成立の画期や、在地社会におけるそれら地方行政単位成立の意味について検討し、問題点を整理した。
⑤ 出席者の90%からアンケートを回収し、そのうちの97%から、たいへん有意義または有意義であったとの回答を得た。
⑥ 昨年度開催した研究集会の報告・討議の内容を掲載した論文報告集『古代豪族居宅の構造と機能』を刊行した。

【実績値】
参加者数：158人（地方自治体職員・大学教官・大学院生など）
報告者数：７人
研究報告要旨・資料集数：１件（①）
刊行図書数：１件　（②）

【備考】
① 奈良文化財研究所『古代官衙・集落研究会　古代地方行政単位の成立と在地社会　研究報告資料』2007.12
② 奈良文化財研究所『古代豪族居宅の構造と機能』2007.12
③ アンケート集計表
④ 研究集会参加者名簿

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２０２８

１．定性的評価

観点	継続性	独創性	適時制	発展性	効率性	正確性
判定	S	A	A	A	A	A
備考						

２．定量的評価

観点	参加者数	参加者満足度				
判定	S	S				
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	参加者が100名の目標値を大幅に超え、アンケート回答者の97%から研究集会の内容が有意義であったとの評価を得たこと、昨年度集会の論文報告集を計画どおり刊行できたことから、全体としてAと評価した。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順　調	当初の計画どおり研究集会を実施し、昨年度の研究集会報告論文集も予定期日までに刊行でき、業務を順調に実現できた。今後は、こうした成果を活かし、官衙関係遺跡データベースの充実なども図り、情報の共有化を進めていきたい。

（様式1）　　№　２０２９

業務実績書

中期計画の項目（Ⅰ4（2）③）	遺跡調査における新たな指標や属性分析法の確立に関する研究等を行い、全国における遺跡調査・研究の質的向上と発掘作業の効率化に資する。

【事業名称】	遺跡の測量・探査技術の有効利用法の研究　（Ⅰ4（2）③ウ）

【事業概要】
遺跡の測量・探査における新たな技術の有効利用法を研究し、全国の遺跡調査の質的向上と発掘作業の効率化に資するべく、機器の更新と実地テストを通じたデータの収集と分析をおこなう。本事業は、現在の遺跡調査の実態に鑑み、従前の方法との乖離を埋めつつ、そうした技術の有効利用法を研究・提示することで、当該分野における指針としての役割を果たすことを目的としている。

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	遺跡・調査技術研究室長　小澤毅

【スタッフ】
金田明大、西村康（客員研究員）

【年度実績概要】
関連機関の要請に応えるかたちで、平城宮東方官衙地区・石神遺跡・藤原宮跡・喜光寺（奈良県）、七ツ壇古墳群（福島県）、太閤堤・笠置城（京都府）、徳島城本丸・芝生城（徳島県）、瓦塚瓦窯（茨城県）、梶栗浜遺跡・大内氏館・凌雲寺（山口県）、赤穂城（兵庫県）、西都原古墳群（宮崎県）、中張窪石切場・伊豆山経塚（静岡県）、美山薩摩焼窯（鹿児島県）において、各種の手法による文化財探査を実施した。
また、三次元計測技術の応用研究を継続しておこない、三次元デジタイザおよびデジタル写真を用いた遺構・遺物の計測を実施した。とくに遺物の記録に関しては、中国遼寧省唐代墳墓出土資料の計測を実施した。
海外の学会では、CAA（ドイツ）、ISAP（スロバキア）で遺跡探査に関連した発表をおこない、CIPA（ギリシャ）では次回の京都大会開催について意見交換と情報収集をおこなった。一方、国内の学会としては、第2回ＤＤＣＨ（文化遺産のデジタルドキュメンテーションと利活用に関するワークショップ）を主催し、国内外から90名を超える参加者を得た。また、日本遺跡探査学会でも発表をおこなった。
このほか、国内では測量外注過程における研修を実施し、国外ではベトナム・タンロン皇城遺跡で、基準点測量および現地の研究者を対象とした測量研修をおこなった。

【実績値】
発表件数：　4件（ＣＡＡ、ＩＳＡＰ、第2回ＤＤＣＨ、日本遺跡探査学会）
刊行図書数：　1件（①）
論文等数：　3件（②～④）
遺跡探査実施件数：18件
三次元計測資料数：52点
遺跡測量実施件数：1件
測量研修実施件数：2件

【備考】
①『台帳の利活用法と土器の洗浄法』埋蔵文化財ニュース第132号、2008.3
② Nishimura Yasushi, Kaneda Akihiro: “Geophysical Survey at Tokushima Castle in Japan”,ISAP2007, 2007.9
③ 金田明大 「瓦礫に花を咲かせましょう」第1回文化遺産のデジタルドキュメンテーションと利活用に関するワークショップ、2007.9 (online)
④ 西村康・金田明大 「徳島城本丸地区の探査」日本文化財探査学会研究発表要旨集、2007.6

（様式２）

自己点検評価調書

No. ２０２９

１．定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性		
判定	A	S	A	S		

備考
適時性：技術革新が進行するなかで的確な指針を欠く現況の改善
発展性：全国の遺跡調査への応用性と影響力
効率性：時間的投資・人的投資の効率化
継続性：事業中断以前を含めたデータの継続的収集

２．定量的評価

観点	遺跡探査実施件数	学会等発表件数	測量研修件数			
判定	S	S	A			

備考

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
S	長い年月にわたり収集したデータやノウハウの蓄積を生かして、外部からの要請にも応えながら、数多くの実地調査と研究を積み重ねることができた。年度当初の目標値を超える遺跡探査実施件数や学会等発表件数とあわせて、総合的評価をＳと判定する。測量・探査ともに、遺跡調査への応用に関して地方公共団体や国外からの期待も大きく、今後、ナショナルセンターとして的確な役割を果たしていくことが必要である。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順　調	測量･探査関係業務の中断をへて昨年度から新たに立ち上げた本事業だが､すでに機器の導入や更新ができた分野については､テストや実際の運用を含めて、計画どおりの順調な進展を見せている。今後も事業を円滑に推進するために、RTK 対応可能の GPS や三次元レーザスキャナなど、現在の技術水準に適合した必要機材の早期導入を望みたい。機材の充実度で、韓国の国立文化財研究所など先進諸国に大きく立ち後れている現状が懸念される。

（様式１）　　No.　２０３０

業務実績書

中期計画の項目 （Ⅰ4 (2) ④)	木質古文化財の年輪年代測定法等を進め、考古学・建築史・美術史の研究に資する。

【事業名称】	年輪年代学研究　（Ⅰ4 (2) ④)

【事業概要】
遺跡出土木材、木造建築物、木造美術工芸品などの年輪年代測定を実施し、考古学、建築史学、美術史、歴史学研究に資する。とりわけ、当研究所で開発したマイクロフォーカス X 線 CT やデジタル画像による非破壊年輪年代測定法は、非破壊を原則とする文化財調査にとって理想的な調査手法であるので、これを積極的に活用して実施事例の拡充を図る。また、非破壊年輪年代測定法の対象範囲をさらに広げるべく新規の技術開発についても取り組み、知的財産権を確保する。これらの上記研究成果を、国内外で開催される学会、学術論文、各種報告書などに発表する。

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	年代学研究室長　光谷拓実

【スタッフ】
大河内隆之、 伊東隆夫（客員研究員）、藤井裕之（客員研究員）、児島大輔（日本学術振興会特別研究員）

【年度実績概要】
考古学関連　７府県下９遺跡から出土した木材試料の年輪年代調査を実施した。なかでも、青森市新田(１)遺跡出土の井戸枠の年輪年代調査では、調査対象とした 30 点の部材の中に樹皮直下の木材組織を残すものがあり、1372 年に伐採されたヒバ材が井戸枠に使用されていたことが明らかになった。
建築史関連　国宝１棟・重文２棟を含む７府県下８棟の建造物に対して、年輪年代調査を実施した。特筆すべきは、長野県大桑村の池口寺薬師堂解体修理にともなう年輪年代調査である。調査対象とした 17 点の部材の中に面皮つきの板材が含まれており、1289 年に伐採されたヒノキ材が用いられていることが明らかになった。
美術史関連　国宝３点・重文１点を含む 6 府県下の 26 躯の木彫像ならびに４点の工芸品に対して年輪年代調査を実施した。特筆すべきは、滋賀県栗東歴史民俗博物館に寄託されている重文善勝寺千手観音立像の年輪年代調査である。従来、美術史的な所見から 10 世紀末～11 世紀初期の造像と見られていたところ、年輪年代調査によって 1010 年を上限とする 11 世紀初期のものであることが明らかになり、造像時期を絞り込むことになった。
埋没樹幹関連　滋賀県甲南町で発見されたヒノキの埋もれ木に対して年輪年代調査を実施し、664 年に伐採されたヒノキ樹幹であることが明らかになった。甲賀杣の存在を示す資料として貴重な成果である。
技術開発・国際協力関連　当研究室で世界に先駆けて開発したマイクロフォーカス X 線 CT 装置を用いた非破壊による年輪年代測定技術は、文化財における年輪年代調査の可能性を拡大する画期的なものとして、海外の研究者からも高く評価されている。ウィーン天然資源・応用生命科学大学との共同研究として、世界遺産に指定されているオーストリアのハルシュタットから出土した青銅器時代、鉄器時代、およびラテン時代の木製品 30 点に対して、当研究所にて非破壊年輪年代調査を実施した。

【実績値】
論文等数： 4 件（①～④、うち 1 件は原著論文査読あり）
発表件数： 4 件（⑤～⑧、うち 1 件は国際学会）

【備考】
① 光谷拓実・大河内隆之「年輪年代法による興福寺国宝板彫十二神将像の年代調査」『奈良文化財研究所紀要 2007』pp.40-41、2007.6
② 大河内隆之「年輪年代学におけるデジタル画像技術の活用」『埋文写真研究 2007』Vol.18、pp42-49、埋蔵文化財写真研究会、2007.7
③ 大河内隆之「國學院大學神道資料館蔵木造僧形坐像の非破壊年輪年代測定」『館報』Vol.8、pp. 6 - 7 、國學院大學神道資料館、2008.1
④ Kaori Saito, Takumi Mitsutani et al.: “Discriminating the Indistinguishable Sapwood from Heartwood in Discolored Ancient Wood by Direct Molecular Mapping of Specific Extractives Using Time-of-Flight Secondary Ion Mass Spectrometry”, Analytical Chemistry, Volume 80, pp.1552-1557, March 2008（査読あり）
⑤ 大河内隆之「マイクロフォーカス X 線 CT による木造彫刻の非破壊年輪年代測定」日本文化財科学会第 24 回大会、奈良教育大学、2007.6
⑥ 藤井裕之ほか「近世民家の用材とその樹種―大和・国中地方の一事例から―」日本文化財科学会第 24 回大会、奈良教育大学、2007.6
⑦ Takayuki Okochi, Takumi Mitsutani.: “Nondestructive dendrochronological study using micro-focus X-ray computed tomography for the analysis of a wooden sculpture of a seated monk housed in Kokugakuin University Shinto Museum”, The First Asia Dendrochronology Conference and Workshop, Bangkok, Thailand, September 2007
⑧ 光谷拓実「中尊寺金色堂、経蔵、および古文化財の年輪年代調査」文化財の解析と保存への新しいアプローチ国際シンポジウム、早稲田大学、2007.9

（様式２）

自己点検評価調書

№.　２０３０

１．定性的評価

観点	適時性	継続性	発展性	独創性	効率性	正確性
判定	S	S	S	S	S	S

備考
適時性: 考古学・建築史・美術史等に関連した木材から得られた年輪年代情報を、速やかに多くの研究者に提供した。
継続性: 各地域・各年代にわたる年輪データを継続的に集積している。
発展性・独創性: マイクロフォーカスＸ線 CT による非破壊年輪年代測定の技術は、当研究室で開発した独創的な技術であり、オーストリアとの国際共同研究へと発展した。
効率性: 年輪年代測定対象に応じて、年輪読取機による計測手法、デジタル画像計測手法、マイクロフォーカスＸ線 CT による非破壊年輪計測手法などを適材適所で選択し、効率的かつ効果的に研究を遂行した。
正確性: １年単位の精度で年代確定可能であるという年輪年代法の正確性は、本年度の研究においてもいかんなく発揮された（新田(1)遺跡、池口寺薬師堂の事例など）。

２．定量的評価

観点	論文等数	発表件数				
判定	S	S				

備考
論文等数は昨年度実績を上回り、発表件数も昨年度実績を維持している。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
S	定性的評価における６項目、および定量的評価における２項目がいずれもＳであることから、Ｓと判断した。とりわけ、オーストリアとの国際共同研究という年度当初の目標以上の成果へと発展したことに対しては、Ｓの自己点検総合評価に十分値するものと自負する。なお、当初計画に掲げている新規技術の知的財産権の確保については、特許出願をすでにおこなっており、現在、特許庁による審査待ちの状態である。この点については、審査期間が長期化している日本の特許制度下では当研究室の努力では如何ともしがたく、ひきつづき特許庁による審査結果を待つことにしたい。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
達成	当該年度における調査研究事業は、その進捗度からみて順調に実施できたと考えられる。さらに、当研究室で開発したマイクロフォーカスＸ線 CT を用いた非破壊年輪年代測定技術が国際共同研究へと発展し、これは中期計画の当初目標以上の成果が達成されたものと判断される。本年度の目標達成に満足することなく、ひきつづき中期計画の遂行に邁進したい。

（様式１）　　№.　２０３１

業務実績書

中期計画の項目（Ⅰ４ (2) ⑤)	遺跡出土の動植物遺存体や古土壌の考古科学的分析により、過去の生業活動の解明と環境復元を行う。

【事業名称】	動物遺存体による環境考古学研究　(Ⅰ 4 (2) ⑤)

【事業概要】
遺跡における古環境復元の研究法を確立する。とくに日本および周辺国各地の遺跡から出土した動物遺存体、および水洗選別で得られる植物遺存体の同定を行い、その歴史的意義を探る。また、動物骨、人骨にみられる傷跡から、その目的と使われた利器を推定する。骨角器とその製作の際に生じた廃材、素材、未成品、そして破損品の研究を通じて、骨角器の製作技法の復元的研究を行う。全国各地の遺跡から出土した動物遺存体の出土例のデータを収集する。

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	環境考古学研究室長　松井章

【スタッフ】
橋本裕子（客員研究員）、丸山真史（京都大学大学院 人間・環境学研究科博士後期課程）、菊地大樹（京都大学大学院 人間・環境学研究科博士後期課程）、ルブナ・オマル（京都大学大学院 人間・環境学研究科博士後期課程）、廣藤紀子（京都大学大学院 人間・環境学研究科博士後期課程）、納屋内高史（京都大学大学院 人間・環境学研究科博士後期課程）、永井理恵（奈良教育大学）、樋廻理恵子、藤田芙美

【年度実績概要】
前年度に引き続き、韓国慶南考古学研究所が発掘した金海ヘヒョンニ貝塚の報告書作成のための指導、協力をおこない、３回韓国を訪問。12月１日から２月末日まで、研究員チョン・テジョン氏を貝塚研究の研修のため奈文研に受け入れた。金海貝塚の出土動物遺存体の整理によって、前１世紀には石器はほとんど用いられず、金属器に置き換わっていたこと、それにもかかわらず、金属器自体の出土がほとんど見られないことを明らかにすることができ、今後の日本の弥生文化との対比に大きな成果となる。７月に中国河南省で開催された考古科学国際会議に出席し、居徳遺跡出土の動物骨、人骨に見られる傷跡について発表をおこない、河南省出土の動物遺存体と骨角器の観察をした。その結果、青銅器時代の利器の鋭さを確認し、鉄器と遜色ないことがわかった。９月には米国オレゴン州のコロンビア川河畔のサンケン・ビレッジ遺跡の発掘に参加。水漬けのドングリ貯蔵穴を発掘し、縄文文化のそれとの共通性を論じる資料を得た。
中期計画の成果品『動物考古学の手引き』とその英文編 "*Fundamentals of Zooarchaeology in Japan and East Asia*"は、学術振興会科学研究費補助金（研究成果公開促進費）を受け、『動物考古学—*Fundamentals of Zooarchaeology in Japan*』として、日英併記で京都大学学術出版会から公刊することができた。
大分県埋蔵文化財センターが発掘した大友宗麟館跡から出土した動物遺存体および骨角器の分析、報告を行い、従来、民俗例でしか知られていなかった、銜を使わず鼻を挟む棒の締め付けの強弱で意志を伝える馬具、オモゲーが、中世に鹿角製品として存在したことを証明した。また、同様の馬具が２年前に調査した英国シェットランド諸島の泥炭切り出しに従事していたポニーにも使われていたことを見出し、ユーラシア大陸の東西端で同様の馬具が使われていたことを明らかにできた。

【実績値】
標本作製（収集）数：魚類 96 点、鳥類 20 点、哺乳類 7 点
論文等数：著書 1 件（①）、論文 4 件（②③）、報告書 12 件、その他 11 件
発表件数：7 件（International Conference of Zooarchaeology（中国鄭州）、第 56 回埋蔵文化財研究集会（和歌山海南市民会館）、東北文化研究室シンポジウム『ゴミの文化学−過去と現在−』（東北大学）、岩手県埋蔵文化財公開講座（岩手県民会館）、カリフォルニア大学バークリー校公開シンポジウム『縄文と環太平洋文化圏の考古学』④、『Society For American Archaeology 』２件（カナダバンクーバー）⑤⑥

【備考】
①松井章『動物考古学　Fundamentals of Zooarchaeology in Japan』京都大学学術出版会、pp.1-312、2008.2
②松井章「縄文人の食物利用」『季刊考古学』100、雄山閣、pp.32-35、2007.8
③松井章 「アメリカオレゴン州サンケン・ビレッジ遺跡」『考古学研究』216、2008.3
④松井章「東アジアの中の縄文—日本・韓国・中国の貝塚遺跡を中心として—」『縄文と環太平洋文化圏の考古学』カリフォルニア大学バークリー校公開シンポジウム、2008.3.21
⑤Matsui, A., and Peter Bleed 'Jomon Ecological Style, Agricultural origins, and the Delayed Appearance of Agriculture in Japan' *Society For American Archaeology*, 2008.3.27
⑥Maruyama, M., and A. Matsui 'Higashimyo Site, Saga City: Excavation and Findings' *Society For American Archaeology*, 2008.3.28

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２０３１

１．定性的評価

観点	独創性	発展性	継続性			
判定	S	S	S			

備考
独創性：全時代をカバーする動物利用の歴史の解明。動物遺存体による日本文化史の構築
発展性：動物考古学から考古学全般、歴史学、民俗学、部落史、生物学への発展
継続性：現生動物骨格標本の追加による充実化、全国各地の遺跡出土動物遺存体の出土報告の追加

２．定量的評価

観点	論文数等	発表件数				
判定	S	S				

備考
論文等公刊件数：28 件
学会発表等件数：7 件

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
S	定性的評価は、第１期の中期計画の成果を、加筆、増補して『動物考古学』（京大出版会）として刊行することができたことが特筆でき、世界で初めての動物考古学の基本を網羅した教科書として、これから世界中で長く使い継がれるだろう。定量的評価も、論文数、学会発表など、英語文献、英語発表を含む多数の業績を挙げた。以上のことから、総合的に S と評価するのが妥当と考える。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順　調	第１期の中期計画の成果を、科学研究費（研究成果公開促進費）によって日英併記で公刊することができた。これは日本国内だけでなく、東アジア全体での唯一の教科書、概説書として広く、長く使い継がれるものと思われる。また、韓国金海ヘヒョンリ貝塚、中国各地の新石器時代から鉄器時代にかけての遺跡から出土した動物遺存体および骨角器の研究から、日本における縄文時代から弥生時代、古墳時代への骨角器の製作技法の変遷、系譜を明らかにできる目途がついてきた。

（様式１）　　No.　２０３２

業務実績書

中期計画の項目（Ⅰ４（３）①）	生物被害を受けやすい木質文化財（社寺等建造物、彫刻など）の劣化診断や被害防止対策を確立する。

【事業名称】	文化財の生物劣化対策の研究（Ⅰ４（３）①）

【事業概要】
歴史的建造物や彫刻等、屋外環境に近い空間にある文化財は、生物被害を受けやすい環境にあるが、その劣化の早期検出や被害防止対策について、研究はまだ十分な状況とはいえない。本プロジェクトでは、特に屋外に近い環境に置かれた文化財の生物劣化対策を確立することを目標に、生物による被害の現況について集約し、早期発見のためのシステム作りや劣化の防止手法の開発など、保存科学的研究を行う。

【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	保存修復科学センター長　石崎武志

【スタッフ】
木川りか、佐野千絵、山野勝次（客員研究員）、犬塚将英、吉田直人、（以上、保存修復科学センター）
トム・ストラング（カナダ保存研究所）

【年度実績概要】
（1）屋外等で使用する防黴剤についての検討
高松塚古墳の発掘・解体に伴い、取合部や断熱覆屋内で使用される木質系材料・土嚢などについて、現場作業に支障のない防黴処置について方法を検討し、実際に施工を行った（奈良文化財研究所との共同作業）。その結果、発掘・解体作業中、高湿度環境のなか、とくに作業環境の木質系材料などが黴に汚染されることなく、全工程の作業を終えることができた
（2）歴史的建造物の仏像胎内納置物の殺菌処理の検討
歴史的建造物に安置される仏像の修理に伴い、胎内納置物を再びおさめる際にできるだけ菌の少ない状態で納めるため、殺菌燻蒸のあと、ＨＥＰＡフィルターを通して清浄空気を導入する方法を試行し、無事作業を完了した。
（3）歴史的建造物の黴の被害の調査と対策
歴史的建造物の地下の黴被害について調査をした結果、地下外壁部での水漏れが原因であることがわかった。建物周りの調査の結果、雨どいや空調機のユニットの排出水などが地下にしみこむ構造になっていることが明らかとなり、施設改善につながった。
（4）害虫侵入早期検出のための基礎研究
害虫侵入の早期検出手法について検討するにあたり、木質文化財の劣化診断についての研究会を行った。
研究会テーマ：　「木質文化財の劣化診断」　　平成 19 年 11 月 19 日（月）東京文化財研究所
害虫や菌類などの被害につねにさらされている歴史的建造物、彫刻など、屋外環境や開放空間にある木質文化財について、生物被害の劣化診断について、実践面のみならず理論的な面からも議論を行う。募集 50 名に対して、参加者 62 名。
＜プログラム＞
文化財建造物の劣化診断と維持管理　－診断例とその対策、今後期待される技術－　　藤井　義久（京都大学大学院農学研究科）
木彫像内部の生物被害を見る　－文化財用Ｘ線ＣＴによる非破壊劣化診断－　　鳥越　俊行（九州国立博物館）
温度による殺虫処理が木質文化財に与える影響の評価　　Tom Strang (Canadian Conservation Institute)

【実績値】
論文数　２件　　(①, ②)
学会研究会等での発表件数　２件　　(③, ④)
研究会　１回

【備考】
①高松塚古墳発掘/石室解体作業に伴う取合部・断熱覆屋使用木材等の防カビ対策：ＤＤＡＣの検討（木川りか、間渕創、高妻洋成、降幡順子、肥塚隆保）『保存科学』47　pp. 21-28, 08. 3
②コンクリート壁面における付着真菌の累積挙動（間渕創、佐野千絵）、『保存科学』47　pp. 197-202, 08. 3
③キトラ古墳保存覆屋内の環境について(2)-土壌水分量推移と環境管理（佐野千絵、犬塚将英、間渕創、木川りか、吉田直人、森井順之、加藤雅人、降幡順子、石崎武志、三浦定俊）　日本文化財科学会第 24 回大会　奈良教育大学　07.6.2-3
④キトラ古墳のバイオフィルムから分離されたバクテリア・菌類に対するケーソンＣＧ相当品（抗菌剤）の効果（木川りか、佐野千絵、立里臨、喜友名朝彦、小出知己、杉山純多）　文化財保存修復学会第 29 回大会　静岡市民文化会館　07. 6. 16-17.

（様式２）

自己点検評価調書

No. ２０３２

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

２．定量的評価

観点	論文数	研究発表件数	研究会			
判定	A	A	A			
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	現場調査、基礎研究の確実な実施、専門研究者間の交流、速やかな研究成果公開を果たし、本課題について必要不可欠な調査研究を実施することができた。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本課題において重要な劣化診断について専門研究者との交流・情報収集を行うとともに、必要不可欠な調査と対策について現場での検討を行った。またそれに付随する基礎研究も併行し、その成果についても速やかに公開した。

（様式1）　　No.　２０３３

業務実績書

中期計画の項目 （Ⅰ４（3）②）	環境の調査手法、モデル実験やシミュレーション技術を用いた環境の解析手法の確立のための研究および実践を行い、文化財を取り巻く保存環境の現状を把握し、改善することに資する。

【事業名称】	文化財の保存環境の研究（Ⅰ４（3）②）

【事業概要】
文化財を大切に保存し次世代に継承していくためには、文化財施設内の温湿度や空気環境を良好に保つ必要がある。しかし、現在の博物館、美術館では様々な問題を抱えている。さらに、空調設備のない神社・仏閣、倉などの施設や古墳などの環境は、より屋外環境に近く、その温湿度の変動は大きい。この５カ年のプロジェクトでは、文化財を取り巻く保存環境の現状を把握し改善することを目的として、様々な文化財を取り巻く環境の調査手法、モデル実験やシミュレーション技術を用いた環境の解析手法の確立のための研究を行う。また、地方公共団体等が設置する文化財の収蔵・公開施設に対して、その依頼に応じて環境調査を行い、専門的・技術的な援助・助言を行う。

【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	保存修復科学センター長　石崎武志

【スタッフ】
佐野千絵、犬塚将英、早川泰弘、木川りか、吉田直人（以上、保存修復科学センター）、三浦定俊（副所長）、カリル　マグディ（外国人特別研究員、客員研究員）、小椋大輔、三村衛（以上、京都大学）、白石靖幸（北九州市立大学）

【年度実績概要】
本年度は、文化財施設内の温湿度解析の対象として、施設の耐震工事を計画している石水博物館千歳文庫を選択し、熱・換気回路網計算プログラムを用いて温湿度解析を行い、実測した温湿度データとの比較を行った。今回作成した計算モデルから得られた計算結果と実測結果は概ね対応したが、一部湿度に関して値の変動が、実測より大きくなる部分が見られた。これは、壁面の吸放湿性能をモデル化していないためと考えられる。今後、壁面の吸放湿性能をモデルに組み込むことにより、解析精度を上げていく予定である。
平成20年３月３日に開催した「金属試験片曝露による環境モニタリング」の研究会では、東大名誉教授の増子昇氏が「金属の錆び生成について」、東文研名誉研究員の門倉武夫氏が「金属片曝露による文化財影響試験の歴史」というテーマで講演を行った。これらの講演と空気モニタリングのための曝露試験の海外の状況などの情報をもとに、空気汚染物質による文化財への影響調査手法などの討論を行った。
建築材料の物性測定および環境の解析手法に関しては、客員研究員のカリル　マグディ氏をドレスデン工科大学に派遣して、プラーゲ研究員と共同研究を行った。

【実績値】
論文等数　３件（①、②、③）
発表件数　３件（④、⑤、⑥）
研究会　１回

【備考】
①犬塚将英、龍泉寺由佳、石崎武志「石水博物館千歳文庫内の温湿度解析」『保存科学』47　pp.69-78, 08.3.
②犬塚将英、新田建史、石崎武志「静岡県立美術館における温熱環境の測定Ⅱ」『保存科学』47　pp.203-208, 08.3
③Magdi Khalil and Takeshi Ishizaki, Moisture Characteristic Curve of Tuff Bressia Stone 『保存科学』47　pp.11-20, 08.3.
④犬塚将英、新田建史、白石靖幸、石崎武志　静岡県立美術館における温熱環境の測定とシミュレーション解析、文化財保存修復学会第２９回大会　静岡市民文化会館　07.6.16-17
⑤犬塚将英、石崎武志　コンピューターシミュレーションによる展示・収蔵施設の温湿度解析、文化財保存修復学会第29回大会　静岡市民文化会館　07.6.16-17
⑥松尾隆士、田中享二、石崎武志　コンクリート補強された煉瓦造建造物に見られる白華現象の低減方法の提案とその効果の検証　日本建築学会大会　福岡大学　07.8.29-31

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２０３３

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

２．定量的評価

観点	学術雑誌等への掲載論文等数	学会研究会等での発表件数	研究会			
判定	A	A	A			
備考						

３．実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	美術館・博物館での環境調査、海外の研究者との情報交換、研究会の実施、学会や紀要での研究成果公表など予定通り実施し、高い調査研究水準を保つことができた。

４．当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	２年目として、環境のシミュレーションに関する現地調査および基礎的な研究も行い、研究は予定通り進んでいる。

（様式1）　　No.　２０３４

業務実績書

中期計画の項目 （Ⅰ４（3）③）	屋外文化財の保存・修復の手法を確立する。また、文化財の防災についてその予防と被災後の情報収集を行い、文化財防災のネットワーク化の一層の推進を図る。

【事業名称】	周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究（Ⅰ４（3）③）

【事業概要】
屋外に位置する美術工芸品、文化財建造物等は、周辺環境の変化が大きな劣化要因となる。本研究では、周辺環境が文化財に及ぼす影響を評価し、予測手法の確立や新たな保存修復技法や材料の開発を目的とする。また、石造文化財の保存修復に関して韓国・国立文化財研究所との共同研究を行う。詳細には双方で対象を設け（日本側：臼杵磨崖仏（大分県臼杵市）、韓国側：弥勒里石仏）、現地観測や修復材料の試験などを行う。

【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	副センター長　川野邊　渉

【スタッフ】
早川　典子、森井　順之（以上、保存修復科学センター）、朽津　信明（文化遺産国際協力センター）

【年度実績概要】
石造文化財や木造建造物など屋外に位置する文化財について、周辺環境の観測を行った。また、その結果に基づいて劣化要因を解明し、その影響を軽減する方法および修復材料・技法の開発・評価を試みた。
今年度の主な成果は次の通りである。
(1) 臼杵磨崖仏では今後の修復事業のために、劣化機構の把握を目的とした気象や岩体水分などの長期連続観測を実施している。特に今年は、ホキ2群の凍結劣化対策として寒冷時の覆屋閉鎖実験を実施し、その効果について評価を行った。また、植物繁茂を制御するための紫外線灯照射実験および照射後の植物除去実験を、臼杵磨崖仏・古園石仏群にて実施した。
(2) 木造建造物の腐朽に関して、富貴寺（豊後高田市）を対象に、腐朽菌や藍藻類の生息分布の調査およびその周辺環境に関する調査を行った。
(3) 今年度の大韓民国・国立文化財研究所との共同研究は、2007（平成19）年10月18日、東京文化財研究所・地下会議質にて研究報告会を開催した。また、研究報告会にあわせて韓国側研究員が来日し、石塔寺（滋賀県東近江市）の三重石塔をはじめとする近畿地方の石塔群について、その残存状況と周辺環境に関する現地調査を共同で実施した。

【実績値】
論文数　3件（①～③）
発表件数　4件（④～⑦）
報告書刊行数　1件（⑧）

【備考】
①朽津信明　「文化財石材の硬さに関する研究」　日韓共同研究報告書2007、pp.1-5、08.3
②森井順之　「臼杵磨崖仏における凍結破砕防止策について」　日韓共同研究報告書2007、pp.54-59、08.3
③早川典子・川野辺渉　「臼杵磨崖仏における表面処置について」　日韓共同研究報告書2007、pp.60-63、08.3
④森井順之　「臼杵磨崖仏における凍結破砕防止策の検討（2）―冷風浸入制御のための実験―」　日本文化財科学会第24回大会、奈良教育大学、07.6.2-3
⑤森井順之　「磨崖仏の凍結防止策の検討」　2007東アジア文化遺産保存国際シンポジウム　国立中央博物館（大韓民国）　07.11.1-2
⑥早川典子・川野辺渉　「臼杵磨崖仏における表面処置について」　国際共同研究「文化財における環境汚染の影響と修復技術の開発研究」に関する日韓共同研究報告会2007　東京文化財研究所　07.10.18
⑦MORII Masayuki "Conservation Project of Usuki Stone Buddha in Japan" International Symposium on Conservation of Stone Cultural Properties, Kongju University (Korea), 07.11.23-24
⑧『日韓共同研究報告書2007』　東京文化財研究所／大韓民国文化財庁国立文化財研究所　70p　08.3

（様式２）

自己点検評価調書

№ ２０３４

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

２．定量的評価

観点	論文数	発表件数	報告書刊行数			
判定	A	A	A			
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	屋外に位置する美術工芸品、文化財建造物等の周辺環境の継続的な調査を実施し、文化財に影響すると思われる事象の予測手法の確立や新たな修復材料の開発に関しての情報収集、研究が実施され、より高い研究水準を保つことが出来た。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	第二年次として、重要な調査結果を継続して収集することが出来、また、各地の研究者との連携も可能となり、今後の研究を進める上で、重要な成果を得た。次年度以降も今年度の成果を元にさらに調査研究を発展させることが可能となった。

（様式1） №. ２０３５

業務実績書

中期計画の項目 （Ⅰ4 (3) ③）	屋外文化財の保存・修復の手法を確立する。また、文化財の防災についてその予防と被災後の情報収集を行い、文化財防災のネットワーク化の一層の推進を図る。

【事業名称】	文化財の防災計画に関する調査研究（Ⅰ4（3）③）

【事業概要】
阪神淡路大震災などの大地震で被害を受けた文化財は数多く、また、1998（平成10）年の台風7号による倒木の被害を受けた室生寺五重塔など、自然災害による文化財の被害の甚大さは記憶に新しい。本研究は、地震や台風などの自然災害から文化財を守るために必要な情報を、地理情報システム（GIS）を用いてデータベース化し、それを分析することで災害予測を行う。また、災害時の文化財救済活動や被災文化財の応急修復方法の確立も目的としている。

【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	副センター長　川野邊　渉

【スタッフ】
中山　俊介、森井　順之、加藤　雅人（以上、保存修復科学センター）
二神　葉子（文化遺産国際協力センター）

【年度実績概要】
本年度は、能登半島地震、三重県中部地震、新潟県中越沖地震と大地震が立て続けに生じ、多くの家屋が倒壊するなど被害が甚大であった。これらの大地震により、その地域にある文化財は例外なく多くが被災した。
(1) 大地震発生後すぐ、強い震度地域に位置する建造物文化財の抽出を、東京文化財研究所で開発したGISによる文化財防災情報システムを用いて行った。発表する震度速報値を用いることで、比較的短時間で被災が予測される建造物文化財の抽出を行うことができた。
(2) 能登半島地震および新潟県中越沖地震により被災した文化財について現地調査を実施した。能登半島地震では主に輪島で、漆芸品の損傷状態の調査を実施、応急処置方法に関する助言を行った。新潟県中越沖地震では、2004年の新潟県中越地震で被害を受けた長岡市の博物館を訪れ、2004年の教訓を受け強化された耐震対策の実効性を確認した。
(3) 文化財防災情報システムを運用するにあたり、地震や台風など新しい災害情報や文化財の修復履歴などを簡単入力できるツールを開発した。また、地方公共団体で発行する防災地図とのカップリングにより浸水や地すべり危険区域を表示可能としたことで、様々な災害に対応できるように改良した。
(4) 第3回文化財の防災計画に関する研究会の講演録を編集し、報告書として刊行した。

【実績値】
発表件数　1件（①）
論文数　1件（②）
報告書刊行数　1件（③）

【備考】
①二神　葉子「文化財ハザードマップについて―海外の事例を中心に」ミュージアム21研究会　国立民族学博物館　08.1.28
②森井　順之、青木　繁夫「6.6 文化財の強風被害（「6章　強風災害」より）」　『風工学ハンドブック―構造・防災・環境・エネルギー（日本風工学会編）』　pp.233-234　朝倉書店　07.4
③『文化財の防災計画に関する研究　第3回研究会―震災から美術工芸品をまもる―』　東京文化財研究所　56p　08.3

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２０３５

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

２．定量的評価

観点	論文数	発表件数	報告書刊行数			
判定	A	A	A			
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	能登半島地震など2007年内に起きた大型地震の際に当システムを用いて災害範囲を推定できるなどの成果をあげ、文化財に関する各種データを有機的に当システムに取り込むことにも成功し、さらに有用性が向上していることが確認できた。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	第２年次として、システムの運用に関する経験を蓄積すると同時に改良を進めることができた。将来における一般化に際して必要とされる貴重なデータを得られた。

（様式１）　　No.　２０３６

業務実績書

中期計画の項目 （Ⅰ４（3）④）	考古資料の材質・構造の調査法に関して、特にレーザーラマン分光分析法や高エネルギーX線 CT・CR 法の実用化を図る。また、考古資料の保存・修復に関する実践的研究を実施する。

【事業名称】	考古資料の材質・構造の調査法及び保存・修復に関する実践的研究（Ⅰ４（３）④）

【事業概要】
考古資料の材質・構造の調査法に関して、１）考古遺物の完全非破壊非接触分析法としてのレーザーラマン分光法の応用をめざした標準試料および考古遺物のラマンスペクトルの収集蓄積ならびにデータベースの構築、短波長レーザーの応用可能性の検討、２）高エネルギーX線 CT 法およびX線 CR 法を応用した考古遺物の内部構造と材質推定法の基礎的研究、３）有機質遺物の分析法の実用化とデータベース作成、４）木製遺物に対する超臨界溶媒乾燥法の基礎的研究と実用化をめざした強化含浸薬剤の検討ならびに乾燥条件の基礎データの集積と検討、５）壁画古墳の保存に関する課題を広く検討するための保存科学研究集会の開催、に取り組む。

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長　肥塚隆保

【スタッフ】
高妻洋成、降幡順子、脇谷草一郎（企画情報部）

【年度実績概要】
１）標準資料および考古遺物のラマンスペクトルの収集をおこなった。
２）考古遺物のX線 CT 撮影、オートラジオグラフィおよびX線 CR 撮影をおこない、基礎的なデータを収集した。
３）昨年に引き続き、シンクロトロン顕微赤外分析法による出土絹繊維の埋蔵中の劣化について分析を進めた。
４）本年度は、強化含浸に用いる薬剤にリグノクレゾールを選択し、含浸濃度の違いと木材への吸着性について検討をおこなった。その結果、濃度を上げることで木材への吸着量も増大することが明らかとなった。
５）高松塚古墳の石室解体に関する報告をおこなうとともに、全国に存在する装飾古墳の保存についても言及し、問題点の共有とその解決方法に関する議論をおこなった。また、高松塚古墳の石室解体時に用いた治具などの公開・展示を実演をまじえておこなった。

【実績値】
発表件数： 13 件（文化財保存修復学会大会３件、日本文化財科学会大会７件、東アジア文化遺産保存国際シンポジウム３件）
論文等数： 22 件（①～㉒）
研究集会参加者数：126 名、発表件数 11 件

【備考】
① 肥塚隆保「日本の古代ガラス」『ガラスの百科事典』pp.40-45、2007.10
② 肥塚隆保「鉛バリウムガラスから発見された青色顔料」『ガラスの百科事典』pp.126、2007.10
③ 肥塚隆保「飛鳥時代に始まった鉛ガラスの製造」『ガラスの百科事典』p.58、2007.10
④ 肥塚隆保「イメージングプレートを利用した古代ガラスの識別」『ガラスの百科事典』p.114、2007.10
⑤ 降幡順子・田村朋美・肥塚隆保「イメージングプレートを用いた日本出土ガラス小玉の調査」『2007 東アジア文化遺産保存国際シンポジウム』pp.291-292、2007.11
⑥ 橋本英将・植田直見・塚本敏夫・高妻洋成・大河内隆之・松尾昭子「鷹島海底遺跡出土大刀の構造復元－「蒙古襲来」の考古学的検討へ向けて」『2007 東アジア文化遺産保存国際シンポジウム』pp.33-38、2007.11
⑦ 片岡太郎・栗本康司・高妻洋成「リグノフェノールおよびセルロース誘導体を用いた出土木材の保存処理法の開発」『2007 東アジア文化遺産保存国際シンポジウム』pp.297-298、2007.11
⑧ 片岡太郎・栗本康司・高妻洋成「セルロース誘導体を用いた出土木材の保存処理」『日本文化財科学会第 24 回大会研究発表要旨集』pp.258-259、2007.6
⑨ 片岡太郎・栗本康司・高妻洋成「リグノフェノールを用いた出土木材の保存処理Ⅲ－材内における存在状態－」『日本文化財科学会第 24 回大会研究発表要旨集』pp.260-261、2007.6
⑩ 片岡太郎・芦谷辰矢・黒田健一・栗本康司・高妻洋成「出土スギ材リグニンの化学構造の解析」『日本文化財科学会第 24 回大会研究発表要旨集』pp.262-263、2007.6
⑪ 高妻洋成・肥塚隆保・降幡順子・脇谷草一郎「クスノキ製剝り抜き井戸の真空凍結乾燥法による保存処理」『奈良文化財研究所紀要 2007』p.35、2007.6
⑫ 佐藤昌憲・後藤卓真・小滝雅也「ナノファイバー薄膜を用いる微量天然染料の分光学的測定」『日本文化財科学会第 24 回大会研究発表要旨集』pp.98-99、2007.6
⑬ 赤田昌倫・後藤卓真・佐藤昌憲・奥山誠義「出土絹製遺物の顕微赤外分析による研究」『日本文化財科学会第 24 回大会研究発表要旨集』pp.100-101、2007.6
⑭ 奥山誠義・佐藤昌憲・赤田昌倫・後藤卓真・森脇太郎・池本夕佳「出土有機質遺物に対するシンクロトロン顕微赤外分光法の応用～繊維資料を中心に～」『日本文化財科学会第 24 回大会研究発表要旨集』pp.206-207、2007.6
⑮ 奥山誠義・佐藤昌憲・今津節生・赤田昌倫・佐藤卓真「出土繊維製品の保存と再分析における前処理」『文化財保存修復学会第 29 回大会研究発表要旨集』pp.54-55、2007.6
⑯ 佐藤昌憲・奥山誠義・赤田昌倫・後藤卓真「顕微赤外分析法による出土植物繊維の材質同定」『文化財保存修復学会第 29 回大会研究発表要旨集』pp.56-57、2007.6
⑰ 佐藤昌憲「顕微赤外分析による出土繊維や漆などの材質同定」『奈良文化財研究紀要 2007』pp.32-33、2007.6
⑱ 降幡順子・肥塚隆保・中村大介「兵庫津遺跡出土青花（染付）磁器の自然科学的調査」『文化財保存修復学会第 29 回大会研究発表要旨集』pp.310-311、2007.6
⑲ 肥塚隆保・高妻洋成・降幡順子・山崎修・松本岩雄「重要文化財島根県加茂岩倉遺跡出土銅鐸の保存修理－保存科学調査から－」『日本文化財科学会第 24 回大会研究発表要旨集』pp.270-271、2007.6
⑳ 高妻洋成・肥塚隆保・降幡順子・山崎頼人「小郡市寺福童遺跡４より出土した銅戈の保存修理」『奈良文化財研究所紀要 2007』p.34、2007.6
㉑ 肥塚隆保・高妻洋成・降幡順子「重要文化財加茂岩倉遺跡出土銅鐸の保存修理」『奈良文化財研究所紀要 2007』pp.36-37、2007.6
㉒ 降幡順子・脇谷草一郎・高妻洋成・肥塚隆保「国宝唐招提寺金堂顔料分析調査」『奈良文化財研究所紀要 2007』pp.38-39、2007.6

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２０３６

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	S	S	S	S	S	
備考						

２．定量的評価

観点	発表件数	論文等数	研究集会参加者数			
判定	S	S	S			
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
S	調査研究事業を当初計画どおり順調に達成することができたことから、総合的評価としてＳと判定した。保存・修復に関する実践的研究においては、超臨界点溶媒乾燥法の開発について、さらに薬剤含浸の検討を進める必要があり、次年度はこの点に関して重点的に取り組む予定である。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度の計画を当初の計画どおり実施できたことから、順調であると判定した。 次年度はこのペースを維持しつつ、とくに保存・修復に関する実践的研究においては超臨界点溶媒乾燥法の開発について、さらに薬剤含浸の検討を進める予定である。

(様式1)　　No.　２０３７

業務実績書

中期計画の項目 （Ⅰ４（３）⑤）	伝統的修復材料や合成樹脂などの物性、製作技法、利用技法に関する調査・研究をもとに、修復材料・技法の評価及び開発を行う。また、海外の文化財保存担当者を対象に、日本の修復材料の使用法や修理技術に関する研修などを行い本国での基本的な作品の取り扱いや保存処理に反映させる。

【事業名称】	伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究（Ⅰ４（３）⑤）

【事業概要】
本プロジェクトでは、文化財修復材料について、製造法・適用法などを調査研究し、適正な文化財修復を行うための基礎を築くことを目的とする。
伝統的修復材料に関しては、製法・使用技法・材料物性などを研究することにより、伝統技術を記録し、その有効性を科学的に検証する。一方、近年、文化財修復に使用されるようになった合成樹脂に関して、その使用事例を再確認する。さらに、これらの調査や研究から得られた結果をもとに、現在の環境も踏まえ、より文化財修復に適した、技術や材料を開発することをも目的とする。

【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	保存修復科学センター 副センター長　川野邊渉

【スタッフ】
北野信彦、早川典子、加藤雅人　(以上、保存修復科学センター)

【年度実績概要】
・伝統的修復材料に関して、調査研究を行った。具体的には、建造物などに使用する漆塗装の耐候性向上に向けた基礎実験を開始した。また、紙に関しては、収集した試料の繊維組成分析を行い、適切な紙を選ぶための基礎データを集積した。古糊に関しては各工房の使用状況について引き剥がし試験をもとに評価した。

・また、本年より、本研究所が携わった修復事業のうち、研究所が所蔵する資料を分類整理し、目録を作成し始めた。また、ネガフィルムなどの資料に関しては、デジタルデータ化を進めた。

・「漆芸品に用いられた金属の劣化」というテーマで第一回 伝統的修復材料および合成樹脂に関する研究会を開催した。
日時：平成20年2月27日 13:00～17:00
会場：東京文化財研究所 地階セミナー室
講演：
北野信彦（東京文化財研究所）
高橋隆博（関西大学）
北村昭斎（漆芸品修復技術者（重要無形文化財保持者））
成瀬正和（宮内庁 正倉院事務所）
佐野千絵（東京文化財研究所）

【実績値】
発表件数　2件（①、②）
論文掲載数　2件（③、④）
研究会開催数　1件
報告書発行数　1件（⑤）

【備考】
①早川典子、中右恵理子、木川りか、沖本明子、川野邊渉「絵画表面に用いる修復材料の基礎的研究　−壁画修復を中心に−」文化財保存修復学会第29回大会　静岡市民文化会館　07.6.17
②北野信彦 「出土資料である漆芸品に用いられた金属の劣化と保存処理」 第1回伝統的修復材料および合成樹脂に関する研究会『漆芸品に用いられた金属の劣化』　東京文化財研究所　08.2.27
③Noriko Hayakawa, Rika Kigawa, Tomoyuki Nishimoto, Kurara Sakamoto, Shigeharu Fukuda, Takayuki Kimishima, Yasuhiro, Wataru Kawanobe “Characterization of furunori (aged paste) and preparation of a saccharide similar to furunori” Studies in Conservation 52 (3)　07.10
④早川典子、中右恵理子、木川りか、沖本明子、川野邊渉「絵画表面に用いる修復材料の基礎的研究　−壁画修復を中心に−」『文化財修復学会誌』 53　2008.3
⑤『伝統的修復材料および合成樹脂に関する研究』　90p　08.3

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２０３７

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

２．定量的評価

観点	発表件数	論文数	刊行書発行数			
判定	A	A	A			
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	建造物などに使用する屋外漆塗装の耐候性、紙の分析手法、古糊の基本物性など、文化財の修復材料に関して有益な基礎的知見を収集することができた。本研究所が携わった修復事業のうち、研究所が所蔵する資料を分類整理し、目録作成を開始した。これにより成果の公開が容易になると考えられる。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本プロジェクトで実行してきた手法の有効性が明らかになってきており、それに伴い重要な知見も蓄積されつつあることから、計画の実施状況は順調である。次年度以降も引き続き、基礎的知見の収集と資料目録化を推進する予定である。

（様式１）　　No.　２０３８

業務実績書

中期計画の項目 （Ⅰ ４ (3) ⑤）	伝統的修復材料や合成樹脂などの物性、製作技法、利用技法に関する調査・研究をもとに、修復材料・技法の評価及び開発を行う。また、海外の文化財保存担当者を対象に、日本の修復材料の使用法や修理技術に関する研修などを行い本国での基本的な作品の取り扱いや保存処理に反映させる。

【事業名称】	国際研修「漆の保存と修復」（Ⅰ ４ (3) ⑤）

【事業概要】
海外の美術館・博物館の保管する漆芸品は、乾燥した環境と保管状況の違いから塗膜の剥落や木地の割れなどの損傷を持つ作品が多い。そのため海外の日本美術品保管担当者や学芸員から漆芸品の保存と修復についての問い合わせが増加している。それらの疑問や問い合わせは、海外において日本の修復材料・技法に関する学習や作品の取り扱いに関しての経験が少ないためといえる。文化財研究所は、ICCROM と共同で１０カ国１０人の参加者を募り国際研修会を開催し、漆芸品の保存と修復についての研修を行う。

【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	保存修復科学センター 副センター長　川野邊渉

【スタッフ】
北野信彦、早川典子、加藤雅人　（以上、保存修復科学センター）

【年度実績概要】
研修日程：2007（平成 19）年 9 月 10 日より 9 月 14 日まで
研修場所：東京文化財研究所、青森県（弘前市、八戸市）、岩手県（二戸市、平泉町）
研修対象：国際研修「漆の保存と修復」の受講者 12 名
研修内容：　報告および講演：9 月 10 日、11 日
報告 1：　Suzanna SHAW, National Gallery of Victoria (Australia)
報告 2：Chenkyo Tshering DORJI, Freelance, Emeritus Professor (Bhutan)
報告 3：　Balazs LENCZ, Hungarian National Museum (Hungary)
報告 4：　Francesco CIVITA, Stibbert Museum (Italy)
報告 5：　Mitra ETEZADI, Cultural Institute of Bonyad Museums (Iran)
報告 6：　Margarita KIRCHNER, Arquinfad (Spain)
報告 7：　Ya Hui LIU ZHOU, National Art Museum of Catalonia (Spain/Taiwan)
報告 8：　Somtawin Pom NILVILAI, Bureau of the Royal Household (Thailand)
報告 9：　Jurgen HUBER, The Wallace Collection (UK/Germany)
報告 10：　Julia HUTT, Victoria & Albert Museum (UK)
報告 11：　Brenda KENEGHAN, Victoria & Albert Museum (UK)
報告 12：　Melissa CARR, Private conservator (USA)
講演：川野邊渉（東京文化財研究所）
スタディーツアー：9 月 12 日～14 日
弘前市（漆工房）、八戸市（八戸市博物館、八戸市縄文学習館）、二戸市（浄法寺町 滴生舎など）、平泉町（中尊寺）

【実績値】
報告者数　　12 名
報告書発行数　　2 件　（①、②）

【備考】
①『-Evaluation seminar, 2007- International course on conservation of Japanese lacquer』　90p　08.3
②『Textbook　“Japanese lacquer　~Basics~”』　110p　08.3

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２０３８

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

２．定量的評価

観点	受講者数	刊行書発行数				
判定	A	A				
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	過去４回行われた国際研修「漆の保存と修復」の受講者から参加者を募り評価セミナーを行った。過去の受講者がそれぞれの職場で、本研修で得られた知識や経験がどの様に文化財の保存・修復・活用に利用できたかを講演して意見交換することにより、本研修の効果を確認すると共に、次回以降の研修をより充実させるための有効な意見が得られた。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	評価セミナーで行い得られた意見から、本研修は、その効果が高く、海外における日本の文化財の保存・修復・活用および日本文化の理解に寄与していることが確認できた。また、今回得られた意見をもとに、次回以降、より充実した研修の開催が可能であることから順調に計画は進行している。

（様式1）　　No.　２０３９

業務実績書

中期計画の項目 （Ⅰ4（3）⑤）	伝統的修復材料や合成樹脂などの物性、製作技法、利用技法に関する調査・研究をもとに、修復材料・技法の評価及び開発を行う。また、海外の文化財保存担当者を対象に、日本の修復材料の使用法や修理技術に関する研修等を行い本国での基本的な作品の取り扱いや保存処理に反映させる。

【事業名称】	在外日本古美術品保存修復協力事業（Ⅰ4（3）⑤）

【事業概要】
海外の美術館、博物館が所蔵する評価の高い作品の修復に協力し、併せて対象作品を所蔵している博物館等と共同で、保存修復に関連する研究を行う事業である。平成3年度から絵画を対象に事業を進めてきたが、平成9年度から工芸品など欧米の修復技術で修復の困難な分野にも協力対象を拡げた。
この事業により修復した作品の公開によって、わが国の修復技術に対する理解が深まり交流が促進されている。本事業の立案のために、欧米の美術館、博物館にて作品調査のほかに修復技術に関する討議を行い、併せて輸送手続きに関する協議を行っている。当研究所は修理内容の検討、修理作品の写真記録の作成および整理・保存、輸送手続きに責任を持って当たっている。
この修復協力事業によって修理された作品の公開展示回数が増すことは当然であるが、修復協力事業が契機となって所蔵の日本古美術品に対する関心が新たに高まりつつあり、欧米諸国では日本古美術品を所蔵する博物館の間でネットワークが構築されつつある。さらに、文化財保存の専門家の交流も促進され、わが国の文化財修復技術の普及と理解に対し効果をあげている。

【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	保存修復科学センター　副センター長　　川野邊　渉

【スタッフ】
中山　俊介、北野　信彦、加藤　雅人（以上、保存修復科学センター）、佐野　智典（管理部）、中野　照男、津田　徹英、塩谷　純、綿田　稔、江村　知子、城野　誠治、勝木　言一郎、皿井　舞（以上、企画情報部）、清水　真一、稲葉　信子（以上、文化遺産国際協力センター）

【年度実績概要】
平成19年度は、11館11点の作品を修復した（うち4点が18年度からの継続、2点が海外での修復（◆印））。
＜絵画＞
1)「日吉山王祭礼図屏風」　6曲1双　ヒューストン美術館
2)「多武峯維摩会本尊図」　1幅　キンベル美術館
3)「釈迦十六善神像」　1幅　オーストラリア国立美術館
4)「花鳥図屏風（波月等薩筆）」　6曲1双　ヴィクトリア国立美術館
5)「阿弥陀三尊来迎図」　1面　チューリッヒ・リートベルグ美術館　（2年計画の2年目）
＜工芸品＞
1)「花卉螺鈿ライティングビューロー」　1基　クラコウ国立美術館　（2年計画の2年目）
2)「楼閣山水螺鈿箪笥」　1基　キョッソーネ東洋美術館　（2年計画の2年目）
3)「源氏九曜紋蒔絵箔箱」　1合　フレンツ・ホップ美術館
4)「楼閣山水蒔絵箱」　1合　オーストリー応用美術博物館（2年計画の1年目）
5)◆「花樹鳥獣蒔絵螺鈿洋櫃」　1基　ケルン東洋美術館　（3年計画の2年目）
6)◆「月琴」　1挺　ウィーン国立民族学博物館

平成19年度、絵画の事前調査ではローマ国立東洋美術館3点、キョッソーネ東洋美術館3点、アシュモリアン博物館10点、ビクトリア&アルバート美術館7点、ベルン歴史博物館2点、イェール大学美術館10点、ブルックリン博物館6点、バンクーバー博物館1点、グレーター・ビクトリア美術館2点の調査を行った。また、工芸品はビクトリア&アルバート美術館5点、アシュモリアン博物館9点、市立ヴェルケ・メディジチ博物館9点、フラノフ城9点、レドニッチェ城9点、ムラビア美術館3点の調査を行った。また、平成18年度修復完了品を東京国立博物館において展示し、その修復成果を一般に披露した（平成19年5月15日～27日）。
平成18年度に修復した絵画、工芸品の修理状況をまとめて「在外日本古美術品保存修復協力事業」の報告書を刊行した。

【実績値】

事前調査事業件数	2件
修復件数	11件
報告書刊行数	1件（①）

【備考】
①『在外日本古美術品保存修復協力事業報告書　平成１９年度　（絵画／工芸品）』　229ｐ　東京文化財研究所　08.3

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２０３９

１．定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

２．定量的評価

観点	調査件数	修複件数	報告書刊行数			
判定	A	A	A			
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	今年度は１１館、１１点の作品の修復を実施した。海外においても、修復家を派遣し、修復作業を実施したとともに海外の修復家、学芸員などを対象にしたワークショップを開催した。このように海外における日本絵画や工芸品を修復したり、ワークショップを開催することによりその技術、取扱い方法を伝えるだけでなく再び展示することができるようになりその価値を高めることができた。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	今年度も引き続き、事前調査を実施しており、来年度、再来年度に向けて、修復する候補作品を抽出している。今後はより広範囲な美術館、博物館から、収蔵庫に眠っている価値ある日本絵画と工芸品を修復し、再度展示可能な姿にするべく努力を重ねる。また、海外において修復技術を伝えることにもなお一層の努力を傾注する。

（様式1）　　No.　２０４０

業務実績書

中期計画の項目 （Ⅰ4（3）⑥）	近代の文化遺産に特徴的な鉄、コンクリート、プラスチックなどの複合素材および技法について国際共同研究を実施し、その成果をもとに国内所在の近代文化遺産の保存修復に関する手法を開発する。

【事業名称】	近代の文化遺産の保存修復に関する研究（Ⅰ4（3）⑥）

【事業概要】
近代の文化遺産は、絵画、彫刻、木造建造物など従来の文化財とは、規模、材質、製造方法などに大きな違いがあるため、その保存修復方法や材料にも大きな違いがある。本研究では、近代の文化遺産の保存修復を行う上で必要とされる材料と技術について調査研究を行う。具体的には、大型構造物の劣化機構の解明とその修復方法の立案、航空機、船舶、鉄道車両などの保存修復上の問題点とその解決方法の究明を目指している。

【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	近代文化遺産研究室長　　中山　俊介

【スタッフ】
川野邊　渉、森井　順之、高橋　真実子、高尾　曜（以上、保存修復科学センター）、朽津　信明（文化遺産国際協力センター）、横山　晋太郎、長島　宏行（以上、客員研究員）

【年度実績概要】
今年度は近代化遺産の利活用に関する手法や問題点をテーマとして研究を行った。イギリスから航空機担当の主任学芸員兼主任技術者を、また、以前、海から引揚げられた旧日本軍機の修復作業を担当された方、日本航空協会からは、所沢の航空発祥記念館に所蔵されている、91 式戦闘機の保存修復に携わっておられる方などを招いて、それぞれの立場から航空機の保存と活用に関する検討会を平成 20 年 1 月 25 日に東京文化財研究所地階セミナー室にて実施した。さらに、ドイツ技術博物館の修復責任者を招いて、設計図面などに多く使われている青図の再発色に関する、双方の研究結果に関して検討会を平成 20 年 3 月 4 日に開催した。また国内における実地調査を平成 20 年 3 月 5 日から 7 日にかけて実施した。加えて、同修復責任者と、共同で研究している合成樹脂の劣化に関する検討会も実施した。
屋外展示されている鉄道車両や航空機などの金属を主体とする文化財の防錆対策のために各種サンプルを作成し小樽市総合博物館、船の科学館、かかみがはら航空宇宙科学博物館、大樹町多目的航空公園、海上自衛隊鹿屋航空基地での曝露実験も継続して実施している。これらの地点では、試料の受けた紫外線量をはじめ、温度、湿度などの測定も行い、これらの塗装仕様と劣化速度の相関についても検討している。屋外展示航空機の環境測定も継続している。

【実績値】
論文数　　4 件（①～④）
発表件数　　2 件（⑤～⑥）
報告書刊行数　3 件（⑦～⑨）

【備考】
①中山俊介　「日本における鋼船の保存に関する問題点」　近代化遺産の修復のための問題点、pp.38-42、08.3
②中山俊介　「鉄道文化財の利活用について」　鉄道遺産の活用、pp.6-10、08.3
③中山俊介　「路面電車の運用と文化財の保存」　鉄道遺産の活用、pp.43-50、08.3
④中山俊介　「初代南極観測船“宗谷”の文化財的価値及び保存修復に係る調査研究」　初代南極観測船“宗谷”の文化財的価値及び保存修復に係る調査研究　報告書　08.3
⑤中山俊介　「航空機の保存と活用」　近代の文化遺産の保存修復に関する研究会、東京文化財研究所、08.1.25
⑥中山俊介　「Country Report –Japan-」　BIG STUFF '07　Beyond Conservation – Industrial Heritage Management　Deutsches Bergbau Museum(Germany)　07.9.12
⑦『近代化遺産の修復のための諸問題』　東京文化財研究所　48p　08.3
⑧『鉄道遺産の活用』　東京文化財研究所　96p　08.3
⑨『初代南極観測船「宗谷」の文化財的価値及び保存修復に係る調査研究　報告書』　東京文化財研究所　107p　08.3

（様式２）

自己点検評価調書

№. ２０４０

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

２．定量的評価

観点	論文数	発表件数	報告書刊行数			
判定	A	A	A			
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	近代文化遺産の保存と活用について、各種の調査及び関係する専門家を招いた研究会を開催した。今後の修復材料の開発、修復技法の開発に関する重要な成果を得る事が出来た。また、現地調査や研究会を通じて近代文化遺産の重要性を多くの方々に認識いただいた。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	第二年次として、継続している現地調査から重要な調査結果を収集することが出来、また、研究会を通じて多くの研究者との連携も可能となり、今後の研究を進める上で、重要な成果を得た。次年度以降も今年度の成果を元にさらに調査研究を発展させることが可能となった。

（様式１）　　No.　２０４１

業務実績書

中期計画の項目（Ⅰ４（4））	高松塚古墳、キトラ古墳の保存対策事業など、我が国の文化保護政策上、重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施する。

【事業名称】	文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力（Ⅰ４（4））

【事業概要】
キトラ古墳：石室内の環境調査と壁画の取り外し作業を実施
高松塚古墳：石室解体のための発掘と環境・生物および壁画の養生・修理に関する調査・研究を実施

【担当部課】	副所長・保存修復科学センター（東文研） 都城発掘調査部（飛鳥藤原地区）、埋蔵文化財センター、文化遺産部（奈文研）	【事業責任者】	副所長　三浦定俊（東文研） 副所長　巽淳一郎（奈文研）

【スタッフ】
石﨑武志、佐野千絵、木川りか、吉田直人、犬塚将英、間渕創、川野辺渉、北野信彦、森井順之、加藤雅人（以上、東文研）
松村恵司、廣瀬覚、内田和伸、井上直夫、中村一郎、豊島直博、岡田愛、加藤雅士、石田由紀子、玉田芳英、村上隆、高橋克壽、肥塚隆保、高妻洋成、降幡順子、脇谷草一郎、高瀬要一（以上、奈文研）
宮原晋一（奈良県教育委員会）、岡林孝作（奈良県立橿原考古学研究所）、相原嘉之、長谷川透（明日香村教育委員会）、花谷浩（出雲市教育委員会）高橋克壽（花園大学）片山一道（京都大学大学院理学研究科）

【年度実績概要】

キトラ古墳

平成 19 年度は東西壁の無地部分の剥ぎ取りをワイヤソー、バンドソーにて行った。天井は無地部分、朱線部分、星宿部分の劣化が著しい箇所を優先的にヘラによる剥ぎ取りを行った。平成 20 年１月には日像の剥ぎ取りを行った。

環境ステーションによる保存施設内外の環境データ計測を継続して行った。また保存施設内では浮遊菌調査を約２回／月で実施し菌種と汚染状況を把握し、施設の清浄化を監視した。

この他、発掘調査報告書の編集、刊行を行った。これは平成 14 年度から 16 年度の３ヶ年に渡る調査の正式報告書であり、遺構、遺物の記載をはじめ、関連調査として金属製品や人骨、漆喰、石材等の分析を行い、キトラ古墳について総合的な考察を加えたものである。また、壁画についてはフォトマップを提示した。

高松塚古墳

平成 19 年度は４月初めから石室解体が始まったが、石室が不安定であったために支保工の設置など万全の対策を講じながら、解体作業と並行して石室細部の調査を行った。その結果、石材接合部に厚く塗られた目地漆喰や小口部の合欠、天井石と南北壁石の側面に穿たれた梃子穴、床石面の水平を出すために使用されたと思われる水準杭の痕跡などが見つかった。また、最終的に床石下の版築や地山面の状況を確認し、古墳構築過程の全容を解明する上で重要な成果を得た。

外気の温度、湿度変動の影響を受けて壁画に結露や乾燥の問題が生じる事を防ぐため、石室上部に内部断熱覆屋および空調設備を設置した。内部断熱覆屋内の設定温湿度は、壁画のある石材の取上が終了する６月 26 日までは、10℃、90%に設定したが、その後状況に応じて温湿度を変えた。８月 21 日に床石の取り上げが完了したので、９月７日に内部断熱覆屋内の空調を止めた。

石室解体作業に際して、現地にて壁画の養生作業を行った。搬入された壁画に対しては経過観察を行い、修理に必要な損傷図面の作成を順次始めた。また漆喰面を広く覆っている黒いかび及びバイオフィルムによる汚れの除去方法の開発評価を行った。

解体に際して予め取り外した遊離石材を含浸強化し、破片同士の接合および整形処置を行なった。また、いくつかの石材には石材を破断する大きな亀裂を有するものもあり、ワイヤーとターンバックルおよびコーナー部の保護金具などを用いた実験をおこない、保護拘束具を試作した。

石室解体・搬出作業開始に伴い、微生物による汚染の状態や分布を正確に把握するため、試料のサンプリングを行い、重要度の高い試料から順次直接顕微鏡観察、微生物分離・同定作業などを進めた。微生物分離・同定作業は現在まだ進行中であるが、菌類の詳細な同定結果により、その由来や生理的性状などについて推定する際に有効な情報が得られつつある。

【実績値】
キトラ古墳：論文数１編①
高松塚古墳：論文数２編②～③

【備考】
①佐野千絵、犬塚将英、間渕創、木川りか、吉田直人、森井順之、加藤雅人、降幡順子、石﨑武志、三浦定俊：キトラ古墳保護覆屋内の環境について(3)－カビ点検報告記録の解析－、保存科学、47 号、135-172（2008）
②松村恵司：石室解体修理事業に伴う発掘調査、月刊文化財、532 号、16-21（2008）
③高松塚古墳石室解体時の壁画保存のための温湿度環境の制御（小椋大輔、犬塚将英、鉾井修一、石崎武志、北原博幸、多羅間次郎）、保存科学、47 号、1-10（2008）

（様式２）

自己点検評価調書

№.　２０４１

１．定性的評価

観点	適時性	発展性	正確性			
判定	A	A	A			
備考						

２．定量的評価

観点	援助・助言実施件数					
判定	A					
備考						

３．実績の総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	キトラ古墳、高松塚古墳ともに、今後、古墳壁画の保存を進めていく上で重要な資料を得た。

４．当年度における中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	高い調査研究の水準で事業を進めることができた。

（様式１）　　No.　２０４２

業務実績書

中期計画の項目 （Ⅰ４（4））	高松塚古墳、キトラ古墳の保存対策事業など、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施する。

【事業名称】	外部機関の要請に基づく文化財の保存修復に関する実践的研究　（Ⅰ４（4））

【事業概要】
国や地方公共団体の要請に応じて、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急性の高い文化財の保存・修復に係る実践的な調査及び研究を実施する。

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長　肥塚隆保

【スタッフ】
高妻洋成、降幡順子、脇谷草一郎（企画情報部）、岡村道雄（企画情報部）

【年度実績概要】
奈良県黒塚古墳より出土した鉄製品（東棺外鉄製品一括）の保存修理にともなう事前調査ならびに保存修理を実施し、報告書を作成した。
秋田県漆下遺跡より出土した漆関連遺物について、X線 CT による撮影、FT-IR 分析、X線透過撮影をおこない、縄文時代の漆工芸技術に関する情報を収集し、年次報告書を作成した。
群馬県万蔵寺廻り遺跡より出土した炭化糸に対して、X線 CT による撮影、FT-IR 分析、X線透過撮影、顕微鏡観察をおこない、糸巻きの構造および糸に関する考古学的な情報を収集し、報告書を作成した。
長野県社宮司遺跡より出土した六角木幢の保存処理を継続し、年次報告書を作成した。
大分県日田市のガランドヤ古墳の保存整備事業にともない、古墳周囲の環境および石室内の環境を調査するために、気象観測ステーションを設置し、気象観測を開始した。また、石室周囲の土中の水分状態等を調査するため、比抵抗映像法による測定をおこない、保存処置に関する重要な情報を提示した。

【実績値】
報告書数：　5 件　（①～⑤）
調査・処理点数：22 点（重要文化財黒塚古墳出土鉄製品の事前調査と保存修理：東棺外鉄製品一括 1 点、漆下遺跡漆関連遺物の調査：20 点、万蔵寺廻り遺跡出土炭化糸の調査：1 点）

【備考】
① 重要文化財奈良県黒塚古墳出土品事前調査ならびに保存修理報告書
② 秋田県漆下遺跡出土漆関連遺物分析調査年次報告書
③ 群馬県万蔵寺廻り遺跡出土炭化繊維遺物の分析調査年次報告書
④ 長野県千曲市社宮司遺跡出土の六角木幢保存修復委託事業年次報告書
⑤ 史跡ガランドヤ古墳の保存整備に伴う環境調査報告書

（様式２）

自己点検評価調書

№.　２０４２

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	S	S	S	S	S	
備考						

２．定量的評価

観点						
判定						
備考						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
S	受託期間内において、本年度の計画を予定どおり遂行し、良好な成果を挙げることができたことから、総合的評価として S と判定した。継続事業については、今後、計画どおりに遂行する予定である。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	受託期間内において、本年度の計画を予定どおり遂行したことから、当事業は順調であると判定した。継続事業については、今後、計画どおりに遂行する予定である。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2101

（様式１）

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ⅲ収蔵品の調査研究、特別調査、特別展・海外展の事前調査の実施 １）特別調査法隆寺献納宝物（第 29 次）「聖徳太子絵伝」第 3 回

【事業概要】
聖徳太子の事績を描いた日本最古の遺品である「聖徳太子絵伝」（もと法隆寺絵殿の障子絵）の制作について、本紙（立涌文綾）、彩色など、彩作当初（1069 年）の姿がどのようなものであったかを、肉眼観察および科学的な分析によって調査研究する。科学研究費補助金（基盤研究 A）による「法隆寺献納宝物聖徳太子絵伝の調査研究」とリンクさせる。

【担当部課】	文化財部	【事業責任者】	上席研究員　松原　茂

【スタッフ】
島谷弘幸（文化財部長）、松原茂（上席研究員）、原田一敏（上席研究員）、澤田むつ代（上席研究員）、田沢裕賀（列品課列品室主任研究員）、救仁郷秀明（事業企画課特別展室長）、松嶋雅人（展示課平常展室主任研究員）、行徳真一郎（保存修復課保存修復室主任研究員）、沖松健次郎（事業企画課出版企画室主任研究員）、小山弓弦葉（展示課平常展室研究員）、神庭信幸（保存修復課長）、和田浩（保存修復課環境保存室研究員）、小林達郎（文化庁文化財部美術学芸課文化財調査官）、若杉準治（京都国立博物館学芸課列品管理室長）、谷口耕生（奈良国立博物館学芸課保存修理指導室研究員）、中野照男（東京文化財研究所企画情報部長）、村重寧（早稲田大学文学学術院教授）、東野治之（奈良大学文学部教授）、三浦定俊（東京文化財研究所副所長）、早川泰弘（東京文化財研究所保存修復科学センター分析科学研究室長）

【年度実績概要】
５年計画の第３年目。10 面のうち第５面と第６面について、外部の研究者も交え、絵画および染織の専門家が肉眼および拡大写真による入念な調査を行い、まず現状の図様が聖徳太子の事蹟のどの場面をどのように表しているのかを検討し、内容を特定した。その成果を、10 月 29 日より公開したミュージアムシアターのコンテンツ「聖徳太子絵伝」に反映した。また、第１年度に調査した第 1･2 面について、図様の紹介と内容の検討を詳細に示した概報を公刊した。科研の補助金により、第１面から第６面までの各面を 32 分割（レンズの収差を補正するため、実際は各面 153 カット）で撮影した高精彩デジタル画像を連結して６面分の大画像を製作した。18 年度までにデジタル化した X 線写真を同様に連結し、第 1～10 各面の大画像を製作した。

【実績値】
調査および検討会　　５回（内４回は科研費による）
収集資料点数　　デジタル高精細画像　924 点　（科研費による）
　　デジタル高精細連結大画像　６点　（科研費による）
　　デジタル X 線連結大画像　　６点　（科研費による）
　　4×5 スチール写真画像　　50 点　（科研費による）
調査概報の刊行　　１冊

聖徳太子絵伝第 5.6 面

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2101

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考

「法隆寺献納宝物聖徳太子絵伝」の調査研究の成果として、17 年度に調査した第 1,2 面の調査概報を刊行する作業の中で、調査方針の再検討とその方法を確立し、それにしたがって調査を進めることができた。科学研究費補助金によって、外部研究者の補充ができ、調査研究の正確性が増した。

２．定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報			
判定	A	A	A			

備考

科学研究費補助金を活用して、調査検討会を 6 回開催し、充実した調査および内容の検討ができた。また、デジタルによる新規撮影が順調に進んだ。さらに、昭和 40 年代に分割撮影した X 線写真（17～18 年度にデジタル化）を連結し、デジタル撮影の全図と対照できるようにした（一部 20 年度に継続）。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	法隆寺献納宝物の「聖徳太子絵伝」は、美術史上重要な作品であるにもかかわらず、従来、10 面からなる特大画面の詳細な図版が公刊されていなかった。19 年度から始まった概報公刊が寄与するところは大きい。顔料分析に充分な時間が割けなかったのが今後の課題である。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	5 年計画の中で、調査研究は順調に進んでいる。概報の公刊が 2 年ずつずれるのは当初からの予定である。今後もこのペースを維持しつつ、さらに顔料分析など科学的な調査の充実をはかりたい。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2102

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ⅲ収蔵品の調査研究、特別調査、特別展、海外展の事前調査の実施 ２）特別調査「書跡」第 4 回（17 年度写経 1 回、18 年度写経 2 回実施）

【事業概要】

東京国立博物館における文化財の中の書跡の特別調査。17 年度、18 年度の写経に続き、19 年度は古文書の特別調査を東京・京都・奈良の国立博物館と文化庁の書跡担当者が共同して実施し、今後の展示や研究の進展の向上に結びつけることを目的とする。

【担当部課】	文化財部	【事業責任者】	文化財部長　島谷　弘幸

【スタッフ】

東京国立博物館：島谷弘幸（文化財部長）　、松原茂（上席研究員）、高橋裕次（情報課長）、田良島哲（情報課情報管理室長）、富田　淳（列品課列品室長）、丸山　猶計（事業企画課特別展室研究員）、高梨真行（列品課列品室研究員）
京都国立博物館：赤尾栄慶（学芸課企画室長）、羽田　聡（学芸課企画室研究員）
奈良国立博物館：湯山賢一（館長）、西山　厚（学芸課教育室長）、野尻　忠（学芸課情報サービス室研究員）
九州国立博物館：藤田励夫（博物館科学課保存修復室長）、東　昇（文化財課資料管理室研究員）
文化庁：池田　寿（文化財部美術学芸課主任文化財調査官）、横内　裕人（同文化財調査官）

【年度実績概要】

東京国立博物館所蔵の書跡作品から古文書 22 件の調査を実施した。各文書の形状、奥書、書写年代、紙質などを調査。

【調査作品実績】

B-1253 土佐家文書　10 巻
B-1721 諸寺院文書　2 巻
B-1755 古文書　2 巻
B-1773 里見家伝来文書　1 巻
B-1799 古文書　20 通
B-1943 豊臣秀吉宛行書　1 巻
B-2060 香宗我部文書　6 巻
B-1861～1875 白河結城家旧蔵文書　計 15 通
計　列品 22 件　57 点　古文書総数　約 300 通

B-2060 香宗我部文書 6 巻 の内の第 3 巻「将軍足利義昭御内書」

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2102

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	B	A	B	A	

備考

すでに、４回を数えているが、法人化以前においては、企画されなかった共同調査である。調査時代については、個々の機関、あるいは個人において進められていたものであるが、個人や機関で得た知見を共有することによって、研究のいっそうの進展が見込まれる。

２．定量的評価

観点	調査作品数					
判定	A					

備考

【調査作品実績】に掲げたように、年度計画に策定することで、計画的に B-1253 土佐家文書　10 巻、B-1721 諸寺院文書　2 巻、 B-1755 古文書　2 巻 、B-2060 香宗我部文書　6 巻など都合 22 件で、古文書総数約 300 通におよぶ調査が出来た。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化庁ならびに国立博物館の専門研究者が一堂に集まり、調査を行い、新知見も得られた。各機関の研究者が集まることで、最新の研究結果を反映させた知見を共有でき、今後の研究および陳列に寄与する点が多い。20 年度以降も継続する。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業は、その進捗度、従来の水準を維持しつつ 17 年度、18 年度に引き続き比較的堅調に実現できたと考える。 調査研究については、今後もこのペースを維持しつつ、目録作成やデータベースの公開や展示に力を注ぎたい。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2103

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ⅲ 収蔵品の調査研究、特別調査、特別展・海外展の事前調査の実施 ３）特別調査金地屏風の金箔地についての調査研究―尾形光琳風神雷神屏風を中心に

【事業概要】

尾形光琳の「紅白梅図屏風」(MOA 美術館蔵) の金地が金箔ではなく、金泥によるものだという調査結果が注目されている。これをうけて、当館が収蔵する光琳の「風神雷神図屏風」をはじめ、各派各時代の金地屏風を、同条件の下で調査し、金地についての客観性のあるデータを蓄積することを目的とする。

【担当部課】	文化財部	【事業責任者】	上席研究員　松原　茂

【スタッフ】

松原茂（上席研究員)、田沢裕賀（列品課列品室主任研究員)、救仁郷秀明（事業企画課特別展室長)、松嶋雅人（展示課平常展室主任研究員)、和田浩（保存修復課環境保存室研究員）

【年度実績概要】

偏りのないデータを収集するために、調査対象とすべき金地屏風を選定し、18 年度に試験的な調査を試み、19 年度は本格的な調査に入る予定であったが、一部科学分析のサンプル調査を行った結果、より客観性のあるデータを蓄積するため、18 年度に引き続き、調査対象とすべき金地屏風の選定見直しと、データの評価の方法論について検討を行った。

【実績値】

風神雷神図屏風　尾形光琳筆

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2103

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	B	A	B	C	

備考

本調査は、現在注目されている金地作品の箔使用に関する調査で、多くのサンプルからデータを集めることで、各時代のさまざまな流派の絵画制作上の特徴をより客観的に研究する基礎調査としてきわめて重要なものである。19 年度は、作品の選定、サンプルの収集法など、調査方法について統一的かつ組織的な調査体制を組むことが出来なかった。

２．定量的評価

観点	調査作品数					
判定	C					

備考

他の業務との組織的調整がうまくいかず、計画的に調査を組むことが出来なかった。そのため、客観的なサンプリング調査となるような量のデータを集めるにいたらなかった。20 年度には、他業務との調整を図り、十分な作業時間を確保することで、調査を計画的に実施したい。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	各派・各時代の屏風のサンプルを均等に集めるための作品選定および、どこに客観性の基準を設定するかの方法論の確立に時間を費やしている。20 年度は、再度方法論を確立しつつ、計画的な調査を行い、実績を上げたい。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	予定の作業が充分にこなせず、成果が出せなかった。担当者がそれぞれ大きな展覧会準備にかかわっており、時間的な余裕がなかったことも事業の進展に支障をきたしている。業務を整理し、時間を有効に活用できるよう、綿密な計画を立てる必要がある。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2104

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ｖ修復文化財に関する調査研究 ４）応挙館障壁画の復元に関する調査研究

【事業概要】
大日本印刷株式会社の特別協力を得て、応挙館の一の間、二の間の障壁画をすべて、デジタル画像処理によって複製するための調査研究を行い、その成果として複製を完成させ、応挙館の室内空間を復元することによって、一般に公開する。
とりはずした障壁画については、必要な修理を行い、随時、平常展において一般公開する予定である。

【担当部課】	文化財部	【事業責任者】	上席研究員　松原　茂

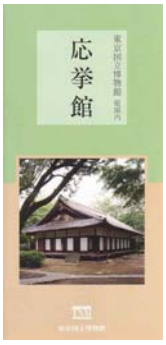
【スタッフ】
神庭信幸（保存修復課長）、田沢裕賀（列品課列品室主任研究員）、救仁郷秀明（事業企画課特別展室長）、松嶋雅人（展示課平常展室主任研究員）、須賀信介（研究支援者・経理課係長（設備担当））

【年度実績概要】
大日本印刷株式会社の特別協力を得て、応挙館の一の間、二の間の障壁画をすべて、デジタル画像処理によって複製するための調査研究を行い、その成果として全画面の複製を完成させた。これによって応挙館の室内空間が復元されることによって、一般に公開することが可能となった。
複製画製作にあたり行った調査研究の成果をパンフレットにまとめ、来館者に供することができた。
とりはずした障壁画については、必要な修理を行い、随時、平常展において一般公開するため、適切な修理方法を調査検討した。

【実績値】
複製画　水墨画 50 枚
デジタル撮影のための応急修理　水墨画 2 枚
応挙館紹介パンフレット　30,000 枚

複製画

応急修理



パンフレット

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2104

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考

高度な複製技術により、文化財保存の観点から全体像を把握することが困難であった応挙館の室内空間の本来の絵画表現を考察することができることとなった。この調査研究により、建築物に付随する障壁画の保存と公開について、汎用できる方法論とデータを得ることができた。

２．定量的評価

観点	複製数	応急修理件数	パンフレット配布数			
判定	A	B	A			

備考

応挙館の室内全体が原画の調査研究をもとに、緻密に校正を経た 50 枚の複製画によって復元されたことで、応挙館を一般に公開することが容易となった。また参考資料（パンフレット）を作製したことで、一般の観覧者が、室内空間の全体像をより的確に把握することが可能となった。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査研究を重ねたことにより、すべての障壁画の複製画を完成し、応挙館室内の復元が完成したことで、当初の室内の画面構成を一望することが可能となった。このことにより、今後の複製画製作の重要な指針を得ることができた。 さらに、とりはずした障壁画の修理実施の方針を立てる上で、重要な参考資料とすることができる。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業によって、複製画が完成し、応挙館室内の復元が完成した。 今後は、とりはずした障壁画の修理実施のため、適切な修理方法を決定するため、調査研究をさらに進めていく。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2105

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管のための調査研究の実施 ⅲ収蔵品の調査研究、特別調査、特別展・海外展の事前調査の実施 ５）館蔵の漢籍・洋書に関する基礎的研究

【事業概要】

東京国立博物館が所蔵する漢籍・洋書に関する書誌学的調査である。これらは、博物館草創期の明治時代初期に、文部省より引き継いだ江戸幕府旧蔵資料を中心とする資料群よりなっている。また洋書にはドイツ人医師シーボルトより献納された数百冊を含んでいる。詳細調査を実施し、その学術的意義を明らかにする。

【担当部課】		【事業責任者】	情報課長　高橋　裕次

【スタッフ】

田良島　哲（情報課情報管理室長)、松田　清（当館客員研究員・京都大学大学院人間・環境学研究科教授)

【年度実績概要】

19 年度は、東京国立博物館の所蔵する洋書のうち、シーボルト献納本など、江戸時代の蘭学研究上に重要なオランダ関係の洋書に焦点をしぼって、その詳細調査を行った。これによって得られた書誌情報をもとに、その学術的意義を明らかにした。研究成果は、20 年度に東京国立博物館研究誌『MUSEUM』にて報告予定である。

【実績値】

調査件数　約 95 件、調書作成点数　95 点、写真撮影点数　40 点、データ入力点数　95 点、
報告書作成件数　85 件

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2105

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考

本調査は江戸幕府旧蔵資料の総合的研究と並行して行っており、シーボルト献納本などについて、洋書としての位置づけがより明確になったことが大きな成果である。今後は、イギリス、フランス、ロシアなどの洋書について、引き続き、詳細調査を実施する予定である。

２．定量的評価

観点	調査件数	調書作成点数	写真撮影点数	データ入力点数	報告書作成	
判定	A	A	B	A	A	

備考

明治初期以来、博物館に収蔵されるにいたった洋書のうち、オランダ関係の資料、とくにシーボルト献納本について、詳細調査を行い、合計約 100 点の書誌データを収集し、1 点ごとの写真撮影（部分）を実施した。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	シーボルトが献納した洋書のうち、オランダ関係について、その全貌を把握することができた。今後は、イギリス、フランス、ロシアなどの洋書について、引き続き、詳細調査を実施する予定である。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	これまで東京国立博物館の所蔵する漢籍・洋書については、悉皆調査が行われたことがなく、その存在はあまり知られていなかった。本研究では、帝室博物館の時代に所蔵していた漢籍・洋書のまとまりとしての意義を重視している。調査では、漢籍・洋書の全体のリストを作成し、将来的には、画像データベースを情報アーカイブで公開することを目標としたい。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2106

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管のための調査研究の実施 ⅲ収蔵品の調査研究、特別調査、特別展・海外展の事前調査の実施 ６）館蔵博物図譜の調査研究（研究成果公開促進費補助金）

【事業概要】

当館が所蔵する江戸時代末から明治時代前期頃に制作された 70 件 400 冊の博物図譜の画像をデータベース化するものである。

【担当部課】	東京国立博物館所蔵博物図譜データベース作成委員会	【事業責任者】	情報課長　高橋　裕次

【スタッフ】

丸山士郎（列品課主任研究員）

【年度実績概要】

東京国立博物館所蔵の博物図譜資料のうち、『植物集説』61 冊、『随観写真』10 冊、『四季草木図譜』35 冊、『阿波産志』57 冊、『成形図説』20 冊、『産物図』105 枚など 49 件について、デジタル画像化、資料中の注記・留書きのテキスト化を行った。なお、これまでの科研の補助金による研究の成果は、東博のウェブ上で情報アーカイブにて公開中である。

【実績値】

調査件数　71 件、作品点数　30,400 点、写真撮影点数　30,400 点、データ入力点数　30,400 点、公開件数　30,400 件

なお、本館 16 室において 2007 年 7 月 3 日(火)～8 月 26 日(日)の期間に下記の展覧会を実施した。

歴史を伝えるシリーズ　特集陳列「博物図譜－ものの真の姿を探る－」　展示作品　計 25 件

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2106

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考

検索は各頁に描かれた図の名称のみならず、産地、日付、方言、画家等の注記についても検索可能としたため、多岐にわたる研究資料として活用できる。さらに、大英博物館やライデン国立民族博物館などの、海外にある同様の図譜との比較研究を可能にするデータベースにすることを目標としている。

２．定量的評価

観点	調査件数	調書作成点数	写真撮影点数	データ入力点数	公開件数	
判定	A	A	A	A	A	

備考

これまでに岩崎灌園『本草図譜』78 冊、『本草図説』50 冊、関根雲停『博物館禽譜』3 帖、服部雪斎『農作物・果樹類図』、中島仰山『博物館写生図』、『博物館獣譜』2 冊、『博物館虫譜』5 冊、『田中房種博物図譜資料』、武蔵石壽『目八譜』、堀田正敦編『禽譜』、『鳩小禽等図』、関根雲亭『魚譜』、『緑猗軒動物図』、『博物館動物図譜』、馬場仲達『蟲譜』･『貝譜』･『舶上画譜』などをデータベース化しており、日本でも有数の博物図譜データベースとなっている。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本データベースは、博物館の情報アーカイブで公開している。月ごとの利用者は 50～100 人前後で、検索実行回数は月に 5000 回ほどに及んでおり、その内容は、学術振興会の実地検査においても、高い評価を得ている。今後は、展覧会において、小中学生などの見学者が増加しているのを反映して、より使いやすいデータベースへの改良を図る方針である。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業の内容は、高い水準を維持しており、比較的堅調に実現できたと考える。20 年度以降は、博物図譜資料のうち、江戸時代の狩野派の絵師による動植物画をはじめ、内国博覧会関係資料や、シーボルト献納本をはじめとする西洋の博物図譜についても対象に加えていく予定である。今後もこのペースを維持しつつ、目録作成やデータベースの公開に力を注ぎたい。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2107

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ⅱ日本及び東洋全般にわたる文化財の調査研究 ７）日本における木彫像の樹種と用材観に関する調査研究（科学研究費補助金）

【事業概要】

日本に現存する仏像、神像等の木彫像の樹種について調査研究し、今後の日本の文化、歴史の理解を深めることを目的として実施する。

【担当部課】	文化財部	【事業責任者】	特任研究員　金子啓明

【スタッフ】

東京国立博物館：浅見龍介（事業企画課出版企画室長）、丸山士郎（列品課列品室主任研究員）、和田浩（保存修復課環境保存室研究員）

森林総合研究所：能城修一（木材特性研究領域樹種識別担当チーム長）、藤井智之（多摩森林科学長）

【年度実績概要】

日本の木彫像を所蔵する各地の寺院、神社等に赴き実地調査した。19 年度は特に広島県、南九州の神社等に保管の神像を中心に調査研究し、併せて関連の仏像についても調査した。調査により美術史的基礎データ、写真データ、樹種の科学的識別のための木片資料の収集を実施した。

【実績値】

調査作品件数
　全 59 件
　　神像 42 件　仏像 17 件
写真データ　690 点、
木片資料　　84 点

野原八幡宮(熊本)僧形八幡坐像

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2107

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	B	A	

備考
神像彫刻は非公開のものが多く、調査の許可を得るまでに時間がかかるため、調査日程に非効率なところがある。さらに、早い段階での所蔵者との交渉が必要である。

２．定量的評価

観点	調査作品件数	写真データ	木片資料			
判定	A	A	A			

備考
神像彫刻は非公開のものが多く、神像調査の 42 件は異例の数字といえる。また、各像について詳細な写真データと、木片資料が得られた。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	神像彫刻については所蔵者が非公開とする作例が多く、美術史的調査が充分には行き届いていない。また、樹種の科学的識別についてはほとんど実施されていない状況にある。今回は地域を限定し、地元研究者との連携を深めることにより、これまで調査が充分でない作品について実地調査し、木片資料を得ることが可能となった。ただし、資料の科学的な樹種識別検査については、時間的制約もあって 20 年度の課題とすることとなった。20 年度では樹種同定の成果を出すことが必要である。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	実地調査については調査対象、方法、協力体勢を調整することで、従来困難であった神像彫刻等の調査について成果をあげることができた。20 年度もこのペースを維持しつつ、樹種識別の成果を確実に出すことに力を注ぎたい。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2108

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管のための調査研究の実施 ⅱ日本及び東洋全般にわたる文化財の調査研究 ８）江戸幕府旧蔵資料の総合的研究（科学研究費補助金）

【事業概要】

江戸幕府旧蔵資料のうち、教育機関である紅葉山御文庫、昌平坂学問所、医学館、和学講談所、開成所などに収蔵されていた 1 万 2 千余部、15 万冊におよぶ図書、美術品、歴史資料等の総合的研究である。

現在、国立公文書館、宮内庁、国会図書館、東京大学、東京国立博物館などに分蔵されている資料群について、リストを作成し、これらの資料の成立、伝来、相互の関連など、その全貌を明らかにする。

【担当部課】	情報課	【事業責任者】	情報課長　高橋裕次

【スタッフ】

丸山　士郎（列品課列品室主任研究員）、小宮 木代良（東京大学史料編纂所助教授）、佐々木　利和（国立民族学博物館先端人類科学研究部教授）

【年度実績概要】

本研究で得られた所在情報と資料群ごとの詳細調査をもとに、江戸幕府旧蔵資料全体における形成過程，伝来，資料の相互の関連を解明し、分散に至る以前の状況について復原考察を行った。また全貌を明らかにすることで、江戸幕府旧蔵資料における学術的・歴史的価値を明確にした。19 年度の報告書を刊行した。

【実績値】

調査件数　約 130,000 件、調書作成点数　約 130,000 点、写真撮影点数　約 3,000 件、
データ入力点数　約 120,000 点、報告書作成件数　約 120,000 件、収集資料点数　約 120,000 点
論文掲載数　高橋裕次「帝室博物館蔵書の変遷と、森鴎外の『発見』について」(『MUSEUM』610 号、平成 19 年 10 月）所載　1 篇

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2108

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考

これまで江戸幕府旧蔵資料の研究については、各所蔵機関や小規模な資料群単位での目録刊行、調査・研究、公開にとどまっているのが現状である。本研究は、資料群の成立、伝来、相互の関連などを検討し、その全貌を明らかにする総合的な研究として行うものである。

２．定量的評価

観点	調査件数	調書作成点数	写真撮影点数	データ入力点数	報告書作成	収集資料点数	論文掲載数
判定	A	A	B	A	A	A	A

備考

明治初期に博物館が所蔵していた幕府旧蔵資料を含む約 15 万点の調査であり、厖大な資料のため、すべての撮影には及んでいない。但し、『博物館書目』など基礎資料については、そのほとんどについて撮影を行った。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	江戸幕府旧蔵の書物類の調査に関して、質量ともに成果を上げることができた。今後は、書物以外の江戸幕府旧蔵資料と、関連する資料も調査対象に加え、実物の比較や分析など、総合的に研究することで、江戸幕府旧蔵資料から、学術資料のあり方など江戸幕府の新たな側面を明らかにしていく必要がある。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究は、これまでまとまったかたちでは知られていない、江戸幕府が旧蔵していた資料の全体像を明らかにすることを目的としている。そのデータを公開することは、江戸幕府研究のみならず、日本の近世・近代史、美術史、建築史など諸分野に対して貢献することになる。その重要性を考え、将来的には、江戸幕府旧蔵資料の詳細なデータを情報アーカイブで公開することを目標としたい。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2109

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（5）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ⅱ日本及び東洋全般にわたる文化財の調査研究 9）日本古代手工業史における埴輪生産構造の変遷と技術移転から見た古墳時代政治史の研究（科学研究費補助金）

【事業概要】

東京国立博物館および日本各地における古墳時代中期の古墳出土埴輪群の調査・研究を実施し、今後の博物館所蔵埴輪資料の編年的および技術的系譜に関する位置づけの向上に寄与することを目的とした。

【担当部課】	保存修復課	【事業責任者】	保存修復課保存修復室長　古谷　毅

【スタッフ】

犬木努(大阪大谷大学 文学部准教授)

【年度実績概要】

19 年度は最終年度として、九州・東海・中部・関東地方の主要古墳を調査した。

対象資料は、大分県・広島県・三重県・岐阜県・静岡県・群馬県などの古墳時代前期末頃から中期中葉の典型例の調査を実施し、資料収集を行った。ほかに、古墳時代中期の基準資料である東京国立博物館所蔵の群馬県赤堀茶臼山古墳出土埴輪の整理および調査・分析を進めた。

また、研究課題・調査研究方法を明確化・向上させるために、19 年 4・8 月と 20 年 3 月に岐阜県大垣市・大分県大分市・三重県松阪市において、日本古代史研究者を交えて研究会を行った。

このほか、これまでに収集した調書・写真・実測図などの資料の比較・検討も進めた。

【実績値】

・調査回数　6 回　・調査件数　600 件

・研究会発表件数「古墳時代中期における埴輪群の構成と生産」　1 回

・論文掲載数　「弥生･古墳時代における手工業生産の展開と特質」1 篇

・収集資料点数　埴輪資料：調書作成資料点数　約 600 点

写真撮影資料点数　約 800 点(1,620 カット)

【備考】

・東広島市教育委員会『第 12 回 安芸の国まほろばフォーラム資料集』2007 年 12 月、掲載

・國學院大學文学部　『平成 19 年度國學院大學文学部共同研究シンポジウム　生産と権力、職掌と身分-社会層形成の歴史学研究　発表要旨集』2008 年 2 月、掲載

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2109

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考

近年、史跡整備等の大規模発掘調査が増加したが整備優先の事業が多く、出土埴輪群の構成・技術的系譜等に関する調査例は少ない。このような資料を悉皆的に調査・記録し、客観的に比較・検討することで技術的構成・系譜が明らかになり、博物館資料等の断片的な発掘調査による埴輪群の技術的位置づけが可能となる。また、既調査資料の研究・活用範囲を拡大することが出来る。

２．定量的評価

観点	調査回数	調査件数	研究会発表件数	論文掲載数	収集資料点数	
判定	A	A	C	B	A	

備考

19 年度、また、調査回数・調査件数・収集資料数も効率的に実施し、成果を上げることが出来たが、論文等の発表はやや低調に終わった。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	評価判定の理由は、18 年度までの進捗・精度に改良・改善を加えながら、今年度計画に反映させ、資料分類・調査項目等の調査回数・精度や調書・写真撮影方法などの改善を実施したことが挙げられる。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業は、18 年度までの進捗・精度水準から向上しながら、堅調に実現できたと考える。 しかし、研究成果公開については、19 年度は科学研究費補助金最終年度で研究成果報告書を刊行・公開したが、今後は論文等の発表機会を増やすとともに、データベース化や成果のさらなる普及・公開に努めたい。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2110

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管のための調査研究の実施 ⅱ日本及び東洋全般にわたる文化財の調査研究 10）東アジアの書道史における料紙と書風に関する基礎的研究（科学研究費補助金）

【事業概要】

国内外に所蔵される東アジアの書道史に関わる作品について、１点ごとに詳細な書誌や伝来などの情報と、デジタル画像を収集する。さらに、科学機器を用いて、料紙の技法、変遷、使用法を実証するとともに、時代による書風の特徴やその変化などを調査研究する。また、作品の修理にともなうカルテなどの情報から、さらに詳しい分析を行う。これらによって、書の作品の存在意義を、料紙と書風という二つの側面から科学的に解明し、料紙と書風の相関関係をも考察する。

【担当部課】	文化財部	【事業責任者】	文化財部長　島谷　弘幸

【スタッフ】
東京国立博物館：島谷弘幸（文化財部長）、松原茂（上席研究所）、神庭信幸（保存修復課長）、高橋裕次（情報課長）、富田淳（列品課列品室長）、和田浩（保存修復課環境保存室研究員）、丸山猶計（事業企画課特別展室研究員）
京都国立博物館：赤尾栄慶（学芸課企画室長）

【年度実績概要】

東京国立博物館・陽明文庫・泉屋博古館などに収蔵されている作品で、装飾料紙を用いた写経・古筆・典籍を中心に、一部古文書なども含め、展示履歴などによって把握できる情報をもとに、調査対象となる作品のリスト作成と調査対象の絞り込みを行った。19 年度の主な調査対象は、写経と古筆であり、作成したリストをもとにデジタル写真撮影と、作品の筆跡および料紙に関する基礎調査を実施した。また、入木道関係の古文献資料のデジタル化を行った。

【実績値】
研究会など発表件数
・島谷弘幸　「文化財の保存と活用―料紙を中心として―」国宝修理装潢師連盟定期研修会
・島谷弘幸　「爛熟期のかなの展開」　現代書道研究所於オリンピック記念青少年センター
・陽明文庫創立 70 周年記念　特別展「宮廷のみやびー近衛家 1000 年の名宝ー」関連講座　計 10 回
論文掲載数　「宮廷のみやび」展の図録に掲載した料紙関係論文　計 3 件
調査件数　50 件、調書作成点数　35 点、写真撮影点数　150 点、データ入力点数　300 点、
文献資料のデジタル化　10 件

泉屋博古館調査風景

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2110

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	B	A	

備考
展覧会において多数の作品が館内に集まっているときに、調査が実施できると効率が良いが、展覧会の会期中は、作品のほとんどが展示されており、また調査を行う時間を確保するのが困難であるのが現状である。

２．定量的評価

観点	調査件数	調書作成点数	写真撮影点数	データ入力点数	資料のデジタル化	研究会等の発表件数	論文掲載数
判定	A	A	A	A	A	A	A

備考
調査対象となる博物館には書跡関係資料が大量にまとまっているため、調査の時間が確保できれば、より充実した内容の調査が可能である。さらに、図版目録などの作成を念頭においた詳細な調査を進めていきたい。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	東アジアの書道史に関わる膨大な資料を有する博物館の特徴を生かした調査を実施している。光学顕微鏡などの科学機器を用いた客観的なデータを広く収集して、調査の内容をさらに充実したものにすると同時に、その成果を特集陳列などで公開していく方針である。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	今後は、東博内や国内にとどまらず、中国、韓国など、これまでの東博の国際交流の実績を反映して、海外においても、東アジアの書道史に関わる資料の調査を継続的に行っていく必要がある。また、国際シンポジウムなどを開催することを目標に、所在情報や、調査方法について、中国や韓国の博物館と相互に連絡を取り合っていきたいと考えている。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2111

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管のための調査研究の実施 ⅱ日本及び東洋全般にわたる文化財の調査研究 11）ガンダーラの仏教寺院の伽藍配置と遺物に関する研究

【事業概要】

1992 年～2000 年に東京国立博物館で実施したパキスタンにおける考古学調査の成果を総括し、最終的に調査報告書を作成する。

【担当部課】	展示課	【事業責任者】	展示課主任研究員　小泉惠英

【スタッフ】

望月幹夫（上席研究員）

【年度実績概要】

1995～1999 年に実施したザールデリー遺跡の発掘調査を踏まえ、その成果の一部を「ガンダーラの仏伝美術と転輪聖王」として発表した（『ガンダーラ美術とバーミヤン遺跡展』＜2007.12＞）。

また、同遺跡の発掘調査報告書の執筆を現在進行中であり、本成果を元にした平常展示の活性化ならびに特別展のプランを計画中である。

【実績値】

論文掲載数　『ガンダーラ美術とバーミヤン遺跡』所載　１篇

【備考】

『ガンダーラ美術とバーミヤン遺跡』所載論文（「ガンダーラの仏伝美術と転輪聖王」）

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2111

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	B	B	B

備考
当館の実施した初の本格的な海外調査で考古学的な成果も大きなものであり、遺物の研究を継続的に実施した。

２．定量的評価

観点	論文掲載数					
判定	A					

備考
最終報告作成に向けて、順調に成果をあげている。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	研究内容は、独創性に富むが、報告作成に向けての準備にやや遅れが出ており、20 年度での調整が必要なため、B 評価とした。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	作品研究についての継続的な調査は実施された。報告書作成準備についても進行中であるが、当初計画よりもやや遅れが出ており、20 年度での調整が必要である。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2112

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ⅳトータルケアシステム構築に向けた応用研究の実施 12)文化財の恒久的保存と持続的公開を具現化する博物館トータルケアシステムの構築（科学研究費補助金）

【事業概要】

保存と公開という博物館の使命を持続的なものとするためには、あらゆるリスクを予測し、リスクを回避するための対策を事前に講じることによって、高い安全性に裏付けられた活動へと博物館を質的に転換する必要がある。そのためには、従来行われてきた基礎研究及び個別的対処を統合し、機動的かつ実効的な臨床保存学を確立する必要がある。その具体的な方法論としてトータルケアシステムの構築について研究を行う。

【担当部課】	保存修復課	【事業責任者】	保存修復課長　神庭　信幸

【スタッフ】
塚田　全彦（環境保存室長)、土屋　裕子（保存修復室主任研究員)、和田　浩（環境保存室研究員）

【年度実績概要】

東京国立博物館が所蔵する文化財コレクションに対して、基礎研究に留まらず、臨床研究としての保存科学を実践するため、10 年度からさまざまな手段、方法論、処置法、装置類（コンサーヴェーション・ツール）を開発・整備してきた。それらは測定（Measure)、分析（Analysis)、改善(Improve)、管理（Control）という４つの段階に分類される。これまでに開発した保存管理手法は、1)履歴・環境情報の収集と解析に時間を要する、2)将来予測と改善策の立案が困難であり、その結果として正確かつ円滑な実践を阻害する。本年度は履歴・環境情報の収集と解析に関して、データの意味づけ、保管・活用の仕方について、実践を通じた研究を行った。

【実績値】

研究会発表件数
公開シンポジウム「博物館の役割と未来」　1 回
「博物館環境のマネージメント」
2007 東アジア文化遺産保存シンポジウム　2 回
「臨床保存の意味と意義－予防保存の最先端－」
「An approach to Preventive Conservation at the Tokyo National Museum」

論文掲載数
2007 東アジア文化遺産保存シンポジウム要旨集　2 篇所載

公開シンポジウム 10 月 28 日

【備考】

- 神庭信幸：臨床保存の意味と意義－予防保存の最先端－、公開シンポジウム「博物館の役割と未来」、2007 年 10 月 28 日、東京国立博物館
- 神庭信幸、和田浩、土屋裕子、塚田全彦：臨床保存の意味と意義－予防保存の最先端－、2007 東アジア文化遺産保存シンポジウム、2007 年 11 月 1 日、ソウル

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2112

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
作品の履歴及び環境の情報の収集と解析に関して、実践を通じた研究を行った。当初の計画に従い、所定の成果を得ることができている。

２．定量的評価

観点	研究会発表件数	論文掲載数				
判定	A	A				

備考
韓国ソウルで開催された東アジア文化遺産保存シンポジウム、文化財保存修復学会公開シンポジウム「博物館の役割と未来」において成果の公表を行い、活発な質疑応答を行った。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	保存と公開を実践しつつ、その安全性あるいは適格性をより向上させるために、現状の解析と改善を具体的に実施した。臨床保存学の具体的な機能が明確化できたと言える。今後は現在の実践をより制度の高いものにすると同時に、将来予測に立脚した現状判断が可能なようにシステムの確立を目指したい。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業は、その進捗度、従来の水準を維持しつつ比較的堅調に実現できたと考える。調査研究については、今後もこのペースを維持しつつ、目録作成やデータベースの公開に力を注ぎたい

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2113

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ｉ保存環境の調査研究等の実施 13）環境保存に関する研究

【事業概要】

東京国立博物館における文化財の保存環境及び展示環境について調査研究し､今後の環境の向上に結びつけることを目的として実施する。

【担当部課】	保存修復課	【事業責任者】	保存修復課長　神庭　信幸

【スタッフ】

塚田 全彦（環境保存室長)、和田 浩（環境保存室研究員）

【年度実績概要】

ホルムアルデヒドなどのアルデヒド類、酢酸などの有機酸や大気汚染物質である窒素酸化物などに関して、博物館内の空気成分の調査研究を実施し、現状の正確な把握を目指した。その結果、一部の測定箇所を除き空気成分は比較的良好な状態にあるが、一部アルデヒド類の濃度に関して危険性が高い箇所があることが確認された。温湿度に関しては、測定結果に対応した湿度分布地図を作成し、注意を要する区域の視覚化を行った。輸送中の梱包ケース内の振動・衝撃について、実際の輸送に関して調査を行い、得られた結果を解析して問題点を明らかにした。また、湿度調節装置ＲＫ2 の能力評価と使用方法の最適化についてさまざまな実験を行い、平成館大型展示ケースの相対湿度調節に関する研究（グラスバウ･ハーン社及び販売代理店アクタス社との共同）を実施した。

【実績値】

研究会発表件数

文化財保存修復学会第 29 回大会　2 回

「相対湿度の安定化とポータブル除加湿器の効果」

「文化財の海外輸送時に計測された各行程別の振動・加速度特性」

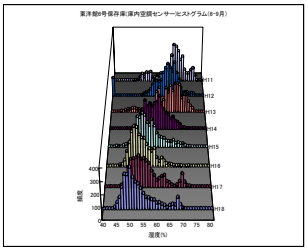
2007 東アジア文化遺産保存シンポジウム　1 回

「A long-term measurement of a museum environment」

論文掲載数

文化財保存修復学会第 29 回大会要旨集　2 篇所載

2007 東アジア文化遺産保存シンポジウム要旨集　1 篇所載



収蔵庫内の相対湿度の改善

【備考】

- 和田浩、塚田全彦、神庭信幸：相対湿度の安定化とポータブル除加湿器の効果、文化財保存修復学会第 29 回大会研究発表要旨集、2007 年 6 月 16 日、静岡
- 神庭信幸、和田浩、塚田全彦、高木雅広、今北憲（アイティエコ（株))：文化財の海外輸送時に計測された各行程別の振動・加速度特性、文化財保存修復学会第 29 回大会研究発表要旨集、2007 年 6 月 16 日

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2113

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
温湿度、生物生息、振動・衝撃、空気成分に関する計測と、その結果に対応した環境整備を実施した。当初の計画に従い、所定の成果を得ることができている。

２．定量的評価

観点	研究会発表件数	論文掲載数				
判定	A	A				

備考
文化財保存修復学会第 29 回大会（静岡)、2007 東アジア文化遺産保存シンポジウム（ソウル）において研究成果を公表し、活発な質疑応答を行った。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財を取り巻くさまざまな環境因子について、現実的な状況を具体的かつ正確に把握することが可能になり、事業の改善に役立てながら文化財の安全の確立に寄与している。今後は更なる調査の実施と、現象のメカニズムの解明にも発展させていきたい。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業は、その進捗度、従来の水準を維持しつつ比較的堅調に実現できたと考える。調査研究については、今後もこのペースを維持しつつ、目録作成やデータベースの公開に力を注ぎたい。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2114

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ｉ保存環境の調査研究等の実施 14）耐震性の高い展示手法に関する調査研究

【事業概要】
考古・工芸分野の器物の展示手法を中心に、地震による転倒などに関する安全性の見直しを行う。

【担当部課】	保存修復課	【事業責任者】	保存修復課長　神庭　信幸

【スタッフ】
塚田　全彦（環境保存室長）、和田　浩（環境保存室研究員）

【年度実績概要】
東洋館展示室におけるエジプトのレリーフ像、西アジアのガラス製品の展示、及び平成館考古展示室における縄文時代の尖頭土器の展示に関して、安全な展示を目指して器物の支持具としての保存安定台の製作を研究し、実際に製作して適用した。

【実績値】
ガラス製品の展示具検討・製作　7 件
考古時展示具検討・製作　12 件
エジプト・レリーフ展示具検討・製作　1 件

不安定なガラス器具の展示支持具

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2114

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
作品を保全するために安全な展示は欠くことができない。一方見やすい展示デザインの追及も必要である。転倒防止のための支持具は両者を併せもつものを目指して検討・製作を行った。当初の計画に従い、所定の成果を得ることができている。

２．定量的評価

観点	展示具検討・制作件数					
判定	A					

備考
作品ごとに形状や状態が異なることから、それぞれの状態に合わせながらの製作になる。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	転倒を防止する保存安定台を展示室に設置して、安全性の向上を図ることができた。こうした取り組みに関し、今後は検討過程や結果を他館や関連分野の研究者にも公開できるように改善していきたい。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業は、その進捗度、従来の水準を維持しつつ比較的堅調に実現できたと考える。調査研究については、今後もこのペースを維持しつつ、目録作成やデータベースの公開に力を注ぎたい。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2115

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ⅵ収蔵品について、科学的分析に基づく保存・修復に関する調査研究の実施 15）大型油彩画のロール状保存と木枠に張り込まない展示手法の開発に関する調査研究

【事業概要】

大型油彩画を数多く扱うルーブル美術館及びフランスの保存専門家と共同で、科学的な裏づけに基づき、木枠に張り込むことなく、同時に絵具にかかる負担を最小限に抑えながら、場所をとらないようにロール状に巻いて保存する方法の開発と、必要に応じて安全に展示する方法の開発である。

【担当部課】	保存修復課	【事業責任者】	保存修復課長　神庭　信幸

【スタッフ】

塚田全彦（環境保存室長）、土屋裕子（主任研究員）、木島隆康（東京藝術大学大学院教授）、山梨美子（東京文化財研究所企画情報部文化財アーカイブス研究室長）

【年度実績概要】

・パリ・ルーブル美術館収蔵庫視察（ロール状で保存する油彩画の例の研究）
・大型カンバスを支持体とする油彩画の修理および保存を専門とするフランスの技術者との打ち合わせ
・「武士の山狩」2 枚の光学調査（普通光、斜光線、紫外線蛍光、赤外線反射写真撮影）およびそのデータ整理

【実績値】

写真撮影　32 カット×４種類の光学調査＝128 枚

開いた時の様子。筒状に巻かれていた。
（東京国立博物館）

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2115

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
作品の光学的調査、ルーブル美術館及びフランスでの専門家との協議などを通じて、ロール状にした保管管理の可能性についての実現性が高まった。当初の計画に従い、所定の成果を得ることができている。

２．定量的評価

観点	写真撮影件数					
判定	A					

備考
大型の画面であるため、作品を安全に設置して撮影できる環境を整え、その上で写真撮影を実施した。赤外線写真の撮影により作品の製作に係る情報を得ることができた。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本格修理に必要な検討をルーブル美術館等の専門家と行い、修理設計に必要となる種々の情報を得ることが出来た。また、事前調査も予定通り進行している。調査検討結果に基づき、修理設計を行う予定である。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業は、その進捗度、従来の水準を維持しつつ比較的堅調に実現できたと考える。調査研究については、今後もこのペースを維持しつつ、目録作成やデータベースの公開に力を注ぎたい。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2116

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管のための調査研究の実施 ⅲ収蔵品の調査研究、特別調査、特別展・海外展の事前調査の実施 ・国立博物館の機能と役割の変遷に関する基礎的研究　－館史資料の分析を中心に－（科学研究費補助金）

【事業概要】

東京国立博物館では、2,046 件が館史資料として登録されている。内容は日本における博物館の歴史そのものであり、昭和 25 年(1950)に文化財保護法が施行され、文化財保護委員会が設置されるまで、日本の文化財保護行政の中心に位置した博物館のあり方を検討する際の貴重な資料である。本研究では、これらの資料について調査を実施し、その細目などを明らかにして、今後の博物館学研究の指針となるべき資料を整理、分類、分析し、研究の成果を一般に公開していくことを目標とする。

【担当部課】		【事業責任者】	列品課主任研究員　丸山　士郎

【スタッフ】
東京国立博物館：島谷弘幸（上席研究員）、高橋裕次（情報課長）、白井克也（教育普及課教育講座室長）、鬼頭智美（事業企画課国際交流室長）、木下史青（事業企画課デザイン室長）
九州国立博物館：伊藤嘉章（企画課長）

【年度実績概要】

東京国立博物館が保管している、列品録、列品台帳、収蔵品目録を中心に、館蔵品の収蔵にかかわる経緯等の調査を実施した。また、京都国立博物館保管の関連資料の調査を実施した。

【実績値】

調査件数　5 件、調書作成件数　5 件、文献資料のデジタル画像化　815 件、データ入力点数　815 件（文字数　約 24,000 字)、写真撮影点数（確認中）

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2116

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	B	

備考
列品録、列品台帳の調査はデジタル画像で行っているが、一部不鮮明なところもあり、原本との照合が必要である。

２．定量的評価

観点	調査件数	調書作成点数	写真撮影点数	データ入力点数	資料のデジタル化	
判定	A	A	A	A	A	

備考
資料のデジタル画像化とともに、文字データの作成も順調に進んでいる。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	東京国立博物館にしかない資料の調査を実施している。これまでに知られていない資料の存在をうかがわせる記述があるので、所在調査を進める必要がある。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画した資料の調査は順調に進んでいる。未紹介資料なども調査し、今後の図版目録の刊行などに役立てていきたい。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2117

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ⅲ収蔵品の調査研究、特別調査、特別展・海外展の事前調査の実施 ・東京国立博物館所蔵写真資料の調査研究（研究成果公開促進費補助金）

【事業概要】

東京国立博物館が所蔵する江戸時代末から大正時代にかけて撮影された 20,000 点余りにのぼる写真資料の画像データベースを作成し、各分野に寄与できる研究資料としてウェブ上で一般に公開することを目的とする。

【担当部課】	列品課	【事業責任者】	列品課列品室長　富田　淳

【スタッフ】

冨坂賢（保存修復課保存修復室主任研究員）、藤瀬雄輔（展示課映像作製室員）、石澤舞（列品課列品室事務補佐員）

【年度実績概要】

『東京帝室博物館美術課列品写真目録』(大正8年)、『幕末明治期写真資料目録1～3』に従い、写真資料の撮影およびデータ入力を行った。撮影は写真資料の体裁、装丁を明らかにするため、全紙撮影、台紙の裏面、アルバム等では表紙、見返し、白紙を含む全頁撮影を原則とし、データは画像番号、名称、撮影者、法量、品質形状、技法、時代、員数、墨書等、備考について作成した。

【実績値】

写真撮影およびデータ作成資料点数　約 4,200 点

（内訳）壬申検査関係写真　約 450 点

ウィーン万博出品写真　約 500 点

臨時全国宝物取調局撮影写真　約 1,500 点

風景写真　約 100 点

文化財写真　約 1,650 点

公開画像　約 8,400 画像

「紹興蘭亭」安村喜当撮影　明治時代

【備考】

「東京国立博物館情報アーカイブ」(http://webarchives.tnm.jp/archives/)、「東京国立博物館所蔵古写真 WEB データベース」(http://dbs.tnm.jp/db/kaken/oldphotos.html) 参照。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2117

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考

東京国立博物館所蔵の写真資料は、以前より外部の機関や研究者から利用の要望があるにもかかわらず、画像を簡便に確認するすべがなかった。ウェブ上で公開を始めたことは、「紫禁城写真展」（東京都写真美術館・2008 年 3 月 29 日～5 月 18 日）の開催にあたり、大きな役割を果たした。

２．定量的評価

観点	撮影数	データ作成数	公開画像件数			
判定	A	A	B			

備考

撮影・データの作成については、当初の計画を充分に達成できた。作業手順の関係から、ウェブ上でのアップは年度明け早々を予定している。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	ウェブ上での画像データベースの公開が、「紫禁城写真展」の実現に大きく寄与した。しかしデータベースの公開そのものが必ずしも広く一般に周知されていない面があり､HP 等での分かりやすい案内が必要となろう。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	写真資料の調査研究事業は、当初の計画に従って進捗し、画像データベース公開による成果も少しずつみられるようになりつつある。 調査研究については、20 年度もこのペースを維持しつつ、撮影を進め、あわせて諸データを整理して、より完備されたデータベースとして公開したい。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2118

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ⅲ収蔵品の調査研究、特別調査、特別展・海外展の事前調査の実施 ・東京国立博物館所蔵古地図の調査研究（研究成果公開促進費補助金）

【事業概要】

東京国立博物館が所蔵するおおむね江戸時代以降の古地図について､詳細な画像データ及び地図に関する書誌的データを整備し、インターネットを通じて公開を図る。

【担当部課】		【事業責任者】	情報管理室長　田良島哲

【スタッフ】

冨坂賢（保存修復課保存修復室主任研究員)、佐々木利和（国立民族学博物館先端人類科学研究部教授）

【年度実績概要】

江戸時代から明治時代初期の古地図約 250 枚について、詳細なデジタル画像データ及び原資料を確認しながらの、書誌的データの作成をおこなった。おおむね目標どおりのデータを作成できた。

【実績値】

データ作成：当館所蔵の歴史資料、和書に属する古地図約 250 枚の画像データ及びそれぞれに関する名称、員数、寸法等の書誌的情報

作成したデータベースの例

【備考】

東京国立博物館　古地図データベース　http://dbs.tnm.jp/db/kaken/oldmaps.html

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2118

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 幅広い利用が可能な資料について、最小限の経費・人員で必要な情報作成を行うことができた。						

２．定量的評価

観点	データ化件数					
判定	A					
備考 目標どおりの件数についてデータ化ができた。						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	これまで十分な情報が作成されていなかった当館蔵の古地図に関するデータ作成を必要最小限の経費で実施し、広く公開を進めることができた。20 年度経費の見込みが立てば、19 年度までに行えなかった大型の地図等についてもデータ作成を進めたい。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	おおむね当初目論んでいたペースで情報の蓄積が進んでいる。作成手順の改善を図るとともに、20 年度以降も経費の許す範囲で積極的にデータ作成を進める。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2119

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ⅲ収蔵品の調査研究、特別調査、特別展・海外展の事前調査の実施 ・特別展の事前調査

【事業概要】
特別展の出品作品を選定し、展覧会全体の構成・章立て・コンセプトを策定するために、出品候補作品およびそれを所蔵していると予想される社寺の所蔵品をできるかぎり数多く、また輸送に際しての作品保全のため、展示手法の検討のため調査が必要な出品作品を、特別展の準備期間中に調査する。また、各博物館・美術館等でも同様の目的で調査を行う。

【担当部課】	事業部	【事業責任者】	事業部長　松本伸之

【スタッフ】
救仁郷秀明（特別展室長）、竹内奈美子（同主任研究員）、丸山猶計（同研究員）

【年度実績概要】
足利義満六百年遠忌記念「京都五山　禅の文化展」、「大徳川展」、陽明文庫創立７０周年記念特別展「宮廷のみやび―近衞家 1000 年の名宝」（以上、19 年度事業）、平城遷都 1300 年記念「国宝　薬師寺展」、尾形光琳生誕 350 周年記念「大琳派展－継承と変奏－」、「スリランカ文化遺産展」（仮称）、無相大師 650 年遠諱記念 特別展「妙心寺」（仮称）（以上、20 年度事業）、平城遷都 1300 年記念　興福寺中金堂修復記念「国宝　阿修羅展」（仮称）、自主企画展「東洋の染付」（仮称）（以上、21 年度事業）のため、出品候補作品を調査した。

【実績値】
出品候補作品　約 660 件

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2119

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 最小限の時間・人員による調査で特別展を実施すべく努力している。						

２．定量的評価

観点	調査作品件数					
判定	A					
備考 それぞれの特別展のコンセプトにあったより質の高い作品をリストアップするために、各所蔵先との連絡調整を密にして多くの作品の事前調査を行うことができた。						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	限られた時間的制約の中での調査ではあるが、新発見の作品など新知見も得られており、概ね成果が認められるといえる。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	特別展の事前調査は、作品の所蔵者ならびに共催者との良好な関係を築きながら、順調に成果を上げている。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2120

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	４．文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ②公衆への観覧を図るための研究 ⅳ京都文化を中心にした文化財の調査研究 １）近畿地区（特に京都）社寺文化財の調査研究

【事業概要】

近畿（特に京都）地区社寺の所蔵する文化財について網羅的に調査し、新資料の発掘に努めるとともに既知の資料についても再評価し、寄託等の推進、また、展覧会の開催により博物館活動の活性化を推進する。

【担当部課】	学芸課	【事業責任者】	学芸課長　森田　稔

【スタッフ】

淺湫　毅（主任研究員）、尾野善裕（主任研究員）、久保智康（工芸室長）、永島明子（研究員）、山内麻衣子（研究補佐員）、大原嘉豊（研究員）、西上　実（上席研究員・美術室長）、羽田　聡（研究員）、山本英男（保存修理指導室長）、若杉準治（列品管理室長）、比嘉飛鳥（技術補佐員）

【年度実績概要】

京都における浄土宗の本山の一つである百万遍知恩寺において、諸堂安置の仏像、工芸品、展示収蔵庫及び土蔵保管の絵画、書跡、工芸品について調書を作成し、写真撮影を行った。（延べ 5 日間）

本調査の成果は近く予定される法然上人に関する展覧会の出品資料の選定の候補でもある。

【実績値】

調査資料件数　230 件

（絵画　70 件、　彫刻　70 件、　書跡　50 件、　工芸品　40 件）

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2120

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考

四年後に計画されている浄土宗関係の特別展を見据えた調査ということで適時性があり、今後この成果を利用しつつ、継続的に関連寺院の調査を計画しており発展性がある。また短期間に学芸研究員全員が参加する形式の、分野の枠を越えた総合的、悉皆的な調査は学術的な正確性を持つと同時に効率性が高く、当館独自のもので独創性も高い。

２．定量的評価

観点	調査資料件数					
判定	A					

備考

短期間で寺院の堂舎、宝蔵、展示収蔵庫等に保管される文化財すべての調査（調書の作成と写真撮影）を完了しておりＡ評価とする。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財を多く所蔵する本山クラスの寺院の文化財を限られた日数で調査できたこと、また、寺院との良好な関係を構築したこと、将来の展覧会の資料を得たことから判断した。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	従来の形式を崩さず、新たな対象寺院を採りあげ充分な成果を上げた。 今後も展覧会を見据えつつ、調査を継続する。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2121

（様式１）

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ②公衆への観覧を図るための研究 ｖ平安仏教とその造形に関する調査研究 ２）平安仏教とその造形に関する調査研究

【事業概要】
平安仏教の美術・造形にかかわる作品や図像及び関連資料を収集、整備する。
報告書の刊行、シンポジウム（研究座談会）の開催により、成果を公開する。

【担当部課】	学芸課	【事業責任者】	上席研究員・美術室長　西上　実

【スタッフ】
西上　実（上席研究員・美術室長）、若杉準治（列品管理室長）、山本英男（保存修理指導室長）、山下善也（主任研究員）、大原嘉豊（研究員）、赤尾栄慶（企画室長）、羽田　聡（研究員）、淺湫　毅（主任研究員）、久保智康（工芸室長）、尾野善裕（主任研究員）、山川　暁（主任研究員）、永島明子（研究員）、難波洋三（情報管理室長）、宮川禎一（考古室長）、中村　康（文化財管理監）、金井杜男（調査員）

【年度実績概要】
平安仏教の美術・造形にかかわる作品や図像及び関連資料を収集、整備し、報告書を刊行した。
シンポジウム（研究座談会）「仏師康尚の時代」を開催した。

【実績値】
シンポジウム参加者　120 名
仏教美術研究上野記念財団助成研究会報告書第 35 冊「研究発表と座談会　仏師康尚の時代」
仏教美術研究上野記念財団助成研究会報告書「図像蒐成 XI」

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2121

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
平安仏教の美術について多面的に調査研究し、多岐にわたる資料を収集した。
また、時機をとらえたシンポジウム（研究座談会）を開催した。

２．定量的評価

観点	シンポジウム参加者数					
判定	A					

備考
シンポジウム（研究座談会）「仏師康尚の時代」を開催し、120 名の参加者を得て活発な討論がなされた。参加者数が 120 名と 90 名（過去 5 回の平均値）を大きく上まわったことから、A 評価とした。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	4 カ年の継続事業のうち、3 年次の事業計画について達成できた。 本調査研究の蓄積は、当館の展観事業に大いに資するものである。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	多岐にわたる分野の資料について収集・整備ができ、また、研究資料を広く公開することで、仏教美術研究の発展に資することができた。20 年度は、本研究事業の最終年度であることから、一層充実した内容の事業としたい。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2122

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財に係る調査研究 ①収集・保管のための調査研究の実施 ⅱ日本及び東洋全般にわたる文化財の調査研究 ３）江戸時代京焼の技術基盤に関する研究

【事業概要】

江戸時代の京焼について、特に京都の社寺伝来品を中心に、文献資料・考古資料・伝世資料を総合的に調査し、京都の伝統産業の一つである京焼の技術系譜を明らかにする。本研究は、18 年度で科学研究費補助金の交付は終了しているが、19 年度は主に蓄積された研究成果の公表を図る。

【担当部課】	学芸課工芸室	【事業責任者】	工芸室長　久保智康

【スタッフ】

尾野善裕（主任研究員）、谷口愛子（調査員）

【年度実績概要】

京焼の技術の影響下に成立した三田焼について、研究紀要『学叢』に研究論文１篇を掲載したほか、陶工の尾形乾山についてなど京焼に関する小論考３篇を雑誌（『淡交』『茶道雑誌』）に投稿した。また、文化財としての京焼に関する普及啓発の一環として、博物館支援団体などが主催する講演会へ出講した。そのほか、京焼陶工との交友について記述のある建仁寺塔頭所蔵の日次記を調査した。

【実績値】

講演会件数　合計３回
- 「仁清と仁和寺」　清風会総会
- 「京焼に見る食の器」　野村美術館講演会
- 「京焼・清水焼の歴史と技」　和座季楽セミナー

論文等掲載数　全４篇
- 「三田焼三輪明神窯の開窯とその戦略」『学叢』第 29 号　京都国立博物館
- 「京焼き「本質」と「定義」」『淡交』No.756　淡交社
- 「「ぼんぼん」育ちの尾形乾山」『茶道雑誌』第 72 巻第２号　河原書店
- 「『陶工必用』にみる尾形乾山の育ち」『茶道雑誌』第 72 巻第３号　河原書店

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2122

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
科学研究費補助金の交付は 18 年度で終了しているが、19 年度最初の論文掲載誌（『学叢』）は 5 月に刊行されており、迅速な成果の公表ができたと考えている。

２．定量的評価

観点	講演会件数	論文等掲載数				
判定	A	A				

備考
当初の予定以上の講演会に出講し、また、論文投稿を積極的に行い、調査・研究の成果について公表できた。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	年度当初に計画していたのは、『学叢』への論文投稿 1 篇と講演会 1 回であったが、随時依頼を受けて実施した結果、当初予定の倍以上の数をこなす一方で、京焼研究に新たな視点を提示できたと考えている。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	単なる調査報告の水準にとどまらず、新たな研究の視点の提示など、質的にも一定の水準の成果を、当初予定以上公表することができた。文化財に対する普及啓発は、重要な博物館の使命の一つであり、特に年度計画には挙げていないが、今後も他の業務の支障とならない範囲で、実施に努力したい。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2123

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財に係る調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ⅱ日本及び東洋全般にわたる文化財の調査研究 ６）仏教における衣服の寄進と再利用に関する基礎的研究―袈裟、打敷、幡―（科学研究費補助金）

【事業概要】

染織品は本来の形状そのままで現代に伝えられているわけではない。とりわけ中世から近世の衣服の場合は、袈裟・打敷・幡といった、宗教空間で用いる品に仕立て替えられていることが極めて多い。そして、そのような場合にはしばしば、寄進に関わる銘文が記されることがあり、規準作の少ない染織品において、重要な作例となっている。しかしながら衣服本来の姿ではなく、仕立て替えられた形状であることから、これらのみを体系的に取り上げる研究は、現在までほとんど行われていない。本研究は、衣服が再利用されたという点に積極的に注目し、作例の所蔵調査を行うとともに、共通調書を作成し写真資料を収集し、データベースを構築するという、基礎的作業を中心に、銘文の解析によって、寄進という宗教的行為の実態について考察するものである。

【担当部課】	学芸課	【事業責任者】	主任研究員　山川　暁
【スタッフ】			

【年度実績概要】

本年度も、尼門跡寺院を中心に、再利用された染織品の所蔵調査、実見による調書作成、重要作例の写真撮影を行った。尼門跡寺院は皇室関係の寺院であるため、明治時代の廃仏毀釈の影響が比較的少なく、まとまった数の打敷が伝えられている。また寄進階層が皇室・公家に限定されているため、寄進銘文の解析も可能である。これまで調査を依頼することが極めて難しい寺院群でもあったので、一部の寺院の打敷のみではあるが、このたび悉皆調査をおこなえたことにより、多くの新資料に接することができた。また今年度は、妙心寺の諸塔頭の染織品についても、特別展覧会の事前調査にあわせて実見し、調書の作成、写真撮影を行った。

【実績値】

調査件数　86 件

調書　　86 枚

データベース　24 件

写真（カラーポジ）　74 枚

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2123

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	B	A	A	B	A	

備考
基礎研究であるため、適時性という観点ではＢ判定とした。
また研究の実施は寺院側の状況に大きく左右されるため、効率性という観点においてもＢ判定とする。

２．定量的評価

観点	調査件数	調　書	データベース	写　真		
判定	A	A	B	A		

備考
月に一度以上は調査日を設けるよう心がけた。打敷の調査および調書の作成は、法量計測が複雑なこともあり、一日に 5～10 枚程度であった。カラーポジ写真はすべて京都国立博物館の資料室に寄贈し、博物館の写真アーカイブの充実を図るとともに、研究者が広く利用できるよう配慮した。
データベースへの入力は、いまだ全件には及ばないが、今後も少しずつ増やしていく所存である。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	科学研究費を得ることにより、日頃の業務内ではなかなか手が届かない基礎作業に向き合う時間と金銭的裏づけを得て、個人的な研究においても、また博物館のアーカイブの充実においても、重要な成果が得られたと考える。調査で得た知見については、2009 年度に開催される他機関の展覧会図録への執筆を二件すでに依頼されており、この課題の着目点が注目された結果と理解している。なお本課題への補助は本年度で終了であるが、個人的な研究は引き続き行っていく。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	科学研究費補助金による最終年度の調査研究については当初の計画どおり実施でき、当課題の研究目的はほぼ達成されている。 今後も継続的に調査研究を進め、成果について、データベース化による蓄積、また、公開していくことに努めたい。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2124

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財に係る調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ⅱ日本及び東洋全般にわたる文化財の調査研究 ７）日本における木の造形的表現とその文化的背景に関する総合的考察（科学研究費補助金）

【事業概要】

先史時代より明治時代に至るまでの、樹木を素材・主題とした美術工芸遺品を通じて、従来蓄積されてきた歴史学の諸成果をフィードバックしながら、日本の木の文化を、他の東アジア諸国との比較史的視座を援用しつつ、跡づけることを目的とする。

【担当部課】	学芸課	【事業責任者】	館長　佐々木　丞平

【スタッフ】

佐々木丞平（館長）、西上　実（上席研究員・美術室長）、若杉準治（列品管理室長）、山本英男（保存修理指導室長）、大原嘉豊（研究員）、赤尾栄慶（企画室長）、羽田　聡（研究員）、淺湫　毅（主任研究員）、中村康（文化財管理監）、久保智康（工芸室長）、尾野善裕（主任研究員）、山川　暁（主任研究員）、永島明子（研究員）、森田　稔（学芸課長）、難波洋三（情報管理室長）、宮川禎一（考古室長）、山下善也（主任研究員）

【年度実績概要】

事業初年度にあたるため、実施のための準備作業を行った。その概要は以下の通りである。

これまで京都国立博物館が収集してきた京都社寺の所蔵品に関するデータの再整理を、事業目的に即してデータベース化していった。

また、事業目的に即した社寺調査を行ための機材及び調査先の選定準備を行った。必要備品としては、表面からの目視からだけでは不可能なデータの収集を可能にするファイバースコープ、デジタルカメラ等を予定しており、順次購入・整備を進めた。

社寺調査の候補目的地として、仏像の用材樹種及び様式の東西の変化地点にあたる静岡県に焦点をあて、臨済寺・穂建寺に事前調査を実施した。

研究分担者は、各自事業目的にそって個人研究を遂行した。この個人研究に際しては、調査も実施し、専門の撮影技師が同行し、大判カメラでの撮影を行なうとともに、デジタルカメラによる撮影も行なった。

二か月に一度程度、研究の進捗状況について内部で実施報告を行った。

【実績値】

調査実績データベース化　827 点
調査機材整備　3 件（予定　50 万円以上備品　3 件）
共同調査のための事前予備調査　2 件（目標　1 件）
個人研究出張調査　4 件

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2124

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	継続性
判定	S	A	A	B	A	B

備考

適時性については博物館事業における公開性及び緊要性を増す環境問題と絡む点、独創性・発展性については適時性での理由をもとにした人文系では先駆的総合研究である点、効率性・継続性に関しては各研究分担者の本務である博物館事業との兼ね合いにおける時間的投資量という観点から、正確性についてはデータの収集という点から、それぞれ評価を下した。

２．定量的評価

観点	調査実績データベース化	調査機材整備	共同調査のための事前予備調査	研究分担者による個人研究（出張調査）	
判定	B	A	A	B	

備考

事業初年度として、目標は概ね達成されている。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	19 年度は、事業初年度ということもあり、事業準備と運営を軌道に乗せることに重点がおかれた。その目標はほぼ達成されたが、20 年度以降はより研究を深め成果の公表につなげる努力がより必要と考えている。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	全研究職員を研究分担者とする競争的資金の導入によって、館全体の研究を活性化している点で意義が深いと思量するが、緊密な研究上の連携を更に行う必要がある。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2125

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財に係る調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ⅱ日本及び東洋全般にわたる文化財の調査研究 ８）建仁寺両足院に所蔵される五山文学関係典籍書類の調査研究（科学研究費補助金）

【事業概要】

建仁寺の塔頭である両足院に所蔵される五山文学関係をはじめとした典籍類を順次、悉皆調査し、法量・装訂・時代などについて書誌学的調査を行い、善本の解題を付した総目録の作成を目指すものである。

【担当部課】	学芸課	【事業責任者】	企画室長　赤尾　栄慶

【スタッフ】

赤尾栄慶（企画室長）、羽田　聡（研究員）、山本英男（保存修理指導室長）、西上　実（上席研究員・美術室長）、金　文京（京都大学）、梶浦　晋（京都大学）、井上　進（名古屋大学）、藤本幸夫、(麗澤大学)、山城喜憲（慶應大学）、住吉朋彦（慶應大学）、堀川貴司（鶴見大学）、柳田征司（奈良大学）、川本慎自（東京大学）、宇都宮啓吾（大阪大谷大学）、

研究協力者：興膳　宏（京都大学名誉教授）、米谷　均

【年度実績概要】

未調査分を勘案して、約 30 箱の調査、すなわち調査員一人あたり年間３箱の調査を目指す。これを達成するために１週間規模の調査を３回程度実施し、書名・法量・装訂・外題・首題・尾題・版式・行数・訓点・奥書・刊記などの書誌学的調査と内容に関する調査を実施し、それぞれを調書に記入する。年２回程度の研究打合会を行う。

18 年度までの 3 カ年にわたる科学研究費・基盤研究（B）「五山禅宗寺院に伝わる典籍の総合的な調査研究―建仁寺両足院所蔵本を中心に―」の研究成果報告書を作成する。

【実績値】

第 70 箱から第 100 箱までの調査を終え、平成 16―18 年度までの３カ年にわたる科学研究費・基盤研究（B）「五山禅宗寺院に伝わる典籍の総合的な調査研究―建仁寺両足院所蔵本を中心に―」の研究成果報告書を作成した。

【備考】

【書式Ｂ】 施設名 京都国立博物館 処理番号 2125

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 両足院所蔵の典籍類の書誌学的な悉皆調査は、はじめてである。						

２．定量的評価

観点	調査箱数					
判定	A					
備考 予定通りに調査が出来た。						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	年度予定の箱数を調査した。20 年度も年間 30 箱のペースを守りたい。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	最終年度の 22 年度には、全体 180 箱すべての調査が終了する予定である。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2126

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	４．文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ｖ修復文化財に関する調査研究 10）修復文化財に関する資料収集及び調査研究

【事業概要】
文化財保存修理所において修復が行われている文化財に関して情報を収集する。

【担当部課】	学芸課保存修理指導室	【事業責任者】	保存修理指導室長　山本英男

【スタッフ】
山本英男（保存修理指導室長)、淺湫　毅（主任研究員)、伊東史朗（調査員）

【年度実績概要】
文化財保存修理所の工房に搬入される新規修理作品に関して、データを収集し、データベースに登録した。
過去の修理作品に関してもデータの更新、整理作業を行なった。
毎月行っている文化財保存修理における修理工房の巡回時のほか、適宜工房において、修復中にしか得ることの出来ない情報（作品の構造や使用材料、内部納入品や銘文など）を収集し、分析を行なった。
『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』第３号に掲載する 13 年度修理作品のデータを整理するとともに、同年の修理で発見された銘文の解読作業を行なった。
また、これらの業務に調査員伊東史朗氏の協力を得た。

【実績値】
19 年度は 102 件の新規修復文化財の搬入があり、これらの作品に関してデータを収集するとともに、データベースへの登録を行なった。
過去のデータに関して 2,377 回追加、更新を行なった。
修理所の巡回を 11 回行なった。
20 年 3 月に『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』第 3 号（13 年度分）を発行した。

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2126

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 限られた期間中にあらゆる側面からの調査を行い、データ収集に努めた。						

２．定量的評価

観点	データ収集件数	データ追加更新件数				
判定	A	A				
備考 目標件数は達成されている。						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財保存修理所で行われる修理作品より得られる情報はおおむね収集できた。 また、その成果を報告書に反映した。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	19 年度収集された情報をさらに充実させる為、他年度と関連づけながらさらなる情報の収集をはかりたい。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2127

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	４．文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ⅲ収蔵品の調査研究、特別調査、特別展・海外展の事前調査の実施 11）永徳に関する調査研究（客員研究員）

【事業概要】
京都国立博物館が行う特別展覧会の事前調査および出陳作品の選択。
社寺調査への参加と協力。

【担当部課】	学芸課美術室	【事業責任者】	上席研究員・美術室長　西上　実

【スタッフ】
山本英男（保存修理指導室長)、奥平俊六（客員研究員）

【年度実績概要】
狩野永徳展に関わる事前の作品調査に参加・協力し、出品作品の決定にも関与した。
また、永徳展の開催を広く一般に知らせる目的で、『別冊太陽』145 に、永徳に関わる一文（実績値参照）を寄稿した。
さらに、百万遍知恩寺の社寺調査に協力した。

【実績値】
奥平俊六「桃山風俗画の誕生と展開」(『別冊太陽』145、平凡社、2007 年)
山本英男　特別展覧会「狩野永徳」図録所載「狩野永徳の生涯」、同作品解説等
山本英男　「大徳寺に伝来する織田信長像」(『紫野』31、大徳寺)
特別展覧会「狩野永徳」　入場者数 230,656 人

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2127

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考

特別展覧会開催のための作品調査を積極的に行い、また、出陳作品の選定には充分な検討を行い、特別展覧会に大きな貢献があった。

また、作品調査で得られた収集データについては、今後の館の展観事業に有効である。

２．定量的評価

観点	論文発表件数					
判定	A					

備考

特別展覧会「狩野永徳」の広報に協力し、入場者数の増加につながった。また、一般の人への博物館事業に対する理解が深まった。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	特別展覧会「狩野永徳」について、その準備を円滑かつ迅速に遂行しえた。 また、限られた時間内で社寺調査を円滑に行うことができた。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	展覧会を開くにあたり、その準備としての作品調査を行い、数多くのデータを蓄積した。このデータは将来、別の展覧会を行う際にきわめて有効になるものと思われる。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2128

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ②公衆への観覧を図るための研究 ⅳ京都文化を中心にした文化財の調査研究 12）近世絵画に関する調査研究（客員研究員）

【事業概要】

京都文化の一端を明らかにすることを目的として、客員研究員である同志社大学教授狩野博幸氏により、京都を中心とした近世絵画に関する作家研究、作品研究を実施する。

【担当部課】	学芸課美術室	【事業責任者】	上席研究員・美術室長　西上　実

【スタッフ】

山下善也（主任研究員）、狩野博幸（客員研究員）

【年度実績概要】

狩野博幸客員研究員が、洛中洛外図、伊藤若冲、曾我蕭白をはじめとした自身の近世絵画研究をいっそう深化させ、それを通じ、京都国立博物館館蔵品・寄託品の価値をさらに明らかにするとともに、館員における調査研究の諸活動に対し指導・助言を行った。また、それを基礎とした同客員研究員の著作活動を通じて、一般の人々の文化に対する興味を喚起し、ひいては博物館に対する理解を深めた。

【実績値】

狩野博幸客員研究員による著作

『荒ぶる京の絵師　曾我蕭白』臨川書店　2007 年

アートセレクション『狩野永徳の青春時代　洛外名所遊楽図』小学館　2007 年

『異能の画家　伊藤若冲』(共著) 新潮社　2008 年

狩野博幸客員研究員による監修

『特別展覧会　絵画の冒険者 暁斎　Kyosai』展図録　京都国立博物館　2008 年（刊行予定）

山下善也「探幽絵画にみる叙情－林鵞峰『富士石記』を起点に」(「美術フォーラム 21」第 16 号、醍醐書房)

山下善也　国際シンポジウム参加及び発表、大和文華館での講演会

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2128

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
館研究員の調査・研究活動に対して、客員研究員がさまざまな視点からの指導・助言を行うことは、研究員の活動を活性化させ、今後の館運営にも大きな効果が認められるところである。

２．定量的評価

観点	著作数	監修数				
判定	A	A				

備考
活発な著作活動等により、博物館事業に対する貢献が顕著である。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	次々と発表される著作は、数々の初紹介作品の収録、新知見の提起など刺激に満ちあふれ、京都の近世絵画の魅力をあますところなく伝えており、研究の社会への還元が十二分になされている。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査活動、著作活動の活発さはいうまでもなく、京都国立博物館の諸活動に対する指導・助言等など、その実質的な貢献はきわめて大きいものがある。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2129

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ②公衆への観覧を図るための研究 ii 博物館情報学を構築する為の研究 13）文化財情報に関する調査研究（客員研究員）

【事業概要】

京都国立博物館における文化財情報について調査研究し、今後の博物館情報学の発展ならびに京都国立博物館の情報環境の向上に結びつけることを目的として実施する。

【担当部課】	学芸課情報管理室	【事業責任者】	情報管理室長　難波洋三

【スタッフ】

西浦嘉博（情報管理室員）、山田奨治（客員研究員）、山田奨治（客員研究員）

【年度実績概要】

京都国立博物館における次代の文化財情報システム（以下のシステムを内包する。収蔵品管理システム、展示支援システム、写真画像管理システム、特別観覧管理システム、寄託品管理システム、資料受入システム、住所管理システム）を構築する為、文化財メタデータ及び画像情報、データベース概念、操作インターフェース、処理速度、通信環境等を総合的に分析し、一部のシステム環境並びにデータベース通信試験環境の構築について、客員研究員の山田奨治氏のご助力をいただいた。また、当館の次期システム構築研究会議をおこない、当館の情報技術へ第三者的な視点から、山田客員研究員より提言をいただいた。

収蔵品管理システム(試験構築)

【実績値】

構築システム

・収蔵品管理システム（試験構築）

・住所管理システム（試験構築）

収集データ件数

・文化財メタデータ　27,148 件、

・文化財写真画像情報 138,452 件

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2129

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	B	A	

備考
　文化財情報システムを有効に活用するための業務を確実におこなっており、今後も最新の技術を取り入れたシステム構築に取り組む。

２．定量的評価

観点	収集データ件数					
判定	A					

備考
　文化財情報システムを運用に供することができるよう収集データの充実に努めている。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	総合的文化財情報管理システムの構築・発展は、文化情報の情報発信基地としての機能を要求される博物館にとって、適時性・発展性に富んだものと考える。かつ、内包する情報を有効に活用する為に、その正確性と効率性も同様に要求される成分である。当館の特色を十二分に生かしつつ、最新の技術を取り入れ、試験構築とは言え、実体性のあるシステムの構築に取り組んだ本業務は、次代への博物館情報学の継続発展を担った有意義なものであり、総合的な意味合いにおいてＡと評価するに足るものと考える。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業は、その進捗度・従来の水準を維持し推移できたものと考える。調査研究については、今後も 19 年度と同程度の成果を得るよう努力し、システム構築やデータベースの構築・公開に力を注ぎたい。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2130

（様式１）

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ⅲ収蔵品の調査研究、特別調査、特別展・海外展の事前調査の実施 14）訓点資料としての典籍に関する調査研究（客員研究員）

【事業概要】

館蔵品の『春記』及び寄託品である『新編諸宗教蔵総録』（高山寺蔵）の紙背にある『春記』の訓点についての調査研究

【担当部課】	学芸課美術室	【事業責任者】	上席研究員・美術室長　西上　実

【スタッフ】

赤尾栄慶（企画室長）、羽田　聡（研究員）、宇都宮　啓吾（客員研究員）

【年度実績概要】

館蔵品の『春記』及び寄託品である『新編諸宗教蔵総録』（高山寺蔵）の紙背にある『春記』の訓点を調査し、その成果を「院政期訓点資料研究の一問題―真言宗における教学的交流を巡って―」（『日本語の研究』第4巻1号　2008.1.1）という論文に反映させた。

【実績値】

「院政期訓点資料研究の一問題―真言宗における教学的交流を巡って―」（『日本語の研究』第 4 巻 1 号 2008.1.1）

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2130

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 当該文献に関しては、はじめて訓点資料としての観点より取り上げた。						

２．定量的評価

観点	論文掲載数					
判定	A					
備考 予定通りに調査が出来、それを論文に反映させた。						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	院政期の訓点資料でもある館蔵品の『春記』紙背にある仏典の訓点などを調査し、訓点の系統から、それらの伝来などを考察したもので、教学的交流にも目を向けた内容として評価できる。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	着実に館蔵品の調査に基づいて、論文を作成しており、今後とも館蔵の書跡の訓点調査を新たな観点から調査することは、展示公開事業にも大いに裨益する。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2131

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	４．文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ⅲ収蔵品の調査研究、特別調査、特別展・海外展の事前調査の実施 15）彫刻に関する調査研究（客員研究員）

【事業概要】

当館に保管および寄託される仏像を中心とした彫刻作品の調査、研究

【担当部課】	学芸課美術室	【事業責任者】	上席研究員・美術室長　西上　実

【スタッフ】

淺湫　毅（主任研究員)、井上一稔（客員研究員）

【年度実績概要】

当館が保管、あるいは当館が社寺より寄託を受けている彫刻作品の調査および写真資料の収集を、新たに行なった。

社寺、個人宅など、館外に所在する彫刻作品の調査・撮影を行なった。

上記調査作品の関連文献、史料の収集および研究を行なった。

これらの調査に際し、客員研究員の井上一稔氏の協力を得た。

過去の研究データに基づき特別展覧会および特集陳列、平常陳列の作品選定、展示、解説を行なった。

【実績値】

特別展覧会『藤原道長』を開催し（展覧会副担当)、図録に概説および作品解説の執筆を行なった。
同展出品作品の調査および写真撮影を展覧会会期中に行なった。
特集陳列『清水隆慶』を開催し、調査による新発見の作品を含めて展示し、解説の執筆を行った。
将来の特別展準備のための調査を妙心寺塔頭（妙心寺展）および本圀寺、頂妙寺（日蓮展）で行なった。
知恩寺において社寺調査を行ない、彫刻作品の調査を担当した。
その他、八坂神社、勝持寺、増上寺、建穂寺において彫刻作品の調査を行なった。このうち八坂神社、増上寺の調査結果は 20 年 5 月発行の『学叢』（京都国立博物館発行）に掲載する予定である。

論文　「木造不空羂索観音坐像・木造十一面観音坐像　京都・金戒光明寺蔵」(『学叢』29 号）他３篇
研究会発表　「金戒光明寺の文殊菩薩騎獅像について」(『戒律文化研究会第 6 回学術大会』)

【備考】

【書式Ｂ】 施設名 京都国立博物館 処理番号 2131

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
彫刻作品の調査の成果を、特別展覧会、特集陳列等の展示により公開できた。次年度以降の展観事業の準備として継続的に調査・研究を行っている。

２．定量的評価

観点	論文数					
判定	A					

備考
計画的に調査を行い、論文に反映させることができた。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当館の所蔵、寄託作品に関する情報は順調に得られており、館外での作品調査に際しても重要な情報が収集された。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究によって得られた情報を将来の展覧会に生かせるよう、さらなる情報の収集を図りたい。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2132

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管のための調査研究の実施 ⅱ日本及び東洋全般にわたる文化財の調査研究 ・建仁寺本坊所蔵典籍の調査・研究

【事業概要】

近年、建仁寺本坊では、第二次世界大戦から閉じられたままの土蔵が開けられ、なかには膨大な数の典籍が収蔵されていることが判明した。

本事業では、これらが調査された形跡がないことにかんがみ、まずは全体像を把握するための調査と、目録づくりをすることを目的とする。最終的には、建仁寺本坊においてこれらの典籍がどのように集積されたのかを研究する。

【担当部課】	学芸課美術室	【事業責任者】	上席研究員・美術室長　西上　実

【スタッフ】

羽田聡（研究員）

【年度実績概要】

1 月に一度、建仁寺本坊の土蔵におもむき、

①典籍の入った箱に通し番号をつけ、一つずつ別室へ運び出す。(写真①：典籍の入った土蔵内部)

②箱内部の典籍を取り出し、ホコリをはらい、全ての調書を作成する。

(写真②：調査風景（ホコリを払った典籍)

③重要と認められるものについては、デジタルカメラで撮影する。

④土蔵内部のホコリをはらい、箱を元に戻す。

という方法で所蔵典籍の調査をおこなった。

【実績値】

調査実施回数	12 回
調査資料点数	約 200 点
調書作成点数	約 200 点
撮影資料点数	約 20 点

①典籍の入った土蔵内部

②調査風景(ホコリを払った典籍)

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2132

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	独創性	発展性	継続性	正確性		
判定	B	A	A	A		

備考

本事業は、調査を維持するという継続性が第一に求められる。ここで得られた成果があらたな寄託品へとつながる可能性もあり、また、集積されたデータは将来的には博物館の有する文化財情報に寄与するという応用性も持ちあわせる。

２．定量的評価

観点	調査実施回数	調査資料点数	調書作成点数	撮影資料点数		
判定	A	A	A	A		

備考

19 年度、建仁寺本坊の所蔵する典籍については、全体の 10 分の１程度の調査を終えた。複数冊で１点というものもあるので、冊数ベースで考えると、実際に調査した典籍はかなりの数にのぼる。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	ほかの事業と兼ね合いながらも、建仁寺本坊の所蔵する典籍については、全体のおよそ 10 分の１の調査を終えた。20 年度は、これまでの悉皆調査と並行して、ある程度、全体像の把握をするようつとめたい。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	建仁寺本坊所蔵典籍の調査・研究事業は、ほかの事業と兼ね合いながらも、おおむね計画通りに実施されたと考える。20 年度は、現状の維持につとめるとともに、ある程度、全体像の把握をする作業にも着手したい。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2133

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管のための調査研究 ⅱ日本及び東洋全般にわたる文化財の調査研究 ・古写経の書誌学的研究

【事業概要】
中国・韓半島・日本で書写された古写経の書誌学的研究に関する論文を発表し、機会があれば、国際会議に出席し、発表を行う。

【担当部課】	学芸課美術室	【事業責任者】	上席研究員・美術室長　西上　実

【スタッフ】
赤尾栄慶（企画室長）

【年度実績概要】
古写経の書誌学的研究に関する論文は、2 編で、韓国と中国で出版されたものであり、国際会議は、イギリスと韓国で開催されたものに参加した。

【実績値】
(学会発表)
・「Prinate Dunhuang-related collections in Japan」2007 年 5 月 17 日　A Hundred Years of Dunhuang, 1907-2007　The British Academy, British Museum and British Library
・「日本の古写経の調査・研究について」2008 年 2 月 21 日　古代韓日言語比較研究　韓国・ソウル大学
(論文 2 編)
・「中・韓・日の古写経にみる見返し絵（扉絵）について」　特別展「写経変相図」345ｐ―349ｐ 2007 年 7 月　韓国国立中央博物館
・「京都国立博物館蔵大谷探検隊帯来写本介紹」　『転型期的敦煌学』33ｐ―40ｐ 2007 年 11 月　上海古籍出版社

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2133

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 国際的な見地から、論文や学会発表を行っている。						

２．定量的評価

観点	学会発表	論文掲載数				
判定	A	A				
備考 学会発表はいずれも高い評価を得、論文は韓国・中国で掲載された。						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	論文や学会発表が、いずれも国際的な視野に立っている。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	学術的な国際交流を視野に入れつつ、研究成果を発表している。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2134

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	４．文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ⅱ日本及び東洋全般にわたる文化財の調査研究 ・日本の漆芸品にかかる調査研究

【事業概要】

日本の漆芸品（国の内外の伝世品、出土品）を調査し、関連する文献を読解して、日本の漆工芸の歴史をより広く深く考察し、平常展示の内容の拡充を図るための研究

【担当部課】	学芸課工芸室	【事業責任者】	工芸室長　久保智康

【スタッフ】

永島明子（研究員）

【年度実績概要】

16 年度～17 年度科学研究費助成金（基盤研究 B)「近世漆工基礎資料の研究―高台寺蒔絵を中心に―」(16320024　研究代表者小松→永島）において調査の機会を得た高台寺蒔絵の新資料や、15 年より日野町の委嘱を受けて調査を進めていた「日野椀」に関わる研究、さらに、同年に当館で一括寄託を受けた個人所蔵の近世の漆絵の伝世品百余点、16 年に京都市埋蔵文化財研究センターで調査をし、その後借用して展示の機会も得た中世の漆絵椀数十点、18 年度早々に調査の機会を得た妙法院の所蔵品、当館に寄託を受けている高台寺をはじめとする社寺や個人の所蔵品の調査に基くデータ、過去の社寺調査で閲覧の機会を得た漆器のデータなど、本年度に限らない漆芸品の調査、採寸、写真撮影によるデータの蓄積に基き、漆絵と蒔絵の関連性など日本の漆芸史の流れを再考した。その内容は平常展示における作品の選択、配列、解説に反映されたほか、土曜講座に活用され、作品購入候補の判断においても参考とされた。また、当館研究紀要や日野町史の紙上で公表されたほか、日野町の依頼により第３回日野町町民大学講座において講演を行い、日野町民に地元の漆器について知ってもらう機会が得られた。さらに、20 年度秋に開催を予定されている輸出漆器の特別展覧会の準備においても、特にその第二章を構成する上で、本年度の調査研究が基礎となった。

【実績値】

論文掲載　・「日野椀」日野町史編さん委員会編『近江日野の歴史』第五巻文化財編　2007 年 3 月
・「漆絵椀から蒔絵椀へ－小倉本就寺蔵「太閤膳」の調査報告および高台寺蒔絵様式の成立と流行に関する一考察―」『学叢』第 29 号　京都国立博物館　2007 年 5 月

撮影数　4800 カット以上

【備考】

【書式Ｂ】 施設名 京都国立博物館 処理番号 2134

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	B	A	A	B	A	

備考

本研究は、日々の調査や研究の蓄積から、帰納的に新見地に至るかどうかわかるものであるため、適時性や効率性の面からは特段優れているとは言いがたいが、古社寺の集中する関西圏、ことに京都という未調査作品の宝庫をフィールドとし、個々の作品を入念に調査して進められる研究であるため、独自性、正確性は高いと言える。今後もますますデータの充実が期待され、発展性も高いと言えるだろう。

２．定量的評価

観点	撮影数	論文掲載数				
判定	A	A				

備考

調査対象作品の所蔵者は 30 箇所以上、デジタル画像の撮影数は 4800 カット以上。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	日本を中心とした漆工芸の作品をまとめて鑑賞できる日本でも数少ない展示施設として、当館が、多様かつ上質な作品の観覧を可能とし、併せてその文化的・歴史的背景をより深く理解できるような場であり続けるために、最も重要となる地道な調査活動の蓄積とそこから得られた新知見の公表を実現しているため。旅費や撮影費の確保、資料読解や考察のための時間の確保、効率的なデータ整理のための機器や人員の配備が課題である。今後も引き続きデータの蓄積に努め、機会あるごとに新知見を国の内外に伝えられるよう努めて行きたい。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	京都文化を中心にした漆芸品という文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究を進めている。研究内容は当館における講座や展示のみならず執筆物で公表されているが、たとえば業績評価の場面などでもその内容を理解した上で評価がなされることがないので、今後はより多くの人の関心と批評を得ることが課題といえよう。また地道な研究活動に不可欠な時間を確保できるよう、不必要な事務書類の省略・簡便化にも努めたい。20 年度以降も精力的に調査をこなし、収集・保管・公衆への観覧に活かして行きたい。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2135

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ⅱ日本及び東洋全般にわたる文化財の調査研究 ・中・近世の金属工芸品の製作と受用にみる江南、嶺・湖南、瀬戸内の地域特質と相互文化認識、交流媒体の研究（トヨタ財団研究助成）

【事業概要】

中世・近世の交易の要であった中国の江南、韓国の嶺・湖南、日本の瀬戸内という 3 地域において、製作あるいは受用された金属工芸品を調査して、製作技術・意匠・用途などの地域間交流の実態を解明し、それを惹起した地域相互の文化認識のあり方、それらを媒介した人や組織などを解明する。

【担当部課】	学芸課工芸室	【事業責任者】	工芸室長　久保智康

【スタッフ】

羽田聡（京都国立博物館研究員）、王牧（中国浙江省文物鑒定中心研究員）、崔應天（韓国国立中央博物館アジア部長）、金恩愛（韓国 AMORE MUSEUM 学芸員）、塚本麿充（大和文華館学芸員）、上里隆史（法政大学沖縄文化研究所研究員）、三笠景子（東京国立博物館研究員）、多比羅菜美子（根津美術館学芸員）

【年度実績概要】

国内では、東京国立博物館・愛知県美術館などに所蔵される唐物銅器の基準作について調査を進めた。また新潟県伊達八幡館遺跡、埼玉県大山遺跡・大光寺裏遺跡から出土した銅器の調査を行い、成果の一部を著述した。とくに前者については、その重要性から 19 年度新潟県指定文化財となり、自治体の文化財保護行政にも貢献できた。国外では、韓国国立中央博物館で、元から博多に 1323 年頃に航行し、韓国新安沖で沈没した遺跡の引き揚げ金工品を調査した。国立海洋遺物展示館の新安船金属工芸シンポジウムに招聘され、調査成果を発表した。さらに平常展示において、特集展示に活用した。

【実績値】

研究会発表件数	新安船出土金属工芸シンポジウム（於韓国木浦） 発表テーマ「14 世紀日本の金属工芸と新安船遺物」	1 回
論文掲載数	『木村定三コレクション名作選』所載	1 篇
平常展示の特集	「平安時代の鏡」「中世武士の装い」「社寺伝来の名刀」	3 回

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2135

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
本テーマは、工芸的観点から日・中・韓の地域間比較を行う点で適時性が高く、従前金工品を射程に置いたものはなかったので、独創性・発展性が高い。３カ国の若手研究者により推進され、効率性・正確性の万全である。

２．定量的評価

観点	研究会発表件数	論文掲載数	平常展示の特集			
判定	A	A	A			

備考
研究会発表は１件だったが、韓国に於いて行われたシンポジウムできわめて大きな注目を集めた。論文・展示については、今後研究の進捗に応じて充実させていきたい。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	国内外の関係作品の調査を積極的に行い、その一部は県指定文化財となるなど、自治体の文化財保護行政にも貢献できた。国内外の研究者と協力体制を構築できた。また研究発表、著作、平常展示の特集展示などで成果を公表できた。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究は 19 年秋から開始したもので、研究参加者との意思統一を十分図ることができ、また韓国でいち早く調査とその成果を発表できて、順調なスタートが切れた。20 年度は本格的調査を実施して、研究を深め、その成果を地元に還元していきたい。また展覧会についても、構想を練っていきたい。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2136

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ⅱ日本及び東洋全般にわたる文化財の調査研究 ・古代中世山林寺院の調査・研究

【事業概要】

仏像、仏画、仏具など仏教美術への理解を促進すべく、それらが需用された「場」としての古代中世山林寺院について調査し、空間論的な検討を行う。

【担当部課】	学芸課工芸室	【事業責任者】	工芸室長　久保智康

【スタッフ】

なし

【年度実績概要】

摂関期の仏教信仰を主導した延暦寺・神護寺と、同時期の地方山林寺院遺跡（福井県文殊山、富山県上黒川宗教遺跡群、静岡県岩室寺跡・久能山など）における建物跡の踏査、伝存美術工芸品についての調査・研究と執筆を行った。また講演会において成果を発表した。

【実績値】

講演会・研究会発表件数	講演会（福井県鯖江市、静岡県袋井市）　2 回
論文掲載数　1 篇	・「道長の時代における在地仏教－山林寺院と工芸にみる－」『藤原道長』所載
著作数　2 篇	・「延暦寺の文化財」『古寺巡礼　京都 12　延暦寺』淡交社（共著） ・「山林密教寺院・神護寺の文化財」『古寺巡礼　京都 15　神護寺』(共著)

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2136

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
古代中世山林寺院というテーマ自体、事業責任者が牽引してきたもので、近年各方面で注目されてきた。更にモノとしての美術工芸品の研究を組み合わせたもので、適時性以下、いずれの観点からも高い評価を与えうる。

２．定量的評価

観点	講演会・研究会発表件数	論文掲載数	著作数			
判定	A	B	A			

備考
一般の聴講者、読者を対象として、複数回の講演、著作をなしえた。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	19 年度当初に開催した特別展覧会『藤原道長』、19 年度内に出版された普及書、古寺巡礼シリーズの『延暦寺』『神護寺』と、福井・静岡での講演会に関係させ、調査研究を促進し、成果をいち早く公開できた。今後も各地の自治体、研究者との交流を深め、生産的な調査・研究に努める。また各地での展覧会など、文化財公開に協力する。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画の一環として、有形文化財の理解を、その存在環境という視点で進めることができた。研究成果をさらに公開すべく活動していきたい。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2137

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ⅱ日本及び東洋全般にわたる文化財の調査研究 ・仏教工芸の調査・研究

【事業概要】

京都の社寺に伝来する工芸品の調査を進め、従来から評価の高い鎌倉時代以前の工芸品に加え、室町時代以降江戸時代に至る工芸品にも目を配り、その存在意義を明らかにして評価を高める。また経典や疏、密教儀軌、図像などを検討することにより、それらの仏教工芸作品が生み出された思想的背景について分析する。

【担当部課】	学芸課工芸室	【事業責任者】	工芸室長　久保智康

【スタッフ】

尾野善裕（主任研究員）、山川暁（主任研究員）、永島明子（研究員）

【年度実績概要】

特別展覧会の準備に伴う妙心寺関係寺院、日蓮宗関係寺院の事前調査、社寺総合調査としての知恩寺の調査を行った。また各方面からの依頼に伴い、延暦寺、仁和寺、妙法院、石清水八幡宮、三重県亀山市内諸寺院、福井県永平寺など各地の寺院所蔵工芸品の調査を行った。またその成果をまとめ、執筆を行った。さらに、中国における学会発表、国内での講演会、土曜講座等で成果を発表し、平常展示において特集展示に活用した。

【実績値】

講演会・研究会発表件数	遣隋使・遣唐使シンポジウム（於中国杭州）　1 回 発表テーマ「東アジアにおける＜唐鏡＞の存在形態とその意味」 講演会（富山県富山市）　1 回 土曜講座（京都国立博物館）　2 回
論文掲載数　2 篇	・「道長の時代における在地仏教－山林寺院と工芸にみる－」『藤原道長』所載 ・『乱世を生きる－真盛上人－』越前市武生公会堂記念館　所載
著作数　3 篇	・「延暦寺の文化財」『古寺巡礼　京都 12　延暦寺』淡交社（共著） ・「山林密教寺院・神護寺の文化財」『古寺巡礼　京都 15　神護寺』（共著） ・「妙法院・三十三間堂の宝物」『古寺巡礼　京都 18　妙法院・三十三間堂』淡交社（共著）
平常展示の特集	「仏教の工芸」　1 回

【備考】

【書式Ｂ】 施設名 京都国立博物館 処理番号 2137

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考

工芸の全分野をカバーするメンバー構成は全国的にもほとんどなく、きわめて高い水準の社寺調査を推進してきた。周囲からの期待も大きく、依頼調査もできる限り応じてきた。適時性以下の各観点で高い評価を与えうる。

２．定量的評価

観点	講演会・研究会発表件数	論文掲載数	著作数	平常展示の特集		
判定	A	A	A	A		

備考

業務多忙な中で、発表・論文・著作とも最大限の成果を出している。各分野が 1～2 ヶ月毎に行う特集展示でも成果が充分活かされている。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	寺院所蔵工芸品について積極的な調査活動が展開できた。また特別展覧会『藤原道長』や、論文・著書、講演会、土曜講座、特集展示等で多くの成果を発表することができた。20 年度以降も、より正確かつ積極的な調査を展開し、成果をさまざまな形で公表したい。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	有形文化財の掘り起こしに努め、展覧会や研究発表・講演・土曜講座などで積極的に公表することができた。研究成果をさらに公開すべく活動していきたい。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2138

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ⅲ収蔵品の調査研究、特別調査、特別展・海外展の事前調査の実施 ・特別展の事前調査

【事業概要】

京都国立博物館の自主企画、特別展覧会「絵画の冒険者 暁斎　Kyosai」(20 年 4 月 8 日～5 月 11 日開催)の展示内容を充実したものにすることを目的として、国内外に所在する河鍋暁斎作品の事前調査、関連文献の調査を実施する。

【担当部課】	学芸課美術室	【事業責任者】	上席研究員・美術室長　西上　実

【スタッフ】

山下善也（主任研究員)、狩野博幸（客員研究員・同志社大学教授）

【年度実績概要】

山下善也主任研究員のニューヨーク出張に合わせて、メトロポリタン美術館所蔵の河鍋暁斎作品の集中的な調査、山下善也主任研究員・西上実上席研究員・狩野博幸客員研究員 3 名により、河鍋暁斎の曽孫が館長をつとめる埼玉県蕨市の河鍋暁斎記念美術館を訪問し、同館所蔵の全暁斎作品の集中的な調査を実施するとともに、東京・千葉・福岡・熊本・兵庫・京都など各地に所蔵される暁斎作品を随時調査した。それとともに、暁斎に関する文献調査・取材調査を実施した。以上により、展覧会の骨格作り、肉付けを着実に進めることができ、展覧会を具体化するための準備を行うことができた。

【実績値】

6 月 6 日～7 日、山下善也主任研究員が、ニューヨーク・メトロポリタン美術館にて、同館所蔵の河鍋暁斎作品 50 件余を集中的に調査。

7 月 27 日～28 日、山下善也主任研究員、西上実上席研究員、狩野博幸客員研究員の 3 名が、埼玉県蕨市の河鍋暁斎記念美術館にて、同館所蔵の河鍋暁斎作品約 200 件を集中的に調査。

その他、福岡市博物館、高津古文化会館、京都文化博物館等の所蔵機関、東京・兵庫・京都等の個人宅にて、山下善也主任研究員、狩野博幸客員研究員が、所蔵される河鍋暁斎作品の調査を随時実施した。

【備考】

【書式Ｂ】 施設名 京都国立博物館 処理番号 2138

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	B	

備考
20 年に予定されている特別展覧会の作品調査について、国内外で積極的に行い、充分な成果を得ることができた。

２．定量的評価

観点	調査作品数					
判定	A					

備考
限られた日程、人員で集中的に調査を実施できたことは高く評価できる。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	暁斎作品の新発見 11 件、それを含めて初公開 22 件ということを実現したのも、積み重なる調査研究があったからにほかならない。暁斎は、幕末・明治期の狩野派作家であり、この成果を、20 年度以降の狩野派研究に反映させることができる。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業は、集中的な事業実施が可能になったことから、順調だったといえる。 このペースを堅持するとともに、調査手法等を深化させ、関連の研究調査に成果をいかしていきたい。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2139

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管のための調査研究の実施 ⅲ収蔵品の調査研究、特別調査、特別展・海外展の事前調査の実施 ・宸翰（天皇の書）の歴史学的見地からみた調査・研究

【事業概要】

宸翰（天皇の書）は、京都国立博物館の書跡部門における館蔵品および寄託品をふくめた収蔵品において、質・量ともに他館に誇るべき大きなコレクションを形成している。

本事業は、これまで書道史の側面から語られることの多かった宸翰について、「その発生から多様化までを歴史学に立脚して解釈する」という問題意識のもと、収蔵品を中心に調査・研究することを目的とする。また、将来的にはこの成果を取り入れた特別展覧会の開催も目的とする。

【担当部課】	学芸課美術室	【事業責任者】	上席研究員・美術室長　西上　実

【スタッフ】

羽田聡（研究員）

【年度実績概要】

宸翰とひとくちにいっても、内容的には日記・文書・詠草・懐紙・経典から画賛や額字まで多様性があり、また、時代による幅がかなりある。したがって 19 年度は、いわゆる宸翰様が大成した鎌倉時代末期から南北朝時代をとりあげ、光厳天皇から後円融天皇にいたる北朝天皇宸翰の重点的な情報収集、ならびに調査を行った。調査の方針としては、一点ごとに調書を作成し、デジタルカメラで撮影のうえ、本文をテキストデータとして入力した。

調査に基づく研究の成果としては、学校法人立命館および妙満寺より寄託されている重要文化財「法華経要文和歌懐紙（光厳天皇宸翰をふくむ）」の伝来、および作成当初のすがたについて、新たな知見を得たため、その成果を研究会で発表し、論文として公刊した。付け加えておくと、こうした成果を個人コレクターに報告したところ、関連作品を所蔵していたことを知り、これを新たに寄託品として加えることができたことからすれば、収蔵品の増加という博物館の根幹事業たりうる部分にもつながった。

【実績値】

研究会発表　羽田聡「法華経要文和歌懐紙の伝来と復元―立命館本を中心に―」（日本文化史研究会、2007 年 7 月 3 日）　1 回
論文掲載数　羽田聡「法華経要文和歌懐紙の伝来と復元―立命館本を中心に―」（『アート・リサーチ』第 8 号、2008 年 3 月）　1 篇
調査資料点数　約 30 点
調書作成点数　約 30 点
撮影資料点数　約 100 点

【備考】

【書式Ｂ】 施設名 京都国立博物館 処理番号 2139

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	B	A	A	A	A	

備考

本事業は、宸翰を歴史学の見地から見直す、というこれまでの解釈にとらわれない発想や着想に基づいているため、応用性が見込まれる。また、継続的に調査・研究を行うことで、将来的には展覧会の開催という公共性および公開性という側面も視野にいれている。

２．定量的評価

観点	調査資料点数	調書作成点数	撮影資料点数	研究会発表回数	論文掲載数	
判定	A	A	A	A	A	

備考

当館に収蔵される北朝天皇宸翰については、ほぼ調査を終え、詳細な調書を作成した。また、調査したものについては、本文を解読のうえ、テキストデータとして入力し、撮影した画像とともに保管する作業もあわせて行った。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	ほかの事業と兼ね合いながらも、当館に収蔵される北朝天皇宸翰については、ほぼ調査を終え、詳細な調書を作成し、データの収集および蓄積につとめた。寄託品の増加という側面ももちあわせているので、20 年度は、博物館外の関連作品も視野にいれ、調査・研究を継続するようつとめたい。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本事業において、北朝天皇宸翰を重点的に調査するという 19 年度の計画は、ほかの事業と兼ね合いながらも、滞りなく実施されたと考える。20 年度は鎌倉時代末期における持明院統、具体的には伏見・後伏見・花園天皇の宸翰を重点的に調査し、状態の維持につとめるとともに、成果を講座あるいは誌上で公開することも考えるようにしたい。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2140

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財に係る調査研究 ①収集・保管に関する研究 ⅲ収蔵品の調査研究、特別調査、特別展・海外展の事前調査の実施 ・特別展覧会開催に向けての在日ヨーロッパ陶磁の調査研究

【事業概要】

20 年 1～3 月に予定されている特別展覧会『憧れのヨーロッパ陶磁』に向けて、江戸・明治時代のうちに日本へもたらされたヨーロッパ陶磁と、その影響関係下にある東洋陶磁の作品を実地に調査し、特別展覧会の内容充実を図る。

【担当部課】	学芸課工芸室	【事業責任者】	工芸室長　久保智康

【スタッフ】

尾野善裕（主任研究員）、谷口愛子（調査員）、森下愛子（調査・研究支援ボランティア）

【年度実績概要】

東京国立博物館・愛知県陶磁資料館（産業技術総合研究所寄託品）・大阪府教育委員会・京都工芸繊維大学美術工芸資料館・京都府立総合資料館・昭和美術館・大阪市文化財協会が所蔵するヨーロッパ陶磁と関連東洋陶磁を合計 100 件以上調査し、調書を作成した。

調査成果については、特別展覧会に併せて刊行した図録の記述や特別展覧会関連土曜講座に反映させ、成果の公開にも努めた。

【実績値】

調書作成件数　約 100 件

調査成果掲載図書　１冊　（特別展覧会（憧れのヨーロッパ陶磁』図録）

講座開催回数　１回

【備考】

【書式Ｂ】 施設名 京都国立博物館 処理番号 2140

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	B	

備考
日本の開国を象徴する修好通商条約締結 150 周年の本年に、日欧の文化交流を主題とした本調査を実施したことは、時宜の上から適切であったと考えている。

２．定量的評価

観点	調書作成件数	調査成果掲載図書	講座開催回数			
判定	A	A	A			

備考
調査の成果を特別展覧会刊行図録に反映することができた。「京都伝来の阿蘭陀焼」と題して実施した土曜講座では、会場定員の 9 割に達する聴講者を得ることができた。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	年度当初に計画していなかった事業であるが、調査成果を反映させた展覧会では 59,000 人の来館者があり、共催新聞社以外の紙面でも視点を評価する好意的記事が複数掲載された。図録に若干の誤植等があったため、定性的評価の正確性についてＢとしたが、他の展覧会図録と較べれば決して多くはなく、全体評価に関わるほどの瑕疵ではないと考える。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	ヨーロッパ陶磁という一見無関係にも思われるような対象の中にも、京都文化との密接な関わりがあることを示すことができ、中期計画に対して順調に成果をあげることができた。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2141

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管のための調査研究 ｖ修復文化財に関する調査研究 ・敦煌写本の保存と修理

【事業概要】
有形文化財のうち、紙の文化財に関する修理・保管についての国際的な交流を行う。

【担当部課】	学芸課美術室	【事業責任者】	上席研究員・美術室長　西上　実

【スタッフ】
赤尾栄慶（企画室長）

【年度実績概要】
国内外の紙の文化財の修理に関する交流や提言を積極的に行う。

【実績値】
IDP（国際敦煌項目）の国際会議の報告書に小論を発表した。

(論文発表)
・「古文書修復―以李柏文書的修復為中心―」　『融摂与創新：国際敦煌項目第六次会議論文集』99ｐ―100ｐ
2007 年 5 月　中国国家図書館善本特蔵部・英国図書館敦煌項目編　中国・北京図書館出版社

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2141

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	B	A	A	A	

備考
敦煌写本の修理に関しては、国際的な見地から発言を行い、指導も行っている。

２．定量的評価

観点	論文掲載数					
判定	A					

備考
敦煌写本の研究・修理などでは世界最大かつ最も権威のある組織の国際敦煌項目（IDP）の報告書に掲載された。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	敦煌学の研究者や保存修理部門の関係者から高い評価を得た。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	今後とも、紙の文化財の修理に関する指導及び提言を行い、国際交流の機会があれば、積極的に参加する。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 2142

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ②公衆への観覧を図るための研究 ⅵ南都諸社寺等に関する計画的な調査研究 １）南都諸社寺等に関する計画的な調査研究等を実施

【事業概要】

近隣社寺へ奈良国立博物館に対する積極的な協力の働きかけを行って所蔵文化財の調査研究等を行い、その成果を事業（展示等）に反映させる。

【担当部課】	学芸課	【事業責任者】	学芸課長　梶谷亮治

【スタッフ】

奈良国立博物館学芸課上席研究員鈴木喜博他 13 名

【年度実績概要】

・室生寺、海住山寺、現光寺など近隣社寺から新規に寄託品を受け入れ、平常展の活性化につなげた。
・東大寺戒壇堂四天王像（国宝）及び法華堂執金剛神像（国宝）の彩色調査、X 線調査に基づく構造分析・作図、成分分析などを継続的に進めてより精度の高い資料を集積し、成果公刊に向けた準備を行った。
・特別展「神仏習合－かみとほとけが織りなす信仰と美」、同「美麗　院政期の絵画」出陳の近隣社寺所蔵品を事前調査（前者の実施は前年度）し、その成果を展示及び展覧会図録に反映した。
・春日若宮おん祭に関する文化財調査を実施し、その成果を特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」に反映した。

【実績値】

・社寺調査対象数　約 20 件

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 2142

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考

南都諸社寺等に所蔵される文化財の調査は、奈良に立地する当館の基本的不可欠な作業の一つであると位置づけられる。こうした調査を通じて、近隣社寺との交流・信頼関係が一層深まりつつあり、今後の当館の企画・事業に好影響が期待される。

２．定量的評価

観点	社寺調査数					
判定	A					

備考

展覧会企画に沿った調査研究が中心になっており、その点では必要十分な条件を満たしている。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	室生寺・海住山寺・現光寺などから新たな寄託品を受け入れたことで平常展が一層活性化した。東大寺戒壇堂四天王像（国宝）及び法華堂執金剛神像（国宝）の調査は 20 年度にその成果を公刊できる予定である。特別展「神仏習合」、同「美麗　院政期の絵画」に出陳した近隣社寺所蔵品の事前調査の成果は展示及び展覧会図録に反映され、高い評価を得た。春日大社の若宮おん祭に関する文化財調査の成果は特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」に反映された。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	仏教美術と奈良の文化を調査研究展示活動の主眼としている当館にとって、近隣社寺の宝物調査は必須の事業である。19 年度も東大寺や春日大社を初めとする社寺の宝物調査を行うことにより、展覧会を活性化させ、学術的成果をあげることもできた。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 2143

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ⅱ日本及び東洋全般にわたる文化財の調査研究 ２）大和古代寺院出土遺物の研究を帝塚山大学考古学研究所との共同研究として実施

【事業概要】

以前に奈良国立博物館主体で発掘調査を行った斑鳩地域の古代寺院の遺物について、分類、実測図作成などの整理作業を通じた出土遺物の研究を目的として実施する。

【担当部課】	学芸課工芸考古室	【事業責任者】	資料室長　吉澤　悟

【スタッフ】

岩戸晶子（奈良国立博物館学芸課教育室）、森郁夫（帝塚山大学教授）、甲斐弓子（非常勤講師）、ほか大学院生 3 名

【年度実績概要】

法隆寺賢聖院等出土の瓦器埦片、瓦片、陶磁器片などの洗浄及び接合作業を行い、加えて可能な限り実測図の作成を行った。さらに、瓦器埦に関しては器形による分類作業を通してこれら出土器の年代判定の基準を得るための試みを行った。

【実績値】

整理作業を行った遺物はコンテナ 13 箱（破片が多く数量は数えるのは不可能）

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 2143

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
瓦器の研究は、昨今の中近世土器研究において注目されているもので、特に中世法隆寺の歴史に直接関わる資料として大きな学術的価値をもつ。その整理に着手したことは向後研究の方向性を定めるためにも有意義であると思われる。

２．定量的評価

観点	資料整理数					
判定	A					

備考
埋蔵文化財行政で処理する量に比べれば、量としては多くないものの、博物館と大学とが教育的配慮のもとに行う調査研究としては適切かつ有益な作業であった。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	法隆寺の中世の土器について、まだ未報告である資料を中心に整理作業を行った。帝塚山大学の学生が実際の作業を担当し、効率よく作業を遂行できた。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本事業は奈良国立博物館で初めて外部との共同研究を行ったもので、長年、整理作業が行われなかった遺物について、外部との協力によって完遂した事業である。本事業の成果を公表することで、新たなデータを提示でき、研究に寄与できると考えられる。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 2144

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ②公衆への観覧を図るための研究 ⅷ仏教美術の光学的調査研究 ３）仏教美術の光学的調査研究（東京文化財研究所との共同研究）

【事業概要】

東京文化財研究所との間で締結した協定書に基づき､両機関の共同研究として仏教美術作品の光学的調査を実施し、使用材料、製作過程等について検討するとともに、高精細デジタルコンテンツを作成する。

【担当部課】	学芸課	【事業責任者】	学芸課長　梶谷亮治

【スタッフ】

奈良国立博物館：中島博（情報サービス室長）、稲本泰生（企画室長）、宮崎幹子（研究員）、谷口耕生（研究員）

東京文化財研究所：山梨絵美子（文化財アーカイブズ研究室長）、早川泰弘（分析科学研究室長）、皿井舞（研究員）、城野誠治（専門職員）

【年度実績概要】

奈良国立博物館において国宝吉祥天画像（奈良・薬師寺蔵）および国宝聖徳太子及び天台高僧像（兵庫・一乗寺蔵）についてそれぞれ、①高精細デジタルカメラによるフルカラー画像の作成、②可視光励起による蛍光画像の作成、③反射近赤外線画像の作成、④透過近赤外線画像の作成、⑤蛍光エックス線分析、⑥軟エックス線照射による透過画像の作成、等の調査を実施した。さらに国宝吉祥天画像については、薬師寺・東京芸術大学・東京国立博物館所蔵の明治・大正期における模写の調査を実施するとともに、昭和 32 年の修理記録を精査し、修理以前の状態および修理時の改変点について確認した。これらの成果に基づき、奈良国立博物館と東京文化財研究所においてそれぞれ研究会を数回開催し、成果発表に向けての検討を重ねた。

国宝聖徳太子及び天台高僧像の調査風景

【実績値】

作品調査実施回数　2 回（それぞれ 1 週間実施）
研究会開催件数　3 回（奈良国立博物館で 2 回、東京文化財研究所 1 回）
論文掲載数　2 本（報告書「国宝 麻布著色吉祥天像」）
調査作品数　2 件 4 点
・国宝　吉祥天画像（薬師寺蔵）　1 点
・国宝　聖徳太子及び天台高僧像のうち善無畏・慧文・灌頂像（一乗寺）　3 点

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 2144

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	B	A	

備考

古文化財、特に著色絵画に対する高精細デジタル撮影、蛍光エックス線撮影をはじめとする光学的調査はこの共同研究を嚆矢としており、今後の調査法のモデル的ケースと位置づけられる。またその結果従来の見解を書き換える成果も期待される。

２．定量的評価

観点	調査実施回数	研究会開催数	論文掲載数			
判定	A	B	A			

備考

国宝吉祥天画像の調査研究の成果として、詳細な画像データ、蛍光エックス線調査データ、画像についての美術史的見解を考察した論文等を掲載した報告書を出版することが出来た。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	最新鋭の光学機器を用いた調査の実施により、従来は不明だった文化財の材質や構造を明らかにすることができ、また文化財の保存・修理を将来行う上での指針となる詳細な現状記録を残すことができた。特に 19 年度は天平仏画と平安仏画の代表作について詳細な調査を実施し、共同研究のメンバー以外にも当該作品の修理に携わった研究者などを招聘して調査を実施することができた。ただし調査データの解析にあたっては、未だデータの蓄積が十分でないために判断を保留せざるを得ない部分もあり、聖徳太子及び天台高僧像全 10 幅のうち未調査幅を中心に 20 年度以降も同様の調査を重ねていくことで、分析の精度を高めていきたい。また調査前・調査後の検討会をより綿密に行う一方、現在は１週間程度かかる１回あたりの調査実施期間を圧縮して作品への負担を軽減したい。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業は、その進捗度、従来の水準を維持しつつ比較的堅調に実現できたと考える。調査研究については、今後もこのペースを維持しつつ、目録作成やデータベースの公開に力を注ぎたい。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 2145

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ⅱ日本及び東洋全般にわたる文化財の調査研究 ４）仏教美術写真収集及びその調査研究

【事業概要】

館蔵品および館外から借用した仏教美術作品を新規撮影し、これを登録管理し、必要に応じて利用できる体制を整える。特にカタログや美術書では見ることのできない作品の側面、裏面、内側などの撮影を多数行い、制作技法や構造理解に資する貴重な写真を蓄えることを主要な目標とした。

【担当部課】	学芸課資料室	【事業責任者】	資料室長　吉澤　悟

【スタッフ】

森村欣司（奈良国立博物館学芸課資料室員）

【年度実績概要】

新規に撮影したカラーポジおよび白黒フィルムを数多く蓄積することができた。その中には、移動の困難な仏像の多面的な写真やＸ線写真など貴重な資料が多く含まれている。また、劣化しているポジフィルムの再撮影、ガラス乾板のデジタルデータ化作業も同時に推進した。ガラス乾版は、過去に奈良国立博物館が行った三重県朝熊山経塚の貴重な発掘現場写真が含まれており、学術的な活用が期待されるものも少なくなく、新規撮影の写真は、データベースに登録し、検索利用を可能とした。さらに別途、公開用台紙を作成し、一般の閲覧に供している。

【実績値】

撮影した写真枚数は以下の通り

カラーポジ（４×５）　3,407 枚、　カラー35 ㎜　423 枚

モノクロ（４×５）　3,158 枚、　Ｘ線　147 枚

公開台紙配架数　カラー　679 枚、モノクロ　1159 枚

【備考】

【書式Ｂ】 施設名 奈良国立博物館 処理番号 2145

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	B	B	A	A	A	

備考
この研究作業は、継続性の高いものであり、短期的な画期性を期待すべきでなく、間断なく質の高い資料を蓄積できた点を評価したい。

２．定量的評価

観点	撮影数					
判定	A					

備考
写真枚数は、必ずしも多ければ良いわけではないが、質や継続性を勘案しても、19 年度は十分な量をこなしていると考える。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	過去 5 年間の平均撮影枚数は約 7 千枚であるのに対して、19 年度はこれを越えている。撮影枚数は目標数値とすべき性格ではないものの、十分な実績であると言える。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	昨今の写真デジタル化の勢いを鑑みた場合、機材と人材の確保を含めた長期的展望が必要であると思われる。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 2146

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ②公衆への観覧を図るための研究 ⅶ我が国における仏教美術の展開と、中国・韓国の仏教文化が及ぼした影響の研究 ５）我が国における仏教美術の展開と、中国・韓国の仏教文化が及ぼした影響の研究

【事業概要】
仏教美術の専門館であり、日本仏教美術に関するもののみならず、広くアジアを視野に入れた展示を構成している奈良国立博物館の特長に鑑みて、中国や朝鮮半島における文化財とわが国の文化財の比較研究を実施する。

【担当部課】	学芸課	【事業責任者】	学芸課長　梶谷亮治

【スタッフ】
奈良国立博物館学芸課上席研究員鈴木喜博他 13 名

【年度実績概要】
・中国上海博物館における仏教美術の調査、碑林博物館及び陝西歴史博物館における唐代文物の調査、敦煌莫高窟及び楡林窟における壁画の調査、蘭州博物館及び麦積山における仏教美術の調査等
・中国河南博物院における仏教美術を中心とした調査
・韓国国立慶州博物館における新羅文物の調査、国立中央博物館における三国時代から高麗時代仏教美術を中心とした調査等
・学術交流協定を結んでいる中国・上海博物館に 1 名、同・河南博物院に 2 名、韓国・国立慶州博物館に 1 名を派遣した。また上海博物館から 3 名、河南博物院から 2 名、中国国家博物館から 2 名、慶州博物館から 2 名の研究員を受け入れた。
・特別展「神仏習合－かみとほとけが織りなす信仰と美」では、中国・韓国における神仏習合の様相にも注目して中国で制作された関連作品の展示を行い、展覧会図録にも調査研究の成果を反映させた。
・特別展「第 59 回正倉院展」では、東アジア文化圏の中で正倉院宝物の意義を考察し、展示及び展覧会図録に反映した。また正倉院宝物の源流をシルクロードに探る取材のため研究員を派遣し、パネル展示や連載記事に協力した。
・20 年度春季特別展「天馬－シルクロードを翔ける夢の馬－」開催のため中国・米国・英国・イタリアに各 1 名の研究員を派遣し、中国で制作された関連作品を中心に、出陳に向けた事前調査・資料収集を行った。

【実績値】
研究員の派遣　6 人　　研究員の受入　9 人
研究発表回数　４回　　図録作成数　　１部（正倉院展）

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 2146

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
　我が国の仏教美術を研究する上で、中国・韓国をはじめとする海外の仏教文化研究は必要不可欠である。そのために数箇所の研究機関と学術交流協定を基軸として効率的に調査研究を進め、その成果を当館の特別展等に反映させるように努めている。

２．定量的評価

観点	研究員派遣人数	研究員受け入れ人数	研究発表回数	図録作成数		
判定	A	A	A	A		

備考
　展覧会企画に沿った調査研究ができ、その点では必要十分な条件を満たしている。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	上海博物館（中国）・河南博物院（中国）・国立慶州博物館（韓国）の三館と研究員の交流を行うことで、広くアジア諸国を視野に入れた調査研究を行うことができた。特別展「神仏習合」では、神仏習合をわが国だけの現象ととらえることなく、中国で制作された関連作品の展示を行い、高い評価を得た。「第 59 回正倉院展」においても、正倉院宝物の源流をシルクロードで調査した成果をパネル展示などに活用した。また中国・米国・英国・イタリアでの調査は、20 年度特別展「天馬」の内容を充実させることになった。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	わが国とアジア諸国との文化交流に関する文化財の調査研究は次第に蓄積を増しており、こうした成果によって 20 年度特別展「天馬」の内容を充実させることができた。21 年度以降も中国との交流をメインテーマとする複数の特別展を計画中で、今後も引き続き調査研究を続けていく必要がある。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 2147

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ⅲ収蔵品の調査研究、特別調査、特別展・海外展の事前調査の実施 ６）当館所蔵品についての調査研究（客員研究員）

【事業概要】

従来からの収蔵品について継続的に調査研究を実施する。なお、新収蔵品については具体的な公開等を見越して重点的にこれを行う。調査研究の成果は、展覧会、印刷物、インターネット等を通じて公表し、広く斯界の学術的発展に資する。

【担当部課】	学芸課	【事業責任者】	学芸課長　梶谷亮治

【スタッフ】

奈良国立博物館学芸課上席研究員鈴木喜博他 13 名

【年度実績概要】

・18 年度に寄贈を受け、新収蔵品となった個人コレクションの仏教工芸品に対する調査研究を重点的に行い、その成果を特別陳列「古玩逍遥－服部和彦氏寄贈仏教工芸展」で公表した。展示に併せて制作した図録は特別陳列の図録であるとともに、当該コレクションの総合目録としても有用であると高評価を得た。
・17 年度に購入し、新収蔵品となった個人コレクション整理・調査研究を進め、その成果を平常展考古部門の特集展示「奈良で甦る縄文の世界－小野忠正コレクション」に反映させた。
・五條市猫塚古墳出土品に関して、細かな観察に基づく再検討を実施した。
・特別展「神仏習合－かみとほとけが織りなす信仰と美」、同「美麗　院政期の絵画」開催に向けて行った関連収蔵品調査（前者の実施は 18 年度）の成果を展示及び展覧会図録に反映した。

【実績値】

図録作成数　　１部（特別陳列古玩逍遥）

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 2147

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考

収蔵品の調査研究は各部門による定期的継続的な点検調査を通して、平常展をはじめとして新たな成果を公開している。また、新収蔵品等についても集中的な調査を実施しており、この成果を公開しているのは前述の通りである。

２．定量的評価

観点	図録作成数					
判定	A					

備考

調査研究成果について、上質の図録として発表することができた。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	新収蔵品となったふたつの個人コレクションの調査研究を進め、特別陳列「古玩逍遥」及び特集展示「奈良で甦る縄文の世界」に反映させた。前者の図録は当該コレクションの総合目録としての意義も有する。また事前調査としての様々な館蔵品調査の成果は、特別展「神仏習合」及び特別展「美麗　院政期の絵画」に反映され、高い評価を得た。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	従来からの収蔵品及び新収蔵品についての調査が継続的に実施され、その成果は評価の高い展覧会を生み、また展覧会図録等の出版物やインターネット等を通じて公表された。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 2148

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ⅱ日本及び東洋全般にわたる文化財の調査研究 ７）統一新羅期の道具瓦集成（科学研究費補助金）

【事業概要】

日本の瓦生産において大きく影響を与えた朝鮮半島の様相を日本の様相と比較検討すべく、今回は道具瓦－鬼瓦と鴟尾－を取り上げた。これまで文様研究ばかりであった統一新羅期の鬼面瓦について集成を行い、データを採取して、基礎的資料を作成する。

【担当部課】	学芸課	【事業責任者】	研究員　岩戸　晶子

【スタッフ】

なし

【年度実績概要】

・11 月に韓国国立慶州博物館・中央博物館へ赴き、調査協力の依頼を行ったうえ、各担当者と具体的な調査の進め方について打ち合わせをおこなった。
・12 月には中央博物館所蔵の鬼瓦資料について調査を行なった。
・2 月・3 月には韓国国立慶州博物館で主に雁鴨池遺跡出土の鬼瓦について悉皆調査に着手し、出土したうちの約 1／3 についてデータ採取、実測図作成などの作業を完了した。

【実績値】

韓国国立中央博物館では 15 点、韓国国立慶州博物館では 126 点の調査を実施した。

【備考】

【書式Ｂ】 施設名 奈良国立博物館 処理番号 2148

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
韓国における古代瓦の考古学的研究はまだ端緒についたばかりであり、特に道具瓦については殆ど行われて折らず、研究テーマ自体もユニークである。韓国国立博物館とのこれまでの学術交流や、当館が国立慶州博物館で開催した展覧会担当者として培った人的つながりから、今回の調査研究が可能となった。

２．定量的評価

観点	調査点数					
判定	A					

備考
韓国国立中央博物館では年間限度点数を調査し、韓国国立慶州博物館でも当初予定を上回る点数の調査を行ったため。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	海外での調査は困難な問題が多いが、現在まで韓国側と適宜相談しながら順調に調査を進めている。20 年度は国内にある統一新羅資料も調査を進めたい。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	日本との比較等を韓国研究者と意見交換しながら進めていく必要があり、それによって考古学的成果だけでなく、人的交流の成果も期待できる。 また、学史的に貴重でありながら、これまで未公表であった資料の公開にも寄与し、将来的には当館の展示にもその成果を反映させることが期待できる。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 2149

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ⅱ日本及び東洋全般にわたる文化財の調査研究 ８）古墳時代中期における対外交渉の特質と地域圏の形成・展開過程（科学研究費補助金）

【事業概要】

本研究は、日本の国家形成をみる上で基点となる古墳時代中期に焦点をあて、外来的な文化要素を徹底して検討することを目的としている。ケース・スタディとして奈良県五条猫塚古墳の出土品を選定しており、その再整理と詳細検討を行う中から生じた問題を、他の地域や遺跡出土の資料に当てはめ、新たな視点から外来的要素の発現メカニズムを探る計画である。

【担当部課】	学芸課	【事業責任者】	資料室長　吉澤　悟

【スタッフ】

研究分担者：岩戸晶子（当館　工芸考古室員)、魚津知克（追手前大学講師）

研究協力者：岩本崇（日本学術振興会ＰＤ)、加藤一郎（宮内庁書陵部)、阪口英毅（京都大学文学部)、川畑純（京都大学大学院)、初村武寛（京都府立大学大学院生）

【年度実績概要】

19 年度は、まず五条猫塚古墳の出土品について、実測図の作成とＸ線撮影をすすめた。金銅装の甲冑や帯金具、鉄製の挂甲、鉄鏃、鍛冶工具などは当古墳の特徴的な遺物であり、従来よりこれらに外来的要素が強くみられると評価されていたものである。今回の作業にあたっては、甲冑や鉄製武具、埴輪などそれぞれの遺物を専門的に研究している大学研究者、大学院生の精鋭を集めてチームを組み、整理作業をすすめながら、各メンバーと資料の性質に関する討論を重ねた。

【実績値】

五条猫塚古墳の武具、農耕具、埴輪ほかの実測図、計 456 枚

同　Ｘ線撮影　214 枚

小検討会　期間中 2 回、全体会議 1 回開催。その他、韓国人研究者を交えての討論を 1 度行った。

【備考】

【書式Ｂ】 施設名 奈良国立博物館 処理番号 2149

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考

近年の韓国研究者による古代日韓交流研究会の資料には五条猫塚古墳の資料が引用されている。今回の整理作業で見出された情報はこれを補完したり部分修正する強力なものがある。海外からも嘱望されている研究であり、時宜や発展性に叶った内容と思われる。

２．定量的評価

観点	資料化数	検討会				
判定	A	A				

備考

単年度で行った研究用の実測や撮影の量は、これまでに例のない数である。検討会は、夏期に野外調査ぬ従事するメンバーが多い都合上、限られた日数しか確保できなかったが、韓国研究者との意見交換もでき、有意義であったと考える。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当研究の初年度の成果としては、一次資料を十分に獲得したという点で相応の評価が得られると思われる。20 年度はさらにこれを継続する一方、内外メンバーで検討する機会をさらに増やし、情報の精度と的確性を確保することが望まれる。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究は、古代東アジアの対外交流史において重要な位置を占めるものと考えている。特に仏教美術を専門とする当館の活動においては、中国や韓国からもたらされた外来文化の受容形態を考える本研究は基幹的な役割を果たすはずである。本研究は 3 ヶ年の時限をもってなされるが、その成果は中・長期的な活動において発展的に継承されるべき内容である。19 年度、精鋭メンバーを招集し、重要な基礎情報を蓄積できたことは、向後の発展性につながる大きな成果であり、初年度実績としては「順調」であると言い得るであろう。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 2150

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（5）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ⅲ収蔵品の調査研究、特別調査、特別展・海外展の事前調査の実施 ・特別展の事前調査

【事業概要】

20 年 4 月開催予定の特別展「天馬－シルクロードを翔ける夢の馬－」の出陳作品および企画上の重要作品について、国内外の作品調査を行う。

【担当部課】	学芸課資料室	【事業責任者】	資料室長　吉澤　悟

【スタッフ】

奈良国立博物館学芸課工芸考古室長　内藤　栄

奈良国立博物館学芸課企画室員　永井洋之

【年度実績概要】

世界各地の博物館やコレクター所蔵品、出土品などから天馬に関係する作品を網羅的に調べ上げ、諸専門家たちとの討議や海外調査などを行い、出陳可能作品の選定と出品交渉を行った。

【実績値】

調査の成果は特別展「天馬」の出陳作品に反映されており、また途中経過的な知見は「奈良国立博物館だより」に寄稿している。

特別展「天馬」の出品件数は 164 件、うち海外作品は 31 件を占める。

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 2150

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	B	A	

備考
従来、あまり研究の行われていない分野について、現存作品を前提に調査を行った。展覧会のためのみならず、美術考古部門の研究においても有益な資料を獲得し得たと考える。

２．定量的評価

観点	出品件数					
判定	A					

備考
天馬に絞った作品を集めることは、時代、国、作品材質やテーマなどが多岐にわたるため大変な作業を伴ったため。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	天馬のような特定の意匠を追って諸外国から作品を集める展覧会は、これまでに例がなく、企画としてもユニークである。一方、経済性の面では限界があることも認識された。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	館で独自に展覧会を企画する力があるかどうかは、博物館のあり方や将来性を問う一つの指標であると思われる。調査を行い、その成果を展覧会に反映させるプロセスを踏んだ当該事業はおおむね目標を達成したと思われる。また、仏教美術以外の面でも展覧会を企画・開催できることを示した点で、当館の裾野を広げることに繋がったと思われる。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2151

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ②公衆への観覧を図るための研究 ⅸ日本とアジア諸国との文化交流に関する文化財の調査研究 １）日本とアジア諸国との文化交流に関する調査研究

【事業概要】

JICA 草の根技術協力事業「文化財の保存と観光資源としての利活用」として、タイにおいて、文化財の保存活用センターとしての役割をになう博物館としての立場から専門家派遣、研修生受入を実施。

【担当部課】	企画課	【事業責任者】	企画課長　伊藤嘉章

【スタッフ】

今津節生（環境保全室長)、原田あゆみ（企画課研究員)、赤司善彦（展示課長）

【年度実績概要】

九博は JICA の草の根技術協力事業として「文化財の保存と地域の活性化」をテーマにタイ・バンコク国立博物館と共同研究を行った。7/23～31 に研究員 3 名を派遣し、日本での文化財の保存と、地域活性化としての文化財活用について発表を行った。9/2～22 にはバンコク国立博物館の研究員３名を受け入れ、日本の博物館における文化財保存と平常展示、特別展示による活用の状況についての研修を行った。

この事業は 20 年度以降も継続され、その成果を明らかにするものとして、数年後にタイにおいて日本文化を紹介する展覧会の開催を計画。その予備調査としてタイ・バンコクの博物館・美術館の状況調査を実施した。

【実績値】

7/23～31 タイへの研究員 3 名　派遣

9/2～22　バンコク国立博物館の研究員 3 名を受け入れ。研修の実施。

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2151

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考

本事業は、文化財が持つ様々な可能性という面に着目し、その保存と活用が単に文化財を守るという意味を超えた役割を果たしうるということを示すものである。日本国内で行うこうした文化財の「活用」を交流によって伝えることが、アジア諸国における文化財行政について新たな展開を促すものとなる。

２．定量的評価

観点	招聘者数	滞在日数				
判定	A	A				

備考

招聘は文化財保存・活用の現場に携わる方々とし、実質的な研修を行った。その滞在日数も実質的かつ参加型の研修を多方面から行いうるものとして 3 週間弱という日程とし、効果を挙げている。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財の保存と活用というテーマ設定は、従来の枠を越えた取り組みであり、国立博物館が海外に対して大きな貢献をするひとつの道が出来上がった点は大きく評価される。20 年度以降については、これを進めるとともに、その成果を両国での開催の展覧会によって形としていくことを目指すことが重要と考えられる。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	博物館が主体となる文化財を通した交流では、従来は一方的な方向となることが多かったのに対して、双方向を企図し、それに向けて順調に進展をしつつある。今後については、文化財保存と活用を示すための展覧会の実施等に向けて、博物館以外の協力体制をも模索しながら、より大きな成果を目指すものとする。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2152

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ｖ修復文化財に関する調査研究 ２）文化財の材質・構造等に関する共同研究（客員研究員）

【事業概要】

絵画などの平面文化財について､科学情報を持った超高精細デジタル画像の取得と解析に関する共同研究を京都大学との共同で実施した（JST 地域研究開発資源活用促進プログラム)。

彫刻・漆器・陶磁器などの立体的な文化財について、大型Ｘ線ＣＴスキャナを用いた文化財の保存・活用に関する構造調査を実施した（科学研究費基盤研究Ｃ）。

【担当部課】	博物館科学課	【事業責任者】	環境保全室長　今津節生

【スタッフ】

鳥越俊行（博物館科学課研究員）

【年度実績概要】

超高解像度大型スキャナ画像の取得と高解像度データを活用した教育番組製作を行った。作品は南蛮図屏風を素材にして「ぞろぞろじろじろ」と題して子供が興味をもつ番組作りを行い、博物館に設置した超高精細デジタルシアター（ｼｱﾀｰ 4000）で一般公開した。また、共同研究機関である京都大学から九州国立博物館内に超高解像度大型スキャナを移設して機器の立ち上げを行った。

大型Ｘ線ＣＴスキャナを用いて、九州国立博物館が所有する文化財、特別展で借用した文化財、修復する文化財を中心として、断層像、三次元像などの画像データを取得して文化財の構造調査を実施した。さらに、文化財保存への多角的活用法について検討した。

【実績値】

京都大学から超高解像度大型スキャナを移設して機器の性能および安全検査を実施した。また、京都大学の指導のもと 4 点の絵画作品について高精細画像を取得した。

大型Ｘ線ＣＴスキャナを用いて、展示・収蔵品を中心に、35 件の文化財について非破壊構造調査を実施した。

また、多様な材質の測定が行えるように装置の改良を行った。

なお、保存修復学会には約 800 名の研究者が参加した。また、『進化する博物館』にてパネル展示した。参加者は約 10,000 人であった。本館シアター4000 にて常時番組を公開している。

大型Ｘ線ＣＴスキャナ撮影風景

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2152

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	B	A	

備考

最先端デジタル計測技術の文化財への応用として、高い独創性・正確性・発展性を有し、十分に成果が認められる。また、デジタル記録を進めることで将来の利活用が大いに期待できる。効率性については概ね成果が認められるが、今後一層の設備的投資ををしながら進めてゆきたい。

２．定量的評価

観点	高精細画像取得数	非破壊構造調査数	保存修復学会参加者数			
判定	A	A	A			

備考

大型Ｘ線ＣＴスキャナを中心に非破壊構造調査の運用を効率的に開始した。超高解像度大型スキャナについては性能および安全性の検査を中心に実施した。保存修復学会（800 人参加）にて研究発表した。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	大型 X 線 CT 装置、精密三次元計測装置、超高精細大型スキャナなどによって取得した科学情報を持った高精細デジタル情報は、文化財の保存と活用に極めて有効な方法であり、本研究の独創性・適時性は高く発展性も大きい。しかし、高精細デジタル化技術は最新の高度技術であり、目的達成のためには他の研究機関との共同研究が不可欠である。これまでも、京都大学工学部との共同研究を進めているが、20 年度はさらに共同研究を深化させ、効率的・正確性を追求したな高精細デジタル情報の取得と活用をおこなえるように改善を進めてゆきたい。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	文化財の材質・構造の研究に高精細デジタル技術を活用して効率的・正確性を追求することは今後の文化財保存や展示の向上にむけた重要課題である。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2153

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ｖ修復文化財に関する調査研究 ３）博物館における文化財保存修復に関する研究（客員研究員）

【事業概要】

当館文化財保存修復施設の機能と利点を活かし、西日本地域の大学で文化財保存修復を学ぶ学部生・大学院生を対象とした研修を実施する。

【担当部課】	博物館科学課	【事業責任者】	研究員　志賀智史

【スタッフ】

篠崎悠美子（別府大学教授）、藤田励夫（保存修復室長）、松尾かをる（研究補佐員）、田畔徳一（国宝修理装コウ師連盟九州支部長）、鈴木　裕（国宝修理装コウ師連盟九州支部技師長）、中村隆博（国宝修理装コウ師連盟九州支部技師）

【年度実績概要】

別府大学篠崎悠美子教授を客員研究員とし、保存修復施設を利用し、地域の大学との協業を果たすことを目的とした短期インターンシップ研修プログラムを17,18年度の実績を踏まえ検討、改善した。

成果は8月7日から5日間にわたり国宝修理装こう師連盟の協力を受け、別府大学と吉備国際大学の学生4名に対して、装こう技術に関する短期インターンシップ「文化財保存修復研修」として開催した。

19 年 8 月 20 日から 24 日までの 5 日間に、障壁画下貼り作製に関する講義と実習を通して、文化財保存修復についての理解と研鑽を深める。

【実績値】

研修開催実績	17 年度より 19 年で 3 回目	
研修参加学生	岡山吉備国際大学	2 名
	別府大学	2 名

研修風景

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2153

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考

文化財を伝えるため、修復技術者の育成は必要不可欠である。その内容は公共性が高いため、適時性と発展性､効率性はA判定とした｡このような研修を行っている機関は極めて少ないため独創性はA判定とした。今年度で３回目となるため、継続性はA判定とした。大学で文化財保存の講義のある中四国九州の大学に募集を行っており、正確性はA判定とした。

２．定量的評価

観点	参加者数					
判定	A					

備考

参加者数は少ないものの、実習形式であり適切な数である。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	少数の研修生で毎年継続することに意味のある事業である｡20 年度以降も実施する予定である。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	博物館における文化財保存修復のあり方について、一定の方向性が示せたのではないかと考える。対象を大学・大学院で文化財保存修復を学ぶ学生に限定すべきかどうかは 20 年度以降の検討課題である。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2154

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ⅱ日本及び東洋全般にわたる文化財の調査研究 ４）彩色水浸文物の保存科学的研究　―中国江蘇省泗水王陵出土文物の保存―（科学研究費補助金）

【事業概要】

中国江蘇省泗水の前漢墓から発見された彩色水浸文物の保存を通して、文化財保存に関する国際的な研究交流と技術開発を行うと共に、文化財保存技術に関する日本の技術を中国に移転することで、九州国立博物館による国際的な研究交流に貢献する。

【担当部課】	博物館科学課	【事業責任者】	環境保全室長　今津節生

【スタッフ】

三輪嘉六（館長）、鳥越俊行（博物館科学課研究員）、西浦忠輝（教授）、伊藤幸司（研究員）、沢田正昭（教授）、ANDRAS　MORGOS（教授）、張　金萍（研究員）

【年度実績概要】

南京博物院（中国側）では実際に文物の保存処理をおこない、九州国立博物館では彩色顔料の材質分析や彩色技法の研究、サンプルによる保存処理を実施した。特に、世界的に見ても例がない赤・白・黄・青などの彩色を残した泗水王陵出土水浸木製文物の保存について研究開発をおこなった。

また、本研究の成果を国際博物館学会文化財保存会議、水浸考古遺物保存部会 International　Council of Museums、Committee for Conservation、 Wet Organic Archaeological Materials（ICOM-CC, WOAM）で研究発表した。

【実績値】

学会研究発表

国内学会　　文化財保存修復学会第 29 回大会　1 回

国際学会　　ICOM-CC, WOAM　　1 回

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2154

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	B	A	

備考
文化財保存を通じた具体的な国際貢献として国際性・適時性に富む研究であり、中国側の評価も高く十分な成果が認められる。研究成果の技術移転を通じて今後の発展性も高く、十分に成果が認められる。

２．定量的評価

観点	学会発表回数					
判定	A					

備考
世界の専門研究者が集まる国際博物館会議文化財保存水浸考古遺物部会で研究発表を行った（ｱﾑｽﾃﾙﾀﾞﾑ、150 名参加)。また、国内では文化財保存修復学会で研究発表を行った（静岡、600 名参加)。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	発見間もない貴重な文化財を日中の研究協力によって保存方法を開発し技術移転しようとする点において、適時性、独創性、発展性において目標を達成した。実際の保存処理は中国で実施しているので今後はさらに効率的な研究をおこなえるように改善を進めてゆきたい。20 年度は中国側研究者を短期間招聘して、さらに効率的な研究を実施したい。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通りに実施されており当該年度計画を 100%達成して順調に研究を進めている。 本研究は文化財の保存技術の向上や国際貢献に結びついた研究として、中期計画にそった研究内容である。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2155

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ⅱ日本及び東洋全般にわたる文化財の調査研究 ５）弥生時代後期～古墳時代の墳墓大量出土ベンガラについての基礎的研究（科学研究費補助金）

【事業概要】

弥生時代後期～古墳時代の墳墓から大量に出土するベンガラについて、形態分類や組成分類を行い、編年と地域性を検討することを目的として実施する。

【担当部課】	博物館科学課	【事業責任者】	研究員　志賀智史
【スタッフ】 なし			

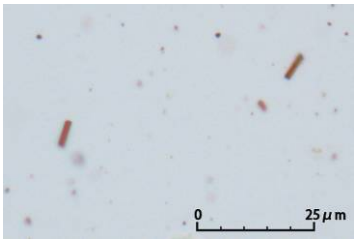
【年度実績概要】

19 年度は近畿地方と東海地方他の教育委員会を訪問し、該当資料の調査を行った。採取した資料は約 30 遺跡分となった。18 年度の調査結果と総合すると、近畿地方北半と九州地方北部では使われていたベンガラの種類が大きく異なることが明らかとなった。この成果は今年度の発掘調査報告書として纏めている。また、20 年度の日本文化財科学会第 25 回大会で研究発表する予定である。

【実績値】論文 2 件

・志賀智史 2008「中島笹塚古墳群出土赤色顔料とその関連資料の微視的・科学的調査」『東谷・中島地区遺跡群 9　中島笹塚古墳群・中島笹塚遺跡(1ー8 区)』財団法人とちぎ生涯学習文化財団　埋蔵文化財センター

・志賀智史 2008「塩田北山東古墳出土赤色顔料の微視的・科学的調査」『塩田北山東古墳発掘調査報告書』神戸市教育委員会



近畿地方で特徴的なパイプ状ベンガラ(神戸市塩田北山東古墳第1主体出土)

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2155

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考

既発掘の資料を用いることから適時性はＡとした。これまで同様な視点での分析調査例はほとんど無く、今後東日本や諸外国の事例との比較検討も必要であることから独創性と発展性はＡとした。文献をもとに各地の資料を効率的に収集し調査を行っていることから効率性と正確性はＡとした。

２．定量的評価

観点	論文発表数					
判定	B					

備考

年間の論文数としては平均的な数である。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	機器分析結果を元に考古学的な検討をおこなうという独創的な研究であり、今後関連資料の調査や諸外国の事例との比較研究が可能などの発展性が認められるためＡとした。20 年度以降も関連する資料の調査を行う予定である。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	19 年度の成果をさらに発展させるため、20 年度以降の科学研究費補助金についても継続して申請したい。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2156

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ⅱ日本及び東洋全般にわたる文化財の調査研究 ６）室町時代の中国文物の受容に関する調査研究（科学研究費補助金）

【事業概要】

室町時代の美術制作に大きな影響を与えた中国から請来された文物に対する認識の基盤を解明することを目的として実施する。

【担当部課】	企画課	【事業責任者】	研究員　畑靖紀

【スタッフ】

なし

【年度実績概要】

室町時代の中国文物に対する認識の基盤を解明しようとする本調査研究では、当時の中国文物受容の枠組みを規定した足利将軍家の評価・意義付けを主要な課題として３つの観点から考察し、下記の成果を得た。

（１）後花園天皇(1419－1470)の室町殿行幸を記録した『室町殿行幸御餝記』（永享９年、1437）の記載を考察して会所の唐物飾りの組み合わせを分析し、その陳列方法および陳列装置との関わりを研究した。とくに附書院に飾られた文房具などに関して、中国の文献資料と比較研究する方法で、その成り立ちについて具体的な知見を得ることができた。

（２）現存する中国美術・工芸のうち日本で唐物飾りとされたものと同種の作品を調査して、その基礎的なデータを収集した。特に東京国立博物館および九州国立博物館が所蔵する中国絵画などを詳細に観察し、特に室町時代の美術に大きな影響を与えた中国・宋時代の美術に関する具体的な知見を得ることができた。

（３）足利将軍家による中国文物受容の枠組みを相対化する試みとして、山口・大内氏の様相を現存作品や文献資料から考察した。特に大内氏のもとで制作活動を繰り広げた画家・雪舟(1420－1506?)を対象に、破墨山水図（東京国立博物館蔵）や唐土勝景図巻・国々人物図巻（ともに京都国立博物館蔵）を調査して基礎的なデータを収集し、当時の政治的な文脈との関係から制作意義を考察した。

【実績値】

論文掲載数　展覧会カタログ『京都五山禅の文化展』　１回
『国華』第 1347 号　１回　（計２回）

調査風景

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2156

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
定性的評価については、国際性・オリジナリティ・多様性・人的投資・基礎性・達成値の観点から、充分な成果が認められると判定される。

２．定量的評価

観点	論文掲載数					
判定	A					

備考
定量的評価については、目標値である「論文掲載数」１回をこえる実績値をのこし、充分な成果と判定される。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価については特に国際性とオリジナリティの観点から、定量的評価については国際シンポジウムの成果から、別記の総合的判定が妥当であると評価される。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究は、研究内容の水準を保ちつつ、順調に遂行できたと考える。 科学研究費による本事業については、今後も外部資金などを積極的に活用する方法により、調査研究を継続してゆきたいと考える。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2157

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（5）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ⅱ日本及び東洋全般にわたる文化財の調査研究 7）日本近世宗門改制度に関する基礎的研究（科学研究費補助金）

【事業概要】

九州国立博物館における文化財の収集･保管に関する調査研究を行い、文化財の保存や展示の向上に結びつけることを目的として実施する。近世九州におけるキリスト教信者を摘発する宗門改制度の資料調査を実施し、幕藩体制における意義を分析する。

【担当部課】	文化財課	【事業責任者】	研究員　東　昇

【スタッフ】

なし

【年度実績概要】

本研究では近世日本における宗門改制度の意味と役割について検討した。本研究課題は、近世を通じて、全国で、ほぼすべての人々が共通に経験した唯一の制度といえる宗門改制度が、幕藩体制の中でどのような意義を持つか分析するものである。

18 年度に引き続き、最大のキリスト教信者が存在した九州地域を中心に資料調査を実施した。長崎歴史文化博物館をはじめ、九州大学附属図書館記録資料館九州文化史研究部門、九州大学付属図書館六本松分館檜垣文庫、天草アーカイブズ、西南学院大学博物館、八代市博物館、大村市立史料館、奄美市立奄美博物館で調査を実施した。また九州地域の比較研究地域として、京都府立総合資料館、愛媛県立図書館、今治市関前支所で調査を実施した。

対象とする資料も、文献資料のみではなく、制度に関わる道具である踏絵や宗門手札、カクレキリシタンが所持していたメダイ、十字架などのモノ資料も調査することができた。特にカクレキリシタンの多い、長崎県の外海歴史民俗資料館、五島観光歴史資料館、堂崎天主堂資料館、五島市奈留のカクレキリシタン関係者からの聞き取り、及び資料調査を体系的に実施した。また昨年度に調査した文化期の天草崩れに関して、上田資料館所蔵の上田家文書と関係の深い崎津村文書（九州文化史研究部門）の宗門改帳、上田家日記の一部（檜垣文庫）を確認し、調査することができた。

【実績値】

研究会発表件数　　九州文化史研究会　　1 回

収集資料点数：主な撮影資料　関前村文書 7,294 枚、崎津村文書 3,958 枚、檜垣文庫 1,012 枚、外海歴史民俗資料館 70 枚、五島観光歴史資料館 57 枚、堂崎天主堂資料館 91 枚、五島市奈留のカクレキリシタン関係者 275 枚、奄美 54 枚

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2157

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考

本研究は長崎県で世界文化遺産候補運動が盛んになり適時性があることをはじめ、文書史料と歴史資料の両方を対象とする独創性、これまでの調査成果をふまえた発展、効率、正確性など、いずれも十分に評価要件を満たしている。

２．定量的評価

観点	研究会発表件数	収集資料点数				
判定	A	A				

備考

研究発表する機会が少ない人文系研究の中で、１回でも公に発表できたことは評価できる。また約１万３千点を超える資料収集は、個人研究としては大変膨大な数量であり調査成果として評価できる。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	計画的に資料調査を行い、多くの画像資料、データを効率よく収集する事ができた事が評価できる。20 年度以降、調査成果を報告していきたい。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業は、その進捗度、従来の水準を維持しつつ比較的堅調に実現できたと考える。調査研究については、今後もこのペースを維持しつつ、研究成果の公開に力を注ぎたい。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2158

(様式 1)

業務実績書

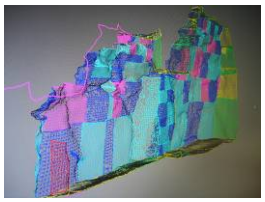
中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ⅱ日本及び東洋全般にわたる文化財の調査研究 10）VR 画像を活用した日本装飾古墳デジタルアーカイブの構築（科学研究費補助金）

【事業概要】
本研究の目的は、日本列島に分布する装飾古墳を対象とし、現状記録写真の撮影と VR 画像を作成することで、装飾古墳の記録・保存・管理のモデル事業を展開し、博物館や web 上で展示・公開するためのデジタルアーカイブを構築する。

【担当部課】	企画課	【事業責任者】	文化交流展室長　河野一隆
【スタッフ】　赤司善彦（展示課長）			

【年度実績概要】
日本列島に約 600 基存在する装飾古墳は、約半数が福岡県・熊本県を中心とする北部九州に所在する。この研究では、写真測量技術を応用して壁画に影響を与えることなく VR 画像を作り出し、装飾古墳の石室全体を客観的に記録するための方法を開発した。これにより、石室と壁画の記録方法が従来の実測図の作成と比べて飛躍的にスピードアップしただけでなく、壁画とカビ等の汚損や石室の崩壊などの石室内における位置関係を３次元的に記録できるようになり、装飾古墳の保存のために蓄積するデータの基盤が確立した。また、この方法で製作した VR 画像データは、通常は内部に立ち入れない装飾古墳を博物館で展示することにも活用できる。VR 画像は文化財の保存・普及に新しくかつ最適な記録手段であることを提言したい。


VR 画像作製状況

また、熊本県釜尾古墳・福岡県王塚古墳を対象として、4×5 フィルムおよび 6×6 フィルムによる写真撮影を実施した。両古墳とも、現時点での鮮明な記録写真が無く、50 枚以上の良好な文様の全体およびアップの撮影に成功し、装飾古墳の現状を記録した貴重な資料となった。また、30 年以上前の装飾古墳の写真のデジタル化などのデジタルアーカイビングも積極的に進めた。

これらの成果の一部を、10 月 2～20 日に当館ミュージアムホールで開催した「進化する博物館－デジタル・アーカイブの可能性を探る～ 迫真のアンコール遺跡 尊顔とバイヨン寺院展」でパネル・映像展示し、シンポジウムでも公表した。

【実績値】
○VR 画像作製・・・福岡県内の 6 古墳(久留米市内 3 古墳(下馬場古墳・前畑古墳・寺徳古墳)、うきは市内 2 古墳(塚花塚古墳・重定古墳)、筑紫野市内 1 古墳(五郎山古墳))、
○高精細写真撮影実施・・・2 古墳(桂川町王塚古墳・熊本市釜尾古墳)で 50 カット以上
○デジタル化装飾古墳画像・・・150 カット
（以上のデータ容量 DVD10 枚ほど）
○これらの成果の一部を公表した「進化する博物館－デジタル・アーカイブの可能性を探る～ 迫真のアンコール遺跡 尊顔とバイヨン寺院展」の入場者数・・・2 週間で入場者 2 万人を数え、今年度の当館の特別展以外のイベントでは、最高を記録した。

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2158

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
本研究は、今まで誰も試みられたことが無い独創的なものであり、19 年度の実績からも効率的に正確に記録作業が進められることは実証されている。

２．定量的評価

観点	撮影件数	入場者数	デジタル化件数			
判定	A	A	A			

備考
撮影件数、デジタル化件数とも目標どおりの実績を残している。また、これらの成果の一部を公表したデジタルアーカイブのイベントおよび研究会は、2 週間で入場者 2 万人を数え、今年度の当館の特別展以外のイベントでは、最高を記録した。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	19 年度の事業は、福岡県内をフィールドとしたもので、いわば研究のモデルケースであったが、予想以上の成果を挙げ、トラブルも無かった。20 年度はフィールドを熊本県に移して、研究方法のシステム化と普及を進めることにしたい。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	全国的にも焦眉の課題である装飾古墳の保存・管理のための研究基盤の確立のために、研究方法の有効性の確認と九州以外への普及を目指して展開していきたい。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2159

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ｉ保存環境の調査研究等の実施 14）博物館危機管理としての市民協同型 IPM システム構築に向けての基礎研究（科学研究費補助金）

【事業概要】

九州国立博物館では文化財環境の保全については IPM（総合的有害生物管理）による体制で生物被害対策など一連の活動を行なっているが、その根幹となる日常管理の一部に、ボランティアや NPO 法人による市民の直接参加をすすめるための基礎研究を行なう。

【担当部課】	博物館科学課	【事業責任者】	博物館科学課長　本田光子

【スタッフ】

三輪嘉六（館長）、今津節生（環境保全室長）、藤田励夫（保存修復室長）、鳥越俊行（博物館科学課研究員）、志賀智史（博物館科学課研究員）

【年度実績概要】

市民による IPM 活動のモデル構築の一環として、5 回にわたり、「市民協同型 IPM 研究会」を開催した。一般公開は 1 回とし、基本的には九州国立博物館ボランティアや地元 NPO 法人等既に何らかの IPM 活動経験者に絞り、実践的なテーマで 4 回実施した。その結果、同研究会参加者の中から、今後の研究活動の実質的作業を進める市民グループが形成される地盤が整ってきた。

こうした活動の指針となる関連機関の IPM に関する取り組みについてヒヤリング調査を実施し、さらに IPM 活動の実務に深い関心を寄せる市民に対して、より実務的な研究会（IPM 活動ワークショップ）を開催した。20 年度においては、このワークショップ参加者の中から、ワーキンググループを形成し市民レベルでの実践的研究活動母体へと指導育成していくことを目指している。

【実績値】

- 市民協同型 IPM 研究会（5 回：目標 5 回）を開催し、
  うち 4 回研究発表
  参加者　延 320 名（目標 220 名毎回 30×4、100×1）
- 関連機関のヒヤリング調査（8 機関）
- ワークショップの開催（2 回：目標 1 回）
  受講者（50 名：目標 40 名）
- 研究発表　文化財保存修復学会　6 月 16 日～17 日　（4 件：目標 4 件）

ワークショップ風景

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2159

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考

文化財保護活動への市民の直接参加は、極めて時勢に適ったテーマであり、しかも、文化財保護の枠組みの中で比較的浸透の遅い IPM 活動をこれまでと違った観点から取り組んでいるので、適時性・独創性は S とした。発展性、効率性、正確性については、今後の成果をみなければ評価の難しいところであるが、現時点で、新しい活動の展開がみえてきたこと、研究の一部がすでに的確、正確な内容で業務に反映されていること。などから、発展性、効率性、正確性においては A とした。

２．定量的評価

観点	研究会開催回数	研究会参加者数	ヒアリング回数	ワークショップ開催回数	ワークショップ受講者数	研究発表件数
判定	A	A	A	A	A	A

備考

市民ボランティア、地元 NPO 法人など対象の研究会、ワークショップとも、熱心な参加者（延 320 名）、受講者（延）50 名により各回充実した内容であった。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	研究会などへの参加者数などからみても、テーマおよびその実践当初計画の社会的妥当性が確認できる。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	博物館における IPM 体制維持のためのボランティアの導入（直接参加型市民活動）を着実に進めることができた。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2160

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ⅵ収蔵品について、科学的分析に基づく保存・修復に関する調査研究の実施 16）博物館におけるＸ線ＣＴスキャンデータの活用（科学研究費補助金）

【事業概要】

九州国立博物館において、X 線 CT を用いて文化財の内部構造調査を行い、文化財の健康状態や制作技法を理解し、得られた成果を展示に活用することを目的とする。

【担当部課】	博物館科学課	【事業責任者】	研究員　鳥越俊行

【スタッフ】

臺信祐爾（文化財課長)、今津節生（環境保全室長)、河野一隆（企画課文化交流展室長)、市元塁（文化財課研究員)、楠井隆志（展示課主任研究員)、松川博一（展示課研究員)

【年度実績概要】

九州国立博物館の展示に借用する文化財を中心に､1 年間で約 300 件の CT 調査を実施した｡得られた成果は､常設展での展示の際に活用している。また、春の特別展で借用した善導大師像(博多善導寺)の調査で、頭部に人の歯が納入されていることが初めて明らかになった。

外部との連携としては、泉屋博古館の所有する中国青銅器のコレクションについて事前調査を行った。この成果を元に、20 年度から九州国立博物館で中国古代青銅器の展示に合わせ CT による調査を実施することとなった。

調査の成果は、日本文化材科学会と文化財保存修復学会で発表した。また、2007 東アジア文化遺産保存国際シンポジウムでも発表を行った。

【実績値】

調査件数　約 300 件

日本文化材科学会での発表　　2 件

文化財保存修復学会での発表　2 件

2007 東アジア文化遺産保存国際シンポジウムでの発表　1 件

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2160

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	B	B	

備考
効率性では、測定データの取扱についてまだ改良の余地がある。また、得られたデータは不定形で複合材質のものが多いため、データの取扱について改善する余地がある。

２．定量的評価

観点	調査件数	学会発表件数				
判定	A	B				

備考
保存修復学会には約 800 名の研究者が参加した。また 2007 東アジア文化遺産保存国際シンポジウムには日本・韓国・中国を中心に約 200 名の研究者が参加した。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財用の X 線 CT としては、世界的で最も優れた装置の一つであり、研究者の間からその有用性について高い評価をいただいた。20 年度は、より幅広い他機関との連携を目指しデータの活用を進めたい。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	九州国立博物館では展示に際し文化財を常に借用するため､CT 装置で文化財所蔵者と共同調査し成果を上げることで、他の博物館との連携が進みつつある。20 年度は、得られた成果を本博物館の展示へ公開し観覧者に供したい。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2161

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ⅱ日本及び東洋全般にわたる文化財の調査研究 17）古代東南アジアにおける三尊像図像の研究－タイ・ミャンマーの図像を中心に－（科学研究費補助金）

【事業概要】

本研究の目的は古代東南アジアの三尊像図像の基礎データを集積・分析し、もって三尊像図像の成立と展開を解明するための端緒とすることである。

【担当部課】	企画課	【事業責任者】	研究員　原田あゆみ

【スタッフ】

なし

【年度実績概要】

古代東南アジアの三尊像図像の成立と展開について明らかにするための基礎データを構築しようとする本調査研究では、上座仏教下にあって判然としなかった大乗仏教の図像を掘り起こすことを主要な課題として、下記の成果を得た。

（１）ミャンマーを初年度の調査実施国とし、ピューおよびモン関係の図像について、エーヤーワディー河中流・下流域、およびタトン周辺の遺跡および博物館の資料を調査した。特に、これまで日本では知られることのなかったモンの作例を実見することができ、比較研究する上で有益な資料を得ることができた。

（２）現在知りうる限りの、日本国内に保管される古代東南アジアの三尊像図像について、その基礎的なデータを収集した。特に東京国立博物館および福岡市美術館が保管する作例などを詳細に観察し、具体的に図像の規範性について考察することができた。

（３）図像受容の枠組みを相対化する試みとして、図像に変化が起こる 8 世紀後半から 9 世紀、そして上座仏教が広まった 11 世紀から 13 世紀までの図像の様相を現存作品や文献資料から考察した。三尊像図像の変容については、ベンガル湾地域－ミャンマー－タイ内陸部が有機的につながりつつ、基層部分の個別性を浮き彫りすることができた。

【実績値】

研究会報告数　1. The Bayon　尊顔とバイヨン寺院展開催記念シンポジウム講演「交流する東南アジア世界」
2. 東南アジア彫刻史研究会発表「今夏のミャンマーのモンとピューの遺跡の調査報告」

論文掲載数　1.「九州国立博物館所蔵 モン・クメールの青銅製仏像について」九州国立博物館紀要『東風西声』第 3 号

ミャンマー調査 2007.8.13.

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2161

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
定性的評価については、国際性・オリジナリティ・多様性・人的投資・基礎性・達成値の観点から、充分な成果が認められると判定される。

２．定量的評価

観点	研究会報告数	論文掲載数				
判定	A	A				

備考
東南アジア関係の資料紹介展開催記念シンポジウム（2008.10.20）では、本調査を受けて、ベンガル湾地域－ミャンマー－タイ内陸部に存在した交易ルートの有機的なつながりについて紹介できた。また、東南アジア彫刻史研究会(2008.10.21)では、調査報告の場を得ることができ、多分野の研究者との意見交換ができた。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	現地調査と研究者間の意見交換を実施しつつ、今後の調査研究につなげるための情報公開、基礎データの収集整理を行うことができた。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業は、順調に遂行できたと考える。20 年度は調査成果の比較検証、考察のためのスケジュールを考慮し、19 年度の情報ネットワークをさらに深めていきたい。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2162

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 vi 収蔵品について、科学的分析に基づく保存・修復に関する調査研究の実施 21) 超高精細大容量画像の安全･ダイナミック表示総合システムの開発（科学技術振興機構）

【事業概要】

京都大学との共同研究によって､文化財のデジタル化に適用する入力装置及びソフトウェア開発を目指した研究開発をおこなう。入力装置は三次元を含む多目的スキャナを開発し、ソフトウェア及び文化財コンテンツを開発する。

【担当部課】	博物館科学課	【事業責任者】	環境保全室長　今津節生

【スタッフ】

赤司善彦（展示課長)、藤田励夫（保存修復室長)、井手　亜里（教授)、大島　寧（部長）

【年度実績概要】

デジタルアーカイブが文化財保存に必要かつ有効な手段であると一般的にも認識され、国内外様々な分野からのデジタル化依頼が活発化してきている。文化財や知的財産のデジタル化には、セキュリティ対策が重要事項であることから、本課題である「安全」かつ「ダイナミック」で、新規性に富んだ展示手法の提案・確立に対する要求も多く集まり、研究開発を完成域に到達させなければならない。

19 年度は、入力装置は三次元を含む多目的スキャナを完成域に、またソフトウェア及び文化財コンテンツ開発については、入力装置とマッチした、新しいコンテンツ開発に必要な装置を完成させた。また、大型入力装置を九州国立博物館に常設して、画像入力のための実験を実施した。

【実績値】

学会研究発表

国内学会　　文化財保存修復学会第 29 回大会　1 回

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2162

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	B	A	

備考

世界最先端の超高画質デジタル撮影技術を文化財へ応用する独創的な研究であるり、研究の発展性・正確性に関して十分に成果が認められる。将来の継続性については、今後の効率性は質・内容を考慮しながら十分に検討を重ねる必要があるが、概ね成果が認められている。

２．定量的評価

観点	学会発表件数					
判定	A					

備考

学会発表件数としては適切であり、保存修復学会には約 800 名の研究者が参加した。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	デジタルアーカイブが文化財保存に必要かつ有効な項手段であることは一般的にも認識され、国内外様々な分野からのデジタル化依頼が活発化してきている。文化財や知的財産のデジタル化には、セキュリティ対策が重要事項であることから、本課題である「安全」かつ「ダイナミック」で、新規性に富んだ展示手法の提案・確立に対する要求は大きい。本研究の独創性・適時性は高く評価され、発展性も大きい。19 年度には大型平面スキャナを九州国立博物館に設置したので、効率性、正確性も追求できる環境が整った。20 年度はさらに効率的・正確性を追求したな研究をおこなえるように改善を進めてゆきたい。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	文化財保存におけるデジタルアーカイブの有効活用は、今後の文化財保存や展示の向上にむけた重要課題である。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2163

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ⅱ日本及び東洋全般にわたる文化財の調査研究 ・近代工芸の美術史・産業史・地域史の基礎資料としての内国勧業博覧会出品作品の研究（科学研究費補助金）

【事業概要】

日本の近代史の展開に大きな意味を持った工芸の展開について､その展開の契機となった内国勧業博覧会の出品作を中心とした基礎資料を整備する。

【担当部課】	企画課	【事業責任者】	企画課長　伊藤嘉章

【スタッフ】

三笠景子（東京国立博物館文化財課列品室研究員)、小川幹生（名古屋市博物館学芸課学芸員)、土井久美子（大阪市立美術館学芸課学芸員)、高橋美奈子（山種美術館学芸部長）

【年度実績概要】

調査方針の検討と現状の情報整理のために、研究協力者による研究会を数次開催した。工芸の分野別によるデータ整理の分担及び、情報収集、整理作業について協議するとともに、これまでの調査成果を共有することとした。関連すると思われる近代工芸を所蔵する機関・個人について、作品の調査を実施した。国会図書館の所蔵する近代新聞･雑誌資料から、関係記事について収拾した。内国勧業博覧会出品が明らかな作品について新たな撮影を実施した。

【実績値】

研究会開催

第一回・・・写真帖データ、褒章授与人データの複合データベースによりデータ化。

第二回・・・第一回に、帝室博物館購入データを加えてデータ化を進めている。

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2163

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考

本研究は、今後の研究の基礎となるデータを集成するものであり、従来の文字情報のみに頼るものから、実際の作品にまで迫ることを目的とすることに独創性がある。これによって価値観というものも研究の中に持ち込むことが可能となる。

２．定量的評価

観点	研究会開催回数					
判定	A					

備考

研究協力者による研究会を開催し、第一回については写真帖データ、褒章授与人データの複合データベースによりデータ化し、第二回についてはこれに加えて、帝室博物館購入データを加えてデータ化を進めている。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	従来、別個に存在していたデータを有機的に結合させ、さらに実作品との結合を進めている。帝室博物館購入品を加えたことにより、現存品についての検討も踏まえる必要が生れ、これにより近代における工芸の位置づけの展開も検討の対象となってきている。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	現時点で、データ化が進みつつある。今後としてはその成果を暫時公開することで、より多くの情報を得る方策を考える必要がある。これにより多角的な研究の展開が可能となっていく。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2164

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ①収集・保管に関する研究 ⅲ収蔵品の調査研究、特別調査、特別展・海外展の事前調査の実施 ・特別展の事前調査

【事業概要】
九州国立博物館における文化財の収集・保管に関する調査研究を行い、文化財の保存や展示の向上に結びつけることを目的として実施する。

【担当部課】	企画課	【事業責任者】	文化交流展室長　河野一隆

【スタッフ】　伊藤嘉章(企画課長)、赤司善彦(展示課長)、河野一隆(文化交流展室長)、森井啓次(展示課主任研究員)、楠井隆志(展示課主任研究員)、金井裕子(企画課研究員)、および展示担当者全員

【年度実績概要】
当館の文化交流展示室のコンセプトであり特色でもある、日本の文化形成の歴史を交流の視点から実物資料によって示すという歴史展示を実施しつつ、より深く掘り下げた研究成果を特集陳列という形で公表した。その主なものとして、九州以外の地域の博物館で保管・展示されてきた九州出土考古資料の里帰り陳列(「重要文化財　王塚装飾古墳出土品と北部九州の王たち」)や、修復が完成した作品の御披露目を契機とする朝鮮仏画展(「釈迦誕生図－受け継がれる朝鮮仏画の名品－」)などであり、来館者からおおむね好評を博した。また、特集陳列以外でも展示テーマ別のワーキンググループを招集して、展示意図が来館者に伝わっているか、分野ごとに活発な議論を行っていくと同時に、展示についての研究会を開催した。この中で、従来まで取り上げられていない新規テーマの開拓と展示に結実させるための作品調査、展示業者との共同研究という形で実施した分かり易く洗練された演出手法の研究、新たな特集陳列の企画立案などが提言された。また、各ワーキンググループで、展示テーマと展示作品とが歴史展示として整合しているかの見直しを行い、展示内容を不断に問題提起していく中で展示を高めていくための会議を積み重ねることができた。

特集陳列：王塚古墳と北部九州の王たちの展示風景

【実績値】
特集陳列として「王塚古墳と北部九州の王たち」(6 月 20 日～20 年 3 月 31 日)、「新指定重要文化財　笹塚古墳出土品と双六古墳出土品」(7 月 2 日～10 月 9 日)、「第 2 回　東アジア紙文化財保存修理シンポジウム記念－文化をつたえる紙の路－」(8 月 20 日～10 月 8 日)、「釈迦誕生図―受け継がれる朝鮮仏画の名品―」(10 月 10 日～11 月 8 日)、「朝鮮通信使―江戸時代の平和外交―」(11 月 20 日～20 年 1 月 6 日)に開催した。また、各ワーキンググループは、年度後半から各５回実施し、丹青社・展示 JV との展示改善のための共同研究会を 1 回開催した。

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2164

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
九博の展示の柱のひとつ文化交流展示について、各テーマ毎にワーキンググループを組織した。これにより各テーマ内での展示の方向性を定め、より分かりやすく意味のある展示になるよう努めた。

２．定量的評価

観点	特集陳列回数	ワーキング実施回数			
判定	A	A			

備考
特集陳列回数、ワーキング実施回数とも適切であり、ワーキンググループには 20 名の研究員が参加し、それぞれに数次に渡り、内容の検討を行っていった。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	開館後に現れてきた問題点の整理と、その改善を目的としてワーキンググループを編成したことで、文化交流展示がさらに充実したものとなった。展示計画をより長期的視野に立って作成することにより、20 年度の特集陳列の増加といった効果も現れた。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	従来の国立博物館とは違う歴史博物館としての展示は、実際の運用の中で問題点も明らかとなってきた。テーマ会議を行うことで、展示の内容をより充実させることが可能となり、あわせてより楽しく分かりやすい博物館に向けて、展示研修などの企画も始まり、より充実したものとなっている。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2165

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（5）有形文化財に係る調査研究 ②公衆への観覧を図るための研究 ｉ有形文化財の展示デザインシステムを構築するための応用研究 1）博物館環境デザインに関する調査研究

【事業概要】
東京国立博物館における文化財の展示環境について調査研究し､今後の展示環境の向上に結びつけることを目的として実施する。

【担当部課】	事業企画課	【事業責任者】	デザイン室長　木下史青

【スタッフ】
矢野賀一（デザイン室研究員）

【年度実績概要】
展示のデザインのクオリティの向上を成立させるための設計技術や、デザインを実現・維持するための現場監理・物品管理に関する技術について、過去の事例や、他館における具体的な事例を調査した。
また以上の技術・手法を、当館においてどのようなシステムで導入・実施が可能かを整理し、実現可能なものについては館内の展示において実施した。
① 本館特別５室「仏像の道」(写真)
・ 免震装置付展示ケース、天井吊展示照明システム、建築空間を生かした環境照明等の手法
・ LED カラーチェンジ照明システム
② 特別展
・ 光ファイバー、LED 照明システムの展示照明への応用技術の開発
・ 新規調光システムによる展示デザインへの導入

本館特別５室「仏像の道」

【実績値】
研究会発表件数
美術解剖学会　１回
日本写真学会･画像保存ｾﾐﾅｰ　１回
論文掲載数
『昭和初期の博物館建築』(共著) 所載　１篇
『表現 Human Contact』　Ｎｏ．２　１篇
『東京国立博物館紀要』43 号　１篇
岩波ジュニア新書 571『博物館へ行こう』　１篇
他館調査　森美術館、サントリー美術館、上海博物館、韓国国立中央博物館、メトロポリタン美術館等

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2165

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	B	A	

備考

博物館における展示・公開は技術的な裏づけの調査研究に基づき、時代に会った見せ方と見え方の評価が求められる。またデザインのクオリティの向上を成立させるための設計技術や、デザインを実現・維持するための現場監理・物品管理に関する技術について、他館における具体的な事例調査を行った。

２．定量的評価

観点	研究会発表件数	論文掲載数				
判定	A	B				

備考

研究・調査によって明らかになった技術・手法を、特に重文指定である本館の建築においてどのようなシステムで導入・実施が可能かを整理し、研究会・論文等で発表した。また実現可能なものについては館内の平常展・特別展において実施し、継続的に調査を行っている。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	特集陳列「仏像の道」が質の高い展示システムを導入することにより実現可能となった。さらに照明器具の問題点について製造メーカーと協同で改良を進めている。具体的には 20 年度予定の特別展・平常展への導入・実施に向け、デザインを進めている。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業は、その進捗度、従来の水準を維持しつつ比較的堅調に実現できたと考える。調査研究については、今後もこのペースを維持しつつ、独創的アイデアの創出と技術開発および館内展示システムの充実に力を注ぎたい。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2166

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財に係る調査・研究 ②公衆への観覧を図るための調査研究 ⅲ博物館教育理論の構築に関する研究 ２）博物館美術教育に関する調査研究

【事業概要】

当館表慶館に教育普及事業を専門に行なうスペース「みどりのライオン」を開設し、その経緯と開設後の活動の成果を報告し、これに博物館美術教育に関する論考を合せ、東京国立博物館美術誌『ＭＵＳＥＵＭ』に「みどりのライオン」の開設と博物館教育を特集した。

【担当部課】	教育普及課	【事業責任者】	教育普及課長　加島勝

【スタッフ】

小林牧（教育普及室長）、鈴木みどり（教育普及室主任研究員）、白井克也（教育講座室長）、神辺知加（教育講座室研究員）、鷲塚麻季（ボランティア室長）、藤田千織（ボランティア室研究員）

【年度実績概要】

・当館表慶館に教育普及事業を専門に行なうスペース「みどりのライオン」を開設した。
・東京国立博物館美術誌『ＭＵＳＥＵＭ』に「「みどりのライオン」の開設と博物館教育を特集掲載した。
掲載した論考は以下の通り。
加島勝「「表慶館みどりのライオン　みんなで楽しむ教育スペース」の開設について」
小林牧「みどりのライオン　教育普及活動について」
鈴木みどり「デンバー美術館の教育普及事業―ミュージアム・エデュケーションからミュージアム・エクスペリエンスへ―」
藤田千織「博物館における鑑賞補助ツールの役割―「親と子のギャラリー」を例に」
神辺知加「「子供のための文化史展」について―東京国立博物館の教育普及事業史研究　敗戦直後―」

【実績値】

論文掲載数　『MUSEUM』No.611　所載　5 篇
研究会発表件数　美術史学会東支部例会　1 回

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2166

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考

教育普及事業を専門に行なうスペース「みどりのライオン」の開設した年度内にその経緯を『ＭＵＳＥＵＭ』誌上に報告し、また関連する博物館教育の研究論文を同誌にあわせて掲載したことは、今後、内外の博物館教育研究に寄与するところがきわめて大きい。

２．定量的評価

観点	論文掲載数	研究会回数				
判定	A	A				

備考

これまで『ＭＵＳＥＵＭ』誌において博物館教育に関する論文は、個別的に掲載されることはあっても、特集号が組まれることはなかった。博物館教育関連論文５篇を掲載した同誌特集号によって、当館の博物館教育に関する情報がまとまって発信できた。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当館表慶館に教育普及事業を専門に行なうスペース「みどりのライオン」を開設したことは博物館美術教育を推進する上でも大きな成果といえよう。また、各研究員が研究し、ここで実施された学校対応やファミリープログラム等のさまざまな教育普及活動は、概ね好評をいただいている。その活動の成果を東京国立博物館美術誌『ＭＵＳＥＵＭ』に報告したことで、博物館美術教育に関する情報を広く内外に発信できたと思う。したがってＡと判定した。今後さらに研究を続け、博物館美術教育に関する情報発信を精力的に行っていきたい。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	博物館美術教育に関する調査研究は、教育普及課の研究員を中心に概ね研究計画にそったかたちで順調に進められていると考える。今後も有形文化財を活用しながら博物館美術教育理論の構築ならびに実践的プログラムの開発に取り組んでいきたい。

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2167

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ②公衆への観覧を図るための研究 ⅲ博物館教育理論の構築に関する研究 ３）博物館教育・普及事業の事例分析と日本の伝統文化に関する先駆的教育・普及理論の構築（科学研究費補助金）

【事業概要】
博物館教育・普及事業の事例分析を通して、日本の伝統文化に関する博物館における先駆的教育・普及理論を構築し、実践的プログラムを開発する。

【担当部課】	事業企画課	【事業責任者】	事業企画課長　井上洋一

【スタッフ】
加島勝（教育普及課長)、小林牧（教育普及室長)、鈴木みどり（教育普及室主任研究員)、白井克也（教育講座室長)、神辺知加（教育講座室研究員)、鷲塚麻季（ボランティア室長)、藤田千織（ボランティア室研究員)、鬼頭智美（国際交流室長)、遠藤楽子（広報室研究員)、田沢裕賀（列品室主任研究員)、高梨真行（列品室研究員)

【年度実績概要】
①文献資料の収集・データベース化。
②アンケート調査の実施。今回は、ヨーロッパ・アジア・オセアニア諸地域から選んだ博物館・美術館（495館）に対して教育・普及事業に関するアンケート調査（教育普及担当者数・事業予算・プログラムの内容等）を実施。
③現地調査の実施。今回はこの分野において積極的に教育普及理論や伝統文化をテーマにした事業を展開しているフランス、オーストリア、ギリシャ、スイス、スペインの博物館・美術館を訪問し、直接教育普及担当者にインタビューを行い、各教育プログラムの理論とその実践活動について調査を行った。また、シカゴ、ウィーンで行われた国際学会にも参加。こうした現地調査等で得られたデータをもとに研究会で討議、分析を行った。

【実績値】
研究会　7 回
論文掲載数　『MUSEUM』No.611　所載　5 篇

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 2167

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
本研究において現代的な教育普及事業のあり方について多方面から有益な情報を得るとともに、その情報をもとに研究会等での討議・分析を行い、その成果を実際の当館の教育普及事業に反映させている。

２．定量的評価

観点	研究会回数	論文掲載数				
判定	A	A				

備考
月に 1～2 回のペースで研究会を開催し、現地調査の事例報告・分析等を中心に行ってきた。また、当館招へい海外研究者を交えての意見交換も行った。掲載論文に関しては、当館の事業ともリンクし『MUSEUM』に教育普及特集が組まれ、5 篇の論考が掲載された。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	アンケート、研究会等の実施に関しては概ね良好。現地調査に関しても順調で、海外における博物館教育に関する国際学会等にも出席。参考とすべき先進的な教育・普及プログラムに関する多くの情報を入手でき、さらに研究者間の交流も深めることが出来た。したがって A と判断した。20 年度は各研究者から得た情報も参考にしながら現地調査を展開する予定である。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本事業は、研究スタッフの協力の下、概ね研究計画にそったかたちで順調に進められていると考える。調査研究については、今後もこのペースを維持しつつ、日本の伝統文化に関する博物館における先駆的教育・普及理論を構築し、実践的プログラムを開発すべく努力したい。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2168

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ②公衆への観覧を図るための研究 ⅳ京都文化を中心とした文化財の調査研究 １）妙心寺本坊、塔頭に所蔵されている文化財の調査研究

【事業概要】

21 年 3 月 24 日（火）から同年 5 月 10 日（日）まで開催される「開山無相大師 650 年遠諱記念　妙心寺」展を視野に入れつつ、妙心寺本坊および山内塔頭、妙心寺派末寺に所蔵される文化財を調査することを目的とする。あわせて、博物館の有する文化財に関する情報を豊富にし、調査に基づく研究の成果を講座あるいは誌上で公開し、広く還元することも目的とする。

【担当部課】	学芸課	【事業責任者】	学芸課長　森田稔

【スタッフ】

羽田　聡（研究員）、山下善也（主任研究員）、赤尾栄慶（企画室長）、大原嘉豊（研究員）、西上　実（上席研究員・美術室長）、山本英男（保存修理指導室長）、若杉準治（列品管理室長）、淺湫　毅（主任研究員）、尾野善裕（主任研究員）、久保智康（工芸室長）、永島明子（研究員）、山内麻衣子（研究補佐員）、山川　暁（主任研究員）

【年度実績概要】

18 年度よりの本坊および麟祥院、龍安寺の調査に引きつづき、19 年度は、
19 年 3 月 6 日（火）～7 日（水）　衡梅院（平均参加人数 8 名）
同年　5 月 18 日（金）　隣華院（参加人数 11 名）
20 年 1 月 30 日（水）　退蔵院（参加人数 8 名）
同年　3 月 14 日（金）　東京・麟祥院（古文書の調査、参加人数 1 名）
同年　3 月 26 日（水）　妙心寺本坊（古文書の追加調査、参加人数 1 名）
の調査を行う。

調査に基づく研究の成果としては、本坊および退蔵院の所蔵する重要文化財「花園天皇宸翰消息」が当館所蔵のものと本来は一具であったことが判明したので、これらの位置付けや重要性について論文を執筆した（2008 年 5 月刊行予定）。

【実績値】

論文掲載数　羽田聡「京都国立博物館所蔵「花園天皇宸翰消息」について」(『学叢』第 30 号、2008 年 5 月)（予定）　1 篇
調査参加人数　平均 9 名（古文書のみの単独調査をのぞく）
調査資料点数　絵画約 100 点　書跡約 80 点　工芸約 50 点
調書作成点数　絵画約 50 点　書跡約 45 点　工芸約 30 点
撮影資料点数　絵画約 300 点　書跡 100 約点　工芸約 150 点

【備考】

【書式Ｂ】 施設名 京都国立博物館 処理番号 2168

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	B	A	A	A	A

備考

展覧会という公共性および公開性の高さにも結びつく本事業は、過去三カ年にわたり、関係作品の分野の担当者が調査に参加する形で継続的に行われてきた。また、将来的には博物館の有する文化財情報への寄与という応用性も持ちあわせる。

２．定量的評価

観点	調査参加人数	調査資料点数	調書作成点数	撮影資料点数	論文掲載数	
判定	A	A	B	A	A	

備考

調査には所蔵作品に関係する分野の担当者が毎回参加している。目下、展覧会の開催という時間的な制約があるため、全作品の調書を作成するにはいたっていないが、重要度の高い作品を優先して調査し、それらに関してはおおよそ調書の作成、および撮影を行った。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	時間的な制約があるなかで、調査には展覧会に関わる全分野の担当者が参加のうえ、重要度の高い作品から優先的に調査し、それらに関しては調書の作成、および撮影を行った。20 年度は、展覧会を視野に入れたリスト作成、講座などでの公開といった点にも 19 年度の成果を活用していきたい。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	妙心寺本坊および山内塔頭に所蔵される文化財の調査研究事業は、18 年度の水準を維持しつつ、関係分野の担当者が参加のもと、計画通り実施されたと考える。20 年度は情報の蓄積・公開・活用という観点にたってこの事業をとらえ、状態の維持につとめるとともに、展覧会を視野に入れた公開および活用についても具体的な方法論を構築したい。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2169

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	４．文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ②公衆への観覧を図るための研究 ⅳ京都文化を中心にした文化財の調査研究 ２）輸出漆器に関する調査研究

【事業概要】

京都国立博物館およびサントリー美術館で開催予定の特別展覧会「japan　蒔絵－宮殿を飾る 東洋の燦めき－」の準備のための調査研究

【担当部課】	学芸課工芸室	【事業責任者】	工芸室長　久保智康

【スタッフ】

永島明子（研究員）

【年度実績概要】

輸出漆器展に出陳予定の作品の調査、採寸、写真撮影を行い、あわせて、日本の漆器が国外で受容されていたその文化的背景を理解するために、文献の解読を進めた。

19 年度は国内に所蔵されている作品を中心に調査した（サントリー美術館、神戸市立博物館、南蛮文化館、京都市内個人、大阪市立美術館、九州国立博物館、東京芸術大学美術館等）。

最終目的は 20 年度秋の展覧会であるが、副次的に 19 年度の土曜講座、外部機関のシンポジウムなどでも成果を活かすことができた。

また、作品の購入により、当館収蔵品を拡充することもできた。

【実績値】

研究発表　お茶の水女子大学第 9 回国際日本学シンポジウム「日本学研究の対話と深化Ⅱ」（テーマ：ヨーロッパにおける日本美術史の成立と発展－フランス及びイギリスの主要な日本美術コレクションの果たした役割－）1 回

論文掲載　「お茶の水大学比較日本学研究センター研究年報第 4 号」所載 1 篇
論文名「英仏の主要な蒔絵コレクションの成立と日本美術史上の役割について―マリー・アントワネットのコレクションを中心に―」

調査資料　約 200 点

購入資料　3 点

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2169

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	B	A	

備考
輸出漆器の研究はここ 10 余年で格段に充実したが、これを特集した大型展は世界でも例がない。日本では「鎖国」の時代を通じて日本の漆器が輸出されていた事実も、ルイ 14 世をはじめとする歴史上の大人物たちがそれを蒐集していた事実も、一般には知られていない。担当者が専門に研究してきたテーマでもあり、機が熟した現在において、日本の国立博物館における大規模な特別展としてこのテーマをとりあげられることは、歴史的に見ても適時性、独創性、発展性、正確性については申し分がない。実現を見るのは 20 年度の秋であるが、順調に進んでいるので A とした。効率性については、人員配置と予算の問題から最善の体制とはいえないため B とした。

２．定量的評価

観点	研究発表数	論文掲載数	調査資料件数	購入資料件数		
判定	A	A	A	A		

備考
展覧会の準備であるため、研究発表数や論文掲載数はこの事業の評価基準としてなじまないが、副産物として公表の機会があったので A とした。調査件数は 200 点を超え、展覧会準備のおかげで購入の機会を得た作品を博物館の収蔵品とすることができたので、それらもあわせて A とした。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	日本の蒔絵が、いわゆる鎖国期を通じて海外へ輸出され人気を博した事実を多くの人に知ってもらう機会を作ることができた。 また、個々の作品の比較により、国内の伝世品のみでは知ることのできない漆器の歴史を編むことができ、20 年度の、世界でも初めての輸出漆器を概観する展覧会に活かすことができる。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	展覧会に出陳を予定している作品の 9 割 5 分は 19 年度までに調査をすすめることができた。 20 年度は残りの作品を早々に調査し、図録原稿の執筆につとめ、国外十数ヶ所の所蔵者を含めた各所蔵者との連絡を密にして、より精度の高い情報による魅力的な展覧会を完成できるよう努力したい。

【書式Ｂ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 2170

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ②公衆への観覧を図るための研究 ⅳ京都文化を中心にした文化財の調査研究 ３）本満寺境内蓮乗院廟の発掘調査に伴う出土品の整理

【事業概要】

京都文化を中心とした文化財の調査・研究を行い、その成果の一部を研究紀要や展覧会などにより公開することを目的として実施する。

【担当部課】	学芸課	【事業責任者】	学芸課長　森田　稔

【スタッフ】

尾野善裕（主任研究員）、清水愛子（調査員）、橘　倫子（調査員）、鶴岡典慶（京都府教育庁）

【年度実績概要】

社寺調査の一環として 16 年に行われた本満寺境内蓮乗院廟の発掘調査に伴い出土した文化財の整理、調査を行った。

その成果について、研究紀要『学叢』第 29 号（平成 19 年 5 月発行）に調査報告「本満寺境内所在　蓮乗院廟発掘調査報告」としてまとめた。

【実績値】

調査報告書　「本満寺境内所在　蓮乗院廟発掘調査報告」研究紀要『学叢』第 29 号（平成 19 年 5 月発行）

【備考】

【書式Ｂ】 施設名 京都国立博物館 処理番号 2170

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 社寺調査の一環として行い、時機を得た調査となっている。						

２．定量的評価

観点	調査報告書					
判定	A					
備考 調査報告をまとめて、紀要である『学叢』に掲載した。						

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	上記の項目については、その成果を当館の研究紀要である『学叢』第 29 号（平成 19 年 5 月発行）に、調査報告として「本満寺境内所在　蓮乗院廟発掘調査報告」としてまとめた。また石廟（霊屋）の解体修理を指導した京都府教育庁文化財保護課の担当者に「附編　蓮乗院廟の霊屋建築について」として、一文を寄稿してもらったことも評価できる。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	2009 年秋に開催予定の特別展覧会「日蓮と法華の名宝―華ひらく京都町衆文化―」にも関連した事業であることから、その成果を展覧会で公開できる可能性がある。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 2171

（様式 1）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（5）有形文化財に係る調査・研究 ②公衆への観覧を図るための研究 ｖ平安仏教とその造形に関する調査研究 1）平安仏教とその造形に関する調査研究成果の「院政期の絵画」展への反映

【事業概要】

院政期は、我が国の絵画史のなかでももっとも美しい作品を生み出した時代であり、多くの分野にわたり様々な形式の作品が伝存しているが、その概要を調査し成果を「院政期の絵画」展に反映させる。

【担当部課】	学芸課	【事業責任者】	学芸課長　梶谷亮治

【スタッフ】

奈良国立博物館学芸課上席研究員鈴木喜博他 13 名

【年度実績概要】

・展覧会を前提とした作品の構成の考察及びリストアップ
・作品所在の確認及び作品の現状・状態等の把握
・研究動向の確認
・文献等による調査研究、及び実地調査
・該当作品の展覧会への出品の依頼等

【実績値】

- 調査作品数　約 120 件
- 図録作成数　　1 部

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 2171

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
平安仏画のみをテーマとした調査研究はかつて当館が企画実施しているが、これに関連する絵巻等の同時代絵画を加えたものは今回が初度であり、当代の絵画を展望する上で画期的なテーマと評価される。

２．定量的評価

観点	調査数	図録作成数				
判定	A	A				

備考
平安後期、院政期の絵画は多くが国宝や重要文化財に指定されていて、実際に全貌を把握することはきわめて困難なこととされていたが、当館の従来の実績を背景にいずれもスムーズに実施することが出来た。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	院政期絵画は、作品の希少性からみて実際に実物に接する機会がきわめて少なく、したがって実物に即した研究も困難が多い。そうした中でこの度は多数の作品に接することが出来たことは評価できる。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	現時点では、十分な調査研究が実施できたと考える。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 2172

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ②公衆への観覧を図るための研究 ⅵ南都諸社寺等に関する計画的な調査研究 ２）南都諸社寺等に関する計画的な調査研究成果の「神仏習合」展並びに特集陳列「おん祭と春日信仰の美術」への反映

【事業概要】

近隣社寺へ奈良国立博物館に対する積極的な協力の働きかけを行って所蔵文化財の調査研究等を行い、その成果を事業（展示等）に反映させる。

【担当部課】	学芸課	【事業責任者】	学芸課長　梶谷亮治

【スタッフ】

奈良国立博物館学芸課上席研究員鈴木喜博他 13 名

【年度実績概要】

・室生寺、海住山寺、現光寺など近隣社寺から新規に寄託品を受け入れ、平常展の活性化につなげた。
・東大寺戒壇堂四天王像（国宝）及び法華堂執金剛神像（国宝）の彩色調査、X 線調査に基づく構造分析・作図、成分分析などを継続的に進めてより精度の高い資料を集積し、成果公刊に向けた準備を行った。
・特別展「神仏習合－かみとほとけが織りなす信仰と美」、同「美麗　院政期の絵画」出陳の近隣社寺所蔵品を事前調査（前者の実施は前年度）し、その成果を展示及び展覧会図録に反映した。
・春日若宮おん祭に関する文化財調査を実施し、その成果を特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」に反映した。

【実績値】

・社寺調査対象数　約 20 件
・図録作成数　２部（神仏習合展、特別陳列おん祭と春日信仰の美術）

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 2172

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考

南都諸社寺等に所蔵される文化財の調査は、奈良に立地する当館の基本的不可欠な作業の一つであると位置づけられる。こうした調査を通じて、近隣社寺との交流・信頼関係が一層深まりつつあり、今後の当館の企画・事業に好影響が期待される。

２．定量的評価

観点	社寺調査数	図録作成数				
判定	A	A				

備考

展覧会企画に沿った調査研究が中心になっており、その点では必要十分な条件を満たしている。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	室生寺・海住山寺・現光寺などから新たな寄託品を受け入れたことで平常展が一層活性化した。東大寺戒壇堂四天王像（国宝）及び法華堂執金剛神像（国宝）の調査は 20 年度にその成果を公刊できる予定である。特別展「神仏習合」、同「美麗　院政期の絵画」に出陳した近隣社寺所蔵品の事前調査の成果は展示及び展覧会図録に反映され、高い評価を得た。春日大社の若宮おん祭に関する文化財調査の成果は特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」に反映された。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	仏教美術と奈良の文化を調査研究展示活動の主眼としている当館にとって、近隣社寺の宝物調査は必須の事業である。19 年度も東大寺や春日大社を初めとする社寺の宝物調査を行うことにより、展覧会を活性化させ、学術的成果をあげることができた。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 2173

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ②公衆への観覧を図るための研究 ⅶ我が国における仏教美術の展開と、中国・韓国の仏教文化が及ぼした影響の研究 ３）我が国における仏教美術の展開と、中国・韓国の仏教文化が及ぼした影響の調査研究成果の平常展への反映

【事業概要】

仏教美術の専門館であり、日本仏教美術に関するもののみならず、広くアジアを視野に入れた展示を構成している奈良国立博物館の特長に鑑みて、中国や朝鮮半島における文化財とわが国の文化財の比較研究を実施する。

【担当部課】	学芸課	【事業責任者】	学芸課長　梶谷亮治

【スタッフ】

奈良国立博物館学芸課上席研究員鈴木喜博他 13 名

【年度実績概要】

・中国上海博物館における仏教美術の調査、碑林博物館及び陝西歴史博物館における唐代文物の調査、敦煌莫高窟及び楡林窟における壁画の調査、蘭州博物館及び麦積山における仏教美術の調査等
・中国河南博物院における仏教美術を中心とした調査
・韓国国立慶州博物館における新羅文物の調査、国立中央博物館における三国時代から高麗時代仏教美術を中心とした調査等
・学術交流協定を結んでいる中国・上海博物館に 3 名、同・河南博物院に 2 名、韓国・国立慶州博物館に 1 名を派遣した。また上海博物館から 3 名、河南博物院から 2 名、中国国家博物館から 2 名、慶州博物館から 2 名の研究員を受け入れた。
・特別展「神仏習合－かみとほとけが織りなす信仰と美」では、中国・韓国における神仏習合の様相にも注目して中国で制作された関連作品の展示を行い、展覧会図録にも調査研究の成果を反映させた。
・特別展「第 59 回正倉院展」では、東アジア文化圏の中で正倉院宝物の意義を考察し、展示及び展覧会図録に反映した。また正倉院宝物の源流をシルクロードに探る取材のため研究員を派遣し、パネル展示や連載記事に協力した。
・20 年度春季特別展「天馬－シルクロードを翔ける夢の馬－」開催のため中国・米国・英国・イタリアに各 1 名の研究員を派遣し、中国で制作された関連作品を中心に、出陳に向けた事前調査・資料収集を行った。

【実績値】

研究員等の派遣　6 名
研究員等の受入　9 名

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 2173

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考

我が国の仏教美術を研究する上で、中国・韓国をはじめとする海外の仏教文化研究は必要不可欠である。そのために数箇所の研究機関と学術交流協定を基軸として効率的に調査研究を進め、その成果を当館の特別展等に反映させるように努めている。

２．定量的評価

観点	研究員派遣数	研究員受入数				
判定	A	A				

備考

展覧会企画に沿った調査研究ができ、その点では必要十分な条件を満たしている。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	上海博物館（中国）・河南博物院（中国）・国立慶州博物館（韓国）の三館と研究員の交流を行うことで、広くアジア諸国を視野に入れた調査研究を行うことができた。特別展「神仏習合」では、神仏習合をわが国だけの現象ととらえることなく、中国で制作された関連作品の展示を行い、高い評価を得た。「第 59 回正倉院展」においても、正倉院宝物の源流をシルクロードで調査した成果をパネル展示などに活用した。また中国・米国・英国・イタリアでの調査は、20 年度特別展「天馬」の内容を充実させることになった。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	わが国とアジア諸国との文化交流に関する文化財の調査研究は次第に蓄積を増しており、こうした成果によって 20 年度特別展「天馬」の内容を充実させることができた。21 年度以降も中国との交流をメインテーマとする複数の特別展を計画中で、今後も引き続き調査研究を続けていく必要がある。

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 2174

（様式１）

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ②公衆への観覧を図るための研究 ⅷ 仏教美術の光学的調査研究 ４）仏教美術の光学的調査研究成果の親と子のギャラリー「仏さまの彩り」への反映

【事業概要】
仏教美術を中心とする当館の収蔵品、寄託品の中から、美術的、歴史的に貴重なものを選び、最新の光学機器をもちいて高精細デジタル画像を作成する。

【担当部課】	学芸課	【事業責任者】	学芸課長　梶谷亮治

【スタッフ】
奈良国立博物館学芸課上席研究員鈴木喜博他 13 名

【年度実績概要】
19 年度は「仏さまの彩り」というテーマのもとに、彩色表現の豊かな以下の作品について、高精細デジタルカメラによる撮影をおこなった。

①刺繍釈迦如来説法図、②絵因果経、③戒壇院厨子扉絵図像（以上当館）、④倶舎曼荼羅（奈良・東大寺蔵）、⑤二河白道図（愛知・蓮光寺蔵）、⑥六道絵のうち人道不浄相（滋賀・聖衆来迎寺蔵）。

この撮影によって得られた高精細デジタル画像から、肉眼では見ることの難しい彩色技法の細部まで閲覧できるデジタルコンテンツを作成した。展示では、会場内に設置した大型ディスプレイにデジタルコンテンツを表示し、作品とあわせて鑑賞できるようにした。

【実績値】
高精細デジタル画像（およびデジタルコンテンツ作成）撮影件数：6 件
図録作成数　1 部

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 2174

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考

仏教美術は当館の専門分野であるが、彩色技法そのものをテーマとした展示はこれまでなされておらず、また 18 年度に続いて最新の光学機器を調査・展示に活用して作品の新しい鑑賞方法を提示したことは、古美術を専門とする博物館ではあまり例のないことであり、評価される。

２．定量的評価

観点	撮影件数	図録作成数				
判定	A	A				

備考

デジタル画像の撮影及び図録作成は、奈良時代から鎌倉時代まで、各時代を代表する仏教美術の名品を取りあげることができた。夏休みということもあり多くの入館者を迎え、新聞等マスメディアでも大きく取りあげられた。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	最新の光学機器を用いた撮影を実施することにより、肉眼では見ることの難しい作品の細部をデジタル画像によって記録することができ、彩色技法についても新たな知見が得られた。通常の展示では、作品を保護するために照度を落としたり、期間を限定するなど、観覧者にとっては必ずしも充分な環境とはならない場合が多いが、デジタル画像を展示にも活用することによって、作品の鑑賞を更に深める機会を提供することができた。 こうしたデジタル画像は、作品の専門的な調査や、復元的な考察を深める際にも参考になるものであり、また作品の現状を詳細に記録するという意味でも、保存上大きな意義を見出せる。しかしながら、デジタル技術の進歩や変化は昨今著しく、技術の選択やデータの解釈にあたっては、関連情報の収集に努めながら今後とも慎重におこなう必要がある。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	仏教美術を専門とする当館にとって、収蔵品や寄託品、あるいは奈良にゆかりの深い作品の調査をおこない、その成果を分かりやすく観覧者に提供することは必須の事業であり、充分な成果をあげることができた。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2175

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ②公衆への観覧を図るための研究 ｉ有形文化財の展示デザインシステムを構築するための応用研究 ・高齢者・障害者・外国人の利用者に対しての、展示の内容・方法、施設整備、管理運営面からの改善、改修方策についての調査研究

【事業概要】

多様なニーズを持った来館者に快適な鑑賞のための環境を提供するため、設備・方法・演出・サインなどの研究と実験を行い、展示をより洗練し、分かり易いものに高める。

【担当部課】	企画課	【事業責任者】	企画課長　伊藤嘉章

【スタッフ】

ユニバーサルミュージアムプロジェクト(UMP)　伊藤嘉章（企画課長）・安藤英崇（総務課施設係員）

共同研究会　企画課・展示課・丹青社・トータルメディア

【年度実績概要】

九州国立博物館は、開館 3 年目に突入して平常展(文化交流展示)が安定するにつれて、多様なニーズを持った来館者にどのように対応するかが急務の課題となってきた。この回答として、18 年度からユニバーサルミュージアムプロジェクト(UMP)を立ち上げ、展示室だけでなく、館内に掲示する簡潔で分かり易いピクトグラムやサインの開発と実践とを徐々に進めてきている。また、学芸側で作品をさまざまに演出したいとの要望が上がってきたことから、文化交流展示室の展示工事を行った丹青社・トータルメディアと共同研究会を立ち上げ、展示の実践作業・設備上の課題を洗い出すと同時に、解決に向けての問題整理を行った。また、障がい者を対象とする展示案内の実験や外国人利用者のための解説内容の見直しや意見聴取(インターン学生による)を実施した。

盲導犬による展示室の案内

【実績値】

丹青社・トータルメディアと共同研究会については、11 月 2 日に実施し、主として企画課・展示課研究員とが参加し、展示の設備・作業上のさまざまな問題についての洗い出しを行った。また、不定期だが、視覚障がい者を受け入れ、盲導犬による展示室の案内も行った。

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2175

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
館全体での快適性の確保を目指したプロジェクトと、文化交流展室の展示を基本とした展示研究という二つのプロジェクトにより、九博への来館者に対するよりよい環境を作るよう努めた。

２．定量的評価

観点	検討会	館外参加				
判定	A	A				

備考
検討会は二つのプロジェクトをあわせて月一回程度行った。これに館外の参加者を加えることで、より客観的な判断が可能となっている。さらに学芸分野に限らず、より広範な内容での改善に向けての運営を行った。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	UMP では九博の観覧環境の改善に向けた資料作りとして、来館者の側に立った状況把握を調査した。展示研究では、九博方式の展示に対して、より理解を深め、展示意図を伝わりやすくするための展示方法について検討を行っている。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	新しい館としての九博の観覧環境、さらには展示について、客観的な評価も含めて検討を加える段階に達した。新規来館者とともにリピーターをも意識した九博像の構築に向けて、基礎的なデータを集めつつあり、展示研究に代表される活動によって、効果的な対応を進めつつある。

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2176

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進

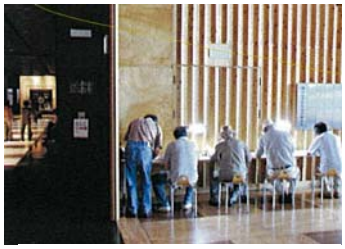
【事業名称】	（５）有形文化財の収集・保管・公衆への観覧にかかる調査・研究 ②公衆への観覧を図るための研究 ｉ有形文化財の展示デザインシステムを構築するための応用研究 ・高齢者・障害者・外国人の利用者に対しての、展示の内容・方法、施設整備、管理運営面からの改善、改修方策についての調査研究

【事業概要】
展示内容に対する理解度と満足度を向上させる。

【担当部課】	展示課	【事業責任者】	展示課長　赤司善彦

【スタッフ】
赤司善彦（展示課長）・伊藤嘉章（企画課長）・永野間一成（総務係長）・吉田公子（事務補佐員）、九州大学大学院芸術工学府　金大雄研究室

【年度実績概要】
（高齢者）
展示解説キャプション　文化交流展示での開館時にデザインした解説題箋は、文字が小さく読みにくいというご指摘が数多く寄せられていた。そこで、展示作品との兼ね合いを勘案しながら、倍以上の大きさで新たに追加し、これをケースのガラス面上方に貼付した。展示作品の観覧をじゃましないように、透過フィルムに出力して貼付したが、背景によっては、黒文字が見にくいなどの問題があったため、白文字も用意した。その結果、概ね好評ではあったが、来館者は展示資料が台に置いてある場合には、目を上げないことが多いため、解説文に気づかれないこともあることが判明した。こうした来館者の行動をふまえて、新たな試行をしなければならない。
（障害者）
目の不自由な方へのアプローチとして、触る資料を充実させ、事前に申し込みを受けて、ワゴンで対応するようにした。結果、感激されたという声をたくさん頂戴した。今後は盲人協会等の団体との連携を深めてよりサービスを向上する必要がある。



（外国人）
外国人への展示解説は英中韓の 3 カ国語としている。解説題箋に全てを網羅することはできないので、無料での音声ガイドを提供している。今後、サービスを向上するために、音声ガイドの来館者評価をおこなった。評価システムの研究は、九州大学大学院芸術工学院の金大雄研究室との共同研究として実施した。

- アンケート調査　外国人 384 名のデータを回収できた。内容は博物館の利用実態、展示の理解度、音声ガイド機器について、解説コンテンツの満足度、今後のニーズ等について分析することができた。
- 追跡観察調査　外国人来館者の個人と団体客を対象に、行動パターン、解説機器の個別展示ケースの滞在時間等について、赤外線送受信機によるログデータ取得と、調査員による観察を組み合わせて実施した。

その結果、1 解説につき約 45 秒前後の時間が望ましい。目をひく展示物や参加型展示での関心が高い。音声ガイド有りのサインがわかりにくい。といったことが判明した。

【実績値】
アンケート調査サンプル数　1856 件

【備考】

【書式Ｂ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 2176

（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考

音声ガイド等の機器類に対する来館者の利用実態や評価について調査した例はあまり知られていない。数多く展示作品情報の中から、文化的背景のちがう国の来館者に適切な解説情報を提供することが、来館者の満足度を向上させるのに必要なことである。その点で本研究は大いに注目できる。

２．定量的評価

観点	アンケート調査サンプル数					
判定	A					

備考

日本人の来館者 1481 名、外国人 384 名から有益なデータが得られた。来館者のニーズを知る上では、十分な量のデータが得られている。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	九州大学の研究者との活発な論議をベースに、有効なアンケート調査や来館者行動把握調査が実施でき、今後の魅力あるコンテンツ制作につなげるための研究を行うことができた。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究は中期計画に沿った内容として遂行できたと考える。 当研究は来館者のニーズを知るだけではない。20 年度以降この成果を活かした新しい音声ガイドコンテンツを制作することにしたい。